

機動戦士ガンダム 英  
雄黙示録

京勇樹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

以前になろうで書いてて、pixivで不定期投稿してましたが  
pixivも危なくなってきたので、こちらに投稿します

# 目次

## 第一部

プロローグ 2年前の戦い	1
登場国家設定	25
オリジナルMS設定	30
それぞれの始まり 前編	41
それぞれの始まり 後編	53
嵐の予感	64
始まる試練	84
選定試験	99
王達の願い	123
転校生と再会	142
驚愕の配属日	160

久しぶりの会話	187
新人歓迎会	199
J E U 艦隊保護戦闘 新たな仲間	208
J E U 艦隊保護戦闘 邂逅	227
J E U 艦隊保護戦闘 葛藤	239
設定集 206編	249
設定集 207編	254
設定集 209編	259
設定集 210編	267
会談	273
教導任務依頼と新たな出会い その1	285

教導任務依頼と新たな出会い	その2
いざ、教導任務へ	299
出張教導任務 邂逅	310
再会と困惑	324
運命の出会い	336
馴れ初めと蠢く黒い思い	344
心の叫び	350
驚愕の出会いと襲撃	355
出張教導任務 迎撃戦	365
急行。そして……	376
断罪	383
パーティー	397
	405

驚愕の新人たちと休暇通達	415
さくらパークへ	422
さくらパークでのデート 始まり	427
少女の慟哭	433
デート 一日目の終わり	439
二日目始まり	443
二人のデート Y&Nルート	450
プールのプルハプニング	454
二人のプールデート	458
軍人の慟哭	462
占い	467
迷子の女の子	473
	479

更なる援軍	564
烈士たち	556
交差	548
538	
対ユーラシア連合戦	532
悲しき邂逅	
それぞれの思い	524
NAU	
それぞれの思い	517
その1	
開戦	510
出撃準備	505
宣戦布告	500
デートの終わり	495
それぞれの終わり	487

指令	656
緊急事態	649
強化人間	641
不期遭遇戦闘	634
プロローグ	629
第二部	
終結	624
落日2	616
悲しき事実	606
落日1	598
流転	591
降臨	585
その名は	573

命の価値	730
一つの戦いの終結	724
混迷の戦場 宇宙	720
混迷の戦場 地上	714
覚醒	710
ライゴウガンダム	704
新たな機体	696
狂気の中の涙	690
対峙	685
理不尽な暴力	680
悲劇	674
宇宙からの脅威	670
捕捉	663

目覚め	738
目的の場所	745
帰投	750
作戦開始	756
挺身	760
ロドニア戦 開戦	764
ロドニア戦 投入	768
破壊、倒れる	773
ロドニア戦 突入	778
陸戦部隊の戦い 1	784
陸戦部隊の戦い 2	789
陸戦部隊の戦い 3	794
ロドニア戦 終結	799

激突	869
一つの終わり	863
最終準備	858
決断	853
災厄の閃光	846
ヤキン・ドゥーエ攻防戦	839
出発	835
NとYの一日 その3	831
NとYの一日 その2	826
N&Yの一日 その1	820
備え	816
ボアズ	811
一步	803

友との決着	927
壊滅する艦隊	922
鹵獲と治療	916
友との再会	912
白と紅 決着	908
ひとつの決着	904
三竦み 3	900
戦場での再会	896
三竦み 2	891
覚悟を決めた者	887
三竦み	883
対決 1	879
因縁	875

ジエネシス攻防戦1	934
ジエネシス攻防戦2	940
完全覚醒	945
合流	950
仲間の思い	955
防衛線突破	960
ジエネシス攻防戦3	965
ジエネシス攻防戦4	972
思いの激突	976
託す思い	980
内部突入	984
決着と説得	988
終わり	993



## 第一部

## プロローグ 2年前の戦い

狭いコクピットの中、少年は深呼吸をしていた

「これから、人間同士の戦いが始まる……………」

彼の名前は土見稟つちみりん

現在、ある軍のMSパイロットである

コクピットの中で待機していると、コクピット内に電子音が鳴り響く

どうやら、味方からの通信のようだ

『こちら、レーヴァテイン5。柏木機！ 土見機、聞こえる？』

なんとも緊張感の無い声と共に、サブ画面に1人の女の子の顔が映った

彼女の名前は、柏木晴子かしわぎはるこ。稟の訓練生時代からの仲間だ

「こちらレーヴァテイン6。土見機、感度良好。聞こえる」

稟は簡素に返答した

『な〜に緊張してるのさ！ ほらリラックス、リラックス！』

と、柏木は朗らかに声をかけた



タイタンの装備は、弓や大剣、そして腕に直接くっついていて大砲である当初は優勢に戦えていた。しかし、戦闘開始してから、約3週間後

タイタン側に、生態型航空戦力の〈ドラゴン〉が出現

それに伴い、タイタンの中に大きな楯を装備したタイタンも出現した

その楯により、砲弾の効果は著しく減少

それが理由により、人類は新機軸の兵器の開発を余儀なくされた

楯を突破して、撃破するには主砲の大口径化かビーム化しかなかった

しかし、当時ビームは戦艦にしか搭載されていなかった

それに、もし小型化できてもエネルギーの問題もあった

そして、一番の問題は多脚戦車では効果的に攻撃できなかつたのだ

それを解決するためには、戦闘機のような三次元機動をする兵器を作る必要があつた

のだ

そして考えられたのは、三次元機動を併せ持つ機動兵器だつた

その間にも人類は、少しずつ防衛線を後退させていった

そんな人類にある一筋の光明が見えた

それは、人型汎用機動兵器MSへモビルスーツである

これを開発したのは、海洋独立国家初音島に存在する〈天枷研究所〉であつた

天枷研究所は、世界でも名の知れたロボット開発の最先端の研究所だった

しかし、世界は最初天枷研究所が発表したMSに対して懐疑的だった

そして、天枷研究所の所長が提案したのは

「では、我々が開発したMSの威力をお見せしましょう」

と、言ったのだ

それにより、MS隊が日本に派遣されたのだ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

日本 光陽町

その町は業火に包まれていた

その町も、緑に包まれていた綺麗な町だったのだろう

しかし、今やその面影はない

そんな街中を3人の男女が走っていた

「はあ……はあ！ 頑張れ楓！<sup>かえで</sup> 桜！<sup>さくら</sup>」

先頭を走っているのは、身長170cm前後で端正な顔立ちの少年だった

名前は土見稟<sup>つちみりん</sup>

「はあ……はあ！ 楓ちゃん、頑張って！」

その少年の少し後ろを走っているのは、腰まで伸ばした黒髪ツインテールが特徴の大

和撫子と呼べる少女だった

名前は八重桜やえさくらと言う

「はあ…はあ…待っててください!」

一番後ろを走っているのは、橙色の髪に赤いリボンを結んでいる大人しい印象の少女だった

名前は芙蓉ふようかえで楓である

「頑張れ! もう少しで避難できる!」

3人の走ってる先には、兵士が避難誘導している

そんな時だった

轟音と共に激しい震動が起きた

「うお!」

「きやー!」

あまりにも激しい震動で、稟たちは立っていられなくなつて倒れた

「楓、桜! 大丈夫か!」

「私は大丈夫! 楓ちゃんは?」

しかし、楓からは返事は無い

「ま、まさか……」

稟は信じたくない思いで、振り返った

先ほどまで楓が立っていた場所には、大きな足が立っていて、その近くには千切れた腕とリボンが残されていた

「か、楓ちゃん……」

桜は顔を青くして、口元を手で覆っていた

「そんな……楓……楓……」

稟は叫ぶことしか出来なかった

すると、目の前に立っていた巨人が手に持っていた大剣を振り上げた

（あ、俺……ここで死ぬのかな？ でも、桜だけでも！）

稟は桜を背後に大きく突き飛ばすと、眼をきつく閉じた

すると、大きな音が3回響き、稟の瞼の裏に強い光が差した

稟はいつまで待っても来ない痛みに不思議に思い、ゆっくりと眼を開けた  
すると、巨人は大剣を振り上げた状態で固まっていた

巨人はその体勢のまま、ゆっくりと倒れた

「稟くん！ 無事!？」

気付くと、桜が駆け寄っていた

「あ、ああ。大丈夫だ……」

稟は、なぜ自分が助かったのか分からなかった

桜は稟に抱きついて泣いている

すると、どこからか空気を切り裂くジェット音が聞こえた

稟は音のした方向に振り向いた

すると、こちらに向かって飛んでくる大きな人型の影

その人型機は、青赤白のトリコロールが印象的な機体だった

その機体は、稟達の近くに着地した

『君達！ 大丈夫か!?!』

目の前の機体からだろう。若い男の声が聞こえた

「はい！ 大丈夫です！」

稟は内心驚きながら、返事をした

(俺と年齢差はない?)

『よし！ 今、桜武おうぶの高機動車と歩兵を呼んだ！ 少し待ってろ！』

稟はその名前を聞いて驚いた

(桜武！ あのMSを開発した初音島の軍隊！)

桜武というのは通称である

正式名称は初音島統合防衛軍である

確かに、目の前の機体の左肩には桜武の証である桜の花に刀が重なったマークがペイントされている

稟は泣いている桜の頭を右手で撫でながら、左手を握りこんだ

(これがMS！ 人類の反撃の刃！)

稟は眼の前の機体を見上げた

これが、後に英雄と呼ばれる少年との出会いである

そして、初音島の派遣したMS部隊は僅か3週間で日本のタイタンを全て駆逐

それを見た世界各国の軍部はMSの採用を決定

新太陽暦71年 12月

人類はタイタンとの戦争を数多の犠牲を払いながらも、勝利したのだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

早朝の朝日が差し込む部屋

その部屋のベッドに、腰掛ける男が1人

その男は両手を組み、その上に額を置いている



すると

「怖いのか？ 義之<sup>よしゆき</sup>」

男の背後から、優しそうな声がかけられた

男、桜内<sup>さくらい</sup>義之<sup>よしゆき</sup>は、背後の眼鏡を掛けて、裸身にシーツを巻いた状態の少女に振り向い

た

「ああ……少し、怖いかな？ ありがとう、麻耶<sup>まや</sup>」

義之は恋人の、沢井<sup>さわい</sup>麻耶<sup>まや</sup>に微笑みながら、返事をした

「仕方ないわよ。今回の相手は人間なんだもの……」

麻耶はそう言いながら、義之の首に腕を回した

「そう、だな……」

義之はそう呟きながら、眼を閉じた

（今でも覚えてるさ。あの、2年前の戦いを……）

義之は、2年前の戦い。〈タイタン戦争〉を思い出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

新太陽暦71年 8月某日

独立海洋都市国家 初音島

「これで……何体倒した？」

義之は愛機、ストライクの武装

15、78m対艦刀(ヘシユベルト・ゲベール)を、タイタンの死骸から引き抜きながら、周囲を見回した

今、ストライクが立ってる場所は。本来、美しい砂浜だった

それが今や。夥しいほどの醜いタイタンの死骸と、友軍機、M1アストレイの機体の残骸で埋め尽くされている

「……IFF及び、レーダーに反応なし……俺以外は全滅か……」

義之は計器を確認して、呟く

最初この砂浜には、ストライクを含めて30機近くのアストレイが展開していたが、今立っているのはストライクのみだった

更に、無線には味方の救援要請、怒号、悲鳴が引つ切り無しに響いている

すると、狭いコクピット内に電子音が響いた

どうやら、通信のようだ

『こちらH<sup>ヘッドクォーター</sup> Q！ ウラヌス1、戦況を報告してください！』

サブ画面に、通信将校の沢井麻耶の顔が映った

ウラヌス1と言うのは、義之のコールサインだ

「こちら、ウラヌス1。当該戦闘区域のMS部隊は、俺以外は全滅した。繰り返す、全滅

した」

義之は悔しさを堪えて、報告した

『HQ了解！ 現在そちらに向けて、連隊規模の敵が進行中！』

「おいおい……さすがに俺一人じゃ、対処しきれないぞ!？」

義之はその多さに、絶句する

『大丈夫よ。今そっちに、強力な援軍が行ったから』

それを聞いた義之は、片眉を上げて

「援軍？ 一体誰が……」

疑問に思った時だった

コクピット内に、甲高い警告音が鳴り響いた

義之は直感に従い、機体を右ステップさせる

すると

先ほどまでストライクが立っていた場所に、光弾が着弾して、クレーターが出来た

「つー！ ドラゴンか!」

義之はストライクの頭部カメラを、上に上げた

するとそこには、10数体のドラゴンが飛んでいた

しかもその内の1体はまさに、光弾を撃とうとしている

ストライクは着地したばかりで、すぐには動けない

「ヤバイ！」

義之は撃墜されると思った

その時だった

光弾を放とうとしていたドラゴンに、レールガンとミサイルが着弾する

「この攻撃は、デュエル A アサルトシユラウド S！ まゆき先輩ですか！」

義之は攻撃の来た方向に振り向いた。すると

『ほらほら！ 油断しちゃ駄目だよ？ 弟くん！』

と、サブフライトシステム S F Sのベースジャバーに乗っている鈍重そうな青い機体。デュエルASが

飛んできた

次には、海から出現したタイタンに、鎧のような物体が刺さった

「この攻撃は、ブリッツ！ 杉並か！」

気付くと、ストライクの右側に黒い流線型の気体

ブリッツガンダムがベースジャバーに乗って、着地していた

『同志桜内は、無事か？』

そして、次には

10数発のミサイルが、ドラゴンに殺到する

「これは、バスター！ 菊理くくりさん！」

義之は背後に振り向いた。そこには、まさにミサイルを発射した証拠に、煙が出ているランチャーが開いている緑とクリーム色の機体

バスターガンダムが、両脇に火砲を抱えて立っている

『流石にこの数は、厳しいですからね♪』

画面に映っている橘菊理たちほなくりは、微笑んでいる

『ふむ。これで、全機集結したな』

最後に、鋭角な赤い機体。イージスガンダムがベースジャバーに乗って現れた

「伊隅隊長！」

『全機に到達する！ 1体たりとて、タイタン共を攻め込ませるな！ 1体残らず血祭りにしろ！』

『『『了解！』』』』

伊隅みちるの命令に、4人の斉唱が答える

5機はそれぞれ、武器を構えて攻撃を開始した

『行くぞ！ 同志桜内！』

杉並は言うと同時に、ベースジャバーを駆ってストライクの後ろに回りこむ

「ああー！」

義之はストライクをジャンプさせて、ベースジャバーに着地した

強力な推進力を有するベースジャバーは、最大で2機まで乗せて飛行できる

杉並はベースジャバーを急上昇させて、ドラゴンの群れに突撃した

義之は、ベースジャバーがドラゴンの上に来たことを確認すると、機体をベースジャバーから切り離れた

もちろん、機体は重力に従って、落ちていく

しかし、真下にはドラゴンの背中が見える

義之はドラゴンの背中に、ストライクを着地させると

「はあああああー！」

ドラゴンの首目掛けて、対艦刀を振り下ろした

ビーム刃は簡単に、ドラゴンの首を切り裂く

義之は、ドラゴンの翼が止まる前に、近くのドラゴンにスラストを噴かして飛んだ

義之はドラゴンの背中に着地すると同時に、ストライクの左肩に取り付けられている

取っ手を掴み、右側のドラゴン目掛けて投げた

投げたのは、ビームブーメランへマイダス・メツサーである

マイダス・メツサーはドラゴンの翼の付け根を容易く切り裂く。ドラゴンは飛べなくなつて、落ちていく

マイダス・メツサーは大きく弧を描き、ビーコンで左肩に戻る

そして義之は、シュベルト・ゲベールをドラゴンの背中に刺してから、切り払った  
ドラゴンは絶命して、落下し始めた

義之は慌てずに、ストライクの左腕を上突き出す

すると、左手に装備されている楯からワイヤー、へパンツァー・アイゼンが射出された

パンツァー・アイゼンは上を飛んでいたドラゴンの、足に当たる部位にアンカーを噛ませると、ワイヤーを巻き戻した

するとストライクは、その勢いによって、上上がる

義之は、そのままスラストを噴かしてドラゴンの上に飛びながら、シュベルト・ゲベールを振り上げる

「いのっー」

そしてドラゴンの胴体目掛けて、振り下ろす

シュベルト・ゲベールは重力の助けもあって、容易くドラゴンを切り裂いた

そして落下しながら、周囲を見回す

空域には、他に敵は見えなかった。どうやら、いままで最後だったらしい

義之は、どうするか考えてると

『同志桜内！ こっつちだ！』

と、声が聞こえた

義之は声のした方向を見た。すると、杉並の駆るブリッツとベースジャバーがこちらに向かっている

『ビーコンを同調させろ！』

義之は反射的にコンソールを操作して、ビーコンに機体を同調させてベースジャバーに着地した

『やれやれ、キリが無いな』

杉並は疲労の溜まった声で、ぼやく

「ぼやくな、杉並」

義之は言いながら、エネルギーゲージを確認した

「そろそろ、ヤバイか……」

エネルギーゲージは危険域レッドゾーンを示している

すると

『義之くん！ エールとランチャーストライカーの予備、持ってきたわよ！』

とサブ画面に、2人の女性の顔が映った

「更識大尉！ 神宮司中佐！ ありがとうございます！」



片方は、くせつ毛なのか、外側に撥ねた水色の髪が特徴の女性。名前は更識さらしき盾無大尉たてなしで、不思議な頼れるお姉さん

搭乗機は、青いタイプのアストレイ。通称アストレイ・ブルーフレームである

もう片方は、三つ綱にした長い茶髪が特徴の女性だった。名前を神宮じんぐう司しまりも中佐で、厳しくも、優しい女性だ

こちらの搭乗機は、金色のアストレイ。アストレイ・ゴールドフレームである

砂浜には、予備のストライカーパックが収まったトレーラーが2台止まっている

「杉並ー」

『うむー』

義之が端的に言っただけで、杉並はベースジャバーの機首を砂浜に向けた

義之はベースジャバーが砂浜の上に来たのを確認すると、機体を砂浜に着地させた

そして着地すると同時に、ソードストライカーをパージした

すると、ストライクの色が

赤・青・白のトリコロールから、グレーに変化した

どうやら、P S 装甲がフェイスソフトダウンしたようだ

P S 装甲は、一定の電圧を通电することで相転移する特殊な金属で作られており、実体弾や実剣などに対して、絶大な防御力を誇る画期的な新型装甲である

そして相転移すると、電圧毎に色が違うのだ。そして、ストライクの場合は赤・青・白のトリコロールなのである

そして義之は、トレーラーの中から出てきた緑色のストライカーパック

ランチャーストライカーを背中に装備した

すると、装甲の色がグレーからトリコロールに変わった

ストライカーパックには、予備の小型バッテリーパックが内蔵されているために、換装すればバッテリーが危険域でも充電が可能なのだ

「菊理さん。手伝います！」

義之はストライクを、膝たち状態のバスターガンダムの際に進ませた

バスターは、94mm高エネルギー収束火線ライフルと350mmガンランチャーを連結した武装、超高インパルス超射程狙撃ライフルで上空のドラゴンや、海面に出現したタイタンを狙撃していた

義之もそれに同調して、左肩に懸架されている巨大な火砲へアグニを脇の下を通して構えて連射する

するとレーダー上に大きな反応が突如、出現した

「あれは！」

『くっ！ ギガンテスカ！』

〈ギガンテス〉

それは、タイタンの中でも最大級の巨人で、最大で80 m近くある

『義之くん!』

「合わせます!」

義之は菊理の言いたいことを、瞬時に理解した

そして、義之と菊理はお互いにギガンテスの頭部を精密照準する

『「いっつけー!」』

2機の火砲から同時に、巨大な火線が走り、ギガンテスの頭部を吹き飛ばす

ギガンテスは、巨大な水柱を起こしながら倒れた

すると、義之たちの左側の砂浜にタイタンが出現した

「間に合え!」

義之はストライクを即座に向けると、右肩に装着されている120 mm対艦バルカン砲と350 mmガンランチャーを撃ちまくる

10数秒後、タイタンが居た場所には、肉片が残っているのみだった

「なんとかなったか……」

義之が安堵の息を吐いていると、周囲にイージス、ブリッツ、デュエルASがベースジャバーで着地する

『全機、状況を報告しろ！』

隊長の伊隅みちるが通信で聞いてきた

『すまん。もう、エネルギーが危険域だ……』

杉並が表情を暗くしながら、報告する

『ごめん。あたしも、エネルギーだけじゃなくって、グレネードもミサイルも弾切れだ……』

まゆきも苦しそうな表情で告げる

『すいません。私もです……』

菊理も同様に告げた

「俺はエールストライカーが残ってるので、まだ行けます！」

義之はランチャーをパージして、エールストライカーを装着しながら告げた

『私は、まだ大丈夫よ！』

『私もだ』

盾無とまりもは、簡潔に答える

『くっ！ 私、エネルギーが危険域だ……』

みちるは悔しそうに、歯噛みしている

それを聞いた義之は、ある答えに行き着いた

「伊隅隊長、杉並、菊理さん、まゆき先輩は補給に戻ってください！」  
『『『『!?!?』』』』

義之の判断に、4人は驚いている

「ここは俺達が引き受けますので、早く!」

『なに言ってるの、弟くん! 5機でやっとなつたのに、3機だけなんて!』

まゆきが、驚きと心配の入り混じった声で言うが

『安心しろ。それに関しては、頼もしい援軍を呼んだ』

と、まりもがまゆきを制した

『援軍でありますか? 一体、誰が?』

と、伊隅が不思議に思っていると。レーダーに味方を表す光点ブリップが2つ現れた  
方向は後ろ、軍形式に言うとう6時の方向だった

義之が後ろを向いて確認すると、見えたのは赤いアストレイと紅いストライクだった  
「あれは、アストレイ・レッドフレームとストライク・ルーージュ! 織斑中佐に草壁大尉  
!」

『すまん、お前達。遅れた!』

『間に合ったか!』

通信画面に映ったのは、黒髪ロングの釣りあがった目つきの女性と

赤い髪をポニーテールにしている、女性だった

黒髪ロングなのは、おりむらちふゆ織斑千冬と言い、厳しいが頼れる女性。階級は中佐で搭乗機は

レッドフレーム

赤髪なのは、くさかべみすず草壁美鈴といい、リーダーシップ溢れる勇敢な女性。階級は大尉である。

搭乗機はストライク・ルージュだ

『さて、伊隅少佐。話は無線で聞いた。桜内大尉の提案に従って、お前達は補給に向かえ。ここは我らが引き受ける！』

千冬は毅然とした態度で、みちるに告げた

『し、しかし！』

不服なのか、食ってかかるが

『行け！ これは、上官命令だ！』

千冬は上官として、命じた

『っ！ 了解しました……御武運を！』

みちる達は後ろ髪を引かれる思いで、補給に向かった

『さて、桜内大尉。貴様の気概を、見せてもらおうぞ？』

千冬は試すような口調で、義之に問いかけた

「了解！ して、織斑中佐。その腰の刀は？」

義之は、レッドフレームの腰に装着されているMSサイズの刀を見ながら聞いた  
『ん？ ああ、これか。これはな、ガーベラ・ストレートと言つてな。私が頼んでおいた  
のだ』

私は刀のほうが得意だからな。と千冬は、付け足した

「菊一文字ですか。かつての名刀の名前ですね」

『まあな。さて、雑談は終わりだ。来るぞ！』

義之たちは機体の向きを、変えた

その先には、数百体のタイタンやドラゴンが居た

『織斑中佐。どうします？』

まりもが千冬に問いかけた

『私と桜内大尉が、空を抑える！ 神宮司中佐は、草壁大尉と更識大尉を率いて地上を頼

みます！』

『了解！』

それを聞いた義之は、ストライクのスラスターを最大限で噴かした

「桜内義之。ストライク、行きます！」

そう宣言すると、ストライクはドラゴンの群れに突撃した

この戦いは一昼夜続き、後にその激しさから

〈初音島攻防戦〉と呼ばれるようになった

更に、この時の戦闘データはシミュレーターに転用され

以降のMSパイロット育成に、大きく貢献した

なお、この戦いで義之は〈初音島の守護神〉と呼ばれることとなった

そして、新太陽暦71年 12月

人類は莫大な被害を出しながらも、タイタンを地球上から殲滅したのだった

これは、日常と、戦争と言う、非日常を

逞しく生きていく、青少年少女たちの記録である



## 登場国家設定

海洋独立都市国家初音島

新太陽暦20年に、日本帝国から独立した島国で、三日月型の島を本島として、周囲に9個のメガフロートを浮かべている

政治関係や統合軍本部、シエルターなどを本島に集中させている

周囲のメガフロートは、外側に軍関係と港が集中しており

内側は民間用となっている

外貨の獲得は輸出を主としている

現在の主力MSはアストレイ2型

軍は志願式で、年齢層は幅広く、脱走等は皆無

現在まで中立を貫いている

他国から亡命してきた人達も受け入れるため、人種と食事が幅広い

治安は良好で、人種差別等は基本的に無い

ユーラシア連合

人口の急激な増加により、経済破綻になった中国をロシアが吸収して生まれた巨大国家

そういった背景のためか、貧富の差が激しく、凶悪犯罪が絶えない

人種差別も激しく、日常的に死者が出ている

軍は徴兵制だが、裏金で免れてる者が多い

故に、軍に所属してるのは貧しい者達が中心で、家族を人質に捕られてる者も少なくない

尚、軍では非人道的な人体実験も行われているようだ

一般兵には主に、中国人が所属している

脱走兵は多い

主力MSはダガーLと新型機のウインダム

新アメリカ連邦 通称、N・A・U

アメリカ合衆国を中心に、南北アメリカ大陸が1つに纏まって誕生した国

そういった経緯のために、多種多様な人種が居て、人種差別はさほど起きていない  
軍は徴兵制だが、一定期間が経つと予備役扱いを選べるようになる

貧富の差もそんなに無く、仕事も豊富

治安もそれなりに良好

主力MSは、リーオー MkⅡ エアリーズ MkⅡ

アフリカ同盟

その名の通り、アフリカ諸国が同盟を結んで誕生した

砂漠地帯をある程度緑化したために、作物等も取れるようになってい

る  
しかし、砂漠地帯が依然として広いために、MSもそれに対応した改良が施されてい

る  
地下資源が豊富で、それを利用した重工業が盛ん

治安は良好

軍は志願式、脱走等は時々確認される

主力MS テイエレン無限軌道型 バクウ ラゴウ バクウ・ケルベロスハウンド

ジンオーカー

赤道連合

赤道下の各島が集まって生まれた国

他国に比べると諸々貧しいが、それでも治安は良好

軍は国民皆兵制度を設けており、有事には国民が軍に組み込まれる

そのために、普段の軍は少ない

主力MS ジンワスプ デイン グリーン ゾノ

オーストラリア諸島王国

オーストラリアを中心に、周囲の小さい島国などが集まって形成されている

漁業を中心に、海底採掘した資源を収入源としている

治安は良好で、マリンスポーツが盛ん

軍は国民皆兵制度を設けており、有事の際は義勇軍が組織される

主力MS リアルドと新型のフラッグ

欧州連合 通称EU

欧州が寄り集って形成されている

日本帝国と同盟を結んでおり、その場合はJEUと呼ばれている

軍は徴兵制度だが、脱走兵は皆無

治安は良好で、ユーラシア連合からの亡命者の多数がここに来る

前大戦で初音島並みの激戦を経験しており、特にEU首都の〈ベルリン攻防戦〉で七

英雄が有名

現在は、ユーラシア連合の武力併呑により、国土を失っている

主力MS コロニー製のMSのライセンス生産機のジン・トリーナード及び改良機のジン・トリーナードADV デイン・ラファール シグー・タイフーン

日本帝国

初音島が元々所属していた国家

征夷大將軍をトップに、各省庁が連携している

経済大国として発展した結果、世界でもトップレベルの技術力を有している

征夷大將軍は、玖条、斑鳩、嵩宰の御三家から選ばれることになっている

軍は徴兵制度を設けているが、脱走兵は確認されていない

主力MS 烈空れつくう 近衛部隊用で烈火れつかと最新型の龍閃りゅうせん

これは、世界各国共通だが

前タイタン戦争の時の弊害で、軍の男女比率が大きく傾き

男が2 女が8 となっており、特に初音島はそれが顕著で1対9となっている

## オリジナルMS設定

MBF-02 アストレイ2型

17.6m

54t

現在の初音島統合防衛軍の主力MS

以前の主力MSだったM1アストレイの後継機

装甲材に採用している発泡金属が新しくなっており、重さは変わらず防御力が向上している

以前のM1アストレイには採用してなかったストライカーパックシステムを採用して、汎用性が上げられている

装甲もブロック化しており、整備性は向上している

現在用意されているストライカーパックは

スナイパー  
長距離狙撃パック

キャノン  
遠距離火力支援パック

アサルト  
強襲突撃パック

飛行パック  
フライト

### 共通武装

70mm対空自動バルカンシステムヘイゲルシュユテルン×2

70式改ビームサーベル×2（腰部のアタッチメントに接続されている）

71式改ビームライフル（Eパック式とドライブ式の2種類）

ハイブリットスナイパーライフル

新たに用意された71式改ビームライフルはEパック方式も採用されており、機体の戦闘継続時間の向上に成功していて、アストレイ2型だけでなく、GAT-Xタイプも使用できる

ハイブリットスナイパーライフルは、実弾とビームの撃ち分けが可能になっており、下に実弾のマガジンを、上にビームライフルと共用のEパックを装備できる

MBF-M3 アストレイ3型

17.5m

53t

現在、統合防衛軍でも極少数の部隊が試験運用中の機体でMVF-11Cムラサメと正式採用を争っている

ストライカーパックも装備可能だが、大きい特徴はパイロットに合わせて機体自体をカスタム出来る点にある

カスタムできるのは、頭部、両腕部、両足部、背部のバックパックが可能である  
それゆえに、固定の装備は持たず、パイロットに合わせた装備を持つ

とはいえ、汎用性も持ち合わせており、71式改ビームライフルと70式改ビームサーベルも装備できる

用意されている装備一覧

71式改ビームライフル

70式改ビームサーベル

試製72式ビームサブマシンガン（エネルギーセル式）

試製72式ビームナイフ

アーマーシユナイダー

ハイブリットスナイパーライフル

70mm自動対空バルカンシステムポッド（ハイゲルシユテルン）

外部後付式三眼式光学センサー

試製72式刀型ビームサーベル

折りたたみ式大口径レールカノン



16連装多目的ミサイルランチャー

Eパック式3連装ビームガトリング（Eパックはライフルと共通規格）

ZGMF-1017/T ジン・トーナード

21.4m

81t

L4コロニー製MSジンをEUがライセンス生産した機体

大きな改良点は背部バックパックにあり、空戦が出来なかつたジンを空戦に対応させ、尚且つ、火力を向上している（形はザクウォーリアのブレイズとレッドフレームのフライトユニットが合わさってる感じ）

武装面においても新しく、100mm支援突撃砲と折りたたみ式ハルバードが用意されている

なお、ハルバードを使用するに当たり、マニピュレーターも強度が3割ほど上げられている

装甲の一部には、リアクティブ・アーマーが採用されている

アドヴァンスド

最近では、センサー類とスラスターを改修した、ジン・トーナードADVに機種変換されている

## 武装一覧

M A | M 5 ハルバード

M M I | M 8 A 3 C 80mm重突撃機銃

M 6 8 キャットウス500mm無反動砲

M k | 7 1 100mm支援突撃砲

M 6 8 パルデュス3連装短距離誘導弾発射筒

A M F | 1 0 1 · R デイン・ラファール

1 9 · 2 m

3 9 · 2 t

ジンと同じくL4コロニー製MSのデインを、フランスの軍需企業のデュノア社がライセンス生産した機体

大きな改良点はスラスタ類の換装が挙げられる

原型機のデインよりも、高出力低燃費のスラスタに換装されており、航続距離と最高速度が向上している

なお、それに合わせて内装式プロペラントタンクも大きくしている

武装は基本的にジン・トーナードと共通である

## 専用武装

90mm対空散弾銃

胸部6連装多目的ミサイルランチャー

ZGMF-515/EF シグー・タイフーン

22m

85t

L4コロニー製MSのシグーをライセンス生産した機体

大きな改修点は、ジンと同じように大気圏内での飛行能力付加と火力向上、及びレーダー範囲と通信範囲の向上にある

背部のバックパックを換装して、大気圏内での飛行能力と火力向上を果たしている（見た目はグフ・イグナイトッドのバックパックに105mm単装砲が2門くつついて、砲身が肩に担ぐようになっている）

生産数が多くなく、主に指揮官機として出回っている

武装は基本的に、ジンと共通

シグー専用武装

GWS-A7 105mm単装砲×2

M7070C 30mmバルカンシステム後付式防盾

MSJ-06IIA TYPE2 テイエレン無限軌道型

19m

124t

機動性に問題のあったティエレンをL4コロニー製MS、TMF/A-802バクウの技術を用いることで、改良した機体

脚部を無限軌道キヤタビラに換装することで、機動性の向上に成功している  
これにより、今まで芳しくなかった地上での機動戦を上げている

その他に、バッテリー式のビームサーベルやEパック式のビームライフル、レールガンを開発して、攻撃力の向上も果たしており、現在のアフリカ連合の主力機

武装一覧

200mm×25口径滑空砲

バッテリー式ビームサーベル

Eパック式ビームライフル

バッテリー式レールガン

カーボンブレイド

71式MS 烈空<sup>れつくう</sup> 他国でのライブラリ表記はType 71

18.8 m

80 t

日本帝国の開発したMS

鎧武者の様な外観をしており、腰には日本刀型の近接戦闘用長刀〈斬鉄剣〉を標準装備している

武装は至ってシンプルで、斬鉄剣とビームライフル二つが基本装備となっている

近接戦闘を重視しており、各関節の強度は他国の機体に比べると2割近く高い

背部に飛行ユニット飛鳥<sup>あすか</sup>を装備することで、空戦能力も得る

飛鳥ユニットの翼下部には、予備のプロペラントタンクやミサイルランチャー等を装備することが可能である

なおこの機体は帝国軍一般軍の機体で、色はダークグレーで統一されている

装備一覧

近接戦闘用長刀 斬鉄剣

70型ビームライフル 〈春雷<sup>しゅんらい</sup>〉

飛行ユニット飛鳥

ミサイルランチャー

71式改MS 烈火<sup>れつか</sup> 他国でのライブ러리表記 Type 71C ERG

19m

82t

帝国軍のMS烈空を基に、更に近接戦闘能力と機動性を強化した近衛軍専用機体  
烈空に比べると、間接強度は3割ほど強化されていて、機動力は2割程強化されてい  
る

近衛軍では出自で機体が色分けされており

一般部隊からの選抜は黒

豪族出身者は白

武家の出身は山吹色

御三家に使える者は赤

御三家は青

征夷大將軍は紫

となっている

パイロットに合わせてチューニングを施すことを許されており、更には生産性と整備

性を犠牲にして、烈空に比べて全体的に性能を上げている

武装は烈空と同じ

72式MS 龍閃りゅうせん 他国のライブラリはType 72 ERG

20m

84t

帝国近衛軍専用が開発された新型機体

前身の烈火に比べて、大幅に性能が向上している

やはり、烈空に比べると格闘戦に比重を置いて開発されている

一般の黒のC型は烈火に比べて20%のスラスター強化、関節強度も60%増しとなっており

白のA型はC型に比べて、スラスターが12%程強化されており、センサーやアビオニクス類も上位の物に換装されており、頭部の形状が若干変わっている

山吹色と赤のF型はA型と比べて、スラスターが15%出力強化がされている

御三家のみが搭乗することを許されている青のR型は関節強度、スラスター出力共に10%の強化がされている

征夷大將軍の紫のRは完全なワンオフであり、関節強度、スラスター出力が青のR型に比べて30%増しになっている

このように、生産性、整備性を犠牲にして龍閃はその高性能さを出している  
そのために、この機体は近衛軍専用である  
新しく、専用武装として刀型ビームサーベル〈安綱<sup>やすつな</sup>〉が、用意されている



## それぞれの始まり 前編

「はあ……はあ……はあ」

満点の星空と満月の月夜の下、広大なグラウンドのトラックを走ってる1人の影  
すると目標を走り終わったのか、影はゆっくりとペースダウンしだして、止まった  
少年は両手を膝に当てながら、肩で息をしていた

そして、息が整ったのか、星空を見上げた

彼の名前は土見稟である

ここ、初音島統合防衛軍の訓練生である

彼は日課のランニングを終えて休息するために、芝生に座った。すると

「む？　そこに居るのは、土見か？」

と、凜とした雰囲気の子どもの声

「ん？　ああ、御剣か。遅かったな、どうした？」

稟は振り返って、背後に居た膝辺りまで伸ばした紺色の髪の毛をポニーテールにした

美少女。御剣冥夜<sup>みつるぎめいや</sup>を確認した

稟は、普段は彼女も自分と同じ時間にランニングしてるのを思い出して、遅く来たの

を疑問に思っただけで質問した

「……………武にすっぱかされた……………」

質問された冥夜は、不満そうに呟いた

「あはは…それは、ご愁傷様」

稟は悪いと思っただけで、笑ってしまった

武とは、本名を白銀武しろがねたけと言い、冥夜と同じ207訓練部隊に所属している

稟は206訓練部隊だ

これは補足だが、冥夜と武は付き合っている。所謂恋人だ

稟はよっこらっしょと、立った

すると

「む？　そこに居るのは、冥夜に稟か？」

と、冥夜と同じような凜とした声が聞こえた

稟と冥夜が声のした方向を見るとそこに居たのは、黒髪をリボンでポニーテールにし

た長身の美少女だった

「ああ、篠ノ乃か」

「おっす、箒」

その少女の名前は、しののほ篠ノ乃箒ほつきと言う

稟と冥夜と同じ訓練生で、210訓練部隊に所属している

「稟は上がりか？」

「ああ、御剣はまだだから、一緒に走ったらどうだ？」

稟はそう告げると、星空を見上げた

「どうした？」

冥夜は、稟が真剣な表情で星空を見上げたのを不思議に思った

「ん？ もうすぐ、総合戦技演習だと思ってるな」

「ああ、なるほど」

「それが終われば、私達は正規兵だな」

稟の言葉に、冥夜と箒は腕を組みながらうなずいた

「そういえば、一夏はどうした？」

と稟は、箒に聞いた

一夏とは、本名を織斑おりむらいちか一夏いちかと言い、箒の所属している210訓練部隊の隊長役を勤めている

「一夏だったら、もうすぐ来るはずだが……」

と言った、その瞬間だった

「おわあああ——!!？」

と、悲鳴が聞こえた

「ん?」

「今の悲鳴は一夏だな?」

3人は悲鳴の聞こえた方向を見た

そこには、足首に紐が絡まって、逆さづりになった一夏が居た

「ふはははは! その程度では、私の嫁にはなれんぞ! 一夏!」

気付けば、そんな一夏の近くに腰辺りまで延ばした銀髪が特徴の小柄な少女がいた

「ラウラ! お前が犯人か! てか、嫁じゃなくって婿だ! つか、下ろせ!!」

どうやら、同訓練部隊所属のラウラ・ボーデヴィツヒの仕掛けた罠に引つかかったよ

うだ

まあ、それも仕方ないことだろう

彼女、ラウラ・ボーデヴィツヒは元ドイツ軍の特殊部隊の隊長だったのだ

「あいつが来て、もう3ヶ月か。随分やわらかくなったな」

「ああ、最初はギスギスしてたがな。今では、信用できる仲間だ」

「ユーラシア連合が、JEUを武力制圧したんだったな」

JEUとは、日本帝国とEUの同盟のことである

事は今から3ヶ月前の、新太陽暦73年3月

ユーラシア連合が突如JEUに対して宣戦布告  
圧倒的な武力を持って、JEUを武力制圧した  
ラウラは、その数少ない生き残りの兵士だった  
「ユーラシアは戦火を広げるばかりだな……」

と、稟が唸っていると

「ちよつと！　なんか一夏の悲鳴が聞こえたんだけどって、一夏!？」

気付くと、逆さづりの一夏の近くに金髪にエメラルド色の瞳が特徴の美少年に見える  
中性的な美少女、シャルロット・デユノア

それに、白髪に左目の眼帯に赤い右目の長身の男子、かんざきなおや神崎直哉が立っていた

「なんだ、楽しそうだな。一夏」

「楽しくねーよ！　頼むから助けてくれ!!」

「わ、わかった！　ラウラ！　一夏を下ろしてあげて!!」

どんどん、騒がしくなってきた

それを見た稟と冥夜、そして箒の3人は顔を見合わせて笑うと

「さてと、助けにいきますか？」

「ああ」

「そうだな」

と、駆け出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
「はあ……はあ……はあ……」

狭いコクピットの中、パイロットスーツを着て、ヘルメットを被った少年が荒く息を吐いていた

「くっそ……数が多すぎる……」

今、少年の乗っている機体の前には。6つ眼の醜い巨人へタイタンへの死骸が折り重なるように倒れていた

そして、一息吐いた。その時だった

コクピット内に、甲高い警告音が鳴り響いた

「な、なに!？」

少年は慌てて、周囲を見回した

すると、目の前にタイタンの死骸の山が盛り上がって、片腕のタイタンが現れた

「しまった! 仕留め損なつた!!」

タイタンはそのまま、手に持っていた大剣を少年の乗る機体に向けて振り下ろした

「くっ! このー!」

少年は機体の右腕に保持されていた、ビームサーベルを振るつたが

気付けば、タイタンは大剣を振り下ろした姿で固まっていた

すると、コクピット内の電気が消えて赤い照明のみが光って、メインモニターには〈搭乗機のコクピットブロック大破 戦闘不能により、状況終了〉という文字が点滅していた

「あーもう！ また負けた！」

少年は頭を抱えながら叫んで、コクピットを出た

少年はコクピットから出ると、ヘルメットを脱いだ

現れたのは、短く切りそろえた茶髪に垢抜けた顔だった

「うーん。あそこは攻撃じゃなくって、回避のほうがかかったかな？」

と少年は、画面を見ながら悩んでいた

すると、空気の抜ける音がしながら扉が開いて2つの人影が見えた

「む、こんな所に居ったか……明久！」

呼ばれた少年、吉井明久よしいあきひさは声のした方向に振り向いた

「あれ？ 優子さんに秀吉じゃん。どうしたの？」

そこに居たのは、瓜二つの姉弟だった

名前は木下優子きのしたゆうこと、木下秀吉きのしたひでよしである

二卵性双生児なのだが、何故か一卵性双生児並みに瓜二つなのである

「あれ？ じゃないわよ、明久くん！ 西村教官が探してたわよ！」

「鉄人が？ なんで？」

一応補足すると、姉の優子は明久の彼女でもある

「明久よ。おぬしだけ未だに、今日のレポートを提出しておらぬじゃろ？」  
と翁言葉で喋っているのが秀吉である

「やっべ！ 忘れてた！ 今何時!？」

明久は顔を青ざめながら、聞いた

「もうすぐで、7時半よ」

「急がないとご飯も食べられないじゃん！」

と、慌てた

レポートよりも先にご飯が出てきたあたりは、育ち盛りだからだろうか

「ほれ、急ぐのじゃ！」

「レポート書くの、手伝ってあげるから！」

「ああ！ 待って！ 今シミュレーターの電源を切るから！」

急かされた明久は慌てながら、シミュレーターの電源を切つてシミュレータールームを出た





「うーん……」

走りながら、明久は首を傾げていた（パイロットスーツは既に着替えた）

「どうしたのじゃ、明久？」

明久の唸り声が聞こえたのか、秀吉が問いかけてきた

「ああ、なにね。ちゃんとMS用の教官が居てほしいなー、って考えてたんだ」

「ああ、なるほどね」

「そうじゃのう。流石に鉄人も、MSはそんなに得意ではないようじゃしのう」

鉄人とは、先ほど優子が言っていた西村教官のあだ名である

理由は別記とする

「自分たちだけでの独学じゃあ、限界は知れてるしね」

「そうじゃのう……」

と、明久と秀吉が話しながら走っていると

「ほらほら！ それより急ぎましよう！ レポートを書かないと、また罰則させられるわよー！」

「うあ！ それは、勘弁！」

優子の言葉を聞いた明久は、走る速度を上げた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

約2時間後

「すみません！ 遅れました！」

と明久は、頭を下げながら紙束を目の前のガタイの良い男性に手渡した

「……………ふむ。確かに、受け取った」

男性は、浅黒い肌に、盛り上がった筋肉が特徴の男性だった。名前を西村宗一にしむらそういちと言ひ、

通称が鉄人である

なぜ、鉄人と呼ばれるのか

理由は、彼の趣味にある

彼の趣味は、筋トレにトライアスロン、それとレスリングなのである

そのために、彼の受け持っている一部の生徒達からは、鉄人と呼ばれている

「まあ、練習熱心なのは買うがな。吉井よ」

「は、はい……………」

「シミュレーターを使うのは構わんが、誰かに一言告げてからにするように」

「すみませんでした……………」

「どうやら、明久は誰にも告げずに、シミュレーター訓練をしていたようだ

「あの一、鉄……………西村教官」

「なんだ？ それと、今、鉄人と言いかけなかったか？」

「気のせいです。それよりも西村教官。提案があるんですが……」

「なんだ？ お前から提案とは、珍しいな」

「えっと、実はMS用の教官を呼んだほうが良いと思うんです」

「ほう……なぜだ？」

明久の言葉を聞いた西村は、目を細めて問いかけた

「はい。理由ですが、自分達のMS操縦技術は全てシミュレーターでの独学に過ぎず、連携も取れてません。ですので、これ以上の技術の向上が見込めないんです」

「……お前にしては、的を射てるな」

「恐縮です……それで、どうしましょうか？」

「安心しろ。先ほど、既に、本社の月詠つぐよみさんと話をつけた」

そう言いながら、西村は机の上から写真を1枚、明久に見せた

「ここは……初音島ですか？」

「ああ。この人物を教官として、呼んでもらうように頼んだ。ついでにMSも、どうかしてくれるようだ」

「本当ですか！ やった！ 僕の使ってたリーオー、もうボロボロだったんです！」

リーオーとは

それは、前タイタン戦争時に新アメリカ連邦NAUが開発したMSで、機体の汎用性と拡張性、そし

て操縦性が非常に良好なのである

そのために、NAUでは改修したリーオーmkⅡが運用されている

そして、明久が使っているリーオーは前大戦時に大破もしくは、中破していた機体を再生<sup>レストア</sup>した機体なのである

そのために、関節が弱かったり、スラスタがオーバーヒートを起こしやすかったりしたので

「それに、初音島といえよ。僕は、ストライクが印象に残ってますね」

「ああ、初音島の守護神か。聞いた話だと、吉井たちとは、年齢的に差は無いようだ」

「ええ!?! そうなんですか!?!」

「ああ」

「はー、会ってみたくないな」

そう言っている明久の目は、子供のように輝いている

「ふむ。運が良ければ、会えるかもしれんぞ?」

## それぞれの始まり 後編

とある軍施設の地下、10階

そのの、とある執務室

その執務室には、少し大きめの木製の事務机と椅子。そして、1対の応接セットが置かれてある部屋だった

なお机には、書類が山のように積まれていて、処理済よりも、処理待ちのほうが圧倒的に多い

そしてその机には、ショートカットに切りそろえた黒髪に軍服を着た男がうつ伏せに倒れている（手にはペンが握られている状態）

すると、書類の山の間にあつた電話が鳴った

電話が鳴ると、男は手だけを動かして、書類を崩さないように受話器を持ち上げた

「……………はい」

『義之。伊隅中佐と高坂中佐が来たわよ』

電話してきたのは、男、桜内義之の秘書官である。恋人の沢井麻耶だった

義之は、耳に受話器を当てたまま、体を起こすと、手櫛で髪を軽く整えながら

「……………通してくれ」

と言うと、受話器を戻した

すると、空気が抜けるような音が聞こえて、ドアが開くと

「伊隅みちる及び、高坂まゆき。両中佐、出頭しました！」

と、2人の女性が敬礼しながら、部屋に入ってきた

「はい、ご苦労様です。というか、敬礼はしないで良いと、言いましたよね？」

義之は返礼すると、首を傾げながら問いかけた

「これは、礼儀みたいなものでして」

「そうだよ。弟くん♪」

2人は微笑みながら、応接セットの近くまで歩いた

義之は2人の反対側に立つと、座るようにジェスチャーで促した

2人は座ると、机の上に脇に抱えていたファイルを置いた

「で、今年はどうかな？」

義之は膝の上で手を組むと、2人に問いかけた

すると、麻耶が机の上にコーヒーを人数分置いた

「今年は大漁ですね」

「そうそう。なんせ、選ぶのに手間取ったくらいだし」

そう言いながら、2人はファイルを開いた

ファイルには、20数人近くの写真とプロフィールが書かれた書類が挟まれていた  
「へえ。今年は、本当に大漁ですね」

義之は、机の上に広げられた書類を見ながら呟いた

「それじゃあ、選んだ連中を紹介するね。まずは、206訓練部隊部隊長の涼宮茜すずみやあかね、次に

……」



「最後に210訓練部隊所属のライラ・フリードリヒ。で、以上です」

と伊隅みちるは、プロフィールの書かれた紙を置いた

「ふむ。今年は本当に大漁だな」

義之は、机の上に広げられたプロフィール表を見て、満足そうに頷いている  
すると

「ん？ この御剣って、あの“御剣”か？」

と義之は、冥夜のプロフィール表をヒラヒラと揺らした

「そ、あの御剣財閥のご令嬢よ。しかも、直系の。備考見てよ」とまゆきは、首をすくめた

「ふーん。なんで、御剣財閥のご令嬢が居るのか知らないけど。使えるなら使うさ」と義之は、満足そうに頷いた

すると

「ああ、そういえば、神崎教官長から推薦が出ているんです」とみちるが、手を叩いた

「え？ あの神崎教官長が？」

神崎教官長とは

本名を神崎恭一郎かんざききょういちろうと言い

現在、訓練生に教える教官達を束ねる立場の男性だ

年齢は40代後半、髪はオールバックにして、無精ひげを生やし、何時もサングラスを掛けている

その経歴も凄まじく、タイタン戦争以前は傭兵として世界中の戦場を渡り歩いていた豪傑だ

しかし、その性格に難があるのだ

それは



人の不幸を笑いながら、撮影したりするのが大好きなのだ

因みに、それに関して義理の息子のKS氏は

「いっぺん、本気で殴ってやりたい！」

と宣言している

### 閑話休題

「それが、こいつです。名前は土見稟訓練生」

とみちるは、プロフィール表を義之に手渡した

「ふーん。こいつかー……あれ？」

「どうしました？」

「いや、どこかで見たとような気が……どこだっけ？」

義之は思い出そうとしているようで、額に指を当てて唸っている

「？　そう。だっけこいつ、総合A判定だね」

まゆきはプロフィール表を見て、顎に手を当てた

義之はどうやら、思い出すのを諦めたようで、立ち上がった

「ほんじゃま、試みましょうか」

「試すとは、室内戦闘ですか？」

「いやいや、俺達に必要な技能だよ」

義之の口元には、笑みが浮かんでいた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
「行つてきまーすー！」

私、八重桜は家の中に居る家族に言うのと、ドアを閉めて歩きだしました

私が住んでるのは、光陽町と言います

とは言つても、今居る光陽町は2番目なんです

本物の光陽町は日本帝国にあつたんですが、2年前のタイタン戦争で廃墟になつてし

まいました

そんな私達を、初音島の大統領さんが受け入れてくれたんです

しかも、無償で家とお仕事。そして学校まで入れてくれたんです

そんな優しい大統領さんの名前は、芳野さくらさん

見た目は完全に10歳くらいの子供なんですけど、立派な大人で、優しいんです

金髪碧眼で、最初は外人さんかと思いましたが、完全に日本人さんなんです

それに、今私が向かつてる学園の学園長も兼任してますし、タイタン戦争で親の居なくなつた子供達の為に里親さんを探してくれたりしたそうです

「ん？ おーい！ 八重！」

私が歩いてると、後ろから私を呼ぶ声が聞こえてきました

「ん？ あ！ 美夏ちゃん！」

私は声のした方向を見ると、そこには牛柄の帽子に真っ赤なマフラーがシンボルの  
あまかせみなつ  
天枷美夏ちゃんが居ました

「これから学園に向かうんだろ？ 一緒に行こう！」

「うん！」

美夏ちゃんとはクラスメイトさんで、仲良くやっています

そんな美夏ちゃんと話し合いながら、私達は駅に着いて、モノレールに15分くらい  
乗って、着いたので降りてから、次に電動無人バスに乗ります

そして、目的地に着いたので下りると

そこには、大きな門に〈風見総合学園〉と大きな校門が建っています

ここが、私達の通ってる風見総合学園です

この学園は、初等部から大学部までエレベーター式に通える学園で

総生徒数がなんと、1万人越えという、超マンモス学園です

私達は警備員のおじさんに挨拶してから、玄関に入って、靴箱で上履きに履き替えま  
す

「そういえば、美夏ちゃんって、軍人さんなんだよね？」

「うむ。流石に、詳しい所属などは言えないがな」

美夏ちゃんは学生ですけど、同時に統合軍の軍人さんなんです

そして、教室の前に到着して、ドアを開けようとしたら

「待て、八重」

と、美夏ちゃんが私の腕を掴んで、ジェスチャーで退いてと言ってきました  
私はそれに従って、ドアから離れると

「すー……はー……っ！」

深呼吸すると、一気にドアを開けました  
すると

「ようこそ！ 桜ちゃん！ 俺様の腕の………」

と、眼鏡を掛けた男子が腕を広げながら、飛び出てきました  
すると

「ふっ!!」

「びっふっ!!」

美夏ちゃんみどりばいっきが、腰の入った右拳、所謂右ストレートを眼鏡を掛けた男子  
緑葉樹みどりばいっきくんの腹部に、もの凄い音と共に放ちました

「学習しないな、緑葉。だったら……麻弓！」

「合点承知なのですよー!!」

美夏ちゃんが呼んで現れたのは、右目が赤で左目が青のオッドアイの女の子で  
名前は麻弓Ⅱタイムちゃんです

「ふっ!」

「がはっ!」

美夏ちゃんが、樹くんを蹴り飛ばすと

「麻弓ちゃん流縄縛術! 第27弾!!」

麻弓ちゃんがどこから出したのか、縄で樹くんを一瞬にしてグルグル巻きにしました  
「新しい世界が見える!!」

そして、麻弓ちゃんがそのまま、樹くんを吊り上げると

「さて、後は……ムラサキ!」

と、美夏ちゃんが振り向くと

そこには、綺麗な金髪ロングに、スタイル抜群の女の子が居ました

その子の名前は、エリカ・ムラサキちゃんです

なんでも、東欧の小国のお姫様なんだそうです

「準備完了ですわ!」

気付けば、エリカちゃんは窓を全開にしてみました

「ふむ……では、行くぞ。麻弓!」

「行くのですよー!!」

「「「麻弓（ちゃん）に美夏（天枷）（ちゃん）!! ぶちかませー!!」」」

「「必殺! ライジング・インパクト!!」」

「ビリヤード!」

意味がわからない悲鳴と共に、樹くんは窓の外に蹴り飛ばされて

「害虫駆除完了ですわ!」

と、エリカちゃんが窓を閉めたと同時に、下に消えました

「あははは……流石にやりすぎなんじゃ……」

私は、苦笑いをしながら、かばんを机に置きました

「何を言う! 八重!」

「そうなのですよ! あの世界発情期はこのくらいしないと、学習しないのですよ!」

随分な言われようです

そして、私が座ると、麻弓ちゃんが手を叩いて

「そういうえば、近いうちに転校生が来るらしいのですよ!。しかも、3人も!」

転校生さんですか。この時期に珍しいですね

「へー、そうなんだ」

私は返事しましたが、それよりも、気になってることがありました

それは、もう1年以上会えてない大好きな男の子です  
稟くん

稟くんは今、何処に居るんですか？

窓の外には、季節はずれの桜の花びらが、舞っていました

## 嵐の予感

「♪」

狭いコクピットの中、パイロットスーツを着た青年が鼻歌を歌っていた

青年の操る赤青白のトリコロールの機体、ストライクは廃都市を飛んでいた

ストライクに装備されているエルストライカーは、この2年の間に改良されて、以前は滑空しか出来なかった大気圏内でも、一級品の飛行能力を有している

「おっと」

青年、桜内義之はビルの上を飛んでいたストライクを一気に噴射ブーストダウンさせた

すると、先ほどもまでストライクが飛んでいた場所を一本のビームが走った

「この狙撃は……風間か。なかなかやるな」

義之はストライクを少し上に上げた

すると、またビームが横切った

しかし、コクピット内では警告音が鳴っていない

「さてと、大体……あの辺りかな？」

義之は、ストライクの右手に保持されてるビームライフルを右斜め前方に向けてと



「当たれよ！」

と言いながら、3発連射した

3発のビームは、地平線の彼方に向かって飛来していった  
しばらくすると、遠方で黒煙が上がった

「ベンゴー！」

義之はそう言うのと、ホバリングしていた機体の向きを変えて、再び高速移動を開始した

第三者視点 side O U T

? 視点

「はあ!? 風間が撃墜された!?!」

あたし、速瀬水月はやせみづきは残った遼機のパイロット、宗像美冴むなかたみさえの報告を聞いて驚いた

あたしは、風間かざま椅子大尉いすだいじうに、へ気付かれないために、狙撃時にはロックオンをしないように

と命令したのだ

そうすることで、機体からロックオンレーダーが照射されなかったために、相手は気付かない

筈なのだ

それなのに！

あいつは、持ち前の異常な勘で気付いて、あまつさえ、風間の位置をビームの発射方向と角度で特定して撃墜したのだ

『まったく。桜内大佐のあの勘は最早、異常の域ですね』

あたしの苦悩に気付いたのだろう、宗像も愚痴ってきた

「まったくよ！……でも、予定通りに行くわよ！」

『了解！』

あたしの言葉を聞いた宗像が、機体を前に進めた

ふふふ……義之、いくらあんだでも、これには気付かないはずよ!!

あたしは、宗像の機体が位置に着いたのを確認すると、機体のある場所に向かわせた  
今回は絶対に負けられないのよ！

負けたら、大台に行ってしまう。それだけは絶対に避けなければ！

水月SideEND

第三者視点

義之はあれから、機体を直進させていた

すると、レーダーに反応が現れた

「ようやくか……反応はー……」

義之はそれだけ確認すると、機体の速度を上げた  
そして、反応に向けて十数秒飛んでいると

「おっと」

義之は機体をバレルロールさせた  
すると、ビームが走り抜ける

「ふむ、この反応は……宗像か」

義之は画面に映った文字を読んで判断した

画面にはアテナ2の文字

「乗ってやるか」

義之は呟くと同時に、更にビームが来た

義之はそれを、機体を斜めにして避けた

そして、宗像機と横並びになって、着地した瞬間

蹴りを前に居る宗像機

ではなく、後ろに繰り出した

すると、そこには黒い装甲のアストレイ3型がビームサーベルを振り上げていた

義之の蹴りは見事に、アストレイ3型の胸部に直撃した

『くあああー！』

『少佐!!』

宗像機は味方誤射を恐れてか、横跳びしながらビームライフルを撃つが「狙いが甘い!!」

義之は、それを難なく盾で防ぎ

「せいー!」

右下大部の収納スペースから抜いた、アーマーシユナイダーを投げた

『しまっ!』

義之の投げたアーマーシユナイダーは宗像機の胸部に突き刺さり、宗像機は機能を停止した

『このおー!!!』

気付くと、水月機が再びビームサーベルを構えて突撃してきていた

「ほい、残念賞!」

義之はそれを機体をバック転させて避けると、踵落としを水月機の頭部に直撃させた

『かはっ!』

「終わり」

義之はうつ伏せに倒れた水月機に、トドメとしてビームライフルを放った

第3者SIDEOUT

## 水月視点

「ちくしょう……」

あたしは赤い非常灯の灯ったコクピット内で、モニターを凝視していた  
モニターには

〈機体の致命的損傷により、パイロット死亡。戦闘シミュレーター終了〉

と書かれていた

「ちくしょう……」

大台に行ってしまった……

あたしは脳内でその文字だけを繰り返しながら、コクピットを出た

水月 side O U T

## 第3者視点

水月がコクピットシミュレーターから出ると

「これで、299敗1勝だな。速瀬」

と、赤髪ショートカットの女性。伊隅みちるが話しかけた

尚、その後方には腰まで伸ばした緑髪が特徴の風間禱子大尉とセミロングの女性、宗像美冴少佐が居る

「言わないでください……」

それに、あたし的には300敗だ

そう水月は内心思った

最初の1勝は、義之はワザと負けたのだ

すると

「まあ、作戦は良かったが、まだまだだな。水月」

と、1番コクピットから出てきた義之がヘルメットを脱ぎながら告げた

「義之く、あんた、あの反応はなんなのよ！」

「なんなのって、勘だが？」

「うがああああ！」

義之の言葉を聞いた水月は頭を抱えて、唸り声を上げた

「なんか、その余裕な態度がむかつく!! 一発殴らせろ!!」

水月は義之に飛びついた

「あー、それは痛そうだから、勘弁な」

義之は、水月の突撃を簡単に避けた

「避けるなー!!」

水月は水泳で鍛えた身体能力を活かして、突進を繰り返すが義之は避け続けた

「水月、やめなよ。義之くんには当たらないよ」

そう忠告したのは、フワフワした印象の女性だった

名前は涼宮遥<sup>すずみや はるか</sup>少佐である。主に通信将校を担当している

速瀬や義之とは同期である

「遥、止めないで！ こいつは一発殴らないと気がすまない!!」

水月はそう言いながらも、拳を繰り出し続けている

「それは危ないな」

義之はヒョイヒョイと避け続けている

「速瀬、その辺にしとけ」

伊隅が嗜めると、速瀬は渋々従った

「さてと、新型のアストレイ3型はどうかかな？」

と義之は聞くと、宗像、風間、速瀬の3人の表情が引き締まった

「新型なだけあって、センサー範囲は流石ですわね。スナイパーパックと合わせると、かなりの物ですね」

そう告げたのは、風間でスナイパータイプへと改装したアストレイ3型を使用してい

た

<sup>音声入力システム</sup>

「V I Sも2型と比べて、良くなっていますね」

「ええ、だけど。少し動きが硬いところがあるわね」

宗像、速瀬と風間に続いた

「そうか、まあ、そこは追々改良されるだろ」

と、義之が言う

「同志桜内」

天井の通風孔から1人の男が、ぶら下がって現れた

「「「うわあ!?!」」」

義之、麻耶、みちる以外の全員は驚いていた

「つて、今は情報省外務2課に所属してる杉並くんか。びっくりした」

最初に気付いたのは、涼宮遥だった

「杉並……もう少し普通に登場できないのか？」

「ふむ、これでも普通のほうなんだがな。分かった、次にはもう少し趣向を凝らそう」

「「「しなくていい」」」

杉並の言葉に、全員の反論が重なった

「それで、杉並少佐。なにか話があるんじゃないんですか？」

麻耶が聞くと、杉並は手をポンと打って

「おお、そうだった。同志桜内よ」

「なんだよ」



「悪い情報が2つに良い情報が1つあるんだ。どちらから聞く？」

「それじゃあ、悪いほうから。良いほうを聞いてから落ち込むのは、勘弁だからな」と、義之が言う

「あい、わかった。では一つ目だが、ユーラシア連合が遂にG A T T Xナンバーの機体を開発した」

杉並の言葉に、その場の全員に緊張が走った

「それは本当か？」

「ああ、間違いない。だが、詳しい情報はわからない。俺より先に潜入した奴からの連絡が途絶えたからな」

連絡が途絶えた。

それは、つまり……

「そうか……遺族には遺言書と手当金は？」

「先日、既に……な。しかし、何度経験しても慣れんな。友が死ぬのは」

「同感だな。だけど、慣れないと壊れるぞ」

「わかっているさ。このUSBに、これまでのデータのまとめが入ってる」

杉並は義之に返答すると、懐からUSBメモリーを取り出して、手渡した

「確かに、受け取った。麻耶」

義之は受け取ると、副官であり、恋人である麻耶にメモリーを預けた

麻耶は預かると、それをアタッシユケースに仕舞った

「で、悪い話の二つ目は？」

「ああ、L4コロニーで不穏な動きがある」

「L4コロニー？ あそこは確か、ユーラシア連合の管轄ね」

杉並の言葉に麻耶は眉を潜めた

現在、広大な宇宙には巨大な人工居住地空間として、コロニーが数多く建造された

その内のラグランジュポイントの4番目、つまりはL4にコロニーを建造したのが

ユーラシア連合なのである

尚、初音島はL1にコロニーが浮いている

「L4コロニー………ユーラシア連合………っ！ ダルクスか!!」

義之が叫ぶように言うのと、全員の視線が集中した

「ふっ、流石は、同志桜内だ」

「ダルクス？ って、ことはダルクス人？ あの人たちがどうしたのよ」

水月は義之がなぜ、コロニーダルクスのダルクス人を挙げたのか分からなかった

「これは俺の予想だが……武装蜂起しようとしてるんだな？」

「「え!」」

義之の言葉を聞いて、杉並以外の全員は驚いていた

「ふっ、流石の慧眼だな。その通りだ。新型機の内容も確認した」

杉並はそう言いながら、懐からプリントアウトされた一枚の画像を出した

その姿は、曲線主体の緑色の装甲の機体だった

「……でも、信じられないわ。あのダルクス人が武装蜂起なんて……」

麻耶は画像を見ても未だに信じられないのか、首を振った

「だが、俺は納得できる。ユーラシア連合はやり過ぎたんだ。だけど、武装蜂起したのは

極一部だな？」

「ああ、確認したのは多くても師団くらいだ」

義之の言葉に杉並は頷いた

「そうだよ、ね、ダルクス人さんだって、我慢の限界だよ……」

遥は悲しそうな表情で、俯いた

なぜ、ダルクス人の武装蜂起が起きそうなのか

……この発端は、今から50年近く昔まで遡る

新太陽暦20年

人類が宇宙に進出し、コロニーを建造し始めた頃だった

あるコロニーの、ひとつのマンションから始まった

ある日、保育園の送迎バスが子供を向かえに行つたが、どんなに待つても現れなかつたのだ

最初は、病気かと先生は思った

しかし、連絡もないのはおかしいと思い、その日の夕方、警察を伴い入室したのだ

そして、見つけたのは

家族全員の死体だった

その死体は、あまりにも綺麗だった

部屋にも争つた形跡もなく、まるで、直前まで普通に生活していたように綺麗だった

当初、警察は一家心中と判断して深くは捜査しなかつた

しかし、事件はそれで終わらなかつたのだ

その翌日は、その部屋の隣室の家族が

その翌日は、近所の一軒家の家族が

と言つた様子で、次々と死んでいったのだ

流石に、これはおかしいと気付いた警察は医療機関と連携して捜査した

そして、原因が判明したのは、最初に死人が出てから半年後だった  
原因は未知の病原菌だった

その病原菌が見つかるまでの、半年間

犠牲者は、当時の全コロニーの総人口の半分にまで到達していた

世界中の研究者達は、その病原菌に対してのワクチンの精製に取り掛かった

が、成功したのは

初音島のみだった

当時、初音島は中立国家として名乗り挙げたばかりだったが、色んな分野で最先端を  
走っていた

それは勿論、医療でもそうだった

当時から、色んな分野の博士号を取得していた芳野さくらを筆頭に、ワクチンは大量  
生産されて、世界中に無償で配布された

そのワクチンのおかげで、事件は終息した

しかし、終息するまでに全コロニー総人口の内、約7割が犠牲になった

そして、そこから事態は思わぬ方向に進んでしまったのだ

ユーラシア連合が

『あの病原菌をばら撒いたのは、コロニーダルクスのダルクス人共だ！』

と、声高に叫んだのだ

そして、世界中の人々もそれに賛同してしまったのだ

世界はどうやら、事件に対してのはけ口を求めていたようだ

そして、ユーラシア連合の発言にも理由はあつた

当時起きた、未曾有のバイオハザード事件

その時、コロニーダルクスでは、被害者がほとんど出ていなかったのだ

しかし、ユーラシア連合の発言に待ったを出した国があつたのだ

それは、初音島とJEUだつた

初音島とJEUが言ったのは

『人類が宇宙に進出する際に、未知の事件が起きるのは予想の範疇だつた。宇宙は人類にとつて、未開の地。故に、今回のようなことは、予想できた筈だ』

確かに、人類が宇宙に人口の大地であるコロニーを建造した際

色々な事故や事件が起きた

隕石の直撃、宇宙放射能による不治の病、既存のウイルスの突然変異、等々だ

初音島とJEUの発表を聞いた世界各国は、納得はしないまでも、引いてくれた

しかし、ユーラシア連合だけは頑なに引かずに、一方的な判断を下した

それは

1つ、コロニーダルクスのダルクス人は、本国の政治に一切の口出し及び、干渉を禁じる

2つ、ダルクス人は姓を名乗ることを禁じる

と、言うものだった

当然、ダルクス人たちは怒った

デモも起きたほどだった

しかし、ユーラシア連合はそのデモに対して、最悪とも取れる方法で対処したのだ  
それは

デモ行進をしていたダルクス人に対して、一方的に武力による鎮圧を行ったのだ

しかも、それだけに飽き足らず、デモに参加したダルクス人の親族までも公開処刑したのだ

ここからだった

ユーラシア連合のダルクス人の迫害は、加速していったのだった

「あんなことでは、武装蜂起も仕方ないな………」

義之の言葉に全員沈黙した

「ユーラシア連合の人たちは気付いてるのかしら……私達の使ってるMSが、そのダルクス人の人たちのおかげで、完成して、発表できたのは……」

麻耶は悲しそうに呟いた

その理由は、初音島が採用した発泡金属とPS装甲がダルクス人の優れた金属精製技術によって、完成したのだ

逆に言えば、ダルクス人の協力なくして、アストレイの完成も無かったのだ

そして、アストレイの完成後に、世界中にMSを発表したのだ

つまりは、世界をタイタンから救った一端は、ユーラシア連合が迫害しているダルクス人が担っていたのだ

そして、しばらく沈黙していると

「んで、いい話ってのはなんだ？」

義之が杉並に問いかけた

「ああ、だが、その前にだ。同志桜内よ。なにか、ストライクに対して不満があるんじゃないのか？」

杉並の言葉に、義之はしばらく黙ると

「どうして、そう思った？」

「ふつ、簡単な話だよ。先ほど、お前がシミュレーターから出た時に、少し浮かぬ顔を



していたのでな」

「義之？」

杉並の言葉に義之が黙っていると、麻耶が心配そうに、見つめてきた

「……はあ、隠しきれたと思っただがな」

義之は頭を掻きながら、呟いた

「それじゃあ？」

「ああ、確かに最近、ストライクの動きが遅く感じる」

「あらら、OSの設定ミスったの？」

「いや、それは無い。OSの設定はずっと変えてない」

「ええ、機付き整備長の私も、月に一回確認してますが、設定は一切変わってません」

速瀬の言葉に、義之と麻耶が言い返すと

「ストライクも最早、2年前の機体だから同志桜内の操縦技能に追いつかないんだろうな。さて、ここでいい話だ！」

「なんだよ、勿体つけずにさっさと見え」

「ふつ、今、天枷研究所で最新の機体が開発されている！」

「新型？ それって、アストレイ3型やムラサメじゃないの？」

杉並の言葉に、速瀬がいぶかしむ様に視線を向けた

「ふん！ あんなの何処が最新鋭だ！ 今、同志桜内の部隊で試験中ではないか！」  
「いや……どつちも、最新型なんだけど……」

杉並の言葉に麻耶が呆れていると

「それに、聞いて驚け！ 開発されているのは、GAT-Xナンバーの最新型だ！ 開発にはかの、篠ノ之東博士も関わっている！」

杉並の言葉に、義之たちは眼を見開いて驚いている

「しかも、確認している限りで数は3機！ こちらの調べでは、スペックはストライクの3倍以上だ！」

「ストライクの3倍以上だと!?!」

「しかも、あの東博士まで!?!」

篠ノ之東博士

彼女は初音島でも有数の科学者で、天才（災?）の名を欲しがままにしている

その実力は大統領でもあり、科学者でもある芳野さくらも認めている

しかも、特にロボット関係ですばらしい技術力を有しており、MSの開発にも一役買っている

ただし、自由気まますぎるのと、一握りの人間としか会話しないので、コミュニケーションが難しいのである

以上、説明終了

「こりや、新型は期待できるな」

「ああ、なんせ、芳野博士と篠ノ之博士のコンビだからな」

義之と杉並の言葉に、全員頷いていた

## 始まる試練

広大に広がる廃墟群

その中に、機械で構成されたの無数の巨人達が立っていた

「この試験で決まる……」

その内の一機のコクピット内部

狭いコクピット内に座ってる少年は、操縦桿を緩く握りながら、小さく呟いた  
すると、コクピット内に電子音が鳴り響き、サブ画面に数人の女子の顔が映った

『20601より各機！ 試験開始まで、残り5分よ！ 準備は良い?!』

そう言ったのは、206訓練部隊の隊長役を勤める涼宮茜すずみやあかねである

活発な少女で、短く切りそろえた髪をヘアバンドで纏めている

とある人物を信奉していて、近接戦闘を得意としている

『20602、麻倉陽菜あさくらほるな。機体状況万全！ 何時でも行ける！』

若干男口調で喋ったのは、麻倉陽菜といい、この206訓練部隊では風紀委員的立場である

なぜ男口調なのかというと、家族が男ばかりなのが理由に挙げられる

『20603、築地多恵！つきしたえ 機体は万全！ 何時でも行けるよ、茜ちゃん！』

次に名乗ったのは、茜を慕っている築地多恵である

因みに、彼女は百合気味で、茜にしよっちゅう飛び掛るのである

その度合いは、茜曰く、

『何度、貞操の危機を感じたか』

らしい

焦ると、どこかの方便で喋るのが確認されている

『20604、田倉美智子。たくらみちこ 機体は万全です〜！ 何時でも行けるよ〜！』

語尾が間延びして喋ったのは、田倉美智子だ。

小柄な体躯と愛らしい見た目で、部隊内のマスコットの立場にある

しかし、その視野の広さは定評があり、冷静に判断を下せるために、中距離支援を得

意としている

『20605、柏木晴子！かしわざいはるこ 機体は万全！ 狙撃支援は任せて〜』

緊張感など微塵も感じない喋り方なのは、柏木晴子とい

的確な状況判断と視野の広さ。さらには狙撃適正の高さから訓練生内では、ダントツ

の命中率の高さをたたき出している

『こちら20606、土見稟。つちみりん 機体状況は万全だ。いつでも行けるぜ』

そして彼、土見稟

彼は最初、成績は最低のCランクだった

それを、必死の努力でAランクまで持っていったのだ

それは正しく、秀才と言えよう

そんな彼の持ち味は、勘の良さと近接機動戦だ

『で、茜。教官からの命令、どうする?』

『あー、あれ?』『207訓練部隊だけは絶対に撃破しなさい!』『ってやつ?』

晴子からの質問に、茜は思い出しながら告げた

『そーそー、それそれ! どう思う?』

『どうせ、香月教官と神宮司教官が賭け事でもしたんだろ?』

香月教官というのは、フルネームを香月夕呼こうづきゆうこと言い、206訓練部隊の教官をしてお

り、207訓練部隊の教官である神宮司じんぐうじまりも教官とは腐れ縁なのだという

それ故か、事あるごとに賭け事をして勝負をするのだ

『そういえば、始まる前に、2人が何か話し合ってたな』

『あー、それは決まりましたねー。完全に巻き込まれたねー』

「勘弁してほしいな」

巻き込まれるほうとしては、堪らないだろう

『で、茜はどうするの?』

『ん、そうねー』

晴子が聞くと、茜は腕組みして、しばらく悩み

『そんじゃあ。とりあえず、片っ端から戦って、お互いに生き残ってたら、戦うってのはどう?』

寧猛な笑みと共に、告げた

『異議なくし』

『右に同じく』

『賛成でーす♪』

『茜ちゃんについてくよ!』

「楽しみだな」

茜の言葉に、各々、返事した

『OK! そんじゃあ、最後まで生き残って最高の成績で任官するわよ!』

『『『『了解!』』』』

茜の言葉に全員、斉唱で答えた

第3者 side OUT

? side

俺は、赤い非常灯が点いた狭いコクピットの中、両手をヘルメットの後部で組みながら眼を瞑っていた

すると、電子音が聞こえたので、姿勢を正した

『20701、榊千鶴より、207各機！ 試験開始まで、5分を切ったわよ！ 準備はいい!?!』

正面のメインモニターに、少し太い眉毛に眼鏡を掛けた、気の強い同い年の女の子  
委員長こと、榊千鶴の顔が映った

『20702、御剣冥夜。準備は完了している。いつでも行けるぞー!』

次に映ったのは、キリツとした顔立ちに、ポニーテールにした藍色の髪が特徴の女の

子  
御剣冥夜だ

因みに、俺の彼女な？

『20703、彩峰慧……機体異常なし。いける』

短く切りそろえた髪に、あまり感情を読めない顔が映った

こいつは、彩峰慧だ

近接格闘ではかなり強い

けど、少し我が強いから委員長とはしよっちゅう喧嘩するのが悩みだ



『20704、よろいみこと 鎧衣美琴！ 機体状況は万全！ いつでもいけるよー！』

そう言ったのは、見た目少年のような少女、鎧衣美琴だ  
かなりマイペースな奴で、人の話を聞きやしねーんだよ

でも、サバイバル技術の高さと付き合いやすさは良いんだよ

『2、20705、たませみき 珠瀬壬姫！ 機体状況、オールグリーン！ いつでもいけます！』

少しドモリながら言ったのが、珠瀬壬姫。通称タマだ！

猫っぽい奴でな、この隊のマスコットでもあるが、狙撃が超得意で確か、歴代訓練生

随一らしい

『20706、しろがねたける 白銀武！ 機体は万全！ いつでもいけるぜ！！』

んで、最後に俺

はい、そこ。ハーレムとか言うんじゃねえよ

と、俺達が点呼を取っていたら

『皆〜！ 絶対に勝ってね〜！ 特に夕呼の部隊には〜』

と、俺達の部隊の教官のまりもちやんが半泣きで言ってきた

なんだ？

『神宮司教官、どうしたんですか？』

「そうだぜ。何時ものまりもちやんらしくないぜ？」

『それは分かってるんだけど……ううう、有明はイヤーー!!』

俺のまりもちやん発言にすら、突っ込みがねえのは相当だな

しかし、有明って……まさか……

「まりもちやん。もしかして……夕呼先生と賭け事したんですか？」

『そうなのよ……つい、売り言葉に買い言葉で……』

「口で夕呼先生に敵うわけではないですよ」

『そうなのよ……それなのに……うう……』

ああ、頭抱えちゃった

『教官、大丈夫ですよ。私達が勝てばいいだけですから!』

『………圧勝する』

『勝ちに行くよー!』

「おう! 要は、俺達が勝てば大丈夫ですよね?」

『みんなくお願いね〜』

まりもちやん、涙目だよ

んじやま、恩師の為に、勝ちに行くか!

武 s i d e O U T

? s i d e

俺、織斑おりむらいちか一夏は、緊張感で心臓が高鳴りながらも、機体の時計を見た  
そろそろだな

「20901より209各機！ 試験開始まで、5分を過ぎた！ 準備はいいか!？」  
俺が、そう告げた瞬間

メインモニターに、全員の顔が映った

『20902、篠ノ之箒しののほうき、準備完了！ 機体状況万全！ いつでも行けるぞ！』  
いの一番に返答してきたのは、俺の第一幼馴染  
篠ノ之箒だ

昔通ってた剣道の道場の同門だ

『20903、ファン・リンイン 鳳鈴音！ 機体は万全よ！ 何時でもいける!』

次に映ったのは、第二幼馴染の鳳鈴音、通称鈴だ

ただ、鈴々とか呼ぶのはNGな？ トラウマがあるんだよ

あ、あと、貧乳とかは禁句だ

言ったら、羅刹の如くキれる

『20904、セシリア・オルコット。機体は万全。いつでもいけますわ!』

次に映ったのは、金髪ロールが特徴のセシリア・オルコットだ

こいつは、本物の貴族だな

少しばかり、プライドが高い

けど、狙撃適性が高い

『20905、シャルロット・デュノア！ 機体は万全。いつでもイケるよ！』

次に映ったのは、ショートカットの金髪にエメラルド色の瞳

それに、中性的な顔立ちの女の子

シャルロット・デュノアだ

シャルは、少し複雑な経緯で来たんだ

だけど、俺が姉であり教官の千冬ちふゆねえ姉に頼んだら

どういうわけか、元の姿に戻れて、今は俺の家に一緒に住んでる

『20906、ラウラ・ボーデヴィツヒ！ 機体状況オールグリーン！ いつでも行けるぞー！』

ぞー！』

次は、長い銀髪に右目の眼帯が特徴だ

名前はラウラ・ボーデヴィツヒだ

こいつは変わり種で、元はE.U.D.ドイツ軍の特殊部隊隊長の少佐だったんだ

最初は恨みと憎しみで行動してたんだよ

で、色々あって今は、年相応の女の子だ

ただ、時々、間違った日本知識が出るんだよ

まったく、犯人は誰だよ

〈犯人は、クラリツサ・ハルフォーフだby作者〉

『20907、更識簪さらしきかんざし、機体オールグリーン、異常なし。大丈夫だよ』

次は、物静かな眼鏡を掛けた水色の髪の子

名前は更識簪だ

機械に強くって、メンテも出来る

アニメが好きで、子供向けのヒーロー物とかが好きなんだよ

『20908、神崎直哉かんざきなおや、機体状況異常無し、システムオールグリーン。準備は万端だぜ

？』

で、最後は俺の親友

神崎直哉だ

ただ俺は、2年前までの計8年間

直哉は死んだ

と思ってた

ただ、どういうわけか、ユーラシア大陸に派遣されてた千冬姉が直哉を保護

そして、帰ってきたのだ

ただ、帰ってきた当時は酷かった

直哉は自我が崩壊しかけていて、まるで人形みたいだったそれを俺と千冬姉の二人掛かりで、一年かけて治したんだ千冬姉なんか、時々軍の仕事を休んでたぐらいだ

『お前ら、準備は出来たか？』

気付くと俺の姉、千冬姉の顔が見えた

『教官、我々の勝利を捧げます！』

気付けば、ラウラが強気な顔で告げていた

ラウラは千冬姉を信奉してるからなー

いや、最早、崇拜か

「こっちは準備OKだぜ、千冬姉……じゃなくって、教官」

ヤバイ！ ミスった！

俺は内心ドキドキしながら、千冬姉の顔を見た

千冬姉はモニター越しに睨んでいたが、溜め息を吐いて

『織斑、今回は見逃してやる』

よし、セーフ！

俺は千冬姉に見えないように、ガッツポーズをした

『お前達、気を抜くなよ？ 今回は何か有りそうだ』

『大丈夫ですわ。私達のコンビネーションならば、如何なる敵でも、撃破出来ます！』  
『そうですよ、織村教官。私達ならば勝てます！』

千冬姉の言葉に、セシリアと箒が意気揚々と答えている  
そんな二人の言葉を聴いても、千冬姉の表情は優れない

『ああ、そうなんだがな……：……今まで、桜内大佐の動きが無いのが気になる（ボソリ）  
なんだ？ 後半がよく聞こえなかつたんだが

『ともかく！ 最後まで気を抜くなよ？』

『「解」』

さて、行こうか!!

一夏side END

?side

「ふむ、そろそろだな」

私、クラリツサ・ハルフォーフは時計を見て呟いた

そして

「21001より、210各機！ 試験開始まで5分を切った！ お休みは終わりだ。  
機体のシステムを戦闘モードに切り替える!!」

私も言うと同時に、機体の設定を戦闘モードに切り替えた

次々と灯るモニターに各種機器

私達が乗っている機体

M1アストレイは、初音島が世界で初めて開発したMSだ

その設計は優秀で、マイナーチェンジ機の2型が主力機として採用されている

それにより、M1アストレイは第一線から姿を消して、今は訓練用の機体となっている

しかし、私達の祖国で採用されていたシグー・タイフーンやデイン・ラファール。ジョン・トナーードよりも動きが軽く、扱い易い良い機体だ

『21002、エルリトリンデ・アーシユベルグ！ 機体は万全！ 何時でもいけます！』

エルトリンデ・アーシユベルグ。こいつは私と隊長が率いていた部隊では、風紀委員的立場の奴でな

隊内の風紀はこいつが担っていた

近接格闘に定評がある

『21003、エルシア・ハーヴェンス！ 機体は万全です！ いつでもいけますよ！

お姉さま！』

私をお姉さまと呼んだのが、エルシア・ハーヴェンスだ



私を慕っているらしい

言っておくが、私が言わせてるわけではないからな？

『21004、レティシア・ライゼンバッハ。機体は万全です。何時でも大丈夫です！』  
少し真面目な感じに答えたのが、レティシア・ライゼンバッハだ

隊内では、レティの愛称で呼ばれている

真面目ゆえに、突発的な事態に弱いが、近接射砲戦が強く、ガンズリンガー機動砲兵として有能だ

『21005、クリステイアーネ・ホーエンフェット！ 準備完了！ 機体は万全です！』

何時でも大丈夫です！』

次にクリステイアーネ・ホーエンフェット

愛称はクリス

こいつは、万事をそつなくこなすタイプでな

隊内では、ご意見板の役割を担っている

遠距離支援が得意で、砲撃支援を担当している

『21006、マルギツテ・エーベルハイト。機体は万全です。何時でも』

マルギツテ・エーベルハイト

こいつは冷静な奴でな

その判断力はすばらしいの一言でな

狙撃適正が高く、判断力と併せて頼りになる

『21007、ライラ・フリードリヒ！ 機体は万全！ 何時でも大丈夫！』

最後に

若干、男口調なのがライラ・フリードリヒだ

こいつは実家が有名な軍人家系でな、家族のほとんどが男らしく、口調はそれが理由らしい

こいつは、私と同じオールラウンダーで、私と共に遊撃を担当している

「今回の試験は隊長が相手だが、負けられないぞ！」

『『『『『了解！』』』』』』

さて、勝ちにいきますよ。隊長？

## 選定試験

「おーおー、やってるねー」

俺、桜内義之は、電子双眼鏡で今やっている試験を廃ビルの屋上に座りながら見ていた

俺が見ている試験

総合戦闘技術演習は、多脚戦車、戦闘機、MS、歩兵、各課の卒業試験なんだ  
んで、俺が見てるのはMSパイロット訓練生たちの卒業試験なんだ

MSだと、一大バトルロワイヤルなんだ

廃都市を再現した訓練場に、対象部隊をランダムに配置して開始する

んで、接敵したら戦うって寸法なんだ

だから、三つ巴の戦いも起きる

「あ？ 202訓練部隊は、もう全滅か？」

俺はそこで、腕時計を確認した

「たった5分で全滅なんて、訓練のやり直しだな。撃破したのは、206か。麻耶、206訓練部隊のデータを」

『了解、送るわね』

俺の副官であり恋人である麻耶が、俺の携帯端末に対象訓練部隊のデータを送ってきた

「ふーん、連携速度に役割分担がしっかりしてる。こりゃ、見つけてくれたまゆき先輩には感謝だな」

俺はそうごちると、視線を別方向に向けた

さて、選んだ奴らは全員生き残るだろうな？

そうじゃないと、イベントを考えた意味がないんだがな

義之 side END

第3者 side

試験が始まって、約40分後

「お？ 今度は212が負けたか。撃破したのは……210か。流石は、元EUDイツ軍特殊部隊だな」

試験開始40分で、参加していた訓練部隊は、半数に減っていた

「ふむ、俺たちが選んだ部隊は……よしよし、全機健在だな。そうこなくっちゃ」

義之はそう呟くと電子双眼鏡から眼を離し、立ち上がって振り向いた

振り向いた先には、義之の愛機のストライクが片膝立ちで待機していた

もちろん、PS装甲はダウンしている

そして義之は、ストライクのコクピットに乗り込んだ

すると

『こちらスクールD3、あさくらゆめ朝倉由夢。兄さん、本当にやるんですか？』  
フェイスマウントディスプレイ

F M Dに、妹分の由夢の顔が映った

彼女は試験機のアストレイ3型に搭乗していて、今回機体はスナイパー仕様に調整されている

「あつたりまえでしょ？ なんの為に、お前らと呼んだんだよ」

そう言いながら義之は機体のOSを立ち上げた

すると、画面に

General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

と、表示された

この最初の5文字を取ると

GUNDAM

ガンダムなのだ

そして義之は、OSが立ち上がったのを確認すると

「オーディーン1より、ワルキューレ隊各機。準備はいいか!」

と指揮官らしい声で、呼び掛けた

すると

『こちらオーディーン2、伊隅みちる。準備は完了してます』

最初に応じたのは、MS隊副隊長の伊隅みちる中佐である

何時もならば、義之と二機エレメント連携を組むが、今回は別の人物と組んでいる

『アテナ1、速瀬水月はやせみつき! 何時でもイけるわよ〜!』

と楽しそうに返答してきたのは、義之とは同期の速瀬水月少佐である

本来ならば、上官である義之に対してこんな口調で話すのは感心しないが、この隊は

特殊なので気にしない

『スクルド1、天枷美夏! 準備は完了している!』

次に映ったのは、ショートカットの青髪に小柄な体の特徴の女子

天枷美夏だった

美夏が乗っているのは、アストレイゴールドフレーム天（以後、AG天と記載）である

前大戦末に中破したアストレイゴールドフレームとブリッツガンダムを組み合わせて作った機体だ

右手に武装が集中しているのが欠点である

『スクルド3、朝倉由夢。準備は完了してます』

そして、妹分の由夢

彼女は前述通り、アストレイ3型のスナイパー仕様に搭乗している

今回義之は、この二人と組んでいる

『オーデイン4、橘菊理。準備は完了してるから、何時でも大丈夫ですよ』

次に映ったのは、長い黒髪にクリツとした瞳。広い額が特徴の女性だ

名前は橘菊理である

彼女はバスターガンダムに搭乗して、中、遠距離支援を得意としている

バスターガンダムの欠点は格闘用兵装がないので、近距離戦を苦手としている

『オーデイン5、更識楯無、何時でも大丈夫よ』

菊理に続いて、お気楽そうな声が聞こえてきた

画面には、外にはねている水色のショートカットの髪が特徴の女性が映っている

名前は更識楯無で、アストレイブルーフレームセカンドシに搭乗している

飄々としていて掴みどころがないが、かなりのカリスマ性を有している

義之も時々、行動が読めなかったりする

『フェニックス1、草壁美鈴くさかべみすず。準備は完了している！』

次に映ったのは、キリつとした眼に長い赤髪。凜とした雰囲気の美少女だった

名前は草壁美鈴と言い、剣術においては類まれなる腕を誇っている

そんな彼女の搭乗機はアストレイ・レッドフレームである

レッドフレームの腰には、日本刀型近接戦闘長刀の〈ガーベラ・ストレート〉が装備

されている

『フェニックス2、皐月駆さつきかける。準備完了！ 行ける！』

次に映ったのは、少し長い前髪で右目が隠れた少年だった

名前は皐月駆である

彼は、近接戦闘重視にカスタムされたアストレイ3型に搭乗している

なお、駆と菊理は付き合っている

今回、菊理から駆までの四人がチームを組んでいる

『アイギス1、如月修史ごとつきしゅうじ！ 準備は完了！ いつでも行ける！』

続いて映ったのは、童顔に少し身長の高い男だ



名前は如月修史と言う

見た目が若く、声も高い。そのため、高校生と言われたら信じそうだが、立派な成人男性だ

自分の見た目がコンプレックスである

彼は、近接格闘用にカスタムされたアストレイ3型に搭乗している

『アイギス2、真田設子、準備は完了している。いつでも』

次に冷徹な声と共に映ったのは、薄紫色の髪が特徴の女性だった

名前は真田説子と言う

元々は敵対関係だったが、所謂、尻尾切りにあい、処分されそうになったのを修史が助けたのだ

暗殺者として育てられたために、あらゆる技能に優れているのだ

補足だが、彼女と修史は付き合っている

そんな彼女は、高機動近接戦闘重視にカスタムされたアストレイ3型に搭乗している  
『アイギス3、穂村有里！いつでも行けまーす！』

続いて朗らかに言ったのが、穂村有里である

腰近くまで伸ばした緑色の髪に、八重歯が特徴の女性である

彼女は機動近接戦闘重視にカスタムしたアストレイ3型に搭乗しており、特に機動砲

撃が得意なのだ

そして、修史、説子、有里の三人でアイギスの三枚楯と呼ばれている

そして、全員が返事したのを確認すると義之は頷いて

「OK！ 全員確認した！ さあ、始めようか！ エインフェリアの選定を！」  
と、凜とした声で告げた  
すると

『ジャミング、スタート！』

と、麻耶が告げた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

稟side

『あーもう！ いきなりなんなのよ！ ジャミングなんて、聞いてないわよ！』

「涼宮、気持ちはわかるから怒鳴るな。耳がキンキンする」

俺の所属してる訓練部隊隊長の涼宮茜が、突然のジャミングに怒鳴っている

おかげで耳が痛い

だけど、気持ちはわかる

40分が経過したら、いきなり強力なジャミングが発生してレーダーが近距離しか効かなくなった

しかも、コマンドポスト C Pとも連絡が着かない

『茜、落ち着きなつて』

「そうだ、落ち着け。多分、これも予定にあつたんだらうな」

『……そうね。ウダウダと言つても、仕方ないわね』

俺と柏木の言葉で落ち着いたのか、涼宮は一回深呼吸をすると

『全周警戒を厳にしなから、移動しましょう！』

『『『『了解！』』』』』

俺達は涼宮の命令に従つて、移動しようとした

その時だった

首筋をチリチリと、嫌な感覚が走った

俺は直感に従い、機体を真後ろに向けた

『土見、どうしたの？』

俺が進行方向とは逆の方向に機体に向けたのを不思議に思つたのか、柏木が首をか  
し  
げ  
た

「……………」

俺はそれに返答せず、ずっと視線を向こうに向けていた

その瞬間

一瞬だったけど、光った

「っ！ 柏木！」

俺は直感に従って、隣の柏木機を突き飛ばした

『土見、なにを!? なっ!?』

涼宮が驚いて俺を叱った

その瞬間

青い閃光が、先ほどまで柏木機の立っていた場所を駆け抜けて、ビルを貫通した

ビームじゃねえか！

「全機！ ビルの影に隠れろ！ 次が来るぞ！」

俺の掛け声に全員すばやく反応して、ビルの影に隠れるが

「柏木！ 早くしてくれ！ 長くは保たない！」

『わかってる！ でも、こうなった原因は土見にあるんだけど?』

「文句は後で聞いてやるから、早く！」

俺はビルにめり込んでる柏木機の前に立って、楯を構えていた

ビームと実弾が交互に楯に当たって、機体が激しく揺れた

『よし！ 土見、いいよ！』

「了解！」

柏木が隠れたのを確認した俺は、機体をビル陰に隠した

稟SideEND

第三者Side

「お？ 隠れたうえに、ビルを切って簡易版の煙幕を作ったか……あの六番機、イイ勘してるな」

義之はメインモニターを見ながら、笑みを浮かべた

『あれをイイ勘で済ませられますか？ 私がトリガーに指を掛けた瞬間に反応してましたよ？』

そんな義之を、妹分の由夢が呆れた顔で見ている

「俺はイイ勘だと思ったんだがな」

由夢の言葉に義之は、唸っていた  
すると

『桜内、貴様は一度、自分の操縦ログと我々の操縦ログを比べてみる。違いが一目瞭然だぞ』

「ん、俺は至って普通のMSパイロットなんだがな……」

美夏の言葉に義之は、腕組みをしながら唸った

が

『『いい（え）や、異常だ（です）』』

美夏と由夢は同時に言い放った

「俺に味方は居ないのか!？」

と義之がうなだれていると

『しかし、どうしますか兄さん？ このままでは狙えませんかよ?』

『美夏が行こうか?』

と二人が問いかけてきた

すると、義之は姿勢を正して

「いや、俺が行こう。由夢はそのまま狙撃を続行。天枷は由夢の護衛を」

『了解!』』

二人が斉唱すると同時に、義之はストライクを前進させた

「さて、楽しませてくれよ!」

第3者 side END

武 side

「くっそ! なんなんだよこいつ!」

俺達は未確認の新型機に突如襲われた

しかも、状況を確認しようにも、CPとの通信も途絶してる

『02！ こつちに来れないの!?!』

『無茶言うな！ こつちの相手はイージスだぞ!』

おいおい！ GATかよ！

『ど、どうするんですか?!?!』

『05落ち着いて！ 前方の相手を狙撃して!』

なるほど！

『え!? でも、当たりませんか?』

『当たらなくていいの！ 相手に隙が出来れば、06が突撃する!』

「おう！ 俺に任せろ!」

俺は委員長の考えに気付いて、模擬弾の装填されたライフルを投棄、代わりにビーム

サーベルを装備した

『……わかりました！ 足止めは出来ても、数秒です!』

「十分だ!」

俺はスラスターを吹かした

武 s i d e E N D

水月 s i d e

「あつはつは！ なかなか楽しませてくれるじゃないの!」

あたしは今の戦いが楽しくって、高笑いしてた

今あたしが相手をしてるのは、207訓練部隊の1、5、6番  
なかなかの連携じゃないの！

すると、サブ画面に中佐の顔が映った

『速瀬、そつちはどうだ？』

「あ、中佐！ なかなか楽しめてますよ！ 中佐はどうですか？」

あたしは1番機の撃ってきた弾を避けながら、ビームで牽制した

『こちらも中々だな』

「ですよね！ しかもこいつら、動きに独創性が見られます。なにより、あの6番機」

『ほう。よく気付いたな』

「と、言いますと？」

『あの6番機のパイロットが、新型OSの発案者だ』

「マジですか!？」

おっと、言葉遣いが

『ああ、本当だ。ただし、口外は無用だぞ？ 機密だからな』

「了解！」

おっと！ あの5番機、際どい位置を狙うじゃないの!!



あたしは5番機が撃ってきた弾を避けて、一気に接近してきた6番機を蹴り飛ばした悪いけど、訓練生如きの弾なんざ喰らってられないのよ！

あたしの目標は義之に勝つこと！

だから、あんたたちには踏み台になってもらうわよ!!

水月sideEND

一夏side

「くっそ！……いつらー！」

俺は、目の前の機体が振り下ろしてきた刀を紙一重で避けた

「いきなり襲ってきて、誰なんだよ！ それに、アストレイに似てる機体を使いやがって

!!」

俺の目の前に居る機体は、正直言って、M1アストレイに似てた

だけど、所々違う

『まさか……ガンダム!?!』

おお、あの簪が大声を……って、マジか!?!

「ガンダムだど!?!」

『うん！ 聞いたことがある。アストレイを量産するに当たって、ガンダムをベースにした機体を開発したって!』

「なるほど！ それなら納得だ！」

俺は刀を再び避けるが、楯を持っていかれた！

「ちい！ 2、3、8！ こつちに来れないのか！」

『無茶言うな！ こつちにも蒼いアストレイが来てるんだ！』

『なんなのよこいつ！ あんな大きい得物なのに、動きが速い！』

俺はサブ画面に映つてる戦いを見た

そこには、確かに蒼いアストレイが居た

が、かなり形状が違つてるし、なにより巨大な剣を持つてる

『こつちも難しい！ ミサイルの雨が激しい！』

『敵機捕捉！ 機種特定………G A T-X 1 0 3、バスター！』

直哉の報告の後、セシリアの切羽詰つた声

つて、マジモンのG A Tかよ！

『一夏！ こうなつたら、集中攻撃で突破するしかないぞ！』

『うん、僕もそう思う！』

ラウラの提案にシャルが賛同した

確かに、これ以上はジリ貧になるな

「わかつた。20901より209各機！ 一か八かで集中突破する！ バスターを落

とすぞー!」

『『『『『『了解!』』』』』』』

こうなつたら、意地だ!

一夏 side END

美鈴 side

「ほう、この攻撃を躲すとはな!」

私、草壁美鈴は目の前の1番機が斬撃を躲せたことに驚いた

私は幼少の頃より剣を嗜んでいるので、剣には自信があつたが

いやはや、訓練生のなかにも強者が居るものだ!

『うーん、確かに強いわねえ。私の攻撃も避けられてるし』

「楯無か。そつちはどうだ?」

私は一緒に接近戦を挑んでいる寮機のパイロット

更識楯無に問いかけた

『今年は粒ぞろいねー。それに、簪ちゃんも強くなつてたし♪』

「む? あの手番機はお前の妹か?」

私は、サブ画面に映っているMLRS<sup>マルス</sup>装備の7番機を見た

『そうよ。あ、だからって手加減しないでね?』

「ふっ、その心配こそ無用だろ」

戦いで手加減するのは、相手に対して失礼だからな！

『こちら菊理。ミサイル攻撃から射砲撃支援に変更します』

『それに伴って、皐月駆が援護に入ります！』

「了解した。気をつけるよ？ どうやら、集中突破する気らしいからな！」

『了解！』

さて、楽しませてもらうか！

美鈴 side END

クラリツ side

「くっそ！ 何者だこいつらは！」

私の部隊は突如、所属不明の機体に襲撃されていた

見た目はアストレイタイプらしいが、機体ごとに細部が違う

新型か？

前衛を勤めてる機体は両手に小型の盾を装備して、打撃兵装として利用してる

中間に居る機体は両手にビームマシンガンを装備しているし

後方に居る機体はビームナイフとビームライフルを装備しているようだ

しかも、一機ずつ特性が違うのか、速度や挙動が違う！

『お姉さま！ クリスが！ クリスがあ！』

「なに!？」

気付けば、クリスの機体が廃ビルに減り込んで機能を停止していた  
恐らく、気絶したのだろう

「ちい！ 全機、連携を密にしろ！ 相手は格が違う！」

『『『『了解!』』』』』

ええい、誰なんだ!!

クラリツサ side END

修史 side

「へー。味方が撃破されたのに、立て直すのが早いな。流星は、元ドイツ軍特殊部隊か」  
俺、如月修史は機体のコクピットでそう呟いた

『油断するなよ。情報だと、隊長は実戦経験者だ』

「わかってるよ、説子」

俺が設子に返事をしたら、サブ画面に有里の顔が

『連携もだけど、指揮能力に操縦技術も高いわね。修史でも一機が限界なんて』

確かにな

俺も義之ほどじゃないが、操縦技術には自信があつたんだがな

「そんじゃあ、本気を出していくぞ！」

『ああ』

『りようか〜い』

二人からそれぞれ、返事がきた

さて、一気に行くぜ!!

修史 side END

稟 side

『茜ちゃん! どうすつべか!?!』

「築地、落ち着け。方言になってるからな」

俺は、パニックになって方言で叫んでいる築地をたしなめていた

だけど、気持ちはわかる

ビルを斬って簡易の煙幕を作ったが、相手に狙撃兵が居るのは変わらない

どうするか悩んでいた時だった

『っ! レーダーに感アリ! 距離600!』

そうだった! 柏木の機体はスナイパー仕様だから、俺達の機体よりはレーダーが強

力なんだ!

『機種の特定は?!』

『待つて………ライブラリ照合結果は……G A T - X 1 0 5 ! ス、ストライク!!』

柏木が悲鳴みたいに報告すると同時に、その姿が視界に入った

特徴的な赤青白のトリコロール

四本角の頭部

赤い翼

その姿は

2年前と変わってなかった

『な!? なんて、初音島の守護神が!? って、土見!?』

気付けば、俺はスラスターを全開にして突撃していた

「ストライクは俺が抑える! 涼宮たちはスナイパーを!!」

俺はそう言いながら、ライフルを投棄してビームサーベルを装備した

『土見は私が援護するから、茜たちは行って!』

柏木の声が聞こえたが、俺の意識はそちらに向かなかった

すると、ストライクもビームライフルを腰にマウントしてビームサーベルを抜刀した

そして

切り結んだ

俺は罅迫り合いになりながらも、機体を前に進めた

その結果、機体同士の額がぶつかった

「ストライク！俺は……ようやく……ようやくここまで来た!!」

俺の口からは、自然とその言葉がこぼれた

すると

『ほう？ この声は……なるほど、あの時の君か!!』

この声は！

「あなたは、あの時の!!」

そう、間違いない

あの時のパイロットだ!!

『面白い！ さあ、全力で来い!』

「行きます!!」

俺の力を見せてやる!!

稟sideEND

晴子side

なんで、初音島の英雄がここに!?

私はモニターに映った機体を見て、驚きで固まっていた

『な!?! なんで、初音島の英雄が!?! つて、土見!?!』



っ！ 土見はなんで!?

『ストライクは俺が抑える！ 涼宮たちはスナイパーを!!』

!?! あの土見が感情をあらわに叫んでる!?!

私はそんな土見がほっとけなくって

「土見は私が援護するから、茜たちは行って!」

気付けば、71式狙撃砲をストライクに向けていた

その先では土見が模擬弾の装填されたライフルを投棄して、サーベルを抜いていて

ストライクもあわせるように、サーベルを抜いていた

そして、激突

二機のビームサーベルがぶつかりあって、激しくスパークを散らした

『ストライク！ 俺は……ようやく……ようやくここまで来た!!』

へ？ この言い方……土見はストライクに会ってる？

『ほう？ この声は……なるほど、あの時の君か!!』

って、ストライクも土見を知ってる!?!

『あなたは、あの時の!!』

って、土見も知ってるの!?!

『面白い！ さあ、全力で来い!』

『行きます!!』

くっ……二人の交差が早くって、援護しづらい!

土見、がんばって!!

私は祈る気持ちで、スコープを覗き続けた

晴子 s i d e E N D

第3者 s i d e

訓練生部隊と義之たちが戦闘を開始してから、10分後

結局、訓練生部隊は全機撃墜された

しかし、義之たちにとっては予想以上で

義之たちにとっては、嬉しい誤算だった

## 王達の願い

場所 ある軍施設地下

「さて、この間試した連中だが」

と、義之が数十人の隊員を前に言った瞬間だった

義之の後ろの机の上に設置された、電話が鳴った

「義之、外線よ。しかも、直通」

と、電話を覗き込んだ麻耶が珍しそうに告げた

「直通外線とは、珍しいな」

義之はそう言いながら、受話器を取った

義之達が居る軍施設は、外部から電話が掛かってくると一旦中央通信オペレーターが

取り次ぐ形式になっている

それは機密の漏洩を防ぐ為の機構だ

しかも、義之達が居るのは軍の中でも機密性が高い特殊部隊

尚更機密性は高いのだ

故に、直通外線を掛けられるのは限られている

「はい、ワルキューレ隊隊長桜内です。……………あ、さくらさん」

どうやら、相手は大統領の芳野さくらだったようだ

「どうしました？ ここに掛けるなんて、珍しいですね……………え？ ……確か居ますが

……………」

義之は机の上から、一枚のプロフィール用紙を取って眺めた  
すると、目を見開き

「は？ ちょ、ちよつと！ それはどういうことですか!？」

義之の驚いてる声に、隊員達は顔を見合わせた

「はい……………はい……………はい、今からそっちに行きますので……………それでは」

義之は受話器を戻すと、体を隊員達に向けて

「予定を変更して、これから通常シフトに入る！ 俺と沢井少佐は少し出るから、なにか採決が必要な場合は、伊隅中佐か朝倉大佐に頼んでくれ。伊隅中佐、朝倉大佐。頼みます」

と義之が言うと、二人の女性

伊隅みちると朝倉音姫あさくらねとめが立ち上がった

「了解しました」

「うん、お姉ちゃんにお任せ！」

と、それぞれ返事をした

そして、隊員が移動したのを確認すると義之は上着をハンガーから取って部屋から出た

その後を麻耶が追隨する

「義之。なにがあつたの？」

麻耶の質問に義之は苦い表情をして

「あーほれ、対象の訓練生の中に、土見稟つて居たろ？」

義之が聞くと、麻耶は目をしばたいて

「え？ ええ、居たわね。その子がどうしたの？」

と、首を傾げた

「実はな………そいつを採用しても、実戦部隊に入れるなって、言われたんだよ」

「え、ええ!! なんだ！」

義之の言葉に、麻耶は目を見開いて驚いている

「そんなの、俺が知りたいよ………でも、さくらさんも何か困つてたみたいだし………」

「困つてた？」

義之の言葉に、麻耶は首をかしげた

「ああ………あんな声、初めて聞いたよ。しどろもどろになってたんだぜ？」



そして、ドアが閉まり

「いつてらっしやいませ」

と、虚は恭しく頭を下げた

軍用電動車は目的地に向かい、静かに走り出した

電動車は橋を渡り、本島に向かっている

橋を渡りきると、窓から閑静な住宅街が見えた

「大分、復興も進んだわね」

麻耶は窓から住宅街を眺めると、嬉しそうに喋った

「ああ、そうだな」

義之もそれに同意するように、頷いた

今から、二年前に起きた、タイタン戦争

戦後、少しずつだが復興が行われて、ほとんど昔の風景に戻っていた

「それに、神族と魔族の方達も増えたみたいだし」

閑静な町並みに居るのは、人族だけではなかった

中には、耳が長い姿がチラホラと見受けられた

それが神族と魔族の証であった

神族と魔族とはなにか

それは、今から約10年前に太平洋のある遺跡から始まった

その遺跡内に突如、巨大な門が出現し、開いたのだ

これが今に言う、【開門事件】である

そして、その門から現れたのが神族と魔族だったのだ

この神族と魔族との交流で、それまでお伽話と思われていた魔法が実在すると証明されたのだ

人族の各国政府は、この神族や魔族との交流の為に、交流都市を制定したのだ

なお、初音島は両世界と同盟を結んでいるので、交流都市の規模はかなり大きい

そして、再び橋を渡りしばらく走ると本島に到着した

本島に到着してからもしばらく走り、一棟の巨大な建物の前に到着した

車のドアが自動で開き、義之と麻耶は車から降りて建物に入った

建物は広く、正面に受付があった

「失礼する。自分は特務部隊隊長、桜内義之大佐」

「同じく、副官の沢井麻耶少佐です」

義之と麻耶が名乗ると、受付嬢が顔を二人に向けて

「はい。本日はどういったご用件でしょうか？」

と、聞いてきた



「大統領の芳野さくら様に呼ばれて来た」

義之は簡潔に用件を述べると、視線で確認するように促した

「承りました。少々お待ちください」

受付嬢は受話器を取ると、短く確認を取り

「確認できました。大統領は地下三階の執務室にいらつしやいます」

と、右側のエレベーターを手で示した

「感謝する」

義之は端的に謝意を述べると、エレベーターに向かった

すると、後方から

「ねえ、今の英雄よね!？」

「間違いないわ! 初音島の守護神よ!」

と、受付嬢達の興奮した声

「人気者ね、義之♪」

「英雄とか、ガラじゃないんだけどなあ……………」

義之はボヤキながら、エレベーターに乗ってB3と書かれたボタンを押した

するとエレベーターは、無音で下っていった

そして、地下三階に到着してドアが開くと

「うんしよ……よいしよ……」

と、銀髪が印象的な小さな少女が高く積まれた書類を持ってフラフラと歩いていた義之と麻耶はそれを見ると、苦笑いして駆け寄り

「さすがに、危ないぞ。アイシア」

「手伝うわよ」

と、書類を抱え上げた

「あ、義之君に麻耶ちゃん！」

銀髪の少女、アイシアは義之たちを見ると、笑みを浮かべた

「どうして、ここに？」

「俺達はさくらさんに呼ばれて、ここに来たんだ」

義之の言葉を聞いたアイシアは、驚いた様子で

「だったら、早くさくらの所に行きなよ！ 私なら大丈夫だから！」

と、先を急がせた

だが、義之たちは首を振って

「アイシアが副大統領なのは知ってるけど、流石にその書類の量は危ないって」

そう、彼女。アイシアは初音島の副大統領なのである

一応彼女のために言っておくが、彼女は少なくとも、義之達よりも年上である

しかし、その見た目は完全に十代の少女のそれである  
いわゆる、年齢不詳という奴である

なお、それはこれから会う芳野さくくも言えたことだが  
閑話休題

「だけど……」

と、アイシアが渋っている

「桜内様、沢井様。手伝いは私がします」

右側から女性の声が聞こえた

三人がそちらに視線を向けると、居たのはメイド服を着た女性だった

「あら、美冬<sup>みふゆ</sup>。調子はどう？」

「はい、沢井様。調子はオールグリーンです」

麻耶の問いかけに、美冬と呼ばれた女性はそう返した

なぜそう返したのかというと、この女性

ロボットなのである

美冬は現在市販されているロボット、ミューのプロトタイプなのである

それゆえに、感情モーションのリミッターが設定されておらず、まるで本物の人間の  
ように感情豊かなのである

「つと、それよりも早く芳野様の所へ向かってください。少しお困りの様子でしたから」

美冬の言葉に、義之は少し考えて

「わかった。ここは頼む」

と、美冬に任せることにした

「はい。芳野様はいつもの執務室にいらつしやいます」

美冬はそう言いながら、執務室の方向を指差した

「わかったわ」

「アイシアのこと、頼むな」

二人はそう言うのと、執務室の方向に歩き出した

「まったね〜♪」

アイシアの言葉を背に、二人は歩き続けた

そして、数分後

二人の前には木製の大きな扉

「相変わらず、デカイことで」

義之は眩きながら、ドアをノックした

すると

『どつどつ〜』

中から、少女のような声が聞こえて、入室を促してきた  
 声を聞いた二人は、入室すると

「失礼します！」

二人そろって、敬礼した

「二人共、よく来てくれたね〜」

二人を出迎えたのは、身長は百四十くらいの金髪碧眼の少女だった

この見た目少女こそが、初音島の大統領

芳野さくらである

「待ってたよ、義之くんに麻耶ちゃん！」

さくらはトテテと走って、近づいてきた

一応、彼女のために説明しておくが、彼女はこの場の誰よりも年上である

正確な年齢は不明だが、少なくとも、統合防衛軍総帥あさくらじゆんいちの朝倉純一と年齢は近い筈であ

る

閑話休題

「さくらさん、アレはどういうことですか？ 土見訓練生を採用しても、実戦部隊には入  
 れるなって」

「うにゃ〜……それは……」

義之が問い掛けると、さくらは困った様子で言葉に詰まっていた  
すると

「その理由は」

「俺達が説明しようじゃねーか」

二人の男性の声が聞こえた

義之と麻耶の二人は、声のした方向に顔を向けた

そこに居たのは

片方は、ガツチリとした体格に着流しを着た神族の男性

もう片方は、ひよろりとした長身に全身黒一色の服を着た魔族の男性だった

そして、その二人を義之は知っていた

「神王ユーストマ様に魔王フオーベシイ様！」

そう、その二人こそが神界と魔界を代表する二人であった

その二人を見た義之達は、慌てて姿勢を正し敬礼をすると

「いらっしやるとは知らず、大変失礼しました！」

神王と魔王の二人に対して、謝罪した

「いや、構わねーよ」

「そうそう、今回は非公式なんだし、気楽にしてくれたまえ」

義之と麻耶の謝罪に王達は、軽い調子で手を振っていた

なお、王達の前の机の上には湯のみとカップが置かれてある  
中はそれぞれ、緑茶と紅茶である

大統領執務室には、緑茶、紅茶、コーヒーマシンが完備されている

そして、麻耶が二人分のコーヒーマシンを持って着席すると

「それで、土見訓練生に關しての事はどういふことですか？」

義之は王達に問いかけた

「あーいやー……」

「それなんだがな……」

義之からの問いかけに、王達は喋りづらそうに口ごもった

だが義之は、王達の言葉を待たずに両手を机に突いて

「そもそも、分かってるんですか！ あなた方がやってるのは、条約違反なんですよ！」

王達に対して、義之は怒りだした

条約違反とはなにか

それは、魔界と神界が人間界に交流都市を設置した際に制定されたもので

その内の一つは

《魔法のMSや軍事的転用への禁止（医療は別）》とされていて、それに付随する形で

《魔界神界の双方は、如何なる理由があろうとも、人間界の軍事に関する干渉を禁ずる》とあるのだ

今回、王達がやろうとしているのは軍の人事権への干渉

立派な条約違反である

「あー……うむ、それはわかっているんだがねえ」

「こつちにも、深いワケがあんだよ……」

義之からの詰問に、王達は苦い表情をしながら呟いた

「ワケですか……お話ください」

落ち着いたのか、義之は腰をソファーに落ち着けた

「あー……詳しく話す前に、義之くんは私達の娘を知っているよね？」

フォーベシイからの意図せぬ質問に、義之は首を傾げたが

「ええ、知っています。魔界皇女のネリネ様と神界皇女のリシアンサス様ですよね？」

義之率いるワルクューレ隊は、特務部隊として護衛の任務も引き受けたことがあり、

その際に会ったことがある

「その皇女様方が、如何なさいました？」

義之としては、何故王達が彼女達のことを上げたのかわからなかった

「ああ、実は……」



「ネリっ子とウチのシアがな……」

王達はそこまで話すと、目を合わせて

「稟殿（ちゃん）に一目惚れしててなあ（ねえ）……」

あまりにも、予想外の言葉を告げた

義之と麻耶は目を丸くして固まり

「つ、つまり……」

「土見訓練生は……」

「次期王様候補だ」

王達の言葉に、義之は額に手を当てて

「それは、確かに、出しにくいですね……」

思わず、唸っていた

その時

「頼む！」

「娘達の初恋を叶えさせてくれ！」

義之に対して、王達は頭を下げた

それを見た義之は慌てて

「頭を上げてください！ そんな簡単に、王が頭を下げないでください！」

と、二人に頭を上げるように促した

すると、王達は頭を上げて

「それじゃあ、聞き入れてくれるのかい!？」

と嬉しそうに、義之を見つめた

が、義之は首を振り

「すみません。こちらとしても、聞き入りたいのですが、ようやく獲得した新人ですし

……なにより……」

義之はそこで一旦、言葉を区切った

「なにより?」

区切ったのを不思議に思ったのか、王達が問いかけた

「これは彼が選んだ道なんです。彼が自ら望み、進んで選んだ道なんです。それを部外

者たる自分達が、決めていいはずが無いんです」

義之の言葉に、王達はハツとして

「すまねえ」

「少し、焦っていたみたいだね……」

義之に対して、謝罪した

「いえ、お気持ちちは察します……」

義之はそこまで言うと、数瞬黙考して

「なんだったら、自分が直接聞いてきましようか？」

と、王達に提案した

「そいつぁ……」

「どういうことだい？」

義之の言葉の意味がわからないのか、王達は首を傾げながら義之に質問した

「総合戦闘技術演習の最終日に、面接があるんです。その面接を自分が行って、彼に問いかけるんです。最前線を望むか、後方を望むか」

義之の提案を聞いた王達はしばらく悩んで

「それじゃあ、すまねえが……」

「お願い……できるかい？」

「はい、承りました。麻耶、頼む」

王達の頼みに義之は頷くと、麻耶に視線を向けた

「わかったわ」

麻耶は頷くと、空間投影式キーボードを出現させてタイピングした

すると、さくらの前にウインドウが表示されて

「許可します」

とさくらは、ウインドウをタツチした

それを見た義之は、首を傾げて

「あれ？ 朝倉総帥はどうしました？」

「お兄ちゃんなら、今日は会議で忙しいんだって。だから、僕が許可を出しました！」  
義之からの質問にさくらは、両手を腰に当てながら答えた

「今日も会議ですか」

大変だなあ、純一さんも

と義之が嘆息すると

「おや？ 確か、ワルキューレ隊は朝倉総帥の直轄部隊じゃなかった？」

魔王フォーベシイが、義之に質問した

フォーベシイの質問を聞いた義之は、頷いて

「はい。確かに、我々ワルキューレ隊は朝倉総帥の直轄部隊ですが、同時に、芳野大統領の直轄部隊でもあります」

そのハッキリとした義之の言葉に、王達は目を丸くして固まった

「つまり……お前さんの部隊は、大統領に匹敵する権限を持つってわけかい？」

いち早く立ち直ったユーストマが、義之に聞くと、義之は頷いて

「その通りです。ですが、自分としてはあまり使いたくありません」

そう言つて、首を左右に振つた

「それはどうしてだい？」

義之は視線をまっすぐ前に向けて

「自分は、権力だけを振りかざす人間になりたくないんです」

毅然とした態度で断言した

すると義之は立ち上がり

「それでは、自分達はこれで失礼します」

と敬礼して、部屋から去つた

それを三人は見送ると

「なかなか、いい眼をしてるじゃねーか」

「そうだね。あの眼をしているのは、護衛騎士団の中でもなかなか居ないよ」

王達が賞賛の言葉を並べると、さくらは嬉しそうに笑つて

「それはそうですよ。義之君は僕達の切り札なんだからね！」

と、二人に語つた

## 転校生と再会

どうも、桜です

今私は、登校した教室を見て固まってしまいました  
だって……

「ここはいつから、女子校になったのだ？」

今美夏ちゃんが言った通り、教室内には女子しか居なかったんです  
私が呆然としてると、麻弓ちゃんが近づいてきて

「男子は皆、転校生を見に行っただけですよ」  
と教えてくれました

転校生？

「ほら、前に教えたのですよ。転校生が三人来るって。まあ、どうやら増えたみたいだけ  
どね」

私が首を傾げたからか、麻弓ちゃんは教えてくれました

ああ、そういえば言ってたね

私が納得していると、麻弓ちゃんがデジタルカメラを取り出して

「だけど、男子達もバカよねー。私に言えば、写真を見せてあげたのに」  
やっぱり、撮ってたんだ……

「行動が早いな、麻弓」

美夏ちゃんが誉めると、麻弓ちゃんは笑いだして

「フッフッフ、初音島のパラッチとは私のことなのですよー!」

麻弓ちゃん、机に足を乗っけるのはやめようよ

と、私が呆れていた時でした

扉が開き、クラスの男子達が入ってきました

皆、興奮してるのがわかります

「いやー、世界は広いね! まさか、桜ちゃんクラスの美少女がまだ居るなんて!」

緑葉くんが興奮しながらそう言ってますが、とりあえず

「緑葉くん、私はそんなに美少女ってわけじゃ……」

「なにを言うのですよ、さっちゃん! さっちゃんは美少女で間違いないのですよ!」

私は否定しようとしたけど、麻弓ちゃんに美少女と言われちゃいました

私はどう否定しようかな? と思い、否定の言葉を探していたらチャイムが鳴って、

担任の紅薔薇先生と副担任の山田先生が入ってきました

「お前ら、席につけー!」

「皆さーん！ 席に座ってくださいーい！」

紅薔薇先生と山田先生が着席を促すと、皆席に着きました

皆が座ると、紅薔薇先生が両手を教卓に突き、大きく溜め息を吐いて

「あー……点呼を取る前に、転校生を紹介する」

と、疲れた様子で言った瞬間

男子達の雄叫びが教室に響きました

うるさくて思わず、耳を塞いだくらいです

「やかましい！ タイヤ引きグラウンド五十周させるぞ!!」

紅薔薇先生が一喝すると、すぐに静かになりました

さすがです

「あー……転校生だが、女が三人に男が一人だ」

と紅薔薇先生が、疲れた様子で言ったら

「喜べ野郎共、良かったですね〜子猫ちゃんたち〜」

……え？

私もだけど、教室に居た全員が、山田先生のセリフに固まってしまいました

すると山田先生は、全員の沈黙に恥ずかしくなったのか、持っていた教科書で顔を隠

しました



「……山田先生？」

「すみません、聞かなかったことにしてください……」

「じゃあ、なんでやったんですか？」

「はあ……まあ、遅れたが、転校生を紹介する。入れ！」

紅薔薇先生が呼ぶと、ドアが開き……

「おう！ なかなか良い教室じゃねえか！」

「そうだね、神ちゃん。これなら、ネリネちゃんの勉強もはかどりそうだ」

入ってきたのは、神族と魔族の男性でした

………

あれ？

「なんで御二方が居るんですかー!？」

入ってきた二人を見て、山田先生がワタワタと手を振りながら叫びました

紅薔薇先生は頭が痛いのか、額に手を当てて大きく溜め息を吐いています

「いやなにね、ネリネちゃん達の教室がどんな感じなのか見えておきたくってね」

「おうよ！ まあ、あの学園長だから心配はしてなかったけどな！」

魔族の男性の言葉に神族の男性が笑いながら豪快に言ったら

「お・と・う・さ・ん！」

鈍い音と共に、神族の男性の頭が横にズレました  
なにか？

「もう！ お願いだから、恥ずかしい事をしないで！」

気づいたら、神族の男性の背後にイスを持った神族の女の子が居ました  
もしかして、あのイスで殴ったのかな？

「シア？ イスで殴るのはやめろと何回も言ったじゃねえか」

「このくらいじゃないと効果ないし、血の気が多いから抜くくらいがちょうどいいんです！」

日常茶飯事なんだ!?

それとシアちゃん、使用方法をキチンと読んで？

イスは座るために使うんだよ？

「お父様もやり過ぎです。皆さんが驚いてるではないですか」

「いやー、ごめんね。ネリネちゃん」

魔族の男性の後ろにも魔族の女の子が居ました

正直言って、二人ともかなりかわいいです

そして、紅薔薇先生の隣に居る男の子は頭を抱えています

その男の子は、長い雪のような白色の髪をポニーテールに纏めています

すると、神族の男性が周囲を見て

「おい、面白いやあ…嬢ちゃんはどうした？」

と首を傾げました

誰のことだろ？

「面白いえばそうだね。このクラスに知り合いが居るって言うから、一緒に編入したんだが」

このクラスに知り合い？

シアちゃんやネリネちゃん達が周囲を見回していると、男の子が教室から出て

『なにをしてんだ、フヨウ』

……え？

……フヨウ？

『ま、待ってくださいシオン君！ まだ心の準備が!』

『知るか、いいから入れ!』

『あ!』

そんな会話の後に入ってきた姿を見て、私の頭の中は真っ白になりました

だって、その姿は間違いなく……

「それで…そろそろよろしいでしょうか？」

気づけば、紅薔薇先生が微笑みを浮かべながらすごいプレッシャーを放ってました  
「「「はい……………」」」

さすがに、怖かったみたいです

そして、少しして

「リシアンサスです！ 神界から来ました。長いのでシアって呼んでほしいです！」

「ネリネと申します。魔界から来ました。よろしければリンとお呼びください」

シアちゃんは元気に、ネリネちゃんはおしとやかに自己紹介してくれました

「俺の名前は剣崎シオン。よろしく頼む」

シオン君は淡々とした様子で、自己紹介してくれました

「俺の名前はユーストマだ。シアの父親で、神界の王をやってる。よろしく頼むぜ？」

…………え？

「私の名前はフォーベシイ。ネリネちゃんの父親で魔界の王をやっている。見知って  
いてくれたまえ」

…………はい？

「お二人は結構です！ それに、まだ一人終わってません！」

紅薔薇先生はそう言いながら、苦笑いしてる《あの子》を指差しました

「私の名前は芙蓉楓です。人界には久しぶりに帰ってきました。皆さん、よろしくお願

いします」

楓ちゃんはそう自己紹介すると、顔を私に向けて微笑みました

その瞬間、私は居てもたつてもいられなくなり、イスを倒しながら立ち上がり、楓ちゃんに駆け寄り抱きつきました

「楓ちゃん！ 本当に楓ちゃんなんだよね!？」

「はい……桜ちゃん……久しぶりですね」

私はその雰囲気と喋り方も楓ちゃんとわかり、思わず泣いてしまいました

桜 side END

第三者 side

桜が泣きながら楓に抱きついているのを見て、周囲のほとんどが反応できていなかった

数瞬後、ようやく紅女史がまばたきした後

「おいおい、八重。どうした？」

と、桜に問い掛けた

すると泣いている桜の代わりに、王達が口を開いた

「あー…待ってくれや先生方よ」

「彼女達は久しぶりの再会なんだ。許してやってくれたまえ」



恥ずかしがって顔を赤らめた

そして、王達はなぜか現れた妻達により引きずられていった

それから、紅女史の計らいにより一限目は質問タイムとなった

その時に樹が少々、問題発言をしましてしまい、シオンが剣を投擲

樹の机に深々と突き刺さった

閑話休題

そして昼休みに入ると、樹の提案により屋上で昼食となったのだ

桜達はすぐに、シア達と仲良くなった

二人の人柄ゆえか、あまり王女といった雰囲気を感じなかったのだ

全員で談笑しながら、弁当を食べていた

その時、ドアが凄い勢いで開け放たれ

「楓が生きてたって、本当!?!」

大声を出しながら、一人の女子が現れた

その女子は緑の髪をショートカットにして、左前髪をリボンで纏めていた

女子の付けているリボンは、三年生を示している

その女子を楓を見ると、微笑みを浮かべ

「お久しぶりです。亜沙先輩」

と頭を下げた

女子、時雨しぐれあさ亜沙は楓の元気そうな姿に涙を浮かべて

「楓——！」

楓に駆け寄り、飛びついた

亜沙が飛びついた衝撃で、楓は倒れそうになったが、シオンが片手で支えた

亜沙はすぐに顔を上げて

「無事ならなんで、連絡くれなかったの!？」

と、楓に問いた

「連絡したかったのですが、民が初音島に居ると知ったのは3ヶ月くらい前でして…し

かも、それまで私はリハビリで忙しかったんです」

「リハビリ?」

亜沙が首を傾げると、楓は頷いて

「はい。前タイタン戦争の時に私は右腕が千切れ、それに伴う出血多量で瀕死の重傷を

負いました」

楓の言葉に亜沙は、視線を右腕に向けた

その腕は間違いなく普通の腕で、義手などではなかった

亜沙の視線でわかったのか、楓は右腕を動かしながら



「この腕は神界の技術で治してもらいました。そのリハビリを兼ねて、神王のお城で働いてたんです」

最初は失敗ばかりでしたけど、と楓は苦笑いしながら付け足した

「あの戦争によつて、どこの国でも色々トラブルがあつてな。情報なんかは正誤が入り混じつてた」

「それらを確認したら、一年以上掛かつてました」

シオンの説明に続くように、ネリネが補足した

ネリネの言葉に亜沙は頷くと

「そういえば、君達が神界と魔界から来た王女様達なんだよね？ ボクは時雨亜沙」

「私はリシアンサスです。長いから、シアって呼んでほしいっすー！」

「私はネリネと言います。よろしければリンとお呼びください」

「俺は剣崎シオン。好きに呼んでくれ」

亜沙が自己紹介すると、シア達も簡易的に自己紹介した

すると、亜沙は腕を組み

「そういえば、なんでシアちゃん達は初音島に来たの？」

と、シア達に問い掛けた

その問い掛けを聞いた桜達は、そういえばと思い視線をシア達に向けた

するとシア達は視線を合わせると、頷き

「私達は稟君に会いに来たの!」

シアが代表して言った言葉を聞いて、桜と亜沙は固まった

「稟君って確か、桜ちゃんの言ってた男子だよな」

桜から話を聞いていた樹が、桜に視線を向けて問い掛けた

「う、うん…….だけど……」

「ボク達も一年以上会ってないから、どこに居るかなんてわからないんだ……」

と亜沙と桜が俯くと、シア達は小さくガッツポーズをして

「それなら大丈夫です!」

「稟様の居場所なら、私達が知ってます」

その言葉を聞いた、桜と亜沙はシア達に詰め寄って

「知ってるの!」

「稟君はどこに居るんですか!」

と問い掛けた

「稟くんなら、訓練校に居ます」

二人の問い掛けに、楓が静かに答えた

「訓練校って、つまりは軍ってこと?」

麻弓の言葉を聞いた桜は立ち上がり

「早く会いに行かないと！」

と意気込んで言うが、その腕を美夏が掴み

「待て、八重！」

「今すぐには無理ですよ。訓練校とはいえ軍の施設なので、アポを取らないと」

「それに今の時期は総戦技演習なので、アポを取れませんわ」

由夢達の説明を聞いて、桜達は首を傾げた

「総戦技演習？」

「正式には総合戦闘技術演習です。つまりは、訓練生の卒業式ですね」

「それに、総戦技演習が終わってもすぐに配属されるので、簡単にはアポは取れないんだ」

由夢に続いて、美夏の説明を聞いた桜と亜沙は打ちひしがれて、座り込んだ

「そんな……：ようやく、手掛かりを見つけたのに……」

桜が座り込んで俯いていると、シアが肩に手を置いて

「大丈夫だよ、桜ちゃん」

「稟様に関して、お父様達が既に交渉したんです」

シアとネリネの言葉を聞いて、桜と亜沙は視線を向けた

「交渉？」

「誰としたんですか？」

桜と亜沙が問いかけると、楓が少し唸って

「確か……初音島統合防衛軍特務隊隊長の桜内義之大佐です」

楓の言葉を聞いた由夢と美夏。そしてエリカは、目を見開いて

「兄さんと!？」

「桜内と!？」

「大佐と!？」

全員、一様に驚いていた

そして、三人の言い方を聞いた桜と亜沙は視線を向けた

「兄さん？」

「ねえ、由夢ちゃん……知ってるなら、教えてほしいなあ」

桜が注目し、亜沙が猫なで声でねだり

「……………」

楓も無言のプレッシャーをかけていると、美夏が溜め息を吐いて

「こうなつては仕方あるまい」

「天枷さん!？」

「いいんですの!？」

美夏の言葉に由夢とエリカが抗議するが、美夏は二人を抑えて

「責任は美夏が取る」

と短く言うと、深呼吸して

「シア達が会ったのは、美夏達の所属してる部隊の隊長の桜内義之大佐だ」

「ちなみに、私の兄でもあります」

美夏と由夢の説明を聞いた桜達は全員驚いていた

「由夢ちゃんにお兄さんが居るってのは聞いてたけど、あの英雄だったんだ……」

「まさかの有名人さんだね……」

桜と亜沙が呟いていると

「確かに、私達が相手した部隊に、土身稟という訓練生が居ました」

「桜内はかなり気にかけていたな」

「あの守護神がかい？」

意外そうに樹が聞くと、由夢達は領き

「ああ、いい勘をしていると言っていた」

「実際に、私の狙撃を避けましたし」

と簡潔に教えた

「それじゃあ、その英雄さんをお願いすれば、簡単にアポを取れるんじゃない？」

麻弓が聞くと、由夢達は首を振り

「それは無理だ」

「私達が所属してるのは特務隊なので、まず連絡がしにくいです」

「私達の誰かの名前を言えば着きやすいかもしれませんが、それでも難しいですわ」

「そんな……」

由夢達の言葉に、桜達は再び座り込んだ

だが、由夢達は見合わせて頷き

「でも、方法はあります」

「方法？」

「教えてください！」

桜が勢いよく聞いてきたので、由夢は驚くが

「この学校の特待コースを優秀な成績でクリアするんです」

由夢の説明を聞いて、楓達は目を見合させた

「特待クラスって、あれかい？ 半年間の間に規定の単位を取得すると自分の望んだ部

隊に入れるっていう」

「はい、そうです」

「実際には簡単ではないがな。それに望んでも、担当した教官が推薦状を書いてくれなければ、特務には入れない」

美夏が腕組みしながら言うが、楓たちは手を握り空を見上げた

(待っててね、稟くん！)

その瞳には、強い決意が見えた

## 驚愕の配属日

「ふざけるなよ……」

訓練生から正規の少尉になった稟は、数日前に行った面接を思い出して呟いた

回想開始

「あー……実は、君に会いたいという子が居るんだがな……どうする？ 望むなら、実戦部隊から外れて学校に通えるが？」

と、義之（伊達メガネと変声器を使ってるので、稟は気づいてない）から問い掛けられて、稟はすぐさまに実戦部隊を望んだ

回想終了

そして今日、いよいよ運命の配属日である

前日に訓練校の卒業式を終えて、配属先を書かれた紙を渡されたので、そこに向かってる最中である

その時だった

「土見ー、なーに背中曲げて歩いてんのー！」

と、稟と同期の柏木が稟の背中にくつついた



稟と柏木の身長はほとんど同じであり、その証拠にズルズルと引きずる音が稟の耳に聞こえた

だが、稟には別のことが気になっていた

(胸！ 胸が当たってる！)

柏木が稟の背中にくつついたことで、豊満な彼女の胸が稟の背中に押し付けられているのである

すると、二人の後ろから

「晴子、土見の背中に胸が当たってるわよ？」

と、涼宮茜の声が聞こえた

すると、柏木はニヤリと笑いながら

「ん？ 当たってるの」

と断言した

つまりは、確信犯だった

それに稟はムツとすると、意趣返しをすることにした

「柏木……そこから突き落としてやろうか？」

と、指差した先は海

「えー……土見、酷くない？」

稟の言いように柏木は抗議するが、稟は無視した  
その時

「稟じゃねーか」

「なにやっつてんだ？」

稟は声の方向に視線を向けた

そこに居たのは、同期の白銀武と織斑一夏だった

正確には彼らだけではなく、彼ら同期の元訓練生達が全員居た

さらに、近くの隊舎からは元ドイツ軍のメンツも現れた

全員それぞれに挨拶すると、同じ方向に歩きだした

「そーいやあ、稟達はどこの配属だ？ 俺は第9機動師団だ」

武からの問い掛けに稟は驚きながら、口を開いた

「俺も第9機動師団だ」

すると、稟に続くように一夏とクラリツサ・ハルフオーフも

「俺も第9機動師団だ」

「私もだ。これは、なんかの偶然か？」

まさか、こんなにも同じ部隊に配属するとは思わず、全員歩みを止めて首を傾げた

とその時、シャルロットが腕時計を見て

「ねえ、そろそろ時間が危ないよ？」

と警告をだした

それを聞いた稟と一夏、武は腕時計を見た  
確かに、配属予定時間まであまりなかった

「確かにな、急ぐか」

「だな、えつと……地図だどこつちだな」

稟が頷くと、一夏が地図を見て、指差した

一夏が指差した方向に、全員歩き出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数分後

「あれ……こつちのはずなんだけど……」

稟達は、軽く迷子になっていた

「ねえ！ 本当にシヤレにならない時間なんだけど!？」

切羽詰まった様子で、シヤルロットが一夏を高速で左右に振った

「待て待て、わかったから落ち着けシヤル!」

一夏はそんなシヤルロットを落ち着けようとするが、尚も振られている

その時、周囲を見回していた武が指差して

「なあ、あの人に聞いてみないか？」

と、全員に問い掛けた

武が指差した先には、岸壁に腰掛けて釣り竿を持つている整備兵の男が居た  
すると、代表してか鈴が近づき

「あの、すいません！」

と、声を掛けた

「ホイホイ？」

声を掛けられた整備兵は軽い調子で、振り返った  
メガネを掛けていて、かなり若い印象の男だった

「僕達、第9機動師団に行きたいんですけど……迷ってしまつて……」

と、シャルロットが恥ずかしそうに言うと、男は立ち上がり

「第9機動師団？ それだったら俺の目的地だから、案内してやるよ」

と言つた

「え？ いいんですか!？」

男の言葉に、一夏が問いかけると

「ああ。どうせ、目的地は同じなんだ。案内したほうが確実だろ？」

と男は、釣り竿を片付けながら言うと

「付いて来な。こつちだ」

と、歩き出した

稟達は、その整備兵の後を付いていった

「そーいやあ、君たちは第9機動師団ではパイロットかい？」

整備兵からの問い掛けに、稟達は頷き

「はい。新しく着任することになりました」

と、整備兵に応えた

「そーかい。無事に卒業できて良かったな」

「ありがとうございます」

整備兵からの言葉に、稟達は感謝を述べた

そんな中、ラウラを含めた元ドイツ軍のメンバーは僅か後方で整備兵の男を睨むように見ている

(あの男の身のこなし、それに放たれるプレッシャー……ただの整備兵ではないな……)

ラウラ達はこの中では、唯一の実戦経験者故に、整備兵の男に違和感を感じていた

(隊長、あの男、ただ者ではありませんね)

隣に寄ってきたクラリツサが、ラウラの耳元で囁くように言ってきた

すると、ラウラは苦笑いを浮かべ

(クラリツサ、今の私は隊長ではない)

と、首を振って否定した

だが、クラリツサは笑みを浮かべ

(いえ、我々の隊長は隊長だけです)

と、断言した

ラウラが後ろを見てみると、他の元ドイツ軍のメンバーも頷いていた

(ヤレヤレ……頑固だな……)

ラウラはそう首を振るが、どこか嬉しそうだつた

そして軽く深呼吸すると、整備兵の男を見つめて

(確かに、あの男はただ者ではない。あの雰囲気は歴戦の猛者のソレだ)

(はい。私を知る限り、あの雰囲気は七英雄と同じです)

ラウラの言葉にクラリツサは、整備兵が放っている雰囲気と同等の例を上げた

七英雄とは

それは、前タイタン戦争の際にEU首都のベルリン攻防戦の時に活躍したパイロット達である

そのパイロット達と同等の雰囲気放っている整備兵の男を見て、ラウラは首を捻つた

(あの男……何者だ?)

ラウラは整備兵に、疑惑の視線を向けた

その整備兵の男は、ラウラの視線に気づき

(ふむ……さすがは、元ドイツ軍の特殊部隊の隊長だ。俺に疑いの目を向けてる)  
と、ほんの僅かだが、口端を上げた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから数分歩き、稟達の目の前に巨大な建物が建っている

「ここが、第9機動師団隊舎だ」

整備兵はそう言いながら、ドアに歩み寄った

すると、自動ドアが開き

「義之! どこに行つてたの!!」

そこには、メガネを掛けた少女が怒り心頭といった様子で仁王立ちしていた

「やっべ!」

整備兵は踵を返して逃亡しようとしたが、横から伸びた手が襟を掴んで阻止した

「勝手に外に出ては困ります。大佐」

整備兵の襟を掴んだのは、ショートカットの赤い髪に170近い長身の女性だった

「……大佐!」

稟達は赤い髪の女性が言った階級に驚いていた

すると、逃げるのを諦めたのか整備兵は大人しくなり

「むう……いつ、気付いた？」

と、メガネを掛けた少女に問い掛けた

「二十分前よ！　まさか、マネキンに士官服とカツラを被せて座らせるなんて、思わなかったわよ！」

「ふむ。思ったよりかは早かったか……あ、ちなみに、協力者はあちらに居る楯無少佐だ」

少女の言葉を聞いて男性は呟くと、ある方向を指差した

そこには、扇子を開いている水色の髪の少女が居た

なお、その扇子には《イタズラ成功》と達筆に書かれている

それを見たメガネを掛けた少女は、額に指を当てて

「もう……楯無少佐!!」

と、怒鳴りつけた

「キヤー♪」

楯無と呼ばれた少女は、一目散に別の通路へと駆け込んだ

手に持っていた扇子には《逃走中》と書かれている



メガネを掛けた少女はため息を吐くと、我に帰ったのかシャルロットが駆けより「あの、僕達、第9機動師団に配属することになったんですけど……」

と、メガネを掛けた少女

沢井麻耶に聞いた

聞かれた麻耶は眉をひそめて

「第9機動師団？ 間違いないのね？」

と、シャルロットに問い返した

問い返されたシャルロットは頷きながら

「はい……これが配属書です」

と、脇に抱えていたケースから一枚の紙を麻耶に渡した

渡された紙を麻耶は一読して

「間違いないわね……」

と呟いてから、視線を整備兵に向けて

「義之、変声機を外していい加減に着替えなさい！」

と、持っていた士官服を投げつけた

士官服が顔に掛かった整備兵ごと、義之は首のチョーカーを外して

「はーよ」



「これで、呼んだ奴は全員だな」

と、部屋を見回した

新人達は全員中央に居て、周囲に他の部隊員が居る

「さて、改めて自己紹介しよう。俺は初音島統合防衛軍特務部隊隊長の桜内義之だ」  
義之が改めて自己紹介すると、新人達は驚いた

「特務部隊？」

「すいません。自分達は第9機動師団と聞いたのですが……」

配属先が違うと思い、新人達は首を傾げた

しかし、それを予想していた義之は頷き

「沢井少佐」

傍らに立っていた恋人に視線を向けた

麻耶は頷くと、端末を操作した

すると、義之の背後のスクリーンに映像が映った

そこに映っているのは、初音島統合防衛軍の全体図だった

その全体図を見て、新人達は気付いた

「あれ？ 第9機動師団がない？」

「だな、第8までならあるけど……」

そう

その全体図には、第9機動師団の枠が存在しなかったのだ

「第9機動師団というのは、このワルキューレ隊の隠れ蓑だ」

新人達の戸惑いに義之はそう説明すると、一拍置いて

「このワルキューレ隊は朝倉元帥と芳野大統領の直轄部隊だ」

と、宣言した

その宣言を聞いた新人達は目を見開き

「朝倉元帥と芳野大統領直轄部隊!？」

「それはつまり、精鋭部隊ってことですか!？」

まさか、訓練生上がりの新人が精鋭部隊に選ばれるとは思わなかったのだろう

新人達の言葉に義之は頷き

「その通りだ。この部隊の任務は多岐に渉り、その任務は過酷だ」

そこまで言うとは、義之は周囲に立っている隊員を見て

「今ここに居るのは、君たちを含めて六十名余り。だが、設立当初は百名近く居た」

つまり、新人達を抜いた四十名はその生き残り

それは、半数を割っている

「この部隊の人員損亡率の高さは、なにも最近の話ではない。この部隊は初音島が独立

した直後から、その任務の過酷さ故に定員割れを起こしている。最近では、二年前の夕イタン戦争でこの人数まで減った」

それを聞いた新人達は視線だけで、周囲の先任達を見たそのほとんどが、悲しい光を瞳に宿していた

「故に、君たちのようなスタンプレィヤーは大歓迎だ！ これからの活躍に期待する！」  
義之の激励の言葉を聞いて、新人達は背筋を伸ばし

「「「はっ！」」」

全員同時に敬礼した

それを義之は満足そうに見ると

「それでは、我が隊の隊訓を教える」

と深呼吸して

「死力を尽くして任務に当たれ!!」

指揮官らしい通る声で、言葉を発した

すると、隣に立っていた麻耶が

「先任、復唱!!」

と、周囲に立っている先任達に復唱を促した

すると

「「「死力を尽くして任務に当たれ!!」」」

先任達が一字一句間違えずに

「生ある限り、最善を尽くせ!!」

「「「生ある限り、最善を尽くせ!!」」」

タイミングを合わせて

「決して犬死にするな!!」

「「「決して犬死にするな!!」」」

義之が言った言葉が復唱した

「新人一同、復唱せよ!」

義之が復唱を促すと、新人達は深呼吸して

「「「死力を尽くして任務に当たれ!! 生ある限り、最善を尽くせ!! 決して犬死にす

るな!!」」」

新人達が復唱すると、義之は満足そうに頷き

「その言葉、胸に深く刻み込んでおけ。いいな?」

「「「はい!」」」

新人達の返事を聞いた義之は頷き

「それでは最後に、我々の上官の朝倉元帥の言葉を伝える」

そこで一旦区切り、咳払いをすると

『かつたるいから、敬語及び敬礼は無しで』以上」

軍としてはどうかと思える言葉を言った

それを聞いた新人達は数秒間固まり

「「「は？」「」」」

全員同時に、首を傾げた

その様子を見た義之は笑い

「まあ、普通はそんな反応だわな」

と言った

気付くと、周囲に居る先任達も笑っている

「まあ、我々の上官の朝倉元帥はな凄い面倒くさがりやでなあ。かつたるいが口癖なくらいだ。故に、隊の人間だけだったら、敬語や敬礼はしなくていい。わかつたな？」

ポカンとしている新人達を見て、義之が笑いながらそう言うと、新人達は呆気にとられながら

「「「は、は、……」「」」」

頷くしかなかった

全員が頷いたのを確認すると、義之は笑みを浮かべて

「そんじやま、かたつくるしいのはここまでにしといて……我が隊の先任達を紹介する。まずは、副官を勤めてる沢井麻耶少佐だ」

そう言いながら義之は、隣に立っている麻耶を見た

「よろしくね」

麻耶は微笑みながら軽く会釈した

「あと、俺の恋人でもある」

「そういうことはいいの」

義之が補足すると、麻耶が持っていたファイルで義之の頭を叩いた

その光景を見て、新人達は苦笑いした

今の麻耶の行動は、本来だったら上官侮辱罪に当たる

だがあまりにも慣れた様子から、本当に普通の軍とは違うとわかった

「痛たた……まあ、次を紹介しよう。MS隊副隊長の一人。伊隅みちる中佐だ」

と義之が紹介したのは、義之が変装していた時に襟を掴んだ女性だった

「MS隊副隊長の伊隅みちる中佐だ。よろしく頼む」

とみちるは微笑みながら敬礼してきたが、キリツとした雰囲気を感じた

「そして、もう一人の副隊長。高坂まゆき中佐」

と義之が紹介したのは、快活そうな女性



「よつろしく〜♪」

紹介された高坂まゆきは軽い調子で、ピツと指を動かした

「さて、次に……」

人数が多いので、以下略

設定を書く予定なので、そちらをお待ちください

### 閑話休題

一通り自己紹介が終わると、義之が手を叩き

「そんじゃあ、お前らは仕事に掛かれー、新人達は俺に付いて来い」

義之が命令すると、先任達は三々五々散っていった

そして義之が歩き始めると、新人達も付いていった

そこから新人達は、色々と施設を案内された

ロッカールームに始まり、執務室、遊戯室、食堂

そして最後にMS格納庫

新人達はそこに入り驚いた

「あの機体はー！」

「総戦技演習で襲撃してきた新型!？」

「それに、ガンダムアストレイ！」

MS格納庫で整備されている機体は、まさしくその機体だったからだ

「新型の名称はアストレイ3型。今後、お前らが乗る機体だ」

新人達が驚いていると、義之が説明を始めた

「アストレイ3型の特徴はパイロットに合わせて、機体自体をカスタマイズ出来るんだ」

義之の説明を聞いて、クラリツサは納得した

「なるほど……それで、一機ごとに特徴が違い、動きも違ったわけか」

クラリツサの言葉に義之は指を鳴らして

「イグザクトリイ、流石は、元ドイツ軍特殊部隊副隊長さん」

カツカツカと笑いだした

すると、義之に視線が集中して

「あの機体があるってことは……」

「あの襲撃は、大佐達か？」

「大正解」

義之はどこから出したのか、扇子を開いた

その扇子には、《御名答》の文字

「姉さんみたい……」

そう眩いたのは、今まで沈黙していた簪だった  
すると、義之が視線を向けて

「そういえば、君は更織少佐の妹さんだったな……更織少佐、居るんでしょ！」  
義之が大声を出すと、横の通路からひよっこりと

「呼んだ？」

呼ばれた更織楯無が現れた

「ヤッホー、簪ちゃん。大分強くなつてて驚いちゃった」

「え？ 姉さん……それって、どういう意味？」

楯無の言葉に簪が首を傾げていると、楯無は微笑んで

「私が乗ってる機体はね、ガンダムアストレイBF2ndLなのよ」

「あの青いアストレイですか!？」

「そよ」

と、一夏達が会話していた時だった

「うほ！ かわいいこちゃん発見！」

全員の頭上から、そんな声が聞こえた

全員が上を向くと、キヤットウオークにサル顔の少年が居た

「かわいいこちゃん！」

サル顔の少年はそんな声を上げながら、某怪盗三世跳びをしてきた  
その直後

「香里中尉！ 修少佐！」

「はっ!!」

義之が名前を呼ぶと同時に、二つの影がサル顔に向けて跳んだ

「天誅！」

「教育的指導！」

メガネを掛けた少年が腹部を殴り、赤い髪の少女が頭を蹴り上げた

「がふあ!!」

二人からの攻撃を受けたサル顔の少年は、クルクルと空中で回転した

その間に二人の少年と少女

あまみしゆう天見修少佐となつきかおり奈月香里中尉は、見事に着地

サル顔の少年

てるやただし照屋匡軍曹は、頭から落ちた

「「「死んだー!?!」」」

頭から落ちた照屋匡を見て、新人達は驚きの声を上げるが

「あー、大丈夫だ。何時もの事だから」

と、義之が呆れ顔で首を振った

「「日常茶飯事!」「」」

義之の言葉に新人達が驚いていると

「匡ったら、本当にバカなんだから!」

「相手は新人とはいえ、少尉なんだぞ? 上官侮辱罪になりたいか?」

と、修と香里が倒れている匡に対して説教を始めた

すると、倒れていた匡が起き上がり

「お前ら! 俺に対する謝罪は無しか!」

と、二人に詰め寄った

「ない!!」

「断言された!」

三人が漫才をやっていると、義之が匡の背後に立ち

「照屋匡軍曹!」

大声で匡の名を呼んだ

「はい!!」

呼ばれた匡は直立不動の姿勢で、固まった

「今はまだ整備中の筈なんだが……?」

「え、えっと……」

「今戻るなら、見逃してやる」

「失礼しますー！」

義之の言葉を聞いた匡は、疾風のごとく駆け出した

その直後、義之のほうに布仏虚が近寄ってきたが、義之が手を振って制した  
つまりは、お咎め無しという意味である

とはいえ、虚からは無いとは限らない

「そんじゃま、機体をカスタムするか」

義之の言葉を合図に、新人達に合わせてカスタムを始めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数時間後、新人達と義之は義之の執務室に居た

「それじゃあ、新人諸君は今日はここまで」

「……はい！」

「明日からは、バリバリ働いてもらうから、そのつもりで」

「……はい！」

義之は新人達の返事に頷くと、引き出しを開けて

「えっと……どこに仕舞ったっけ……ああ、あった」

中から、茶色い封筒の束を取り出した

「ほい」

義之はその封筒を机の上に置いた

「あの、その封筒は？」

と、直哉が問い掛けると

「ん？ お前らの自宅通勤許可書」

義之は、なんでもないように答えた

すると、新人達は驚き

「自宅通勤許可書は確か、佐官からだったと思うんですが……」

と、義之に問い掛けた

「ん？ それはな、もう一人の上官のさくらさんの言葉でな『みんなにだって家族が居るんだから、仲良くしたほうがいいでしょ』とのことだ」

その義之の言葉に、新人達は啞然とした

すると、義之が手を叩き

「ほれほれ、こっちはまだ仕事があるんだ。自分の名前が書かれてる封筒を取って、帰った帰った」

と、新人達を促した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
夕暮れに染まる街角の一角で、稟は黄昏ていた

「自宅通勤許可書って言ってもな……家なんてないんだが……」

稟の家族は幼い頃に事故で亡くなっていて、稟を引き取っていた家も娘が死んでしまった

そう思いながら、見つめていた書類を封筒に仕舞うと

「ん？ もう一枚ある……」

中にもう一枚、書類があるのを見つけた

そのもう一枚を取り出すと、その書類には

「この場所へ行け？」

その書類には、一カ所の住所が書かれていた

稟はその書類に首を傾げながらも、近くを通った無人電動タクシーを見つけると片手を上げて止めた

無人電動タクシーに乗ると稟は、端末に住所を入力した住所を入力すると、無人電動タクシーは静かに発車した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なんで……この家が……」



稟の目の前には、ある一軒家が建っている

その家に稟は見覚えがあった

約二年前まで稟が住んでいた、光陽町に建っていた家だったからだ

「は、はは……偶然だよな……」

稟はそう思いながら、表札を見た

そこには《芙蓉》の文字

「まさか……そんなはず……」

稟はそう呟きながらも、震える指でインターホンを押した

すると、家の中からピンポンと聞こえて、その数秒後、パタパタと走る音がしてか

ら

扉が開いた

中から出てきた人物を見て、稟は驚愕で固まった

「か、楓……?」

「はい、稟君。お帰りなさい……」

それはまるで、奇跡のような再会だった

死んだ筈の少女と自分の無力感に涙して、自ら軍に入った少年

一時は分かたれた二人は、二年という時を経て再び出会った

ここからどうなるのかは、誰にもわからない

## 久しぶりの会話

稟が帰宅して数分後、稟を含めて数人の姿が居間にあつた

「楓……生きてたんだな……」

稟は涙を必死に堪えながら、目の前に座っている一人の少女

芙蓉楓を見つめていた

「はい……稟くん……お久しぶりです」

楓も涙を堪えているのだろう、胸元で手を組ながら返答した

稟は数回頭を左右に振ると、視線をズラして

「桜も……一年ぶりだな……」

楓の右隣に座っていた八重桜に、声をかけた

「うん……久しぶりだね。稟くん……」

桜も感動したように、涙を堪えながら返答した

そして、最後に稟は男性に視線を向けた

「幹夫さんも……お久しぶりです」

ふようみきお  
芙蓉幹夫

この男性は楓の父親であり、現在の稟の後見人である

「ああ……一年ぶりだね。稟くん」

「はい……ご心配をおかけしました」

幹夫が返答すると、稟は深々と頭を下げた

稟は戦後のドタバタした時期に訓練校に入ったために、幹夫は稟が訓練生になったことを知らなかったのだ

すると稟は堪えきれなくなったのか、涙を流して楓に抱きついた

「楓……よく……よく、生きてくれた……」

「はい……心配をかけました……稟くん……」

楓も涙を流しながら、稟の背中に手を当てた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

十数分後、二人は落ち着いたらしく姿勢を正して座っていた

「そういえば、なんで生きてたのなら、連絡をくれなかったんだ？」

「それは」

稟からの問いかけに楓が答えようとした瞬間

「それは」

「俺達が説明しようじゃねーか」

と新しい声が聞こえて、リビングの庭側の窓が開いた  
そこに居た二人を見て、稟は固まった

「し、神王陛下に、魔王陛下!?!」

その二人は事ある式典などでしか見たことない人物だったからだ  
「な、なぜお二方がこんな所に!?!」

稟は驚きからか、姿勢を正して二人に問いかけた

すると二人は、靴や下駄を脱いでリビングに上がり

「おいおい稟殿よお」

「そんな、よそよそしい言葉使いはやめてくれたまえ」

と稟に微笑んだ

「は? あ、あの……それはどういう意味ですか?」

訳がわからない稟は首を傾げながら、二人に問いかけた

すると二人は目を合わせて

「稟ちゃんね、私の娘ねネリネちゃん」と

「俺の娘のシアの」

「「婚約者なのさ(なんだよ)」」

二人の言葉を聞いて、稟は固まった

「はあ!? はあ!? はあ!？」

予想外の事態に稟は驚愕した

驚愕で固まっている稟に二人は近づいて

「なるほど……いい目をしてるじゃねえか。ウチのシアをよろしく頼むぜ」

「おいおい、神ちゃん。抜け駆けはよくないよ。稟ちゃん、私のネリネちゃんもよろしく頼むよ」

神王は肩を叩きながら朗らかに、魔王は笑いながら肩に手を置いた

あまりに予想外の事態に稟が固まっていると

「お・と・う・さ・ん！」

鈍い音と共に、神王の頭が横にズレた

「おっ!？」

神王は悲鳴と共に倒れて、その背後には両手でパイプイスを持っている神族の少女

リシアンサスが居た

「もう！ 挨拶に行くって聞いたから、もしかしてって思ったら！」

リシアンサスことシアは憤慨した様子で、倒れている父親を見下ろしていた

「お父様もです。それに楓さんのことを説明してないじゃないですか」

魔王の後ろには娘のネリネが居た

「いやあ、ごめんねえ。つついついネリネちゃんを紹介したくなってね」

予想外の事態の連続に稟が処理落ちしかけていると、窓から入ってきた男子、シオンが

「あー……俺が説明しますんで、いいですか？」

と、稟に聞いた

稟はとりあえず正確な情報が欲しかったので、無言で頷いた

それから稟は、シオンから話を聞いた

シオン達が重傷だった楓を保護して、治療を施したこと

稟はシアとネリネの二人と会っていること

そして、その二人が稟に一目惚れしたこと

そして、シアとネリネ。楓の三人は桜が通っている風見総合学園に転校してきたこと

最後に、稟がシアとネリネの二人との婚約者に上げられていることを

「そうだったのか……シオンさんだったか？」

「シオンと呼び捨てで構いませんよ。俺達、近衛隊は稟様を護衛することも任務に含みます」

稟が問いかけると、シオンは片膝を地面に突いて頭を下げた

「俺はそんなに偉いわけじゃないけどな……まあ、それはともかく」

稟はそこで一旦区切って咳払いすると、背筋を伸ばして「楓を助けてくれて、ありがとうございませす」

と、頭を下げた

「り、稟様!? 頭を上げてください!」

頭を下げた稟を見て、シオンが頭を上げるように促した

が、稟は首を振り

「シオンが居なければ、楓は死んでました……だから、言わせてください。ありがとうございませす」

稟はそう言いながら再び、シオンに対して頭を下げた

そのことにシオンが困惑していると、楓が近づいて

「シオンくん、諦めたほうがいいですよ」

「芙蓉……」

「稟君は頑固だからね」

楓の説明を継ぐように桜が言うと、シオンはため息を吐いて

「わかりました。その感謝、確かに受け取りました」

と、苦笑混じりに言った

すると、稟は満足そうに頷いた



ちなみに補足だが、神王と魔王の二人はシオンが話してる最中に現れた奥様方に連行された

なんでも、仕事が溜まっているらしい

楓の父親の幹夫は会社から連絡が来て、急遽出勤した

そして、ひとしきり話が終わると稟は視線を窓の外に向けて

「なあ、楓。縄、あるか？」

と、楓に聞いた

「縄ですか？ さすがに、無いですね……」

と楓が言うと、シアがどこからともなく縄を取り出して

「縄ならあるっスよー!」

と言いながら、稟に手渡した

手渡された縄を見てから、稟はシアに視線を向けて

「なんで、縄なんて持つてるんだ？」

と問いかけると、シアはフンスと鼻息荒く

「お父さんを捕まえるためっス!」

と断言した

(あら不思議、それだけで納得できた俺が居る……)

稟はなぜ納得できたか不思議に思いながらも、縄の先端を輪つかにしてから庭に出た。そして、一角の生け垣を見ると縄を頭上で回して

「ちよいさー！」

カウボーイよろしく投げた

投げた縄は生け垣の中に入り

「うきや!?!」

と、声が聞こえた

声が聞こえた直後、稟は思いっきり縄を引っ張りながら

「フイツシユー！」

と、赤い弓兵風のかげ声を上げた

その結果、生け垣の中から縄に引っ張つられて影が飛び出し

「あ痛っ！」

と、庭に落ちた

稟はその人物に近づいて

「誰だか知らないけど、不躰じゃないの?」

と、倒れてる人物を見下ろした

すると、稟の隣に駆け寄ってきた楓と桜がその人物を見て

「え、生徒会長さん!」

「瑠璃さん!」

と声を上げた

「へ?」

桜と楓が知つてゐることに稟が驚いていると、遅れて来たシオンが

「だから言つただろ、マツリ」

と苦笑いしながら、頭を掻いていた

「あう……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「すいませんでした!」

数分後、稟は居間で絶賛土下座中だった

「い、いえ! 大丈夫ですので、頭を上げてください!」

そう言つてゐるのは、先ほど稟が縄で捕獲した人物

風見総合学園高等部生徒会長にして、近衛部隊所属の瑠璃Ⅱマツリだった

「頭を上げてくださいよ、稟様。今回はこいつにも非があつたんですから」

「そうです! 稟殿が軍の訓練を受けてゐることは知つてましたから!」

と二人が非を認める発言をするが、稟は頭を上げずに

「とはいえ、楓の恩人の一人になんてことを！」

と、叫んだ

稟が言った恩人の一人と言うのは、楓からの証言で判明したことだ

楓の意識が戻る前、瑠璃の証言により楓が稟の幼なじみとわかり、そのおかげで治療を受けられて腕の再生医療も受けられた

更に意識が戻った後は、初音島に来るまでの間は瑠璃の推薦で神王の家の世話になったということ

それを聞いた稟としては、瑠璃に頭が上がらない思いだった

「本当に大丈夫ですから！ それよりも稟殿、よく私に気づけましたね？」

「ああ、それは俺も不思議だった。マツリは近衛部隊でも、一、二を争う隠密の達人なのに、よく気づけましたね？」

瑠璃の言葉に同意してから、シオンは稟に問いかけた

「簡単ですよ。マツリさんは気配を殺しすぎたんです」

「殺しすぎた？」

「どういうことですか？」

稟の言葉にシオンは首を傾げ、瑠璃が問いかけた

「マツリさんの気配は確かに、ありませんでした。だけど、多分、魔法も使ってたんで

しょうね。マツリさんの居た場所だけ、不自然に空白が出来てたんです。これは、俺の知り合いの言葉ですが、気配を消すには、周囲に自分の気配を馴染ませることがコツなんだそうです」

「周囲に馴染ませる……」

稟の言葉を聞いて、瑠璃は口元に手を当てて呟いた

ちなみに、稟が言った知り合いというのは同期の鎧衣美琴である

彼女の特技はサバイバル技術であり、特に秀でてるのが隠密術である

実際に彼女と稟は模擬戦をして、稟に気づかれることなく彼女は背後に回り込み稟に勝利している

どうやって隠密術を身につけたのか聞いたら、彼女は遠い目をして

『父さんに色んな所に放り込まれたんだ……』

と言ったので、稟は深くは聞かなかった

そして稟にとって、その美琴に比べたら、マツリは見つけやすかったのだ

「なるほど……魔法に頼り過ぎたってことですか……」

「まあ、そういうことですね」

稟の言葉を理解したシオンが聞くと、稟は頷いた

「そういうことですか……精進します」

「頑張ってください」

稟が励ますと、瑠璃は頬を赤らめながら微笑んだ

そして、シオン達が帰ると稟は荷物を持って立ち上がり

「荷物を部屋に運ぶか……」

と呟いた

それを聞いた楓は立ち上がり

「部屋に案内しますね。稟くん」

と提案した

「頼む……そうだ、桜、楓」

稟が呼ぶと、二人は視線を稟に向けて首を傾げた

すると稟は、深呼吸して

「改めまして……久しぶりだな。これからもよろしくな」

と頭を下げた

すると、楓と桜は微笑んで

「よろしくね、稟君♪」

「よろしくお願ひします。稟くん！」

と、笑みを浮かべた

## 新人歓迎会

新人が配属された二日後

ワルキューレ隊隊舎の大ホール

「まあ、固い挨拶は抜きにして……今日は無礼講だ！　かんぱーい！」

「「「かんぱーい！」」」

新人歓迎会が行われていた

新人含めて全員、義之の号令の後にグラスをぶつけ合った

机の上には、様々な料理と飲み物が所狭しと並べられている

「にしても……この料理、美味しいわね」

「だな……誰が作ったんだろ」

涼宮の言葉に稟は同意して、誰が作ったのか疑問に思っている

「それを作ったのは、義之と音姫さん。それに委員長だぜ」

「月島もですー」

と、二人の男女の声が聞こえて、涼宮と稟は振り返った

「板橋准尉に月島准尉！」

片方は着崩した軍服に茶髪。軽薄な雰囲気男子、板橋渉《いたばしわたる》准尉  
もう片方は、ちよこんと立ったアホ毛が特徴の女子、月島小恋《つきしまここ》准尉  
だった

「委員長とは？」

「あー、悪い。沢井のこった」

「わたし達の時の部隊長だね。雰囲気から皆、委員長と呼んでるの」

稟が首を傾げていると、渉と小恋が分かり易いように教えた

「どうかこれ、大佐達を作ったんですか!？」

「おうよ！ 後は月島もな」

「えへへー、頑張りました！」

涼宮が驚きながら聞くと、渉が頷き、小恋は自慢気に胸を張った

「プロかと思いました……」

稟は料理の美味しさに、驚愕していた

(まあ、楓もプロ並なんだがな……)

と思っていたら

「ゲファッ！」

吐くような声とともに、倒れる音が響いた



「どうしたー?」

「賢久先輩が、スペアリブ食べて倒れましたー」

義之が問いかけると、小柄な体躯にツインテールの金髪にメガネを掛けた少女。広原雪子《ひろはらゆきこ》中尉が答えた

「スペアリブ?」

料理名を聞いた義之は、倒れてる灰色の長髪に大柄な男、田島賢久《たじまたかひさ》中尉の手を見て首を捻った

「あれ? なあ、音姉、麻耶、小恋。俺達って、スペアリブ作ったっけ?」

と三人に聞くと、三人は首を振って

「ううん、作ってないよ。沢井さんは?」

「私も作ってないです。月島さんは?」

「わたしも作ってないよ?」

と、否定した

それを聞いた義之は、腕を組んで首を捻り

「だよなー……あれー?」

と、不思議に思っている

「あ、それ作ったの、あたし」

と、ショートカットの青髪にヘアバンドをした少女。椿原蓮《つばきはられん》中尉が手を上げた

それを見た設子が、必死な形相で

「いかん！ 全員、スペアリブは絶対に食べるな！」

と、声高に叫んだ

「え？ なんでですか？」

「こんなに美味しそうなのに」

設子の声を聞いた新人達は、皿に乗っているスペアリブを見て首を捻った

「だから、たちが悪いのよ」

「その見た目で、訓練生時代に悲劇が起きたくらいなんだし……」

と額に手を当てるて呟いたのは、長い金髪が特徴の春日崎雪乃《かすがぎきゆきの》大尉と、小柄な体躯にピンク色ツインテールが特徴の新城鞠奈《しんじょうまりな》少尉だった

「ひ、悲劇……ですか？」

「ええ……あなた達も知ってると思うけど、《死のお茶会事件》よ」

築地の問い掛けに雪乃が答えると、新人達に衝撃が走った

「お、俺、知ってます！ 当時の訓練生の内の八割を病院送りにしたという、あの事件で

すよね!？」

その事件を知っていた一夏は、顔を青くしながら叫ぶように言った  
すると、雪乃は頷き

「そうよ。その犯人が蓮なの」

と、遠い目をしながら告げた

その時、部屋の隅では

「さて、椿原中尉。白状しようか」

「今回は、何をしたの?」

義之と麻耶の前で、蓮が正座していた

「え、えつと……………手近なものを適当に入れました…………」

蓮の自白を聞いた義之と麻耶の額に、青筋が浮かび上がって

「適当に入れるな!!」

と、蓮を怒鳴りつけた

「ごめんなさい!!」

怒られた蓮は、すぐさまに土下座を敢行した

その横では

「賢久! 賢久、しっかりしろ!」

駆が必死に声を掛けながら、賢久を揺すっていた

「ああ……大丈夫だ」

「よかった……」

うつ伏せに倒れたまま賢久がそう言うのと、駆は安堵の息を漏らしたが

「あの川を渡ればいいんだろ？」

賢久は三途の川を渡ろうとしていた

「渡るなあああ!!」

駆は思わず、大声を上げた

「なに？ 六万だあ？ ふざけんな。船賃は六文と相場は決まって……」

「起きろ！」

「賢久先輩！」

流石に危ないと思ったのか、美鈴が腹部を蹴り、雪子がボディプレスで賢久に放った

「グフツ!! はっ!! 俺は一体、なにを……」

「よかった……」

賢久が無事に起き上がると、駆は胸をなで下ろした

「ふむ、よかったよかった」

その光景を見た義之が笑顔で頷いていると、義之の腕を音姫が掴んだ  
「なしたん、音姉？」

義之が問いかけても、音姫は無言だった

その様子に義之が不思議に思っていると、気づいた

音姫の顔が、赤くなっていることに

そのことに嫌な予感がした義之は、先ほどまで音姫が飲んでいた缶を見た

側面には

カシスオレンジの文字が明記されていた

「飲み物買ってきたのは、誰だああー！」

「確か、速瀬のはずですが……」

義之が大声を出したことに驚きながらも、みちるは飲料を買ってきた人物を指差した

「水月ー！」

義之が大声で呼ぶと、呼ばれた水月は缶チューハイ片手に

「えー、今日くらいいいじゃないー」

「未成年も居るんだから、自重しろ！ てか、音姉に酒はやばいんだよ！」

「そうですよ！ お姉ちゃん、匂いだけで酔うのに、飲んだらどうなるのか分からないん

ですよ！」

義之に続いて由夢が言うと、流石にヤバいと思っただらしく、水月は汗を流した

その時、義之は掴んでる音姫の力が強くなってきたことに気づいた

「フフフ……弟くん……」

義之から音姫の顔は見えないが、口元は笑い、掴まれてる腕がギシギシと軋んだ  
「待とうか音姉……俺の腕はそっちに曲がらな……っ！」

義之が制止しようとしたが、それも虚しく、鈍い音が響いて義之は倒れた

「大佐ー!? 速瀬! お前が原因なんだ! 朝倉大佐をなんとかしろ!」

「り、了解!」

みちるに命令されて、水月は慌てた様子で音姫に飛びかかった

が、水月の身体能力を持ってしても、音姫は捕まらなかった

「あ、あれ? 朝倉大佐って、こんなにも早かったっけ?!」

水月は鍛え上げた身体能力をフルに活かして、音姫を捕まえようとしているが、音姫はなかなか捕まらず、気づけば、逆に捕まり

「あ、待って待って、あたしの関節はそっちに曲がらない……っ!」

抵抗虚しく、水月も義之の後を追った

「水月ー!?!」

「速瀬先輩!?!」

「誰でも構わん！ 全力で朝倉大佐を捕まえるー！」

水月の惨劇に幼なじみの涼宮姉妹は叫び、一人では抑えられないと判断したみちるは必死な様子で号令を掛けた

みちるの号令を聞いた全員は、決死の表情で音姫に飛びかかった

その後十数分間乱闘は続き、新人一人を含む四人が新たに犠牲になった

しかも最後は、暴れていた音姫が泥酔して終わるといふ呆気ない幕切れだった  
事の顛末を聞いた純一は、額に手を当てて「かったるい」と呟いたとか

今回のことで、全員に《音姫に絶対に酒は飲ませない》と心に誓ったとか

翌日、音姫は二日酔いに襲われながらも、入院した人数分の書類を裁いていたとか

……

楽しいはずの新人歓迎会は、恐怖と新たな教訓だけを残して終わったのだった

## J E U艦隊保護戦闘 新たな仲間

それはある日、突然起こった

「それじゃあ、今日の予定だが……」

と、隊員の前に立った義之が一日の予定を言おうとしたその時だった

全員の耳に、甲高い警報音が鳴り響いた

そして、全員が視線を上げると同時に

『第一防衛基準発令！ 繰り返し返す、第一防衛基準発令！』

という、放送が聞こえた

「第一防衛基準!?!」

「どっかの艦が領海に侵入してきたのか!?!」

放送を聞いた新人達が浮き足立っている

「落ち着け新人共!!」

義之の怒声が響き渡り、新人達は視線を義之に向けた

その時にはすでに、麻耶が端末を義之に見せていた



「メインモニターに回せ！」

「ええ！」

義之の指示に従い、麻耶がメインモニターに状況を映し出すと

「総員傾注！」

義之の号令が響き、全員の視線が義之に向けられた

「状況を説明する！　今より数分前に所属不明の艦隊が領海に接近。それに伴い、護衛艦隊と即応MS部隊が展開した。だが、所属不明の艦隊は領海に侵入。それに伴い、我々も出撃する。なにか質問は？」

義之が全員に問い掛けるが、全員は無言で返した

義之はそれを確認すると、頷いて

「それでは、全員三分以内に着替えてMS格納庫に集合せよ！　駆け足！」

「了解！」

義之の号令後、全隊員はロッカー目掛けて駆け出した

場所は変わり、MS格納庫

ここでは、整備士達がMS格納庫中を走り回っていた

「ほらほら、ストライカーパックの用意が終わったら、次はベースジャバーよ!!」

「はい！」

整備班副班長の虚の指示に従い、整備士達は的確に行動していった  
全員の思いは同じだった

小さなミス一つ許されない！

自分達のミスは即、パイロットの死に繋がる

ここ、ワルキューレ隊に居る整備士達は前タイタン戦争でそれを経験していた  
見送ったパイロット達が、機体に起きた故障が原因で二度と帰らなかつた

その悔しさと後悔はひとしおだった

自分達がキチンと整備できていれば、助かったかもしれない命だった  
だからこそ、全員には整備士としての誇りと責任感があつた

故に、手は抜けないし、全員でカバーしあう

それを、虚が指示を出しながら見守っていると

「副長！ ウィザード隊の整備が終わりました！」

頭上のキャットウォークから、上半身を乗り出して大声を出している照屋匡の姿があつた

「それじゃあ、フェニックス隊の手伝いをお願い！」

「了解！ よっしゃ、お前ら！ 行くぞ！」

「「「「おう!!」」」」

匡が駆け出すと、その後を十数人の整備士が追い掛けた

虚がそれを確認して、次の指示を出した時だった

虚の隣に、眼鏡を掛けた女性整備士が近寄ってきて

「いったい、どこのバカが領海に入ったのかしらね？」

と、虚に問い掛けた

すると虚は、肩をすくめて

「まだわからないわよ、薫子」

と女性整備士、まゆずみかおるこ 薫子技術中尉に返した

そして虚は、腰のポシエットから携帯端末を取り出して操作した

「情報が更新されてる……なにこれ!？」

そして、携帯端末を見た虚の顔が驚愕で固まった

虚の様子を見た薫子は片眉を上げると、携帯端末を覗き込んで、虚と同じように固

まった

「JEU艦隊の12隻はいいとして、ユーラシア連合の30つて……」

「敗残兵を追うにしては、過剩ね……」

そんな二人の言葉は、整備士達の作業音の中に消えていった



四分後、MS格納庫の端にあるブリーフィングルームに義之達は集まっていた

「よし、全員集まったな……情報が更新されたので、説明する。麻耶」

「ええ」

義之の指示に従い、麻耶がPCを操作すると、モニターに海域の俯瞰図と情報が表示された

「では説明する。現在海域に侵入してきたのは、J E Uの残存艦隊とそれを追撃してきたユーラシア連合艦隊だ」

接近してきた艦隊を義之が告げると、一部で緊張感が高まった

義之が視線を向けるとそこに居たのは、ラウラ達の元ドイツ軍メンバーだった

義之は心中察しながら、説明を続けた

「なお、J E U艦隊からは亡命したいという宗の連絡があり、初音島政府は人道的立場からこれを受諾。ゆえに、我々の任務はJ E U艦隊の保護とユーラシア連合の撃退に変わった」

そこまで言うと、義之は全員を見回して

「なにか質問あるか？」

と問い掛けた

義之の問い掛けに、全員は無言で返した

それを確認すると、義之は頷き

「各員、機体に搭乗しろ！ 出撃する！」

「「「了解！」」」

義之の号令後、全員ブリーフィングルームから飛び出して、自分の機体に向かった。義之はストライクに乗ると、OSを起動させた。

お馴染みのスタート画面が映り、膨大な文字列が上にスクロールしていく。

そして、GUNDAMの文字が消えると、モニターに外の様子が映った。

すると、キャットウォーク上に居た整備士がストライクが起動したのを確認したらし

く

『御武運を！』

と言って、ストライクから離れていった。

義之は返答代わりとして、ストライクのメインカメラを光らせた。

その直後、ストライクを固定していたロックが外れて、キャットウォークも離れた。

義之はそれを確認すると、誘導員が振っている旗に従い、ストライクをゆつくりと歩

かせた。

そして、リニアカタパルトの台にストライクの足を固定すると、シャッターが閉まり、

天井が開いた。

『ストライカーパックはエールを選択!』

オペレーターを勤めている麻耶の言葉の後、天井からエールストライカーが降りてきて、ストライクに接続された

『リニアカタパルト、システム正常! 進路オールクリア! ストライク、発進どうぞ! 気をつけてね……!』

最後の麻耶の言葉に義之は微笑むと、操縦桿を掴み

「オーライ……オーデイン1、桜内義之。ストライク、出るぞ!」

義之の体がGでシートに押し付けられながら、ストライクは蒼空に飛び出した

その後、ストライクに続いてワルキューレ隊のMS隊とベースジャバーが三基のリニアカタパルトを使って次々と蒼空に舞っていく

そして、全機が出撃したのを確認すると

「フォーメーションはストライクを中心に、ウエッジワウン傘壺型陣形! 最大戦速! 続けえ!!」

『『『『了解!』』』』

義之の指示に従い、陣形を整えてワルキューレ隊は戦闘区域へと向かった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わり、戦闘区域

ここでは、初音島の即応MS部隊とユーラシア連合軍のMS部隊が戦闘を繰り広げて

いた

しかし、ユーラシア連合のMS部隊の方が数多く、初音島のMS部隊は押されていた『クラッカーよりHQ！ 応援部隊はまだか!? こちらは長く保たない……早くしてくれ!!』

悲鳴混じりに聞いたのは、即応MS部隊のクラッカー小隊を預かる女性

まきなみあやせ  
薪波綾瀬中尉である

彼女が率いるクラッカー小隊はなんとか、一機も欠けることなく戦っていた

だが、共に出撃した他の小隊では既に被害が出ていた

そのために、再三に渡る応援要請を出していた

『HQよりクラッカー。現在そちらに向けてワルキューレ隊が急行中。到着まで、後二百秒』

HQからの応答を聞いて、綾瀬は目を見開いた

『ワルキューレ……英雄率いる部隊か！ 助かる！ クラッカーより各機！ ワルキューレ隊が到着するまで、約三分だ！ 何としても保ち堪えろ！』

「ワルキューレが来てくれるんですか!？」

嬉しそうに声を上げたのは、クラッカー小隊に所属している伊隅あきら少尉である

『畜生！ 簡単に言ってくれる！ だったら、もっと航空支援か支援砲撃を寄越しな!』

綾瀬の言葉に怒鳴り返したのは、クラツカー小隊とは別の小隊の隊長である  
 鹿島美智子中尉だ

『04回り込まれるぞ！ 03カバーしろ！』

「了解！」

隊長の指示に従い、あきらはクラツカー4のカバーに向かったが

『ウオオオ！』

「危ない！」

クラツカー4、ヴィルヘルミナ・オルテンシアは一機のウインダムに狙われていた

あきらは撃とうとしたが、相手のほうが早く

『ぐっ！』

「やめろおお！」

ウインダムの放ったビームライフルが、ヴィルヘルミナ機の左腕を肩から吹き飛ばし

た

『くっ……調子に乗るな……っ?! 動かない? 動かない!』

ヴィルヘルミナ機はすぐさま体勢を整えようとしたが、機体は動かなかった

『どうした!?!』

ヴィルヘルミナ機のカバーに、クラツカー2こと、おだたかまさ小田隆正少尉が入った



『駆動系が……駆動系がイくれました!』

『バカ野郎! 早く緊急脱出しろ!』

ベイルアウト

緊急脱出というのは、コクピットユニットごと機体の外に脱出することである

初音島はこれを採用することにより、パイロットの生存率が一気に上がっている

ヴェルヘルミナが脱出するのを支援すべく、クラツカー小隊はクラツカー2を囲むように布陣した

『ひ、ヒイツ!』

「早く、急いで!」

あきらは一機のダガー1を撃破しながら、脱出を催促した

が、ヴェルヘルミナ機の脱出機構が作動する気配はなく

『脱出機構が……さっきの攻撃で、作動しません!』

「そんな!」

ヴェルヘルミナの報告を聞いて、あきらの動きが僅かに止まった

それにより、敵のウインダムが一気に接近しながら、ビームサーベルを抜いてクラツカー2に切りかかり

『うおおお! ツガアアア!』

クラツカー2はウインダムに胴体を斬られて、爆散した

「02!？」

味方が撃破されたことにあきらは動揺して、動きが乱れた

その隙に一機のダガーLがバズーカを構えて、動けないクラッカー4を狙い

『た、助け……ヒツ!？』

クラッカー4はバズーカの直撃により、爆散した

『この野郎オオオ!』

立て続けに部下が撃墜されて、クラッカー1は激情に任せてスラスターを吹かして突撃した

正面に居た二機のうち、一機をビームライフルで撃ち抜き、もう一機を抜いたビームサーベルで切り捨てた

その直後、クラッカー1の胸部をビームが貫通した

『ガアアア!?!』

スパークした数瞬後、機体は爆散した

「た、隊長!」

隊長が撃破されて、あきらは反射的に周囲を見回した

気づけば、生き残った機体は自分だけになっていた

しかも、敵はいまだに十機近く残っている

その事態に、あきらの頭は真っ白になり

「あ、う……ウアアアアア！」

あきらはビームライフルを乱射しながら、叫び声を上げた

その時、コクピット内に警告音が響き、あきらは矢印が示した後ろを見た

そこには、自分に対してビームサーベルを振り下ろそうとしているウインダムの姿が

あった

「ひっ!？」

あきらが恐怖で身を固めた、次の瞬間

ビームサーベルを持っていたウインダムの腕がビームにより撃ち抜かれ、立て続けに

頭部と胸部に実弾とビームが当たり、ウインダムは爆散した

「え……う？」

突然の事に、あきらが呆然としていると

『襲うこと、奪うことしか知らないユーラシア連合の野獣共に、守る者達の強さを教えて

やれええ!』

という若い男の声が無線越しに聞こえて、その斉唱代わりと言わんばかりに、ビーム

や実弾が立って続けにユーラシア連合軍の機体に襲いかかった

ビームや実弾が来た方向を見ると、トリコロールが特徴的なガンダム

ストライクを先頭に、六十余りの機体が次々と砲撃を行いながら接近してきていた。それを見たあきは、ほんの三分前の隊長の言葉を思い出した

「ワルキューレ……部隊……？」

あきらが呆然と呟いていると、その左右をアストレイタイプやガンダムタイプが通過していくがストライクが寄ってきて

『君、無事だな？ 生きてるな？』

サブモニターに《サウンドオンリー》と表示が出て、先ほど聞こえた若い男の声があきらに問い掛けてきた

「は、はい！」

『よし、では一旦下がれ』

あきらが返答すると、男がそう言ってきた

「ですが、ここは……」

あきらは生き残った部隊のプライドで、反論した

すると、赤い鋭角的なガンダムタイプが近寄ってきて、肩に手を置いた

すると、接触回線が開き、サブモニターにもう一つ《サウンドオンリー》と表示が出て

『ここは我々、特務部隊が引き受ける。貴様は別部隊の指揮下に入れ、いいな？』

と、女性の声が聞こえた

そして、あきらはその女性の声を聞いて驚いた

「その声は……みちるちゃん!？」

『なっ!? あきら!?!』

赤いガンダム、イージスに乗っていた伊隅みちるも驚きの声を上げた

『オーデイン2、どういうことだ?』

『はっ! このパイロットは自分の妹の伊隅あきらです!』

男が問い掛けると、みちるは簡潔に答えた

すると、男は舌打ちして

『身内が居ることを考慮すべきだったな……少し待て』

と言って、ストライクからの通信が閉じられた

そのタイミングを見計らって、あきらは口を開いた

「まさか、みちるちゃんがワルキューレ隊に居たなんて……教導団に居たんじゃ……」

と、みちるに問い掛けた

『ワルキューレ隊で名前を公開されてるのは、オーデイン1の大佐のみでな。家族にすら、所属していることを教えられないんだ』

と、みちるが教えたタイミングで

『すまん。待たせた』

再び、《サウンドオンリー》と表示が出た

『大佐、どうでした？』

『うむ……君、秘匿回線Bを開け』

「は、はい！」

あきらは男の指示に従い、秘匿回線を開いた

すると、モニターに若い男とみちるの顔が映った

『よし、顔は見えているな？』

「は、はい！」

男からの問い掛けに、あきらは内心でもしかして？　と思いつつ、返答した

すると、男は頷き

『よし。俺は、ワルキューレ隊隊長を勤める桜内義之大佐だ。伊隅あきら少尉で間違いないな？』

男、英雄と知られている義之に名前を呼ばれて、あきらは緊張しながら

「は、はい！　そうであります！」

と返すと、義之は満足そうに頷いて

『では、我が隊にようこそ、伊隅あきら少尉！　君を歓迎する！』



と義之が言った直後、モニターは通常に戻った

『さて、暫定的だが、君のコールサインはオーデイン6とする。いいな?』

「了解!」

あきららが返答すると、義之は頷き

『さてと……:オーデイン1よりワルキューレ隊各機に通達! 現時刻を以て、即応MS

部隊から伊隅あきら少尉が編入された! なお、現時点でのコールサインは暫定的に

オーデイン6とする!』

と、指揮官らしい貫禄で告げた

すると、サブモニター一杯に六十名近い顔が映り

『『『『了解!』』』』』

と、全員の斉唱が響いた

「伊隅あきら少尉です! 皆さん、よろしくお願いします!」

あきららがそう言うのと、各々は親指を立てたりして軽く挨拶すると、表示されていた顔は全て消えた

『さて、あきら少尉。機体は大丈夫か?』

義之が問い掛けると、あきららは手早く機体の調子を調べた

「機体のほうは、なんら問題はありません。ですが、ビームライフルがオーバーヒート手



前です」

あきらが見ている画面には機体の様子が映し出されており、装備しているビームライフルが真っ赤に染まっていた

「どうやら、乱射したのが原因らしい」

『ふむ……では、これを使い』

義之はそう言いながら、自機の持っていたビームライフルを差し出した

「ですが！　そうしたら大佐の武装が！」

あきらが抗議すると、義之は微笑んで

『大丈夫だ。予備がある』

義之はそう言うと、エールストライカーに懸架されていた予備のライフルを示した

それを確認したあきらは、自機のライフルを腰にマウントすると

「では、お借りします」

義之が差し出したビームライフルを受け取った

それを確認した義之は、予備のライフルを装備して

『オーデイン1よりワルキューレ隊全機に通達！　フォーメーションはストライクを中ウイングダブルファイブ心に複鶴翼伍陣！　ラインを押し上げて、JEU艦隊を援護する！』

と号令を出した

『了解！』

全員の斉唱を聞いた義之は、あきららに向けて

『あきらら少尉、君は俺の隣を飛べ。遅れるなよ？』

そう言いながら、不敵な笑みを浮かべた

「了解！」

あきららが返すと同時に、部隊の陣形が整った

義之はそれを確認すると

『全機最大戦速！ 行くぞ！』

ストライクを最大速度で飛行させた

## J E U 艦隊保護戦闘 邂逅

初音島から数十キロ離れた海上では、蒼いシグー・タイフーンが右手にキャットウス無反動砲を持つて戦っていた

「このっ!!」

蒼いシグー・タイフーンのパイロット、ウエルキン・ギウンター少佐は気合いと共に機体を上下逆向きにして、後方に無反動砲を放った

放たれた砲弾は直線上に居た機体、ウインダムに向けて疾走する

その砲弾を回避しようとしたのか、ウインダムは機体を右に滑らせたが、その砲弾が花弁のように開き、中から無数の小さい弾を吐き出した

流星にその弾幕は予想外だったらしく、ウインダムは避けきれずに、無数の弾に貫かれて爆散した

ウエルキンは撃破確認もせず、機体を立て直すと同時に持っていた無反動砲を投棄空いた右手に折りたたみ式ハルバードを保持させると、左手を肩越しに後ろへと向けて盾に取り付けられているガトリング砲を斉射

連続して発射された砲弾は、ダガーLを蜂の巣にした

が、ガトリング砲はそれで弾切れになり、ウエルキンは舌打ち混じりにガトリング砲をパージした

そして、レーダーを確認すると同時に

『ウエルキン！ 無事!?!』

一機のデイン・ラファールが接近してきた

「ああ、大丈夫だよ。アリシア」

ウエルキンはデイン・ラファールのパイロットであり、恋人のアリシア・メルキオットに返答した

そして改めて、レーダーを確認した

すると、自分の周囲に味方の機体が集まりつつあったことに気付いた

『しっかし、ユーラシアの連中はしっこいな』

そう言ったのは、両手にキャットウスを持ったジン・トーナードADVに乗った男ラルゴ・ポッテル少尉だった

彼はウエルキンが率いる部隊の中では最古参で、タイタン戦争以前から対戦車兵として戦っていた

するともう一機、両手に重突撃機銃を構えたジン・トーナードADVが来た

『初音島までもうすぐだってのに……』

苦虫を嘔み潰したように言ったのは、ロージーこと、ブリジット・シユターク少尉である

そして、彼女達が集まった瞬間だった

四機のコクピット内に、警告音が鳴り響いた

「全機、散開！」

ウエルキンの言葉に従って、全機はバラバラに離れた

その直後、先ほどまで彼らが居た場所を極太の閃光が貫いた

「戦艦か!？」

ウエルキンの視線の先には、まさに第二射を放とうとしているユーラシアの戦艦があった

「間に合え!!」

ウエルキンが必死の思いで避けようとした瞬間、その戦艦の艦橋をビームが貫いた

「なに!？」

ウエルキンがビームが来た方向を見ると、そこにはバスターの姿があった

『初音島のガンダム!？』

『間に合ってたか!』

アリシアとラルゴが驚いていると、若い男の声で

『こちららは、初音島統合防衛軍特務部隊だ！ すまない、遅くなった！』

という言葉を聞き、ウエルキンは部隊指揮官として

「こちららは、J E Uドイツ軍第7 M S大隊のウエルキン・ギウンター少佐です！ 助かりました！」

と返すと、サブモニターに《サウンド・オンリー》と表示されて

『ここは我々が引き受けます。あなた方は帰艦して、アレの指示に従ってください！』

そう言いながらストライクが指差した先には、ただただ、海が広がっているだけだった

そのことに、ウエルキンは首を傾げて

「あの、アレとは一体……」

と問い掛けた直後

『ウエルキン！ 海中に巨大な反応！ 推定、戦艦クラス！』

アリシアからの悲鳴のような報告を聞いて、ウエルキンは海面をよく見た

すると、ストライクの指差した方向の海面に巨大な影が写り、数秒後、海中から白亜の巨艦が海水を滝のように落しながら現れた

そして、その艦をウエルキンは知っていた

「不沈艦……アークエンジェル！」

不沈艦アークエンジェル

それはストライクと同じように伝説的な扱いの戦艦で、激戦と知られている初音島攻防戦で最後まで戦い抜いた戦艦である

そして、その艦橋ブリッジに居るのは

「ゴッドフリート、バリアント、両舷起動！ イーゲルシュユテルン、全門自動照準で起動！ 艦尾ミサイルランチャーは全門コリントス装填完了！ 艦長！」

副艦長として雪村杏少佐

そして、艦長席には

「総員、対MS及び対艦戦闘用意！」

凜とした雰囲気の中、朝倉音姫が座っていた

「艦長、通信繋がります！」

CICに座っている白河ななかがそう言うと、音姫は頷いてから受話器を取り「こちらは、初音島統合防衛軍特務部隊旗艦、アークエンジェル！」

ウエルキンに対して、通信を始めた

「貴官達は母艦へと帰艦して、こちらの指示に従ってください！」

『……了解しました。頼みます！』

通信が終わると音姫は、受話器を戻して

「白河さん、彼らの誘導をお願い！ 板橋君はそのまま操舵を！ 総員、気を引き締めて！」

「「「了解！」「」」」

音姫からの激励に、全員は斉唱で返した

こうして、彼女達も戦場へと向かう

場所は変わり、激戦地域

そこでは、帝国軍部隊とEU軍が共闘していた

『殿下！ 富士にお戻りください！ 殿下になにかあつたら！』

そう言ったのは、赤い龍閃に乗った中年の男性

ぐれんこれただ  
紅蓮是唯中蔣だった

そんな彼の機体の近くには、紫色の龍閃が居て

『ならん！ 我々が引いたら、撤退している民を誰が守るといふのだ！』

と声を張り上げた

殿下と呼ばれた男

いがるがこじよう  
斑鳩古城は、一機のウインダムを刀型ビームサーベルで斬り捨てると

『彼らは我々を信じて、ここまで付いて来てくれた！ その彼らを守らずして、なにが征夷大將軍か!?!』



『しかし！』

斑鳩の言葉に紅蓮は反論しようとするが

『くどい！ なれば、貴君ら近衛が我を守ってみせい！』

その一言を聞いて、紅蓮は齒噛みすると

『承知！ クレスト2より、近衛各機に通達！ なんとしても殿下と民を守れ！』

と命令を下した

「了解！」

その命令を聞いた女性

篁たかむらゆい唯衣中尉は、愛機である山吹色の龍閃のビームライフルでダガーIを撃破した

その直後、唯衣の近くに白い烈空タイプが近づいてきて

『アルゴス1よりホワイトファングー！ これ以上は保たねえぞ！』

と喚きたてた

彼の名前は、ユウヤ・ブリッジス少尉である

彼は日系アメリカ人であり、本来ならばNAU軍の所属であるが、現在は彼が乗っている烈空式型タイプ1のテストパイロットである

これは日本帝国軍が新型機を開発するにあたり、NAUからの支援であった

当初、彼は日本を毛嫌いしていて、非協力的であったが、唯衣と接していくうちに日

本を認めて、烈空式型の機体特性を發揮していけるようになってきた

その矢先に、ユーラシア連合が日本に対して宣戦布告

ユウヤとそのチームは日本に残り、共に戦ったのである

そして今、初音島まで来ていた

「ホワイトファングーよりアルゴスー！ 何としても保たせろ！」

そうとしか言えない唯衣は、歯噛みした

その時

『グウツ?!』

うめき声がして、赤い龍閃が右腕を肘から喪失しながら後退してきた

そして、その赤い龍閃を落とそうとウィンダムがビームライフルで狙うが

『させない!』

という声の直後、一発の砲弾が胴体を貫いて爆散した

『清十郎！ 大丈夫!』

そう言いながら、一機のジン・トナーDADVが両手で支援突撃砲を持って現れた

『イルフリーデ殿、すまない……助かった』

彼の名前は真壁清十郎少佐

そして、彼を助けたのはイルフリーデ・フォイルナー大尉である

すると、イルフリーデ機の近くにデイン・ラファールともう一機のジン・トーナードADVが来て

『イルフリーデ、いきなり離れるな』

『カバーがし辛いですわ』

と、イルフリーデに対して苦言を呈した

ジン・トーナードADVに乗っているのは、ヘルガローゼ・ファルケンマイヤー大尉で、デイン・ラファールに乗っているのが、ルナテレジア・ヴィッツレーベン大尉である

イルフリーデ、ヘルガローゼ、ルナテレジアの三人はEUドイツ軍の精鋭部隊である、ツエルベルス大隊に所属している

清十郎は以前にそのツエルベルスに研修に赴いていて、その時は彼女達が世話役になつたらしい

ただ、当時のことを聞こうとすると、遠い目になるが

閑話休題

その時、警告音と同時に

『中尉、後ろだ！』

ユウヤの声と同時に唯衣が振り向くと、そこにはウィンダムがビームライフルを構え

ていた

（私の回避も攻撃も間に合わない！ 味方の援護も無理……私はここで死ぬのか？ あいつに再会せずに……っ！）

この時、唯衣の脳裏によぎったのは、11年前に初音島に来た際に会った一人の少年だった

11年前、唯衣は父親の仕事に付いて来て初音島に来た

ただ、自分のミスによりはぐれてしまい、泣いていた時に手を差し伸べてくれた少年が居た

その少年は父親が見つ付けてくれるまで、一緒に遊んでくれた

そして、別れ際に名乗りあった

その少年の名前は……

（もう一度会いたい……神崎直哉！）

唯衣がその名前を思った直後、ウィンダムスのビームライフルを光弾が貫き爆発した

「……………え？」

唯衣が呆然としてみると、そのウィンダムスの胴体を一機のアストレイタイプが切り裂いた

『初音島のアストレイか!?!』

『データベースに適合無し……新型!』

清十郎とイルフリーデが驚いていると、そのアストレイタイプは唯衣の機体をじつと見ていた

なんとなくだが、そのアストレイタイプのパイロットを唯衣は知っている気がした  
すると、アストレイタイプのカメラアイが不規則に光り出し、唯衣はその光方が光通  
信と気付いた

「……こちらは初音島統合防衛軍特務部隊の者だ……こちらの指示に従ってもらいたい  
……」

唯衣がそう呟いた直後、アストレイタイプがゆっくりとある方向を指差した

唯衣がその方向を見ると、その先には白亜の巨艦

アークエンジェルが存在していた

「アークエンジェル……!」

『初音島の部隊……間に合ってくれたか!』

唯衣に続いて、ユウヤが言う

『こちらは初音島統合防衛軍特務部隊旗艦、アークエンジェルです! こちらの指示に  
従ってください!』

若い女性の声が、コクピット内に響いた

『こちららは日本帝国軍征夷大將軍の斑鳩古城だ！ 救援に感謝する！』

斑鳩が返答すると、唯衣機の前に居たアストレイタイプは機体の向きを変えて、高速でユーラシア連合軍部隊に突撃していった

「あつ……」

それを見た唯衣は反射的に手を伸ばすが、すぐに引つ込めた

『中尉、俺達は富士の護衛に行くぞ』

「ああ、そうだな……」

ユウヤの言葉を聞いた唯衣は、後ろ髪引かれる思いで富士級MS空母一番艦《富士》の護衛へと向かった

## J E U 艦隊保護戦闘 葛藤

初音島沖合

そこでは、激しく銃火が瞬いていた

ユーラシア連合のMS部隊とJ E U艦隊残存部隊、そして、初音島の部隊が撃ち合っていた

今もまた、一機のウインダムがビームに貫かれて爆発した

そのウインダムを撃破したアストレイタイプは、すぐさま機体を翻すとビームサーベルを左手で抜いて迫ってきたダガーLを切り捨てた

その光景を見た新任少尉、織斑一夏は

(なんで……なんでそんなに躊躇いなく撃破出来るんだ……直哉っ！)

と自身が率いる部隊の隊員であり、年上の幼なじみに困惑していた

自分達は初の実戦であり、初めての殺し合いである

それは直哉も同様の筈なのに、一夏は躊躇いがあった

(あれに人が乗っているとと思うと……っ！)

そう思うだけでどうしても、コクピット付近や直撃弾を当てられず、僅かに狙いをズ

ラしてしまふ

その証拠に一夏が放ったビームは、ダガーの腕を吹き飛ばした程度だった

その時、コクピット内部に警告音が鳴り響き、一夏は条件反射でサブモニターを確認した

すると、主兵装のビームマシンガンのエネルギーが無くなっていった

残弾確認を怠っていたことを心中で叱責しつつ、一夏は口を開いた

「ストラトスー<sup>マグチェンジ</sup>弾倉交換！ 援護願う！」

『ストラトス5、援護了解！』

一夏からの援護要請に即座に反応したのは、僚機を勤めていたシャルロットだった。シャルロット機は下腿部から、新しく作られた連装式ショットガンを外して斉射した。それにより、一夏を攻撃しようとしていたウインダムが蜂の巣にされて爆発した。補足すると、EU出身者組みは躊躇いなどなかった。

祖国を落とされたという恨みや憎しみもあるだろうが、大きい義務教育の内から軍事教練を受けていたことだろう。

EUでは、徴兵制度を設けるにあたり、小学校、中学校で基本的な軍事教練を受けるのだ。

そして、高校から上は選択式で軍事教練科目を選べるようになってい



ラウラはこの軍事教練において、優秀な成績を収めたので飛び級している。その差を考えるだけで、一夏は歯がゆい思いだった。

ビームマシンガンの弾倉を交換し終わると、一夏は素早く状況を確認した。

戦況は混戦模様となっていて、JEUの残存部隊を逃がしたいが、戦況がそれを許さなかった。

故に、今回は義之の提案によりJEU残存部隊と連携を取ることにした。

殿しんがりを勤めていたJEU残存部隊は日本帝国軍の帝都守備連隊を中心とした部隊らしく、烈空が多かった。

一夏は確認が終わると

「誰か、08の援護出来ないか!？」

と声を張り上げた。

理由としては、直哉機がいささか突出してしまい、孤立状態になりかけていたからだ。『難しいですわ! 彼の動きが速過ぎて、下手に撃つたら誤射する危険すら!』

セシリアの言葉を聞いて、一夏は唇を噛み締めた。

直哉機が孤立状態に陥つたのは、直哉機の速さもあるが、一夏の指示ミスだった。

今回は混戦になるだろうから、指示は各部隊長に任せると義之は通達していて一夏は直哉に、切り込んで敵の連携を崩してくれ。と指示していたのだ。

それが仇となつて、直哉が孤立状態になつてしまつた

一刻も早く、直哉の近くに行きたいが、敵部隊の数が多く、不用意に近づけば、あつという間に撃墜されるだろうことは容易に想像出来た

どうすればいいのか一夏が悩んでいると、サブモニターに通信画面が開き

『俺とレーヴァテイン5が切り開く！』

という稟の声が聞こえて、一夏機の頭上を稟機が飛んでいった

『レーヴァテイン5！ 援護願う！』

『レーヴァテイン5、援護了解！』

稟が援護要請をすると、柏木は即座に了解した

二人のやり取りを聞いて、一夏は瞠目した

稟と柏木の二人は、敵を撃破することに躊躇いなど持っていないかつた

だが、自分はどうだ？

躊躇つて味方に負担を掛けている挙げ句、自分の指示ミスで直哉が孤立している友人が動いているのに、自分が動かないでどうする！

一夏はそう思うと、操縦桿を強く握りしめて決意の光を込めた瞳で戦場を見据え

「ストラトス1よりストラトス隊各機に通達！ これより、レーヴァテイン5、6と連携してストラトス8と合流する！ 前衛は俺と2、3！ 中央に5と6！ 後衛に4と7

！」

と一夏が指示を出すと、サブモニターに顔が映り

『『『『了解！』』』』』

という、全員の頼もしい斉唱

全員の斉唱を聞いた一夏は頷いて

「全員、連携は密に行え！ 互いの背中を守れよ！ それじゃあ、行くぞ！ 全機、突撃  
！」

一夏がそう言つて、ビームサーベルを右手に、ビームマシンガンを左手に構えて突撃すると、右側に箒機、左側に鈴機が並び、その真後ろにシャルロット機とラウラ機、最後方にセシリア機と簪機が並んだ

「オオオオオオ！」

一夏は雄叫びを挙げながらビームマシンガンを斉射して、それを盾で防いだダガーLの胴を通り過ぎ様に切り捨てた

数瞬後、背後で爆発が起きて、一夏は自分で撃破したことがわかった

それを自覚した瞬間、一夏を猛烈な罪悪感が襲ったが、それを歯を食いしばって耐える

「これが……俺の選んだ道なんだよ——！」

と叫んだ

その後、一夏達は稟と柏木機と連携しながら、一機また一機と撃破していき、長いよ  
うで短い戦闘を潜り抜けて、直哉機と合流した

一夏機が直哉機の隣りに止まると、直哉機から通信が開いた  
『よお、ストラトス1。遅かったな』

「悪いな、ストラトス8。敵さんがしっこくって、手間取った」

そんな二人が始めたのは、戦場では不釣り合いな軽口だった

『そうかい。こちらは、奴さんから熱烈なワルツの誘いが多かったよ』  
「そりゃ、お疲れさん」

だが、二人にとってこの軽口の応酬は互いの無事を確認するためだった

そして二人は、短い軽口の応酬で互いに無事を確認すると

「で、ストラトス8。機体は大丈夫かな？」

『まあ多少、間接にガタが来てるが、まだまだ大丈夫だ。そっちはどうだ？』

「こっちは、無駄弾を撃ちまっただが、まだまだ行けるさ」

互いの機体の調子を確認すると、領きあつて

「そんじゃま、人様の土地に土足で踏み込んできた奴らに、お仕置きをしてやろうぜ」  
『オーケイ、痛い思いをしてもらおうぜ！』

二人がそこまで言うと、通信画面が開き

『こちらレーヴァティン6！ ストラトス8とは合流できたか!?』

と稟が怒鳴るように聞いてきた

「こちらストラトス1。無事にストラトス8と合流できた。支援感謝する！」

『なんの！ 味方が困ってるなら、助けるのが仲間つてもんだろ？ 気にするな！』

『その通りだよ、ストラトス1！』

一夏が感謝を述べると、稟と柏木がどうってことないと返した

『それでも、危険を冒して助けてくれたんだ。感謝する』

と直哉が言うと、二人は笑みを浮かべて

『ほんじゃま、これから敵を落とすぞ！』

『支援ならお任せ〜！』

と、戦闘継続の意を示した

稟と柏木の言葉を聞いた一夏は頼もしさを感じて

「オーライ！ 礼儀知らず共に、俺達の強さを教えてやるか！ ストラトス1より、ストラトス隊各機に通達！ レーヴァティン5、6の協力により、ストラトス8との合流に成功！ これより、引き続きレーヴァティン5、6と連携し楔型陣形（アローヘッド）にて、敵の包囲網を食い破って離脱する！」

「……了解……」

一夏の指示を聞いた全員が斉唱すると、一夏は頷いて「行くぞ、全機……突撃い！」

その一夏の号令を皮切りに、ストラトス隊とレーヴァテイン5、6は突撃していった

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
 ほぼ同時刻、伊隅あきら少尉は驚愕していた

(これが本当に、着任して一ヶ月未満の新人!?)

あきららは途中で軽く自己紹介しあい、新人達が着任したばかりと聞いていたのだが、一年先に着任したあきららに迫るか、下手したら、既に抜いている程の腕だったが、それも仕方ないだろう

新人達は着任してからほぼ毎日、義之達と模擬戦を繰り返してきたのだ  
 本人達にとっては、地獄のような模擬戦を何十回、何百回と繰り返した結果、今の腕になった

ただし、現在の新人達の戦歴は全戦全敗だが  
 一回の実戦は十回の訓練を超えるという、ワルキューレ隊の暗黙の了解を行ったまでである

使っているのは模擬弾やシミュレーターとはいえ、それは実戦さながらである

それを数時間も行い、負けた原因を洗い出して反省会を行う  
それを何回も繰り返してきたのだ

腕が上がるのは当たり前である

だが、それを知らないあきらは

(一年だけとはいえ、先輩として恥ずかしい格好は出来ない！)

と意気込んで、気付かぬ内に自身の限界を超える速度で機体进行操作し続けた

そして、あきらが放ったビームが一機の戦闘機を撃破した時、遠方に瞬く光が見えた

「大佐、あれをー」

あきらが近くで戦っていた義之に声を掛けると、義之はストライクを光の方向に向けた

『あれは……信号弾だな』

見えたのは右から赤白青という、発光弾だった

義之がそれを確認した数秒後、戦闘を行っていたユーラシア連合軍の部隊が転進して  
いった

「撤退……!?!」

あきらが驚いていると、義之は淡々とした様子で

『撤退してくれると言うのであれば、こちらとて手出しはしない。オーディーナーより

ワルキューレ並びに帝都守備連隊に通達！ 深追いはするな！ 敵が領海に出るまで

現状を維持し、警戒せよ！』

と、友軍に通達した

『『『『了解！』』』』

ワルキューレ隊と帝都守備連隊は返答すると、警戒態勢を維持したまま待機し続けた  
その後、ユーラシア連合軍全部隊が領海から出たことを確認すると、義之達は帝都守  
備連隊を先導する形で初音島へと帰還していった

こうして、J E U艦隊保護戦闘は終結した

だがこれが後に、戦火を呼ぶことになる……



# 設定集 206編

涼宮茜 すずみやあかね  
階級少尉

太陽暦73年6月頭に着任したばかりの新任少尉

明るい性格で責任感も強く牽引力もあるので、リーダー向き

速瀬水月に憧れていて、彼女を追って訓練校に入隊、持ち前の運動能力と学習意欲を活かして好成績を収めてワルキューレ隊に所属した

通信将校を勤めている涼宮遥とは姉妹で、姉妹揃って入隊するという偉業を成し遂げた

いた 207の榊千鶴とはライバルであり、よくよく部隊を巻き込んだ競争などをやって

コールサインはレーヴアティーン1

機体は火力重視にセッティングされており、右手にビームライフル、左手にビームサブマシンガンを装備

両肩にはビームガトリングを搭載しており、脚部は地上での機動性を考えてホバー式になっていて、空中戦ではベースジャバーを使う

ストライカーパックは新しく試作されたガンナーパックを装着するガンナーパックは攻撃用ではなく、主にエネルギーパックやマガジンを大量に収納されていて、交換が必要になった際にサブアームによって迅速に交換する機能になっている

盾は取り回しを重視して、小型の物を採用  
尚、ビームライフルの銃身下部にはビームサーベルが取り付けられていて、格闘戦もこなせるようになってい

あざくらほるな  
麻倉陽菜 階級少尉

男口調が特徴で、訓練生だった時は隊内の風紀委員的立場であった  
実家が格闘技の道場のために、本人も格闘技を得意としている

MS戦でもその格闘技の冴えは素晴らしく、同期では極数人しか渡り合えなかった  
彼女曰わく、MS戦では稟と武の二人とは戦いたくないらしい

機体は格闘戦を重視してカスタムされており、両腕には打撃兵装として小型の盾を装備して、肩装甲も駆動範囲を考えて小型化されている

主兵装として、ビームサブマシンガンとビームナイフを装備している  
コールサインはレーヴァティン2

築地多恵つぎしたえ 階級少尉

涼宮茜が大好きな百合少女

焦つたりするとどこかの方言を口走ることが確認されており、何回も議論が重ねられたとか

涼宮茜のフォローをしたいためか、基本的にオールラウンダーだが特に得意なのは中距離戦闘らしい

機体はほとんどベース仕様で、唯一の違いはビームライフル下部にグレネードランチャーを装備しているくらい

コールサインはレーヴアティン3

田倉美智子たくらみちこ 階級少尉

小柄な体躯に愛らしい仕草、間延びした口調という3つの要素により、部隊のマスケット扱い

そんな印象とは裏腹に視野は広く、中距離火力支援を得意としている

機体は両手にビームライフルを装備し、右肩にレールカノンを着装している

盾は右肩からサブアームが支えており、射撃時には邪魔にならないように考慮されている

コールサインはレーヴアテイン4

柏木晴子 かしわざきはるこ 階級少尉

背が高いのを若干気にしている

下に二人の弟がおり、その二人を守りたいと思い入隊

サバサバした性格で男女に受けはよく、交友は幅広い

学生だったころはバスケ部に所属していて、ポイントゲッター P、Gを担当していた

その頃の経験からか、視野の広さとの確かな判断力に定評があり狙撃支援を得意として  
いる

なお、その狙撃の腕前は歴代訓練生の中でも高く、当代では二位だった

機体はスナイパー仕様で、頭部には三眼式光学センサーを取り付けている

盾は左側からサブアームによって支えており、狙撃時に機体を防御するように出来て  
いる

右手首マルチラックにビームサーベルを内蔵しており、狙撃から迅速に格闘戦に移行  
出来るように出来ている

コールサインはレーヴアテイン5

土見稟 つちみりん 階級少尉

元日本帝国に住んでいた少年で、二年前のタイタン戦争の時に自分の無力さを思い知り、初音島に来てからすぐに訓練校に入隊

当初成績は最低のCランクだったが本人の血の滲むような努力により、最高ランク一歩手前のAランクまで上がった

その努力は誰もが評価しており、そして全員が心配している

稟の右手首には、二年前に楓が着けていたリボンが巻かれている  
勘が異常に鋭く、大抵の奇襲などは感づくほど

機体の構成自体はほとんどベースに近いが、稟の耐G体質の高さを活かしての機動性の高さや稟の反応に追いつくためにレスポンスを他の機体に比べて四割近く上げている

武装はビームサーベルとビームライフル、バルカンポッドというノーマルな物  
コールサインはレーヴァテイン6

## 設定集 207編

榊千鶴 さかきちづる 階級少尉

気の強い少女で、同部隊所属の綾峰慧とは犬猿の仲

政治家の父親が居るが、母親と共に別居中でそんな母親の負担になりたくない、軍に入隊

気が強い人物が多い部隊を纏めるために、かなりストレスが溜まる模様

206の部隊長たる涼宮茜とはライバル関係

中距離火力支援が得意

機体は両手にビームライフルと両肩にMLRSを装備

盾は小型のものを装備

脚部はホバー式になっていて、地上での機動性は高く、空中戦ではベースジャバーを使用

バックパックは涼宮茜と同じガンナーパックを使用しているが、一部にはミサイルの予備弾頭になっている

コールサインはヴァルキリー

御劍冥夜 みつるぎめい 階級少尉

世界的大財閥の御劍財閥の直系で、双子の次女

それ故か、喋り方が古風で侍気質

芯が強く、自分の理念に従って軍に入隊したらしい

日本帝国に古くから伝わる無限鬼道流むげんきどうりゆうという剣術を体得しており、それを駆使しての

近接格闘戦を得意としている

同部隊の白銀武と付き合っている

機体は近接格闘戦を重視しており、ビームサーベルは試製刀型ビームサーベルに変

更。盾も取り回しをを重視して小型に、肩装甲も稼働範囲を考慮して小型化した

火器はビームライフルとバルカンポッドのみ

コールサインはヴァルキリー2

綾峰慧 あやみねけい 階級少尉

寡黙だが気が強く、表情があまり変わらないために何を考えてるのか分かりづらい

身体能力が高く、格闘戦が得意

父親が陸軍の将軍だったが、その父親はユーラシア大陸に派遣された時に戦死

許嫁も居たが、同じようにユーラシア大陸で戦死となった

部隊長の榊千鶴とは犬猿の仲で、喧嘩が耐えない

機体は格闘戦を重視して、両腕に小型の盾を装備

ビームライフル下部にはビームサーベルを取り付けており、更にはビームナイフとビームサーベル、アーマーシユナイダーを装備している

機動性を上げる為に機体各部分に小型のスラスタを内蔵しており、それに合わせて脚部を長くして内蔵式プロペラントタンクを大きくした

コールサインはヴァルキリー3

鎧衣美琴 よろいみこと 階級少尉

小柄な体格に機敏な動作、更には気配の遮断が得意

父親の影響でサバイバル技術が磨かれて、大抵の場所でも生きられるようになってる

性格としては至ってマイペースで、人の話を聞かない場合が多い

サバイバルによって得た判断力の高さにより、火力支援が得意

機体はビームライフルと右肩に折り畳み式レールカノン。左肩にMLRSを装備している



盾は通常の物を装備

コールサインはヴァルキリー4

珠瀬<sup>たませ</sup>壬姫<sup>みぎ</sup> 階級少尉

小柄な体格に猫のような髪型に仕草、素早い動きと合わせて、マスコットのようないで武からタマと呼ばれている

実家が弓道を営んでおり、父親は外務省の大臣

実家が弓道場のためか、狙撃が得意で歴代訓練生ではトップの腕前を誇る

あがり症だったが、訓練で乗り越えられた

機体は柏木晴子と基本的に同一だが、柏木機とは違い空中戦はベースジャバーにしている  
コールサインはヴァルキリー5

白銀<sup>しろがね</sup>武<sup>たけ</sup> 階級少尉

陽気な性格だが、芯の通った少年

現在、初音島統合防衛軍で採用されている新OSの発案者

自由奔放な両親に育てられたためか、あまり物事に囚われない奇抜な発想の持ち主

周囲からは変態機動と呼ばれるほどの独創性の強い機動を行い、整備士泣かせで有名な耐G体質が高いために、高機動戦法を得意としている

機体は武の高機動戦法を活かすために、機体全体に低燃費高効率のスラスタを配置し、脚部を延長して内蔵式プロペラントタンクを大きくしている

武装は至ってノーマル

コールサインはヴァルキリー6

## 設定集 209編

織斑一夏おりむらいちか 階級少尉

特技は家事全般、優しい性格だがコレと決めたら譲らない頑固な面もある

いわゆる一級旗精製人間で、部隊所属の全少女が一夏に恋しているが朴念仁で、その度合いは最早、神の域

以前に篠之ノ剣術という道場に通っていたために、近接格闘戦を得意としているが反面的に射撃はお世辞にも上手いとは言えない

機体は近接格闘を重視して、盾は小型に、ビームサーベルは試製刀型に変更

射撃兵装はビームサブマシンガンにして、弾幕形成を主眼にしている

コールサインはストラトスー

篠之しののののののほううき 階級少尉

長い黒髪をリボンでポニーテールにしている大和撫子と呼べる少女で、一夏とは幼なじみ

実家が剣術道場のために剣術が得意で、身体能力もそこそこ高い

一夏に恋しているが、気の強い性格が仇となつてなかなか素直になれないし、一夏が鈍感なためにアプローチしても気づいてももらえない

家事が得意で料理の腕は一夏も誉めるほどだが、たまに大ポカをやらかす

天才(災)と呼ばれる自由奔放な姉が居て、度々振り回されたからか、現在は何かあつたら容赦なく木刀や竹刀を振り下ろす(姉本人には大した効果無し)

機体構成は格闘戦に比重を置いていて、射撃兵装はビームライフルと肩に装備しているデュエルASと同型のシヴァ

ビームサーベルは試製刀型に変更しており、手首マルチラックにビームナイフ二本を内蔵している

盾は従来の大型タイプを採用している

コールサインはストラトス2

ファン・リンイン  
鳳鈴音 階級少尉

一夏と幼なじみだが、それは小学校からの付き合い

実家は中華料理屋を営んでおり、結構人気らしい

小柄な体格で胸が無いのを気にしているらしく、貧乳など言うとうと、手がつけれなくなるほど怒る

身体能力は非常に高く、切り込み隊長を自認している

一夏に恋しているが、箒と同じように気が強い性格が仇となつてなかなか素直になれないでいる

機体は彼女の反応速度に合わせて、レスポンスを二割増ししており、ビームサーベルとアーマーシユナイダーを装備

盾には、ビームナイフをクロウのように展開出来るようにしている

射撃兵装は両肩に装備しているビームガトリングのみ

コールサインはストラトス3

セシリア・オルコット 階級少尉

生まれも育ちも生粋のイギリスで、二年前のタイタン戦争で両親が死んでしまい、両親が残した遺産を守るためにメイドであり幼なじみのチエルシー・ブランケットの助言に従い初音島に来た

貴族のお嬢様のために、所々に上品な仕草が見受けられる

お嬢様育ち故か多少世間知らずに育ってしまい、時々とんでもない発言や行動をする  
こともある

訓練校に入隊したのは、一目惚れした一夏を追ってきたという不純な動機だが、EU

での訓練を活かして好成績を叩き出し、千冬の指導により狙撃能力を高めた

機体はそんな彼女の特性を活かすために、頭部には三眼式光学センサーを採用  
手首にビームサーベルを固定して、緊急時に展開出来るようになってい

盾は肩に固定している

コールサインはストラトス4

シャルロット・デュノア 階級少尉

フランスの軍需企業、デュノア社の娘

正確には副社長の愛人の娘

母親がタイタン戦争で亡くなってしまい、途方にくれていたら、父親の部下が迎えに  
来た

その後、父親のおかげで不自由無く暮らしていたが、社長の正妻がシャルロットの存  
在に気づきデュノア社の為に彼女を利用して男装させて初音島に送った

手先が器用で、万事をそつなくこなすタイプだが、時々とんでもない大ポカをやらか  
してしまう

一夏にバレたのもそんな所で、何時もは鍵を掛けてシャワーを浴びるのに、その時は  
鍵を掛け忘れてしまった

全てを知った一夏が姉の千冬に相談したら、義之を伝つてさくらが知り、さくらと義之、杉並の三人が結託してデユノア社に嘘の報告をして（父親は全て知つて、涙ながらに感謝してきた）シャルロットを本来の姿に戻らせた

現在は織斑家に同居している

機体は彼女の器用さを活かすために、マウントラッチを多めにしてあり、新しく連装式ショットガンを試作して、スラストは自動で出力調整がされるようにしてあり、まるで移動火薬庫とも呼べる機体に仕上がっている

盾は小型の盾を採用

コールサインはストラトス5

ラウラ・ボーディヴィツヒ 階級少尉

元E.U.ドイツ軍特殊部隊隊長の少佐だった少女

最先端の遺伝子工学によって誕生した試験管ベイビーで、戦闘技能全般が非常に高いレベルで纏まっている

左目の眼帯はナノマシン移植によって暴走を始めた目を封印するために装着

一般常識が欠如していて、一夏の布団に裸で潜り込む等々、とんでもない行動を起こし、副官だったクラリツサの間違った知識によつて一夏を嫁扱いするなど、周囲の人間

としては気苦労が絶えない

初音島に来た当初は憎しみや怒りによって行動していて、かなりギスギスしていたが、千冬の一言で一夏と戦い、一夏に負けてしまい、一夏の強さを知った

機体は中距離支援を中心にしており、両肩に折り畳み式レールカノンを装備、通常の盾の裏側にビームガトリングを取り付けており、ビームライフル下部にはビームサーベルを取り付けてある

脚部はホバーにしてあり、両肩のレールカノンを撃つ際には、腰部からロッドが伸びて機体を支える

空中戦はベースジャバーを使う

コールサインはストラトス6

さらしきかんざし  
更織簪 階級少尉

初音島に古くから存在する名家の娘で、万能な姉が居る

その実家は世界規模で有名で、実態は対暗部用暗部という特殊な家である

気弱な性格で、以前は姉に対して劣等感を感じていて距離を取っていたが、一夏の働きによって和解した

機械に対する造詣が強く、メンテナンス等も出来るし、プログラミングも出来る



掛けている眼鏡は伊達で、小型のディスプレイであり、コードで繋がればMSのデータも見れる特注品

子供向けのアニメが好きで、特に好きなのは勧善懲悪物

視野が広いために火力支援を得意としている

機体は両肩にMLRSを装備しており、腰部にビームガトリング、右手にビームライフルを装備している

ビームサーベルは盾に取り付けてあり、緊急時に展開出来る

バックパックはガンナーパックを採用してあるが、神機や涼宮機の物より大きくしてある

脚部のホバーと肩部追加スラストで強引に推力を強化してある

空中戦はベースジャバーを採用

コールサインはストラトス7

神崎直哉かみざき なおや 階級少尉

この隊では一番年上の18歳

一夏や箒とは幼なじみで、頼りになる兄貴分だった

が、10年前に家族が殺されて自身は誘拐されて行方不明になってしまった

その後、8年間行方知れずだったが、タイタン戦争の折にユーラシア大陸に派遣された千冬が保護し初音島に帰ってきた

が、見た目は大きく変わっていて、黒かった髪は白くなり、左目には眼帯、黒かった目は赤くなっていて、自我が崩壊しかけていた

それを千冬と一夏が一年掛けて治し、千冬の計らいによって現在はシャルロットと同じように織斑家に住んでいる

身体能力や知識が非常に高く、特に耐G能力が人並み外れて高い

機体は高機動重視で、その機動力は他のパイロットが乗ったら命の保障が出来ない程に強化されていて、それに合わせて脚部が延長され内蔵式プロペラントタンクが大型化されている

武装は至ってノーマルで、ビームライフルとビームサーベル、バルカンポッドのみ  
ストライカーパックは強襲か空中戦用を使うが、スラスターのリミッターが解除してある

コールサインはストラトス8

## 設定集 210編

クラリツサ・ハルフォーフ 階級少尉

元E.U.ドイツ軍特殊部隊副隊長で、部隊では最年長の二十〇歳（なぜか銃創）

タイタン戦争初期から生き残っており、隊内では一番の実戦経験者

ラウラと同じように左目に眼帯をしているが、別に暴走はしておらず、最早部隊全体でのトレードマークとなっている

経験から裏打ちされている判断力の高さからくる支援は的確で、遊撃を担当している初音島に来た当初、復讐者となっていたラウラに心を痛めていたが、今は一夏に感謝している

ドイツに居た頃から日本の少女漫画や同人誌等々を読んでいて、かなりのオタクとなっていて、そこから来る間違った知識をラウラに教えている張本人

最近の楽しみは、年相応に恋するラウラの応援と恥ずかしがっているラウラを見ること（鼻血付き）

機体構成はほとんどノーマルだが、頭部のアンテナを大型化してリーダー範囲と通信範囲を大きくしてある

グ  
武装はビームライフルとビームサーベル、そして右肩に装着してあるビームガトリン

コールサインはアストレア1

エルトリンデ・アーシユベルグ 階級少尉

元EUDイツ軍特殊部隊の隊員

隊内では一番年下だが、真面目な性格で風紀委員的立場を担っていて、暴走しがちなクラリツサを宥めることたしなもあつた

近接格闘が得意で、マトモに相手出来るのはラウラとクラリツサの二人だけだった

可愛い物を集めるのが趣味で、部屋中にぬいぐるみが置いてある（他の隊員には内緒にしている）

最近では、修史に師事して格闘技を習っているらしい

機体構成は肩部にスラスターを配置しており、それを用いて意表を突いた機動を行う  
両腕に小型の盾を装備しており、更にはビームナイフを装着してクロー状に展開出来るようになっている

武装はビームサーベルとビームナイフ、ビームサブマシンガンを装備

コールサインはアストレア2

エルシア・ハーヴェンス 階級少尉

好奇心旺盛で、クラリツサに毒された人物第一号↑はい、ここ重要

クラリツサに進められて少女漫画や同人誌を読み、その影響でクラリツサをお姉様と呼ぶようになった

中距離火力制圧を得意としており、適格に撃ち込む地点を割り出せる

機体は両肩にMLRSを搭載し、バックパックに火力支援パックを装備する

脚部はホバー式にして、走破能力を高めている

それに合わせてリーダーも強化してあり、広い範囲を見渡せるようになってい

コールサインはアストレア3

レテイシア・ライゼンバツハ 階級少尉

生真面目な性格で予想外の事態になると、慌ててしまうが、判断力は高い

部隊内では、レテイの愛称で呼ばれている

趣味としては編み物が好きだが、あまり上手くない

機動砲撃戦を得意としており、一対多を得意とする

機体は両手にビームライフルを装備しており、銃身下部にはビームサーベルを装着し

て相手に接近されたさいに展開する

両肩にビームガトリングを装着し、バックパックはガンナーパックを採用、盾は肩に固定してある

脚部のスラスタを強化しており、跳躍しながら砲撃をするなどの行動も可能  
空中戦はベースジャバーを使用する

コールサインはアストレア4

クリステイアーネ・ホーエンフェット 階級少尉

優しい性格で周囲への気配りも出来る人物で、隊内唯一の良心

クリスの愛称で呼ばれている

その気配りからくるのか、視野が広く遠距離支援を得意としている

どうやら恋人が居るようで、結構な頻度で文通している

機体構成は頭部のアンテナが大型化されており、レーダー範囲を強化

左肩からサブアームで盾を保持して、遠距離支援の支障を来さないようにしている

主武装は複合型スナイパーライフルとビームサーベル

バックパックは遠距離支援を採用

空中戦はベースジャバーを使用

コールサインはアストレア5

マルギツテ・エーベルハイト 階級少尉

冷静沈着な人物で判断能力が高く、狙撃が得意

普段は無口だが、音楽に関してはうるさい

自室のクローゼットには可愛らしい服が大量に収納されており、それを着て歩くのが密かな楽しみ

機体構成は頭部に三眼式光学センサーを搭載し、盾は左肩に固定しており、盾裏にはビームガトリングが装着されてある

複合式スナイパーライフルの銃身下部にビームサーベルが装着されていて、スナイパーライフルを用いての槍術として扱う

コールサインはアストレア6

ライラ・フリードリヒ 階級少尉

有名な軍人家系の出身者で、母親は幼い頃に病気で他界

男兄弟ばかりの中で育ったために、若干男口調で喋るのが特徴

家族がそうなのだからと、家族の制止を振り切って軍に入隊。元々の素質からか、メ

キメキと頭角を表した

家事が得意で、特に洋菓子作りが好き

遊撃を担当している

機体構成はクラリツサと同じように、ほとんどノーマルに近い

唯一の違いはスラストターが強化されて、それに合わせて脚部が延長され内蔵式プロペラントタンクが大型化したくらい

武装はビームサーベルとビームライフル、バルカンポッドのみ

コールサインはアストレア7



## 会談

JEU艦隊保護戦闘から一週間後

義之は統合防衛軍本部の廊下を、麻耶と歩いていた

歩いている理由は、今から数十分前に、純一の秘書官である伊隅やよいに呼ばれたからである

何でも、JEU艦隊のトップ陣が礼を述べたいと言ってきたらしい

当初、純一は別に構わないと言っていたが、度重なる嘆願に折れたらしい

そして、義之と麻耶はドアの前に着くとノックをして

「朝倉元帥。ワルキューレ隊隊長の桜内大佐です」

「同じく、副官の沢井少佐です」

『入れ』

二人が名乗ると、中から入るように促された

二人はドアを開けて入ると、閉めてから

「失礼します！」

敬礼した

中には純一を含めて、十数人の男女が居た

「皆さん……彼が、ワルキューレ隊隊長の桜内義之です」

と純一が紹介すると、男女達はざわめいた

「彼がかの守護神か……」

「若いな……」

等々がほとんどである

そして、義之と麻耶は純一に示されたソファーに座ると

「改めまして、自分が初音島統合防衛軍特務部隊隊長の桜内義之大佐です」

「その副官の沢井麻耶少佐です」

と頭を下げながら、自己紹介した

すると、最初に正面中央に座っていた男が

「私は日本帝国征夷大將軍の斑鳩古城だ。あの時は助けてもらい、心より感謝する」

と言いながら、頭を下げた

「いえ、我々は当然のことをしたままでです」

「ですので、頭を上げてください」

義之と麻耶が立て続けに言うとうと、斑鳩は頭を上げた

「しかし、貴官らの活躍により民と部下が助かったのは事実でな」

そう言ったのは、斑鳩の隣に座っている禿頭に左額から顎まで裂傷跡がある初老の男性だった

如何にも、歴戦の武人という雰囲気醸している

「失礼ですが、あなたは？」

と義之が聞くと、男性は後頭部をペシリと叩き

「これは失礼した。私は帝国近衛軍大将の紅蓮是唯だ」

と言うと、手を出した

「ああ……貴方が有名な紅蓮大将でしたか。噂は聞いてますよ」

義之は握手しながら、そう返した

それを聞いた紅蓮は顎髭を撫でながら、好々爺然と

「ふむ、恐らくだが……私が変わり者といった所かな？」

と言うと、義之は首を左右に振り

「まさか、あなたが人徳者であると聞いております」

「それは、嬉しいことだ！」

義之の言葉を聞き、紅蓮はカッカッカと笑った

すると、紅蓮とは反対側に座っていた黒髪に右こめかみから顎あたりまで裂傷が走っ

ている男性が

「次は私ですな。私は帝国陸軍技術廠の巖谷榮二准将です」

「巖谷……もしや、帝国軍名戦闘機、《太刀風》たちかぜ開発者の巖谷さんですか？」

岩谷の名前を聞いた義之がそう問いかけると、岩谷は意外そうに

「おや……私のご存知だったか」

と言うと、義之は微笑んで

「当たり前ですよ。軍関係であたのことを知らないのは、よほどのバカか新人くらいです」

と言った

すると、岩谷は苦笑して

「なるほど……それは確かにな」

と呟いた

その呟きを終わりと取ったのか、次に動いたのは浅黒い肌が印象的な男性だった

「私の名前はヴィルフリート・アイヒベルガー。階級は大佐だ」

と、男が端的に名乗ると、義之は数瞬黙考してから

「ああ……貴方がEU七英雄の一人。黒狼王か」

と納得した様子で頷いた

EU七英雄

それは、先のタイタン戦争の時に活躍した七人のパイロットである  
その七人はそれぞれ、色を冠した二つ名を与えられている

そして義之は、隣に居る白金色の髪を三つ編みにした美女を見ると  
「ということは、あなたが白き后狼ですか？」

と問い掛けた

問い掛けられた女性は一瞬驚くが、すぐに柔らかな笑みを浮かべて

「ええ、その通りです。私はジークリンデ・ファーレンホルスト。階級は少佐です」  
と答えた

「噂はかねがね……そして、あなたが赤き音速の薔薇の……」

「ゲルトルート・ララーシュタインである。階級は少佐である」

義之が二人の背後の立っている男性に視線を向けると、男性は自慢気に髭をいじりながら名乗った

余談だが、彼ら三人はEUDドイツ軍の第44MS大隊の隊長格であり、第44MS大隊は貴族で固められている

その三人に対して、義之と麻耶は改めて頭を下げると、視線を青年に向けて

「そして、あなたは青き一角獣のウエルキン・ギウンター少佐ですね？」

と問い掛けた

問い掛けられた青年、ウエルキン・ギウンターは一瞬驚くが、すぐに持ち直して「その通りです。よくご存知ですね」

と問い掛けた

すると、義之は微笑んで

「まず、あなたのお父上であるベルゲン・ギウンター将軍が有名ですし、貴方自身も七英雄なんですから」

と答えた

「そうでしたね」

「それで……ベルゲン・ギウンター将軍は……」

義之が問い掛けると、ウエルキンは苦い顔をして首を左右に振って

「父は僕たちを逃がすために、殿となって……」

最後まで言わなかったが、義之は察して悲しそうにして

「そうですか……お悔やみ申し上げます」

と頭を下げた

ベルゲン・ギウンター将軍

彼の名前は、軍の教科書に必ずと言っていいほど乗っている

彼はタイタン戦争の時、MSが発表される前に唯一と言っていいほどに戦線を長期間

に渡り維持してきた名将である

彼の活躍が無ければ、EUはより多く、民間に被害を出していただろうと言われているほどだ

そして、義之が更に視線を動かすと、そこには一際小柄な少女が居た

「君が白き薔薇のベルナデット・リビエール少佐であつてゐるかな？」

義之が問いかけると、少女は鷹揚に頷いて

「ええ、間違いないわ。よろしく、英雄さん」

と言つて、握手した

なお、余談ではあるが、彼女の本名はもつと長いが、彼女が長つたらしいと言つて、軍には今の名前で登録してある

更に言えば、彼女の家系はかつて、フランス革命で平民側に着いた貴族の末裔である  
その影響からか、彼女の家の家訓は『力無き者を守るための剣となり、盾となれ』である

そして、彼女はその家訓を守り軍に入隊

そして見事に、七英雄と呼ばれるまでに至つたのである

### 閑話休題

そして、義之が最後に視線を向けた先には、形こそEU軍共通だが、色が黒く、右胸

に7、1、13という数字が当てられた軍服を着た三人が居た

「貴方達のお名前は？」

「自分はJEU軍第422部隊隊長の7です」

そう名乗ったのは、シヨートカットで切りそろえられた濃紺の髪が特徴の男だった

義之は彼がナンバーで名乗ったことで、その部隊の正体を知った

（懲罰部隊か……）

彼が率いる部隊は、軍規違反や問題を起こした者、挙げ句の果てには犯罪者などで構

成されている部隊なのだ

ゆえに、本名を名乗らずにナンバーで名乗ったのだ

だが、義之はそんな彼を見つめると

「自分は名を聞きました。ナンバーを聞いたわけでは、ありません」

と告げた

すると、男は迷う素振りを見せた

その時だった

「彼らに、名乗る資格など無いんですよ。英雄殿」

という、第三者の声が割り込んできた

義之が声のした方向に目を向けると、そこに居たのは短く切りそろえられた金髪が特



徴の二十代後半くらいの男だった

「あなたは？」

義之が問いかけると、男は恭しく頭を下げながら

「これは失礼しました。私はEUIギリス海軍のアービノス・セレスティア准将です」

と名乗った

（セレスティア……確か、イギリスの名門貴族だったな……）

義之は頭の中から必要な情報を引き出すと、アービノスを睨み

「准将殿、私は彼らの名前を聞いたんです。それなのに、ナンバーで名乗るといふのは、いささか失礼ではないですか？」

と義之が問いかけると、アービノスはやれやれと言った様子で首を振り

「彼らは我々JEU軍の恥曝しです。そう言った彼らが、こうした場に来るのもおこがましいというのに、あまつさえ、名乗るなど言語道断です」

と言った

義之はそんなアービノスの目に、ある感情を見いだした

（侮蔑か……なるほど、彼は貴族主義者でなおかつ、権威主義者か）

義之がそう思っていると、アービノスは再び口を開き

「今からでも遅くはありません。彼らを退出させて、我々で」

とそこまで言った、そのタイミングで

「そこまでしておけ、提督殿」

斑鳩古城が、アービノスを睨みながら地を這うような声を出した

「斑鳩殿……なんですか？」

アービノスが問いかけると、斑鳩は静かに、しかし強く

「彼らは初音島に来るまで、危険を省みず幾度となく獅子奮迅の活躍してくれた。彼らの活躍が無ければ、より多くの民が犠牲になっていたかもしれん」

「そうかもしれませんが……」

斑鳩の話聞いて、アービノスは口ごもった

そこに、斑鳩は更に続けて

「それと、懲罰部隊に行くというのならば、我々もそうだ……祖国を失い、従って付いてきてくれた民に不便と犠牲を強いてしまい、今もこうして初音島に迷惑を掛けて、生き恥を晒している」

「斑鳩殿……」

斑鳩の話聞いて、アービノスは神妙な表情になった

「それに、今や我々は流浪の身……私は今を以て、懲罰部隊の枷を外したいと思う……皆はどうか？」

斑鳩が問いかけると、主だった人物達は肯定するように頷いた

斑鳩はそれを確認すると、視線を三人に向けて

「そういうわけだ。名乗って構わない」

と告げた

それを聞いた7と名乗った男は頷くと、左右の二人に視線を向けてから

「わかりました……では、改めて……自分はJEU軍第422部隊ネームレス隊長のクルト・アーヴィング大尉です」

と名乗り、続いて右側に座っていた赤と銀が入り混じった髪の女が

「自分はリエラ・マルセリス少尉です」

と名乗り、最後に黒髪をポニーテールにした小柄な女が

「……イムカ少尉です」

と名乗った

「よろしく願います」

義之が名乗った三人と握手すると、それまで黙っていた純一が手を叩いて

「これで、お互いの自己紹介は終わったな……それでは、これより貴方方のこれからのことを話していこう」

と言うと、JEUの面々は頷いた

JEUの面々が領いたのを確認すると、純一は現在のJEU軍と民間人の立場から、これからのことを話した

そこから互いに必要なことを調整して、それを書面化

そこに純一と斑鳩の名前を署名すると、今回の話し合いは終わったのだった

## 教導任務依頼と新たな出会い その1

6月初頭

義之は統合軍本部の純一の執務室に呼ばれたために、向かつていた

そして、到着したのでノックすると

『入れ』

と促されたので、義之と麻耶はドアを開けて入った

そして二人は入ると、敬礼しながら

「特務部隊隊長、桜内義之大佐並びに、副官の沢井麻耶少佐、出頭しました！」

と名乗った

「うむ、よく来たな。お前ら」

二人が名乗ると、机に座っている純一が鷹揚に頷いた

二人は純一の近くに寄ると、近くに居た女性秘書官

伊隅やよいに軽く頭を下げた

彼女は義之達の部隊副隊長の伊隅みちるの姉で、純一の秘書官である

やよいは軽く微笑みながら、頷いた

そして、義之達は純一に視線を戻すと

「して、今日呼んだ理由はなんでしようか？」

と、純一に問い掛けた

すると、純一は頷いてからややよいに視線を向けた

ややよいは二人に近付くと

「これを」

と、茶色い封筒を手渡した

義之は受け取ると、封筒の封を解きながら

「拝見します」

と言つて、中から書類を取り出して目を通した

すると、義之は目を細めて

「御剣財閥への教導任務……ですか？」

と、首を傾げた

「ああ。大佐、去年末に国際会議で決定された内容を覚えているか？」

純一がそう問い掛けると、義之達は頷き

「ええ。もちろん覚えてます」

今から半年ほど前、各国の代表が映像会議で決めたのは

《警備会社のMS保有の許可》である

これにはワケがあり、今から一年半ほど前に遡る

タイタン戦争が終結してから、約三カ月後から、海賊が出没するようになったのだ

当初はまだ重火器で武装して、改造したモーターボートや漁船に乗って、輸送船を襲撃するという、まだ可愛げがあるレベルだった

だがある日から、突如としてMSを使つて襲撃してくる海賊が現れ始めたのだ

MSはかなり高額のために、本来だったら海賊程度が保有できるわけがないのだが、現に使用していた

これには輸送船を警護していた警備会社も太刀打ちできず、被害が拡大していった

これまで警備会社は、護衛艦や戦闘機などで海賊を撃退していたが、通常兵器では適わないのは明白である

これを各国政府も重く見て、話し合いの場を設けた

そして、警備会社にMSの保有を許可したのである

「しかし、なぜ、自分達が？」

「うむ、それなんだがな……」

義之からの問い掛けに、純一が答えようとしたら

「それに関しては、私がご説明します」

新たな女性の声が聞こえ、義之と麻耶は振り返った

部屋の入り口近くに設置してある応接ソファーには、赤を基調としたメイド服を着た女性が居た

その女性を見た義之と麻耶は、内心で驚愕していた

確かに、気が緩んでいたのは否めない

だが、応接ソファーの近くを通り過ぎたというのに、まったく気づかなかつた

「あなたは？」

警戒を緩めずに義之が問い掛けると、女性は恭しく頭を下げながら

「申し遅れました。私は、御剣財閥会長秘書を勤めています、月詠真那つくよみまなと申します」

と名乗った

その名前を聞いた義之は、気配を感じなかつたのを納得した

御剣財閥の秘書官を勤める月詠一族は、忍者の末裔と杉並の情報にあつたからだ

故に、こうして居るだけでも、隙がないのがわかる

御剣財閥

世界規模で手広く事業を行っている財閥で、衣類から果てはコロニーの建造まで行っており、後ろ暗い噂などは義之は聞いたことがなかつた

「これは失礼しました。自分は初音島統合防衛軍特務部隊隊長の桜内義之大佐です。こ



ちらは、副官の沢井麻耶少佐」

「よろしくお願ひします」

義之は月詠に挨拶しながら、月詠と名刺交換をした

そして、義之と麻耶。そして純一の三人は月詠と対面する形でソファーに座った

すると、やよいが義之達の前にコーヒーと日本茶を置いた

そして義之は、コーヒーを一口含むと姿勢を正して

「それでは、聞かせてもらつていいですか？ なぜ、そちらはMS部隊の教導を我々に？」

と問い掛けた

すると、月詠は神妙な面持ちで

「はい……我々、御剣財閥の警備部門、御剣セキュリティサービスは、半年前の国際会議の決定を受けて、MS部隊を編成し、訓練を開始しました。ですが、警備部門にはMSに詳しい人物は居らず、シミュレーションによる訓練のみで、あまり連携なども出来ておりません」

とそこまで言うのと、真剣な様子で

「そこで、教官殿と話し合い、世界で初めてMSを開発した初音島の方に教えてもらうことにしました」

と語った

「なるほど、得心しました。それで、自分なわけですね？」

頷いた義之がそう返すと、月詠は

「はい……ここ初音島で最強のMSパイロットと言えば、守護神たる桜内様ですから」と答えた

それを聞いた義之は、数秒間黙考すると

「わかりました。その教導任務、引き受けましょう」

と快諾した

「ありがとうございます。それと、厚かましいかもしれませんが、MSも融通してもらいませんか？」

月詠は感謝しながら頭を下げると、そう言ってきた

「どういうことですか？」

麻耶が問い掛けると、月詠は恥ずかしそうに

「お恥ずかしながら、我々が保有しているMSは前大戦時に大破か中破したMSをレストアしたものでして、これからのことを考えると、心許なく、機種もバラバラなので統一化しておきたいのです」

と語った

それを聞いた義之は、視線を純一に向けて

「元帥、現在解体待ちのアストレイは何機ありますか？」

と問い掛けた

問い掛けられた純一は、視線をやよいに向けた

すると、やよいは頷いてから携帯端末を取り出して操作して

「現在、解体待ちは24機です」

と答えた

それを聞いた純一が視線を向けると、月詠は

「充分でございませぬ。価格に関しましては、そちらの言い値で構いません」

と答えた

そこからはとんとん拍子に話しは進み、ワルキューレ隊からは四人のパイロットが出

向することになった

場所が変わって、市街地

月月火水木金金と言われる軍にも、月一だが、休暇はある

そして、日曜日この日に稟は休みだった

その休日に稟は、二人の幼なじみの少女達と街を歩いていた

稟としては、生活必需品や本などを買いにきたのだ

だが気づけば、二人の少女達

楓と桜と共に、買い物になっていた

「なあ、いいのか？ 自分達の買い物優先していいんだぞ？」

自分の買い物に付き合ってくれている二人に対して、稟は申し訳なさからそう言った  
すると二人は、微笑みながら

「いいのー！」

「稟くんと一緒に居るだけで、充分に楽しいですから」

と答えた

その答えを聞いて、稟は顔を両手で覆いたかったが荷物を持つるので変わりに、顔を横に逸らした

すると、《シルキー》というゲームセンターの前に一人の少女が居た

(あの子……まだあそこに居る)

実を言うと、稟は買い物に行く時にこの道を通った時にもその少女を見ていた

その時は、さして気にしていなかったが、二時間以上同じ場所に居ると話とは別である

軽く周囲を見ても、親らしき人物は見当たらない

そのタイミングで、楓と桜が稟が足を止めたことに気づいて声を掛けてきてから、稟

の視線を追ってその少女に気づいた

「あの子は……」

「確か、来る時もあそこに居たよね？」

楓と桜がそう言うのと、稟は意を決して近づいた

「どうしたの？」

稟は圧迫感を与えないようにと配慮して、少女と目線を合わせて声を掛けた  
すると、少女は一回稟に視線を向けて

「ネコ……」

と言いながら、UFOキャッチャーの筐体を指差した

「ネコ？」

稟は首を傾げながら、少女が指差したUFOキャッチャーの筐体を見た

その中には、様々な模様のネコのぬいぐるみが入れてあった

「これに興味があるのか？」

と稟が問い掛けると、少女はコクリと頷いた

それによく見れば、少女の腕の中にはポロポロのネコのぬいぐるみがあった

「ふむ……少し待ってな」

稟はそう言うのと、立ち上がってから財布を取り出して、中から小銭を出してUFO

キャッチャーの筐体に入れた

すると、ピローンと軽い音がしてから音楽が鳴りだした

稟はそれを軽く聞き流しながら、様々な角度から筐体の中を観察した

「これで……どうだ!」

そして、ある一カ所でクレーンを止めると、降下のボタンを押した

すると、クレーンがゆっくりと降りていきアームが開き、ぬいぐるみの山に突っ込んだ

数秒後、クレーンが上がると、二体のネコのぬいぐるみが持ち上がった

しかも、そのままクレーンは動き、アームが開いて見事にゲットした

「ラッキー。二体もゲットしたぜ」

稟はそう言いながら、取り出し口から二体のぬいぐるみを取り出して

「ほい」

と、少女に差し出した

「……いいの?」

少女はチョココンと首を傾げながら、問い掛けた

「ああ、そのために取ったんだしな」

と稟が言うのと、少女はぬいぐるみを受け取って

「ありがとう」

と微笑んだ

すると、そのタイミングで

「稟くん、昔からUFOキャッチャー得意だったもんね」

「流石です」

桜と楓がそう言ってきた

すると、少女が

「……りん？」

と聞いてきた

「ん？ ああ、俺の名前は土見稟だけど……」

稟は最初なんのことがわからなかったが、少女が名前を聞いてきたとわかり名乗った

すると、少女は数秒間稟を見つめてから突如として抱きついた

「はあ!？」

稟が驚愕していると、少女が

「……りん……会いたかった」

と呟いた

それを見ていた桜と楓は

「あはは、稟君って昔から小さい子供に懐かれてたよね」

「懐かしいです」

と呑気に語った

「その小さい子供ってのは、主に昔の二人だったよね!？」

稟が突っ込み気味にそう言うが、抱きついてきた少女はと言うと

「……りん……会いたかった」

まだ言っていた

その状況に、稟は深々と溜め息を吐いた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数十分後、稟達は自宅近辺まで戻った

しかも、少女は稟の服の裾を掴んだままである

それを見た稟は

(服が伸びそう……)

ということを気にしていた

そして気づけば、魔王邸の門前では魔王とネリネの二人が仲良く掃除をしていた

それを見た稟は、これ幸いにと

「ネリネー、魔王のおじさん……」



と、二人に声を掛けた

ちなみに、魔王をおじさんと呼んでいるのは以前に嘆願されたからである  
『せめて、おじさんって呼んで！』

と

これは、神王も同じである

### 閑話休題

稟が呼ぶと、二人は視線を稟達に向けて

「稟様、こんにちは」

「やあ、稟くん。いい天気だねえ」

と挨拶してきた

稟がそんな二人に軽く挨拶を返すと、二人は首を傾げて

「稟様、どうしました？」

「なんだか、疲れてるみたいだが？」

と問い掛けてきた

その問い掛けに、稟は苦笑いを浮かべながら

「疲れたというか、憑かれたと言わべきか……」

と言いながら、視線を動かした

二人はそんな稟の様子に首を傾げると、稟の視線を追って、目を見開いた

「リムちゃん!？」

「プリムラ!？」

二人が驚いた直後、新たな人物が転移してきて

「魔王陛下、申し訳ありません！ 新人がミスして、プリムラ様を見失いました……つて、ここに居た!？」

シオンは頭を下げながら謝罪していると、少女ことプリムラに気づいて驚いていた  
「……どういう状況だよ」

三人の様子を見て、稟は首を傾げた

## 教導任務依頼と新たな出会い その2

「……人工生命体？」

魔王からの説明を聞いて、稟は眉をひそませた

「そう。ある計画のために作り出した人工生命体。それがこのプリムラさ」

魔王はそう言いながら、稟の隣に座ってネコのぬいぐるみを抱いている少女

プリムラを指し示した

稟は視界の端で、プリムラを見た

プリムラは無表情でぬいぐるみを抱きしめている

「……なぜ、人工生命体を……プリムラを誕生させたんですか？」

「おつと……いくら稟ちゃんの頼みとは言え、詳しくは教えられないね。ただ言えるのは、その計画には途轍もなく強大な魔力を必要としたのさ」

魔王は稟からの問いかけにそう返すと、一拍置いて

「私と神ちゃんね、その計画のためにプリムラを含めて三体の実験体を用意した」

「三体……ですか」

稟が呟くように言うと、魔王は頷いて

「そう……最初の一号は魔力を強化したのさ……だが、強化した魔力に着いていけず、一号体は暴走を起こして消えた」

と悲しそうに言った

それを聞いた稟は黙祷のつもりなのだろう、数秒間目を閉じてから

「それで、二号体は？」

と問い掛けた

「二号体のコンセプトは、元々強い魔力を持っている者の複製……つまりは、クローン  
さ」

それを聞いた稟は、目を見開いて驚いた

「しかし、クローンは国際法で……」

「確かに、禁止されているね……しかし、我々には手段は選べなかったのさ」

稟の言いかけた言葉を引き継いで、魔王はそう言った

その時、ネリネが

「二号体……リコちゃんの複製元は……私です」

と言った

「ネリネが？」

稟はネリネの言葉に驚くが、すぐに納得した

軍の資料で、ネリネは現代において当代随一の魔力を有しているというのを見たからだ

リコちゃんというのは、恐らくは愛称だろうと稟は予想してから

「……その子も、失敗だったんですね？」

と問い掛けた

稟からの問いかけに、魔王は頷いて

「その通りだよ……クローンだったからか、それとも強化したからか……寿命が短かったんだ」

と答えた

そして、魔王はプリムラに視線を向けて

「そして、三号体は創造というコンセプトで造られた」

と語り始めた

「創造と口にするのは簡単だが、これは難航した……失敗に次ぐ失敗を繰り返し、天文学的な確立とほんの少しの偶然により産まれたのが、プリムラさ」

魔王の言葉を聞いて、稟は隣に座っているプリムラを見つめた

プリムラは楓が出したプリンを食べており、その姿はまるで猫を彷彿させた

その時、魔王が

「おっと、カップが空だね……稟ちゃん。紅茶のお代わりはいるかい？」

と、稟に問い掛けた

問い掛けられた稟は

「あ、どうも……つて、なんで魔王のおじさんが給仕をしてるんですか!？」

魔王の言動に驚いて、声を張り上げた

「ふっ……安心したまえ、稟ちゃん。私の特技は家事でね……こういうことは大得意……いや！ 大好きなのだよ!!」

と魔王は笑いながら、一瞬にしてエプロンを装着していた

しかも、何気に似合っている

そのことに稟と桜が絶句していると、楓が苦笑いを浮かべながら

「稟くん、早く慣れたほうがいいですよ？ そうしないと、気疲れを起こしますから……」

と、実感がたつぷりと籠もった声で言った

（これまで俺が培ってきた魔王像が、一気に崩壊したなあ……いや、そもそも、人間が間違った魔王像を持っていたんじゃないか？ ……確かに、楓の言うとおりに慣れたほうが良さそうだ……そうしないと、フリーズを起こす……よし、一旦、頭の中にあつた魔

王像は全て捨てよう）

と、そこまで一気に考えると、大きく深呼吸して

「それで、プリムラが人間界に来た理由はなんですか？」

と、問い掛けた

「そういえば、そうだね。プリムラ？」

と魔王が問い掛けると、プリムラは視線を魔王に向けて

「……リンに、会いに来た……」

と呟くように、その理由を語り出した

「……リコリスお姉ちゃんが……リンのことをよく話してたから……」

「リムちゃん……」

プリムラの言葉を聞いて、ネリネは悲しそうにプリムラを見つめた

「ふむ……」

プリムラの言葉を聞いた魔王は、顎に手を当てて考えだした

そして、少しすると

「よしー」

と意気込んでから、視線を稟に向けて

「稟ちゃん、急で申し訳ないんだが。プリムラを預かってくれないかい？」

と言った

「はい!？」

まさかの話に、稟は驚愕した

「実はね、プリムラはまだ魔力の制御が出来ないのさ……その理由は、感情が未発達だからなんだ。言っておくけど、プリムラの魔力が暴走したら、一つの都市くらいは簡単に地図から消えるよ?」

「なるほど……つて! まるで、歩く核弾頭じゃないですか!？」

「放射能を撒き散らさない分、地球にクリーンな兵器だね♪」

魔王の説明を聞いて稟が突っ込むと、魔王は朗らかにそう言った

それを聞いた稟は、深々とため息を吐いた後

「俺はこの家に厄介になっただけですので、楓がいいのならば……」

と言うと、楓に視線を向けた

すると楓は、笑みを浮かべながら

「稟くんが良いのでしたら、私は構わないですよ?」

と言った

それは稟の予想通りの言葉だったので、稟はため息を吐いてからプリムラを受け入れると魔王に言った

その頃、魔界にある神魔界合同近衛部隊の隊舎では……



「この、バカスバル！ あんたのせいで、あたしまで始末書を書くはめになったじゃないの!!」

「あ痛っ！ ティア、ごめんってばあ！」

と騒いでいるのは、この部隊の新人の二人である

怒鳴ったのは、オレンジ色の髪をツインテールにした少女で名前はティアナ・ランスターで、怒鳴られたのは、青い髪をショートカットにした少女だ

名前はスバル・ナカジマという

プリムラが脱走したのは、スバルが食欲に負けて持ち場を離れてしまったからであり、ティアナはスバルの相方なので、連帯責任でスバルと同じように始末書を書いている

そして、それを監督しているのは茶髪をサイドボニーにしている少女だった

「はいはい。文句を言わないでチャキチャキ書く！」

彼女の名前は高町なのは

この世界では珍しい人族の一人であり、近衛部隊の隊長の一人である

「はい！」

なのはに言われて、ティアナとスバルの二人はペンの速度を上げたのだった

場所は初音島に戻り、ワルキューレ隊隊舎

そのある会議室に、主だった隊長陣が集まっていた

議題はもちろん、御剣財閥への教導任務である

「というわけで……近々、御剣財閥への出張教導任務がある」

と義之が言うのと、麻耶が

「向こうの希望は、義之を含めてパイロットは四人。整備士は最低でも15人というこ  
とです」

と、補足説明をした

「あ、じゃあ、パイロットの一人はあたしが立候補するわ」

そう言つて、いの一歩に手を上げたのは高坂まゆきだった

「わかりました。では、伊隅中佐は留守番ということで、構いませんか?」

と、麻耶がみちるに問い掛けた

すると、みちるは頷いて

「高坂中佐が行くのであれば、私が残るしかありませんから」

と言った

その言葉を聞いて、義之は頷き

「それじゃあ、二人目はまゆき先輩に決定つと……後の二人は新人から選ぶか……誰に  
しようかな……」

と唸りだした

すると、千鶴が手を上げて

「なんでしたら、白銀を連れて行つてはどうでしょうか。白銀の腕はかなりのモノですが……」

と意見を出した

「あいつはダメだ」

が、義之はそれを拒否すると、端末を取り出して

「この間、楠木軍曹に泣きつかれてな……」

と言いながら、端末の画面を見せた

そこに出ているのは、どうやらMSの部品の損耗具合らしい

各人の名前の上に損耗量を示すグラフが表示されていて、白銀武はダントツでトップだった

「あいつは、MSの負担を考えなさすぎだ。いくらワルキューレ隊が優遇されてるとはいえ、このままじゃ部品が底を突く」

「申し訳ありませんでした……」

義之の言葉を聞いて、千鶴は深々と頭を下げた

「それに、出張ということを考えると……持つていける部品にも限りがあるから、尚更

だ」

と言うと、端末を見て

「お? ……織斑少尉が適任かな?」

と呟いた

「お、俺ですか!?!」

一夏はまさか名前を出されるとは思っておらず、慌てた様子で問い掛けた

「ああ。織斑少尉は部品の損耗量が新人の中では、ダントツに少ないからな。こういう

出張では助かる」

一夏からの問いかけに義之はそう返すと、視線を一夏に向けて

「どうかかな? 一緒に来てもらえるかな?」

と問い掛けた

問い掛けられた一夏は、数秒間黙考すると

「わかりました。その任務、引き受けます」

と宣言した

それを聞いた義之は、満足そうに頷くと

「そうなるのだ、もう一人は織斑少尉の部隊から選ぶべきだな」

と言うと、顎に手を当てて唸りだした

すると、一夏が手を上げて

「それでしたら、シャルはどうでしょうか？」

と、シャルロットを推薦した

「デュノア少尉か……確かに、織斑少尉が前衛だから、遊撃か中距離が最適だな。わかった。四人目はデュノア少尉とする。異論は無いな？」

義之が隊長陣にそう問い掛けると、隊長陣は無言で頷いた

その後、整備士は麻耶と虚が選ぶことになり、護衛のための歩兵部隊は五反田弾准尉率いる一個小隊に決まった

余談ではあるが、五反田弾は一夏の友人で、一夏は弾がワルキューレ隊に所属していたことに驚いていた

しかも、整備士の虚技術大尉と付き合っていると聞いて驚愕の声を上げていた

出張の出発まで、あと三日である

## いぎ、教導任務へ

三日後、義之達の姿は軍港にあつた

「つーわけで、我々はこれから御剣財閥への教導任務に向かう」

「「「はい！」」」

義之の言葉を聞いて、出張に向かうメンバーは姿勢を正した

「お前ら、忘れ物はないか？ 取ってくるなら、今のうちにソッコーで取ってこいよー」

と義之が言うと、シャルロットがおずおずと手を上げて

「あの、大佐……」

と、声を出した

「どうした、デユノア少尉。忘れ物か？」

と義之が問い掛けると、シャルロットは首を振って

「いえ、そうではなく……ボク達が乗る艦はどれでしょうか？」

シャルロットの疑問も、もつともだろう

ワルキューレ隊旗艦のアークエンジェルに乗るのかと思えば、アークエンジェルの姿は見当たらない

「あー、うむ……我々が乗る艦は……アレだ」

義之はそう言いながら、人差し指である艦を示した

「「「……………え!?!」」」

その艦を見て、その場のほとんどのメンバーが驚愕した

数時間後、場所初音島から離れた海上

「まさか、富士に乗れるなんてな……」

「流石に、予想外だったよ……」

一夏とシャルロットは、手すりに身を預けながら海面を見て呟いた

そう、教導任務に向かうメンバーが乗ったのは、日本帝国が誇る超弩級空母の富士だった

しかも、富士を護衛しているのはJEUの艦隊である

富士級超弩級空母一番艦《富士》

この富士は、日本帝国が発した八八艦隊計画に基づき建造された超弩級空母である  
トラマリン構造を採用し、莫大な積載量と三基のカタパルトを利用した迅速なMSの  
展開に重点を置いた巨大空母である

しかも、内部にはかなりの規模の機械設備を誇っており、部品状態からのMS建造や

簡易的な改修まで行えるのだ

驚くべきは、MSの最大収容数である

甲板を含めると、最大で四十機を搭載可能という話だった

なお、護衛艦隊の旗艦は同じく日本帝国の最強を冠する戦艦

大和級一番艦《大和》だ

一夏とシャルロットが大和を見た第一印象は、移動要塞である

なお、この大和も八八艦隊計画に基づき建造された戦艦である

大和級はこの大和の他に、二番艦《武蔵》と三番艦《信濃》が建造されている

そして、この大和級のコンセプトは最強の火力と防御力である

異常とも呼べる対空レーザー機銃の数

艦の側面や艦尾に設置されているミサイルランチャー

二連装式45センチ副砲が前後合わせて、三門

そして、三連装式55センチビーム砲《カグツチ》が二門もある

装甲に至っては、対ビームコーティングが施された複合装甲が三層形成されている

これぞまさしく、最強の戦艦と言えるだろう

そして、この大和は砲撃戦だけではなく、MS運用能力も有している

積載MSの数は一個中隊規模



戦艦としては、十分だろう

その戦艦、大和を含めてJEUの連合艦隊が護衛に就いている

もはや、VIP待遇である

なお、一夏達は知らなかったがこの護衛艦隊はJEU側が願い出たのである

義之達としては、自前でなんとかしようとしたのだが、JEUからの強い嘆願に折れた形である

そして、二人がぼーつと海を見ていたら

「お？ こんな所に居たのか」

と、義之の声が聞こえた

二人が声のした方向に顔を向けると、制服を着崩した義之が居た

「大佐！」

「お疲れ様です！」

義之に気づいた一夏とシャルロットが敬礼すると、義之は手をパタパタと振って「敬礼はいい。それよりも、お前らは荷物はちゃんと置いてきたか？」

と二人に問い掛けた

すると、二人は若干顔を赤らめて

「は、はい……置いてきましたが……」

「俺達が同じ部屋というのは……大丈夫なんですか？」

と、義之に問い掛けた

そう、この空母に乗るにあたり、泊まるペアを発表したのだ

義之、麻耶ペア

虚、弾ペア↑付き合ってるので問題ない

一夏、シャルロットペア↑義之のイタズラ心

本音、さやか

以下略

という具合である

二人の問い掛けを聞いて、義之はカツカツカと笑って

「どうせ、一つ屋根の下で同居してんだ。今更、大して変わらないだろう？」

と言ったが、二人としては大違いである

確かに、二人は同じ家に住んでいるが、他に直哉や一夏の姉である千冬も住んでいる

しかも、部屋も完全に別なので、かなりの緊張感である

二人がどう反論すべきか口ごもっている、義之が手を叩いて

「と、そうだった。お前らを呼びに来たんだった」

と言った

「呼びに来た？」

と一夏が首を傾げると、義之は笑みを浮かべて

「そう。既に、艦長殿には話をつけた。水着に着替えて、甲板に集合だ」と言つた

そう言われた二人は、キョトンとした

「まあ、ちよつとした暇つぶしだよ」

義之はそう言つと、背後に居た麻耶と共に二人の前から去つた

それから、十数分後

富士の甲板の一角には、水着を着た男女達が集まつていた

「とういわけで、今からバレーボール大会を行う！」

「「「おとおお！」」」

義之の言葉を聞いて、初音島のメンバーは喝采を上げた

なお、よく見れば、初音島メンバーの他には、休憩中なのか帝国軍の顔ぶれも混じつて  
ている

「このバレーボール大会で優勝した者には、豪華景品を授与する！　なお、今のところの  
参加者およびオッズはこれだ！」

と義之が指差した先には、麻耶が書いたのだろう

几帳面な字で参加者とオツズが書かれていた

義之、麻耶ペア 1・2倍

一夏、シャルロットペア 1・8倍

弾、虚ペア 2・5倍

本音、さやかペア 5・9倍

まゆき、雪菜ペア 1・5倍

以下略

となっている

そして、ホワイトボードの下には《途中参加大歓迎》の文字

「それでは、第一試合！ 開始!!」

義之のその言葉を合図に、バレーボール大会は始まった

その後、試合はトントントン拍子に進んでいった

もう、残ってるペアも数組となった時だった

「随分と楽しそうだな」

という、男性の声が聞こえた

その声に聞き覚えがあり、義之は振り向いた

振り向いた先に居たのは、共にメガネを掛けた男女だった

「あなた方は確か、帝都守備連隊の……」

と義之が言うのと、男性のほうが

「そういえば、名乗っていなかったな。私は帝国陸軍帝都守備連隊の狭霧直哉少佐だ」

「その副官の駒木沙世子大尉です」

男性、狭霧直哉が敬礼しながら名乗ると、女性、駒木沙世子も続けて名乗った

二人は総じて痩身だったが、義之は二人の体つきを見て、パイロットだとわかった

「帝都守備連隊の少佐殿ですか。まさしく、トップガンですね。失礼。自分は初音島統

合防衛軍特務部隊隊長の桜内義之大佐です」

「同じく、副官の沢井麻耶少佐です」

義之と麻耶が名乗ると、狭霧直哉は少し驚いた様子で

「君がかの英雄か……若いな」

と言った

それを聞いた義之は、軽く肩をすくめて

「よく言われますよ」

と言うと、狭霧直哉に視線を向けて

「そういえば、狭霧少佐殿はなぜこちらに？」

と問い掛けた

すると、狭霧直哉はバレーボールのコートに視線を向けて

「なに。私達も少しばかり、暇を持て余していてな。参加したいと思ったのだが、大丈夫かな？」

と首を傾げた

「ええ、大丈夫ですよ。こちらへ」

義之は快諾すると、二人を案内した

そして、試合はすぐさま始まった

「それでは、飛び入り参加者対、大佐の試合を始めます！」

なお、今回から実況は早々に敗れた楠木さやかが行っている

「では、飛び入り参加者を紹介いたします！ 帝都守備連隊の狭霧直哉少佐殿と駒木沙世子大尉殿です！ 帝国軍のトップガンの腕はどれほどなのでしょうか！」

とさやかが興奮した様子で語っていると、横に座っている本音が

「これは、面白い勝負になりそうですねー」

と何時も通りの、のほほんとした様子で語った

ちなみに、本音の水着（？）は某電気ネズミの着ぐるみである

なぜか、尻尾や耳が動いている

「そして、そのお二人の対戦相手は、我等が英雄！ 桜内義之大佐とその副官、沢井麻耶

少佐です！」

さやかが義之達を紹介すると、周囲で喝采が起きた

「それでは、注目の対戦！ スタートです！」

さやかの鳴らしたゴングを合図に、ボールが宙を飛んだ

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数十分後

試合が始まった当初は周囲からヤジや応援があつたが、今はシンと静まり返つていた  
 「な、なんとという白熱した試合でしょうか……今現在、点数は10対10で両方ともマツチポイントです！」

このバレーボール大会は、11点先取で勝ちということになっている

それに対して、両方ともマツチポイントという白熱した試合展開

ヤジも止むというものだ

「それでは、真正正銘の最終ラウンド、スタート!!」

さやかがそう言った直後、ボールを持っていた麻耶がボールを高く上げてから鋭いスパイクを放った

麻耶が放ったボールは文字通り、弾丸のように相手のコートに突き刺さりそうになつたが、駒木が素早く反応して右手を突きながら、左手で宙に上げた

それを、狭霧直哉が渾身の力を込めてお返しとばかりにスパイクを打った。狭霧直哉が打ったボールは、義之たちのコートのだ真ん中に突き刺さるかと思いきや、それを義之が右手で打ち上げた。

それを、ジャンプした麻耶が見事なスパイクとして相手のコートに打った。しかし、このボールは狭霧直哉がレシーブして空中に浮いた。浮いたボールを、駒木がコート目掛けて打った。

その直後

義之がネット間近でジャンプして、ブロックした。

その結果、ボールは狭霧直哉の手前でコートに落ちた。

「試合終了！ 激戦を制したのは、桜内大佐と沢井少佐ペアです！」

さやかが勝者を宣言すると、ドツと歓声が起きた。

義之と麻耶は、汗をタオルで拭きながら二人に近づいて

「いい試合でした」

と言いながら、右手を出した。

「こちらも、なかなか楽しませてもらったよ」

狭霧直哉もそう返しながら、同じように右手を出して義之と握手した。

なお、この少し後に義之と麻耶は大会から棄権



以降は観戦に回っていた

そして、大会の結果はというと

優勝したのは、決勝戦にてまゆき、雪奈ペアを大どんでん返しにて下した、一夏、シャルロットペアだった

「それでは、優勝した織斑少尉とテュノア少尉に対して、賞品を与える」

義之はそう言うと、一つの封筒を差し出した

「開けてみ」

義之に促されて、一夏は封筒を開けた

中に入っていたのは二枚のチケットだった

「さくらパーク豪華プレミアムチケット……えっ!？」

シャルロットはそのチケットを見て、目を見開いて固まった

「さくらパークって、あのさくらパークですか!？」メガフロート丸々一つを使った、超巨大

大テーマパークの!？」

さくらパーク

それは、初音島に住んでいる者ならば誰もが知っている巨大テーマパークである

このさくらパークのコンセプトは、一日では遊び尽くせないである

それを体現したかのように、膨大な敷地を活かした遊具が施設されている

「おうよ。そのさくらパークだ」

義之が肯定すると、シャルロットは更に

「しかも、このチケットは、めったにお目にかかれないあの幻のプレミアムチケット!」

と驚愕していた

すると、一夏が無頓着な様子で

「なあ、シャル。このチケットって、そんなに凄いのか?」

と聞くと、シャルロットは目をクワツと見開きながら一夏の肩を掴んで

「凄いなんでもものじゃないよ! これが有るだけで、全アトラクションが優先的に乗れるし、更にはさくらパーク内にあるホテルにもタダで泊まれるんだよ!」

「わかった、わかったから。落ち着け!」

シャルロットは力説しながら、一夏を左右にガクガクと揺らした

揺らされてる一夏としては堪ったものではなく、シャルロットに落ち着くように促し

た

「はっ! ぐ、ごめんね一夏。つい、興奮しちゃって……」

促されて落ち着いたらしく、シャルロットは謝りながら手を離れた

義之はそんな二人を見ながら、微笑んで

「まあ、いつ使うかはご自由に」

と言うと、あてがわれた自室へと戻った

こうして、単発イベントは終了した

そして、一同は御剣財閥の有する島へと向かう

## 出張教導任務 邂逅

義之達が初音島から出航して、四日後

ある海域に存在する小島

その島は、御剣財閥が所有している島の一つだった

この島は主に、警備関係を纏めた島だった

その島のとある道を、二人の少年が歩いていた

一人は垢抜けた顔に、短く切りそろえられた茶髪が特徴の男子

名前は吉井明久よしいあきひさ

もう一人は、中性的な顔と体格で、まるで女の子に見える男子

名前は木下秀吉きのしたひでよしである

ちなみにこの島は、かなり赤道に近いために一年中暑い

そのため、二人が着ているのは白無地のTシャツとポケットが多めの長ズボン。そして、首に汗拭き用なのだろうタオルくらいだった

「今日も暑いね……」

「そうじゃのう……」

明久の眩きに秀吉は同意すると、二人揃ってタオルで汗を拭いた  
その時、明久があつ、と声を上げて

「そういえば、確か今日だったよね……MSの教官が来るの」  
と、秀吉に問い掛けた

問い掛けられた秀吉は、ズボンのポケットから携帯端末を取り出して確認すると  
「うむ。何の問題もなければ、確かに今日じゃのう」

と肯定した

「はあ……どんな人が来たのかなあ……」

秀吉の言葉を聞いて、明久が期待の声を出した

その時

「……明久、秀吉」

「うわあっ!?!」

二人の背後には、いつの間にか一人の男子が居た

「つて、ムツツリーニか……」

「脅かすでない!」

二人の背後に居たのは、少し目つきの悪い三白眼が特徴の男子

ムツツリーニこと、つちやこうた土屋康太だった

ちなみに、ムッツリーニというあだ名はむつつりスケベから来ている

「で、どうしたの、ムッツリーニ？」

「なにがあつたのじゃ？」

二人が問い掛けると、康太は懐からデジタルカメラを取り出して

「……十数分前に、艦隊が到着したんだがな」

と言いながら操作すると、画面を二人に見せた

そこに写っているのは、数十人の男女

「この軍服は……初音島じゃな」

「誰が来たのかな」

秀吉の言葉を聞いて、明久は期待の籠もった声を上げた

その声を聞いて、康太は再び操作してから画面を見せた

「……これがズームした写真」

画面には、三人の教官である西村が若い男と握手していた

「この人が代表なのかな」

明久が呟くように言うのと、康太は三度操作しながら

「……次、驚くぞ」

と言ってから、画面を見せた

その写真は更にズームしていて、西村と握手していた男の顔が拡大されていたが「っ!? こつちを見てるじゃと!?!」

「ムツツリー二に気づいたの!?!」

二人の驚愕の声を聞いて、康太は頷き

「……思わず、逃げてきた」

と悔しそうに、呟いた

その時、三人の耳に空気を切り裂くジェット音が聞こえてきた

「この音は……戦闘機かのう?」

「だね……でも、あんまり聞いたことない音だなあ……」

秀吉の言葉に明久が同意すると、康太がある方向を指差して

「……アレだな」

と呟いた

康太が指差した方向を見ると、そこには白、オレンジ、黒の配色にリバースデルタの主翼が特徴的な戦闘機が飛んでいた

「見たことない機体だなあ……二人は?」

明久がそう問い掛けると、二人は首を振って

「知らないのじゃ」

「……見たことない」

と言った

その直後、その戦闘機が急降下したと思っただけ急上昇した

その瞬間、三人は驚いた

「変形した!?!」

「可変式MSじゃと!?!」

「……初めて見た!」

三人が見ていた矢先に、その機体は戦闘機形態からMS形態に変形したので

そのMSはしばらくの間、三人の上空を旋回していた

すると、康太が何かに気づいてデジタルカメラを向けてシャッターを連続で切った

その数秒後、旋回していたMSはある方向へと飛んでいった

「あの方向は!?!」

「MS課の方角じゃ!」

明久と秀吉の二人が驚いていると、デジタルカメラの画面を見ていた康太が目を見開いて

「……やはりか!」

と驚愕の声を上げた



「どうしたの、ムッツリーニ」

「何が写っていたのじゃ？」

二人が問い掛けると、康太は興奮した様子で

「……この機体の左主翼を見ろ！」

と言いながら、デジタルカメラの画面を見せた

「このマークは!?」

「初音島じゃと!?!」

デジタルカメラの画面には、先ほどの可変式MSが写っており、その左主翼には初音島を示すマークがペイントされていた

「ということは、あの可変式MSは初音島の新型機!?!」

「MS課の方へ向かってみるのじゃ!」

「……それが手っ取り早い」

そう言いあうと、三人は自分達の本拠地の方角に走り出した

数分後、MS課のあるハンガー

「ふむ。MVF-111・ムラサメ、なかなかいい機体じゃないか」

若い男、初音島切つてのエース

義之はヘルメットを脱ぎながら、そう評価した

その直後、義之の耳が引っ張られて

「義之、わたし、あんな機動の許可はしてないんだけど？」

と麻耶が苦言を呈した

「痛ててっ!? 悪かった、悪かったって! つい、興が乗っちゃったんよ!」

と、義之が悲鳴を上げた時

「あっ! さっきの可変式MSだ!」

「む、確かにそうじゃな」

「……間違いない」

という三人の声が聞こえて、義之達は振り返った

そこには、目をキラキラと輝かせた明久を筆頭に秀吉と康太が居た

すると、義之の耳から手を放した麻耶が

「君達、ここはMS課のハンガーよ? 関係者以外は立ち入り禁止になってるわ」

と念の為に、警告した

すると、三人は姿勢を正してから敬礼して

「失礼しました。僕達はMS課所属のパイロット候補生です。僕の名前は吉井明久で

す」

「ワシは木下秀吉じゃ」

「……土屋康太です」

と、三人は名乗った

その数瞬後、明久が一步前に出て

「それで、先ほどの可変式MSのパイロットはあなたですか？」

と義之に問い掛けた

すると、義之は頷き

「ああ、確かに俺だ。だが、俺の専用機は……アッチだ」

と義之は、壁際に並んで立っている機体の一機を示した

その機体を見て、明久達は目を見開いた

「ストライクじゃと!？」

「……まさか、初音島の守護神!？」

「あなたが、桜内義之大佐なんですか!？」

と驚愕しながら、義之に視線を向けた

「おう。俺が桜内義之だ」

義之が頷くと、明久はどこからか色紙を取り出して

「僕、あなたのファンなんです！ サインください！」

と、義之に差し出した

それを義之は受け取ると

「えつと、吉井明久君でいいんだよね？」

サラサラと書きながら、問い掛けた

「は、はい！ そうです！」

「ホイホイ……ほれ」

義之は書き終わったらしく、色紙とサインペンを明久に返した

明久は感動した様子で、色紙を見つめて

「ありがとうございます！ 宝物にします！」

と頭を下げた

「そんな大層な物でもないと思うけど……まあ、いいか」

明久の言葉を聞いて、義之はそう呟いた

すると、明久が

「教官があなた達ということは、僕達の機体はアストレイですか？」

と問い掛けた

「ああ。M1アストレイだ。ついでに、シユライクも有るぞ」

明久からの問い掛けに、義之がそう答えると秀吉が

「助かったのじゃ。ワシらの使っていた機体は、ボロボロで心許なかったからのう……」

と言った

「そういえば、君達の機体は前タイタン戦争の時に大破もしくは、中破した機体の再生《レストア》機だったな？」

秀吉の言葉を聞いた義之がそう問い掛けると、康太が

「……明久はリーオー。秀吉は烈空。俺はエアリーズです」

と、眩くように答えた

「なるほど、全て操縦性は高い機体だな。流星は、御剣財閥だ」

康太の言葉を聞いて、義之が感心していると麻耶が

「あなた達用のアストレイは、隣のハンガーにあるわ。見てきたらどうかしら？」

と提案した

「はい！ そうさせてもらいます！」

「感謝するのじゃ」

「……そうさせてもらいます」

麻耶の提案を聞いて、三人が踵を返そうとした時

「ああ、そうだ。土屋康太くん」

と、義之が康太を呼んだ

「……なんででしょうか？」

康太が首を傾げると、義之は微笑みながら

「君だろ。さつき、俺を撮影してたの」

と康太にとっては、衝撃的なことを告げた

「……っ！ ……なぜ、気付いたの？」

康太は一瞬驚くと、義之に問い掛けた

すると義之は、クツクツクと笑って

「なに。君の存在感の無さが決定的かな。それに、懐に入れてるのはカメラだろ？」

義之はそう言いながら、康太の胸元を指差した

その位置はまさしく、康太がデジタルカメラを仕舞った位置だった

義之の指摘を聞いて、康太は軽く両手を上げて

「……降参です。確かに、撮影しました」

と白状した

「うむ。素直でよろしい」

義之は鷹揚に頷きながら、康太の肩をポンポンと軽く叩いた

「まあ、一応釘を刺しとくけどね。その写真は、あまり配布とかしないように。わかった

？」

義之が凄みを効かせながら言うと、康太は押し潰されそうな感覚に襲われながら

「……約束します。絶対に、配布や販売はしません」  
と宣言した

「よろしい。それじゃあ、機体を見ておいで」

義之は康太の宣言を聞くと、新しい機体を見てくるように促した  
すると、三人は姿勢を正して

「はい、そうさせていただくのじゃ！」

「ありがとうございます！」

「……また後ほど」

と言いながら、新しい機体を見に行った

その姿を義之たちは、微笑ましく見送った

## 再会と困惑

義之達が出張教導任務に向かつて、早くも二週間が経過した

その間、初音島は平和そのものだった

そんな折、ワルキューレ隊所属の神崎直哉はある任務に就いていた

「本日、あなたがたのご案内をすることになりました。神崎直哉少尉です。よろしくお願います」

直哉は敬礼しながら、目の前に居る人物達にそう告げた

直哉の目の前に居るのは、残存JEU艦隊所属の人達だ

「おう。俺はヴァレリア・ジアコーザ少尉だ。VGって呼んでくれ」

そう名乗ったのは、かなりノリのいい男性だった

VGと言うのは、あだ名らしい

「あたしは、タリサ・マナンダル。階級は少尉だ。よろしくな!」

そう名乗ったのは、褐色の肌が特徴の小柄な少女だった

「わたしは、ステラ・ブレーメル少尉よ。よろしくね」

そう言いながら握手を求めてきたのは、金髪グラマーな美女だった



「俺は、ユウヤ・ブリッジス少尉だ。好きに呼んでくれ」

そして四人目は、短く切りそろえられた黒髪が特徴の男性だった

そして、最後に

「……私の名前は……篁唯衣。階級は中尉だ……」

途切れ途切れに名乗ったのは、腰辺りまで伸ばした黒髪が特徴の女性だった

先に名乗った四人は、唯衣の態度を不審に思い首を傾げた

四人の知る限り、唯衣はハキハキとした女性で、そのような態度はついぞ見たことがない

だが、直哉は気にしていないようだ

「はい、承りました。では、皆さんをご案内しますので、付いて来てください」

そうやって歩いた先には、一台の車が止まっていた

その車に近寄ると、直哉はポケットから小さい黒い物を取り出して、スイッチを押した

すると、車のエンジンが始動してスライドドアが自動で開いた

「皆さん、乗ってください。目的地まで、自分が運転しますので」

直哉が搭乗を促すと、後ろにV Gからユウヤまでが乗り、助手席に唯衣が乗った

なお、全員の服装は軍服ではなく私服である

それは、これから向かう先が市街地なのを考慮した結果である

市街地を軍服を着た軍人達が歩いたら、そこにいる民間人は何事かと身構えてしまうだろう

それを防止するために、事前に通達されていたのだ

直哉は全員が乗ったのを確認すると、運転席に座ってからドアを閉めた

そして、シートベルトを装着すると

「それでは、出発しますね」

直哉はそう言うのと、静かに車を発進させた

「ほー。お前さん、運転が上手だな」

直哉の運転技量に、VGが感心したように呟いた

「ありがとうございます。教官の指導の賜物です」

VGの言葉に直哉がそう返すと、今度はタリサが

「なあ、お前も軍人なんだよな？ 所属はどこなんだ？」

と問い掛けた

すると、直哉は困った様子で

「申し訳ありません。詳しくは、機密の関係上で教えることは出来ないんです。ですが、

自分はMSパイロットです」

と直哉が答えると、次にステラが

「あら、あなたもMSパイロットなのね。実は、私達全員もMSパイロットなのよ」と言うのと、直哉が少し驚いたように

「おや、それは偶然ですね。結構、腕が立つのでは?」

と問い掛けた

「まあ、そうだな。特に、お前の隣に座ってる中尉は強いぞ? なにせ、帝国近衛だ」

「ほう……帝国近衛ですか? 色はなんですか?」

直哉が問い掛けると、唯衣は一瞬口をつぐんで

「……山吹色。機体は龍閃だ」

淡々とした口調で告げた

「ほう……山吹色、しかも龍閃ですか。ということは、高機動型のF型ですね?」

「そうだが……よく知っているな?」

直哉の詳しい説明に、唯衣は問い掛けた

「一応、自分も軍人なんですね。世界各国が採用しているMSのデータは頭に入ってます」

直哉がそう言ったタイミングで、車は橋を渡り始めた

「しっかし、初音島は凄いやな……僅か五十年で、ここまで発展するなんてよ」

とVGが感心したように、眩くと

「特にこの十年で大きく発展しました。初音島は、魔界や神界の技術を積極的に取り入れてますので」

直哉はV Gにそう説明した

直哉のこの説明には、訳がある

初音島が魔界・神界の双方と同盟を結んでから、初音島は魔界・神界と技術交流会を積極的に行い、初音島は魔界・神界の技術を、魔界・神界は初音島の技術を積極的に採用した

その結果、初音島はメガフロートの採用に成功

魔界・神界はMSの採用に成功したのだ

まさしく、初音島と魔界・神界の二人三脚だ

そして、目的地に到着したのか車は止まり

「皆さん、着きましたよ」

直哉はそう言いながら、ドアを開けた

そこは、初音島でも一際大きいショッピングモールだった

「ここならば、大抵の物は揃います」

直哉がそう説明した直後

「おっ先ー！」

V Gが我先にと、シヨッピングモールに向けて駆け出した

「あ、ズリーぞ！ V G！ ほら、ユウヤも行くぞ！」

「待て、チョビ！ 引つ張るな！」

「あらあら……仕方ないわね」

そんなV Gの後を追い掛けて、タリサがユウヤの手を引きながら駆け出し、ステラはそんな三人の後を困ったように嘆息しながら追い掛けた

「おやおや……皆さん、元気ですね……しかし、篁中尉は行かないの？」

直哉は四人を見送ると、隣で俯くように立ち尽くしている唯衣に視線を向けた  
すると唯衣は、拳を握り締めて

「……いい加減……他人行儀はやめてくれ……直哉」

まるで、懇願するように呟いた

少しすると、直哉は微笑みを消して

「流石に、バレルか……やっぱり」

と言いながら、頭を掻いた

すると、唯衣は憤慨した様子で

「当たり前だ！ 10年も経ったから、成長しているのは予想していた。だが！ その髪と目の色はなんだ!? 眼帯の下から聞こえてくる駆動音はなんだ!? 答えろ、直哉

！」

と、直哉を怒鳴りつけた

すると直哉は、少し驚いた様子で

「驚いたな……コレの静音性は折り紙付きなんだがな……」

と呟くと、視線を上に向けて

「詳しくは言えないが……俺はもう、普通の人間ではなくなったのさ……」

直哉がそう言うのと、唯衣は唇を噛み締め

「……お前をそんな風にしたのは……この国なのか？」

と、直哉に問い掛けた

すると、直哉は首を振って

「いや……初音島の人たちは、むしろ俺を助けてくれて、受け入れてくれたよ」

と言うと、唯衣に顔を向けて

「俺をこんな風にしたのは……」

と、言おうとした時だった

「中尉！ なにしてんだ！ あいつら、ほっといたら高いモノばかり買っちゃまうぞ!!」

と、ユウヤが唯衣を呼んだ

唯衣はため息を吐くと、顔をユウヤの方に向けて

「今行く！ それと、階級で呼ぶな!!」

と言うと、一歩前に出て止まり

「今度、話してくれ……」

と言つてから、再び歩き出した

それを直哉は見送ると

「今度か……話すチャンスがあればいいのだが……」

と呟くと、唯衣の後を追いかけた

## 運命の出会い

義之達が教導任務に向かって、約三週間と少しが経過した

義之からの報告では、将来有望なパイロット達ばかりで指導に熱が入るとか特に、明久が良いらしい

### 閑話休題

そんなある日、市街地を彼、ユウヤ・ブリッジスが一人で歩いていた

「しまった……迷った……」

彼は申請して許可が降りたので、一人で街を散策していた

だが気づけば、知らない道に出ている

なんとか戻ろうと歩いたが、余計に道に迷ってしまった

「えっと、ここはどこだ？」

ユウヤは一人眩きながら、携帯端末に映っている地図に視線を向けた

「えっと……第五人工島の第七地区……」

ユウヤはそう言うと、頭を乱暴に掻いて

「目的地は第四人工島だから、えっと……」



と唸っていると、すぐ近くから

「あなたも迷子なの？」

と声を掛けられて、ユウヤは声のした方へと振り向いた

そこに居たのは、銀髪碧眼の少女だった

(今のは、この子か?)

ユウヤが内心で首を傾げていると、銀髪碧眼の少女が小首を傾げながら

「お兄さん？」

と聞いてきたので、ユウヤは慌てて

「あ、ああ……そうだな。確かに、迷子だ」

と答えた

そして、少し気恥ずかしそうに頬を掻いてから

「そういう君は？」

と、少女に問い掛けた

「私も迷子だけど、クリスカの居場所は分かるよ」

少女の答えに、ユウヤは首を傾げた

「クリスカ？」

「あ、クリスカって言うのはね、私のお姉さんみたいな人なの」

少女の言葉を聞いて、ユウヤは内心で

(ご)近所の人なのかな?)

と思いつながら

「そうか……俺はユウヤ・ブリッジス。君は？」

「私はイーニア。イーニア・シエスチナ！」

ユウヤが名乗ってから名前を聞くと、銀髪の少女

イーニアは元気に名乗った

「OK、イーニア。そのクリスカつて人はどこだ？」

ユウヤはもしかしたら、駅かバス停に行けるかとも思い、イーニアに問い掛けた

するとイーニアは、ユウヤの手を掴んでから

「こつち！ こつちだよ!!」

と言うと、駆け出した

「おお?」

ユウヤは引つ張られると思ってなかったのと、予想外の力強さに僅かにバランスを崩しかけた

「こつち！ こつちに居る！」

「わかった。わかったから、引つ張るなって」

ユウヤが抗議するが、イーニアは無視して引きながら曲がり角を右に左に走り続けた。そして数分後、広い道に出ると

「イーニア！ イーニア、どこ!?」

という、イーニアを呼ぶ声が聞こえた

声のした方を見ると、イーニアと似た銀髪に少し高めの身長が特徴の女性が居た

ユウヤは彼女がクリスカだろうと、当たりを付けた

すると、イーニアが空いている手を高々と掲げながら

「クリスカ!」

イーニアが名前を呼ぶと、銀髪の女性、クリスカが振り向いて

「イーニア!」

安堵した様子で走り出したが、少し手前で止まると身構えて

「お前は……」

とユウヤを睨んだ

どうやら、怪しまれてるらしいと踏んだユウヤは、軽く両手を上げると

「待ってくれ、怪しい者じゃない。俺の名前はユウヤ・ブリツジス。この子、イーニアと

一緒に迷子になってたんだ」

ユウヤが説明するが、クリスカは尚もユウヤを睨んでいる

すると、イーニアがクリスカの腰に抱きつき

「クリスカ。ユウヤは怪しくないよ！」

と訴えた

「イーニア……」

「ユウヤはね、私にお願いしただけなの！ クリスカの場所まで案内してって！」

イーニアが説明すると、クリスカは数回ほどイーニアとユウヤを交互に見た

そして、深々とため息をするとユウヤに視線を向けて

「どうやら、要らない勘ぐりをしてしまったようだな。すまない」

と、頭を下げた

「いや、この場合は仕方ないだろ。妹みたいな子に知らない男が居たらな」

ユウヤはそう言うと、イーニアに視線を向けて

「イーニア、もうはぐれるなよ？」

「うん！」

ユウヤの言葉に、イーニアは満面の笑みを浮かべて頷いた

「そういえば、名乗っていなかったな。私の名前はクリスカ・ビヤーチエノワだ」

「さつき名乗ったが、俺はユウヤ・ブリッジスだ」

二人は互いに名乗ると、握手をした

「おっと、そうだ。この近くにバス停か駅はあるか？」

ユウヤの問い掛けに、クリスカはある方向を指差して

「ああ……それならば、あちらにモノレールの駅があつたな」

と言つた

「おお、サンキュー！　じゃあな、イーニア、クリスカ！　また何処かで会おうぜ！」

ユウヤはクリスカにお礼を言うと、クリスカに教えられた方向に走り出した

「じゃあね、ユウヤ！」

「ああ、また会おう！」

イーニアとクリスカの二人はユウヤを見送ると、互いに手を繋いで歩き出した

この時、三人はまだ知らなかつた

次に会おうのが、戦場だということを……

## 馴れ初めと蠢く黒い思い

義之達が教導に来て、早一ヶ月が経った

今日は機体の一斉メンテナンスもあり、訓練は休みだった

そして、義之達はそれも相まって訓練生達と食事をしながら歓談していた

「へえー……それじゃあ、大佐と少佐は訓練生時代からの付き合いなんですね」

と言ったのは、義之達の正面で食べていた明久である

「そうよ。私が義之を含めた訓練生のまとめ役」

「で、俺はパイロット候補生だったんよ」

麻耶と義之が続けて言うと、明久と秀吉、優子の三人はへえーと声を漏らした

すると、麻耶が渋面を浮かべて

「ただ、あの頃は義之達に苦労させられたわ。義之、杉並、板橋の三人は問題児トリオだったから」

「いやあ、俺も青かった」

麻耶の眩きを聞いて、義之は笑いながらそう言った

「そうだったんですかあ……」

意外だなあ。といった様子で明久が頷いていると、優子が恐る恐ると手を上げて

「あの……お二人が付き合うようになったのは、いつ頃からなんですか？」

と問い掛けた

「ああ……初音島攻防戦の後だったな」

「ええ……出撃前に、終わったたら大事な話がある。って言われたのよね」

二人は懐かしいなあ、と呟いた

「そうなんですか……」

優子が頷いていると、義之が優子に視線を向けて

「君も、明久くんと付き合ってるから気になるか？」

と言うと、優子はむせた

「き、気づいてたんですか!？」

明久が驚きながら言ううと、義之はカッカッカと笑って

「そりゃね。あんだけ仲むつまじく一緒に居たら、わかるよ」

と言った

すると、明久と優子の二人は顔を真っ赤にした

そんな二人を見て、義之は微笑むと

「人が誰を好きになるかなんて、個人の自由だ。恥ずかしがる必要なんてないさ」

と言った

すると、麻耶が頷いて

「そうよ。あの時の訓練生部隊には、他に魅力的な子達が居たわ……だけど、義之は私を選んでもくれたの」

と嬉しそうに言った

「なるほどのう……」

二人の馴れ初めを聞いて、秀吉は腕組みしながら頷いた  
すると、明久が義之に対して

「それで、大佐は訓練生時代から凄かったですか？」

と問い掛けた

すると、麻耶が頷いて

「それは凄かったですわよ？ 訓練生の中で唯一、MSでの模擬戦で教官を倒したんだから」と答えた

「教官に勝ったんですか！」

「それは凄い！」

麻耶の話の聞いて、明久と優子の二人は驚いた

教官に勝つというのは、並大抵の技量では土台無理だからである



ちなみに、義之が勝った教官というのは、千冬である

誰もが勝てなかった千冬に、義之は紙一重とはいえ勝った時、誰もが驚愕し、そして喜んだ

千冬も最初は驚いていたが、機体から降りると義之を褒め称えた

義之は確かに、勘が鋭く反射能力も高かった

だが、千冬の予想外の速度で腕を上げていたのだ

実は、この模擬戦が理由で千冬は義之をストライクのパイロットに推したのだが、義之は知らない

「さて、歓談はここまでにしようか」

「え？ ……うわ、こんなに時間が経ってる!？」

義之の言葉を聞いて、時計を確認した明久は驚愕した

なにせ、食べ始めて一時間が過ぎていた

気づけば、ご飯も少しばかり冷たくなっている

「さて、作ってくれた人に申し訳ないから、急いで食べようか」

「はい」

義之の言葉に従って、明久達は食べるほうに集中した

そして食べ終わると、それぞれ自室へと引き上げた

この時、自室へ引き上げていった明久達を物影から見ている二つの人影があった  
ただ、その視線に含まれているのは怒りだけ

「吉井の奴……あんな女と一緒に居るなんて……、あれの準備は出来てる？」

一人が問い掛けると、もう一人は頷いて

「ええ…… ちゃん……後は、チャンスを待つだけです」

と答えた

問い掛けた人物は、その答えに満足げに頷いて

「後は、アレを使って勝てば……吉井だつて……」

「はい……私達を見てくれる筈です！」

二人はそう言うが、それが後に危機を招き寄せることに気付かなかつた

## 心の叫び

義之達が教導に向かい、1ヶ月と半が経過した

そしてこの日はたまたま、稟は必要な書類仕事が多く早く終わり、定時を少し過ぎた辺りで帰宅することが出来た

そして、一人歩いていると家の近くにある公園の前に通りかかった

その公園は、稟達が昔住んでいた旧光陽町にあった公園を再現したらしく、稟にとつては懐かしい公園だった

その公園に視線を向けると、なぜか同居人であるプリムラが居た

なお、最近プリムラは魔王の薦めもあり風見総合学園に通っている理由は、プリムラの感情発露を促すためである

プリムラは今まで、同年代と過ごした経験が少ないので、同年代が大勢居る学園に通わせて発露を促そうと画策したのだ

とはいえ、今のところその様子は無いのだが

閑話休題

公園でプリムラを見つけた稟は、思わず

「珍しいな……」

と呟いた

とはいえ、それは仕方ないことだろう

なにせ、プリムラは学校から帰るとほとんど家から出ようとしないので

とはいえ、自室に引きこもっているという訳ではなく、宿題をやったり、テレビを見たり、楓の家事を手伝っていたりするのだ

なお、家事に関して稟は全くと言っていいほど出来ない

つい最近、楓が珍しく風邪を引いてしまい、稟が代わりにやったのだが、結果は散々たる有り様だった

それにより、稟が得た教訓は

1、料理は化学の実験ではありません。キッチンとレシピの通りに作りましょう

2、洗濯をする時は下着はネットに入れて、色物などはキッチンと分けてからしまし  
う

という物だった

なお、稟の散々たる結果を見て、プリムラの

「稟って……不器用？」

という一言が、稟の心に深々と突き刺さったのは余談である

## 閑話休題その2

「プリムラ！ 何してるんだ？」

稟は公園に入ると、プリムラに声を掛けた  
すると、プリムラは稟に視線を向けて

「……リコお姉ちゃんを待ってるの……」

と言った

「リコお姉ちゃん？」

聞いたことのない名前を聞いて、稟は首を傾げた

すると、プリムラは持っていた猫のぬいぐるみを強く抱き締めて

「……ずっと待ってるのに、来てくれないの……」

と、悲しみを堪えるように呟いた

「そっか……」

稟はプリムラの目線の高さに合わせてしゃがむと、プリムラの頭を撫でながら  
「とりあえず、今は家に帰ろうぜ。もうすぐ、雨が降りそうだからな」

と言った

その証拠に、空は灰色の雲によって覆われている

「うん……」

プリムラは頷くと、稟が差し出した手を握った

その後、二人は揃って帰宅

楓が作ってくれた料理を食べながら、談笑した

それから約二時間後だった

稟が居間でテレビを見ていると、廊下からドタバタという音が聞こえてきた

「稟くん、大変です!」

稟が廊下に視線を向けると同時に、楓がドアを凄い勢いで開けて駆け込んできた

「どうした?」

稟が問い掛けると、楓は呼吸を整えながら

「リムちゃんか……リムちゃんが居ないんです!」

と言った

「なんだって?」

「お風呂が空いたので、リムちゃんに入ってもらおうと部屋に行っても、居ないんです

!」

稟が眉をひそめると、楓は矢継ぎ早に説明した

楓の説明を聞いて、稟も意識を集中したが、確かに、今家に居るのは二人だけのよう

だ

「靴も無いですし、どうしたら……」

楓がオロオロしていると、稟は楓の肩を掴んで

「落ち着け、楓。プリムラは俺が見つけるから、楓は魔王のおじさんを読んでくれ」と頼んだ

「わ、わかりました!」

稟の言葉を聞いて、楓は電話へと駆け寄った

それを確認した稟は、探すための道具を取りに行つた

それから数分後、楓と呼ばれて魔王が現れた

「やあやあ、稟ちゃん。そちらから呼んでくるとは、何があつたんだい?」

魔王がそう問い掛けると、稟は鋭い眼差しで

「率直に聞きます。リコお姉ちゃんっていうのは、誰なんですか?」

と問い掛けた

稟の問い掛けを聞いて、魔王は目を細めて

「その名前は、誰から聞いたんだい?」と問い掛けた

「プリムラから聞きました。ついでに、ずっと待つてるのに来てくれないと」

稟がそう言うと、魔王は溜め息混じり

「リコお姉ちゃんというのは、稟ちゃんに前に話した実験体の二番目だよ。正式な名前

はリコリスだ」

という魔王の説明を聞いて、稟は思い出した

確かに、プリムラが来た時にそんな説明を聞いたな。と

「以前、プリムラはリコリスに非常に懐いていたんだよ。そして、リコリスもプリムラを可愛がっていた」

魔王はそこで一旦区切り、若干俯いて

「しかし、クローンだったからか、リコリスは短命だったんだよ……」

と言った

クローンは元となった人をコピーする技術であり、これには致命的な欠点がある

それは、老化遺伝子《テロメア》が極端に短くなるのである

元となった人から遺伝子を得るのだが、その時点で育っている分短くなっており、そこから薬物や魔法などで一気に成長させると、更に短くなる

そのために、クローンというのは満足に生きられて約十数年と言われている

その限界がリコリスに訪れたのだろう

「そして、リコリスはネリネちゃんと一つになった」

「一つになった？」

魔王の説明を聞いて、稟は首を傾げた



「ネリネちゃんは今昔は病弱でね……ネリネちゃんを元気にするために、リコリスをネリネちゃんと融合させたのさ」

稟の言葉に、魔王は自虐的な笑みを浮かべながら語った

「……そのことを、プリムラは？」

「もちろん、知っているよ……ただ、信じてくれなかったんだ……」

魔王のその言葉を聞いて、稟はプリムラが欲しがっているものを確信した

「では、俺は探しに行きます」

稟がそう言いながら立ち上がると、魔王が

「稟ちゃん……プリムラをよろしく頼むよ……」

と言ってきた

その言葉に稟は無言で頷くと、稟は家から出た

傘は持っていない

軍で訓練を受けた稟にとっては、傘はもしもの時に邪魔になる

そして、稟はあの公園に向かった

なぜか、プリムラはそこに居るとい確信があった

そして、公園の前に到着して公園内を見ると、プリムラはあの時と同じ場所に居た

その姿は寂しくて、稟はゆっくりと近づき

「プリムラ」

なるべく優しく声を掛けた

まるで泣いてるように、呟いた

「待ってるのに、全然来てくれないの……」

「そうか……」

稟は頷くと、プリムラの前でしゃがんだ

「あのな、プリムラ。リコリスはな、もう死んだんだ……」

稟がそう言うのと、プリムラは首を振って

「そんなことない……リコお姉ちゃんは、きっと……」

と言った

「なあ、プリムラ……俺達じゃあ、ダメかな？」

稟のその言葉を聞いて、プリムラは軽く目を見開いた

「俺達じゃあ、リコリスの代わりにはなれないかもしれない……だけど、プリムラと一緒に居ることは出来る」

「一緒に……？」

稟の言葉をプリムラが反芻すると、稟は微笑みを浮かべながら

「ああ……プリムラが望むなら、ずっと一緒に居る」

と言った

すると、プリムラの目尻に涙が滲み出して

「リコお姉ちゃん……うあ……あああああ」

プリムラは大声で泣き出した

プリムラが求めていたのは、家族だったのだ

プリムラは実験によって産み出された存在で、真の家族と呼べるのは居なかった  
それに近かったのが、リコリスだったのだ

稟はそこに気づいたのだ

プリムラが泣いてる間、稟はプリムラを抱き締め続けた

そして十数分後、雨が止み、雲の隙間から柔らかい月の光が見えた

その頃になって、プリムラはようやく泣き止んだ

それを確認した稟は、手を差し伸べながら

「それじゃあ、家に帰ろうぜ……楓が心配してる」

と言った

プリムラはその手を握りながら、顔を赤くして

「稟……お兄ちゃんって、呼んでいい？」

と問い掛けた

プリムラの問い掛けと表情を見て、稟は数舜驚いたが

「ああ、良いよ……楓もお姉ちゃんって呼んでやれよ？ 喜ぶぜ？」

と言った

すると、プリムラは微笑みながら頷いた

プリムラの返事を確認すると、稟はプリムラと共に歩き出した

そんな二人を、雲の切れ間から見えている月の光が優しく照らした

## 驚愕の出会いと襲撃

義之達が教導任務に来て、もうすぐで期限の3ヶ月になろうとしていた  
そんなある日のこと

義之達は月詠さんに呼ばれ、とある会議室へと向かっていた

「しかし、話ってなんなんでしょうね？」

一夏の言葉に、義之は肩をすくめると

「さあねえ……まあ、重要な話だから呼んだんだらうけど……」

と言いながら、頭を掻いた

すると、少し先に目的の会議室が見えてきた

「ハイ、ね」

麻耶がそう言うと、義之は頷いてからドアをノックした

『はい』

「呼ばれた初音島統合防衛軍の者達です」

ドアの向こうから聞こえた月詠の言葉に対し、義之はそう言った

『お入りください』

「失礼します」

月詠に促されたので、義之を筆頭に麻耶達は入室した

そして、立っている月詠の隣に座っている少女を見て、一夏とシャルロットは驚きで目を見開いた

「冥夜?！」

「なんで?!!?！」

なにせそこには、初音島に居る筈の冥夜に瓜二つの少女が座っていたからだ

「お前ら、落ち着け……失礼しました」

義之は二人を諫めて謝罪するが、内心では驚いていた

それほどまでに、目の前に居る少女は冥夜に似ていた

すると、月詠が

「こちらにいらつしやるのは、御剣財閥代表の御剣悠陽様みつるぎゆうひです」

と紹介した

月詠が紹介すると、義之たちは姿勢を正して

「自分は初音島統合防衛軍特務部隊隊長を務めます、桜内義之大佐です」

「同じく、副官の沢井麻耶少佐です」

「MS部隊副隊長の高坂まゆき中佐です」

「MS部隊所属、織斑一夏少尉です」

「同じく、シャルロット・デュノア少尉です」

「歩兵部隊隊長の五反田弾准尉です」

敬礼しながら、全員名乗った

すると、少女ごと御剣悠陽は軽く頭を下げた

「皆さん、初めまして。私は御剣財閥代表の御剣悠陽です。此度は我々のご依頼を引き受けていただき、心から感謝します」

と言った

すると、視線を義之に向けて

「先ほど、冥夜と言いましたが……もしや冥夜は、初音島に居るのですか?」

と問い掛けてきた

義之は一瞬答えようか迷ったが、すぐに

「ええ、御剣少尉は自分の部隊に所属しております」

と答えた

義之の返答を聞いて、悠陽は呆れた様子で

「ある日、『修行に行っていく』という置手紙のみを残していなくなっただと思えば、まさか初音島の統合軍に入っていくとは……」

と首を振った

悠陽の言葉を聞いて、義之は頬が引きつった

(なんで御剣のお嬢様が居るのかと思ったら、まさか家出同然とは……)

選抜の際になぜ、御剣財閥のお嬢様が居るのか甚だ疑問だったが、これで納得した  
そして、義之は気を取り直して

「して、今回自分たちを呼んだ理由はなんでしようか？」

と、悠陽に問い掛けた

すると、悠陽は真剣な表情を浮かべて

「明日の訓練風景を是非とも、見たいのです」

と告げた

義之が驚いていると、悠陽は続けて

「訓練生達がどのような訓練をして、死地へと赴くのかを知りたいのです」

と告げた

悠陽の様子から、義之は悠陽が本気だと察した

「つきましては、明日の訓練時におきまして、歩兵部隊の皆さんに護衛をお願いしたいのです」

月詠の言葉を聞いて、義之は頷いた



「わかりました。五反田准尉、いいかな？」

「わかりました」

義之が問いかけると、弾は頷いた

「ありがとうございます」

弾が肯定したことに、月詠は頭を下げた

その後、弾率いる部隊が悠陽の居るフロアを護衛することに決まり、この日は解散した

翌日

「訓練生諸君、本日の訓練。急な話だが、御剣悠陽様が視察することになった」

義之がそう言うと、フロアに居た訓練生たちはざわめいた

「静に！ 月詠さん。悠陽様。入ってください」

義之が入室を促すと、ドアが開いて月詠と悠陽が入ってきた

「初めまして、MS課訓練生の皆さん。今日は皆さんの訓練風景を見させてもらいます」

「ハッ！」

悠陽の言葉を聞いて、訓練生たちは緊張した様子で敬礼した

その光景を見て、義之は頷くと

「では、ここからの予定だが……」

と言つて固まると、視線を窓に向けた

「義之?」

「大佐?」

「どうしました?」

「弟くん?」

義之の様子を見て、麻耶たちが困惑した様子で声をかけた

だが、義之はそれに答えずに窓に駆け寄つて、窓を開いて外に身を乗り出して外を見

回した

すると

「……月詠さん。今日、どこかで実弾演習をする予定でも有りますか?」

と、月詠に問い掛けた

問い掛けられた月詠は一瞬驚きの表情を浮かべると、悠陽に視線を向けた

悠陽が頷くと、携帯端末を取り出して操作してから

「いえ、そのような予定は一切ありません」

と答えた

すると、義之は慌てた様子で

「これはマズいかもしれんぞ!」

と言いながら、ドア横の内線電話に駆け寄って受話器を掴み、ボタンを押すと

「こちらは、教導任務に來ている桜内義之大佐だ！ 一体、何が起きている!？」

と、怒鳴り声を上げた

そんな義之に驚いて、麻耶たちは先ほどの義之と同じように、窓に駆け寄ると窓の外に身を乗り出した

そして、外を見まわすと

「黒煙!？」

「この音は……突撃機銃!？」

「それに、飛行MSのスラスタ音だね……」

とある方向の遠方に、複数の黒煙の帯が昇っており、さらには独特な重音が聞こえたその時

「なに? 所属不明のMS部隊の襲撃だ!？」

と、義之は大声を上げた

「数は? ……約40機!!? こちらの戦力は? ……戦闘機と多脚戦車!!? そんなので戦えるわけがないだろう!!? こちらで対処する! 部隊には交戦を避けるように厳命しろ! いいな!」

義之は怒鳴りつけると、受話器を叩き付けてから教壇の位置に立ち

「総員傾注！」

と、声を張り上げた

義之の声を聴いて、訓練生たちの視線は義之に集まった

「今から数分前、突如として所属不明のMS部隊が警備網を突破、襲撃してきた。現在は戦闘機部隊と多脚戦車部隊が交戦しているが、状況は芳しくない。よって、我々が対処する」

義之の言葉を聞いて、訓練生たちに動揺が走った

「落ち着け。今の君達ならば、訓練通りに対処できる筈だ」

義之がそう言うと、赤髪の男子

さかもとゆうじ  
坂本雄二が立ち上がり

「正気か!? 俺たちは訓練生なんだぞ!」

と、声を張り上げた

そんな雄二を、義之は見つめて

「正気さ。なにより、相手は訓練生だろうが何だろうが。容赦なく撃つてくるぞ?」

と、言い放った

義之のその言葉に、雄二は口をつぐんだ

すると、今度は黒髪ロングの少女

霧島翔子が立ち上がり

「……それで、相手の機種と数は？」

と、問い掛けてきた

「相手はデインタイプ。数は30〜40機前後だ」

義之が返答すると、翔子は頷いて

「……出撃、するんですよね？」

と、義之に問い掛けた

「霧島訓練生の言う通りだ。これより、我々は全員で出撃する！ なお、今回は混戦が予想されるので二機連携とする。編成はいつもの通りに……なにか質問は？」

義之が全員を見まわしながら問い掛けるが、誰も手を上げなかった

「では、全員。三分以内に着替えて格納庫に集合せよ！ 駆け足！」

「了解！」

義之の号令に従い、訓練生たちは全員駆け出した

義之は見送ると、月詠に視線を向けて

「月詠さん。今回の視察の件、他に誰かご存じですか？」

「ええ、本社の上層部ならば、ほとんどの者が知っております」

義之の問い掛けに、月詠はそう答えた

その答えを聞いて、義之は数瞬考えると

「その中に、野心が強い者が居ませんか？」

と、問い掛けた

その問い掛けに、月詠は少し考え込むと

「居ます……一人、とても野心が強い男が居ます」

と答えた

「恐らく、その男が犯人でしょう。襲撃のタイミングがあまりにも良過ぎる」

義之の言葉を聞いて、月詠は頷いて

「そちらに聞かしましては、こちらで裏を取ります」

月詠の言葉に、義之は頷くと耳に手を当てて

「五反田准尉、強化外骨格の使用を許可する。悠陽様の護衛、万全を期してくれ」

『了解！』

弾が返事をする、次に視線を麻耶に向けて

「麻耶は悠陽様の近くに居てくれ」

と命じた

「ええ、わかったわ。悠陽様、地下指令室へ向かいましょう」

義之の命令を聞いて、麻耶は頷いた

「よしなに……大佐殿、必ず、無事のぞ帰還を」  
「はっ！」

悠陽の言葉を聞いて、義之は敬礼した

そして、麻耶たちを見送ると、義之たちも着替えに向かった

## 出張教導任務 迎撃戦

出撃命令が下されて、数分後

義之達はハンガーに集合していた

「全員集まったな？ 推測混じりではあるが、ブリーフィングを行う」

義之はそう言うのと、全員を見回した

「敵の狙いは、悠陽様だと思われる」

義之の言葉を聞いて、明久達はざわめいた

「静かに！ 故に、我々は敵を一機たりともここまで通してはいけない。基本フォーメーションは複鶴翼伍陣だ。しかし、陣形に固執し過ぎるな。臨機応変に対処しろ。いいな!」

義之はざわめいていた訓練生達を一喝して静かにさせると、全員を見回しながらそう告げた

「」「はい!」「」

義之は全員が返事をしたことを確認すると、深呼吸して

「全員、搭乗せよ!」



「「了解！」」

義之の号令を聞いて、明久達は自分の機体へと駆け寄った。そして、明久も自分のアストレイに乗ると起動スイッチを押した。すると、見慣れた起動画面が映った。

そして、OSの起動が終わりメインモニターが映った瞬間

「え、なに!？」

突如、機体の電源が落ちた

明久は慌てながらも、もう一度スイッチを押した

だが、ウンともスンとも言わない

「どうして!？」

明久は操縦桿を乱暴に動かすが、機体は一切反応しない

『ブラボー2！ 吉井訓練生、なにをしている!』

義之の声を聞いて、明久はヘルメットの耳元に手を当てて

「教官、機体が動かないんです!」

『なに?』

明久からの報告を聞いて、義之は疑問の声を出した

「先ほど、電源が点いたんですが突如消えたんです!」

明久はそう言いながら、操縦桿を動かしたりスイッチを押ししたりした

だが、機体は一切反応を示さない

『わかった。吉井訓練生は機体から降りろ。ハッチは別電源だから、開くはずだ!』

「了解!」

明久は義之の指示に従い、シートベルトを外しながらハッチの開閉ボタンを押した

すると、義之の言った通りにハッチが開いた

そして、明久が機体から降りると

『虚技術大尉、吉井訓練生の機体を調べて下さい! 吉井訓練生は機体が動くまで、待機

している!』

「了解!」

虚は義之の指示に従い、数名の整備兵と一緒に明久の機体に駆け寄った

「頼みます!」

「任せて」

明久が頼むと、虚は微笑みながら頷いた

『ブラボー、坂本訓練生。すまないが、しばらくの間は一人になる』

『了解、明久が来るまでは耐えてみせますよ』

義之の言葉を聞いて、雄二はそう返した

『では、吉井訓練生。先に出撃している。機体が動き次第、追いついてこいよ?』  
 「了解! 必ず行きます!」

義之は明久の言葉を聞いてから、機体をハンガーの外に向かわせた

『なお、俺達のコールサインはアサルトとする! いいな?』

『『『『了解!』』』』』

義之の言葉に、まゆき達や他の訓練生達は斉唱で返した

『アサルト!、桜内義之、ストライク出るぞ!』

ストライクが出撃していくと、初音島の部隊と訓練生達の機体も次々と出撃していった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あれか……」

出撃して数分後、義之は前方にその機影を確認した

「デインにデイン・ラファール……それに、デイン・レイヴン!」

『これまた、珍しい機体だね。弟くん』

「ええ……」

義之が驚愕の声を上げると、まゆきがそう言ってきた

デイン・レイヴン

この機体は前タイタン戦争時、ユーラシア連合が初音島が運用していたガンダムブリッツの使用するミラージユコロイドが実際に、タイタンに通用するのかどうかという名門で、ダルクスに開発させた機体である

しかし、このデイン・レイヴンは原型機体であるデインに比べて、かなりコストが高いのである

おおよそ、二倍強といった所らしい

ゆえに運用された数が非常に少なく、大体、百機前後しか製造されなかった所謂特務仕様だった

なお、ミラージユコロイドを運用するとは言っても、ブリッツに比べてかなり限定的である

理由としては、まず機体形状が挙げられる

ブリッツは最初からミラージユコロイドの運用を想定していたので、ミラージユコロイドが装甲に付きやすいように流線型である

それに対して、デインは元々は空戦を想定していたので空力を意識して鋭角的な部分が多い

そして、一番の違いがバッテリー容量である

初音島が開発したガンダムのバッテリーは、元々ビーム兵器や特殊装備の運用を大前

提にしていたのでかなりの大容量である

それに対して、デインは実弾の運用を大前提にしているのでガンダムに比べるとかなり容量的に劣る

もし、ブリッツと同じようにミラーージュコロイドを運用したら、すぐさまバッテリーが切れてしまうのだ

だから、せいぜいレーダーに機体が映りにくい程度である

そして、製造されたデイン・レイヴンは全て、タイタン戦争時に大破もしくは撃破された

というのが、ユーラシア連合の公式発表である

閑話休題

『大佐、どうします?』

一夏が問い掛けると、義之はすぐに

「デイン・レイヴンとデイン・ラファールの半数を我々が対処する。残りのデインとデイン・ラファールは訓練生に任せるぞ!」

と指示を出した

『『了解!』』

義之は一夏達が返事したのを確認すると、通信画面を開いて

「アサルトルよりブラボー1、我々がデイン・レイヴンとデイン・ラファールの半数を請け負う。お前達は残りのデインとデイン・ラファールを落とせ、いいな!」

『ブラボー1、了解!』

義之は雄二が頷いたのを確認すると、訓練生全体に通信を開き

「お前たち、訓練を思い出せ! 仲間を守れ! 守りたい人たちの為に戦え! それを忘れなければ、お前たちならば勝てる! いいな!」

『『『『了解!』』』』』

義之の言葉を聞いて、訓練生たちは士気を大きくした

「全機、突撃!!」

『『『『了解!』』』』』

義之の号令に従い、訓練生達は襲撃者達へと突撃した

急行。そして……

義之達が出撃して、数分後

ハンガー

「……機体はまだですか!？」

「原因がわからないのよ!」

出撃出来ないことにイラついて、明久は声を張り上げた

機体の不調の原因が分からず、虚も大声で返答した

ヘルメットの無線から聞こえる声を聞いて、明久は拳を握りしめた

無線で聞く限り、仲間達は空戦機のデインに苦戦している

アストレイは元々陸戦機であるために、飛行装備であるシユライクを装備しても最高

速度ではデインに劣る

だが、旋回性能ではデインに勝る

その旋回性能の高さにより、なんとか戦えているようだ

だが、このままでは被害が出るのも時間の問題である

しかも、無線を聞く限りだが、デインの動きがデータよりも早いらしい

ただでさえ、空戦機に慣れてないというのに、このままでは……

と明久は歯痒く思った

その時、明久の視界の端にある機体が入った

そちらに視線を向けると、そこに有ったのは戦闘機形態で駐機してあった初音島の最新鋭機

MVF-111C ムラサメだった

明久はムラサメを見ると、駆け寄って

「すいません！ この機体を貸してください！」

と声を張り上げた

すると、明久の機体を点検整備しながら指示出ししていた虚は驚愕で目を見開いて

「何言ってるの！ それは初音島の大事なもの！」

「無理はわかってます！ でも、仲間達がピンチなんです！」

虚の言葉に被せるように言うと、明久は両手両膝を突いて

「お願いします！」

と土下座までした

「気持ちに分かるけど……」

と虚がためらっていると、空気が抜けるような音がして



「虚技術大尉、私が許可します」

という声が聞こえた

虚が声のした方向に顔を向けると、サブマシンガンを肩から下げた麻耶が居た

「沢井少佐！ いいんですか？」

虚が問い掛けると、麻耶は頷いて

「今は非常事態ですし、動かせる機体があるのに動かさないで被害が出て後悔するより、動かして後悔する方がマシです。それに……義之なら、恐らくは許可するでしょう」

と麻耶は言うのと、両手両膝を突いていた明久の肩に手を置いて

「吉井訓練生、君の気概を見せてもらいました。私の独断ですが、我が初音島の最新鋭機。ムラサメを貸します。ですが、条件が有ります」

麻耶がそこまで言うのと、明久は真剣な表情で麻耶を見つめながら

「機体は必ず、無事に返します！」

と言った

すると、麻耶は首を振って

「それだけでも……必ず、あなたも無事に帰ってきなさい」

と言った

すると、明久は一瞬驚くがすぐに笑みを浮かべて

「わかりました！」

と頷いた

麻耶はそれを確認すると、ムラサメに歩み寄りコクピット付近のカバーを開けてキーをタツチした

すると、麻耶は振り向いて

「今、この機体に掛けてあった制限を解除しました。これで、吉井訓練生でも操縦出来るわ」

と言った

そして、視線を虚に向けて

「虚技術大尉、ムラサメのOS設定を吉井訓練生に合わせてあげてください」

と言った

虚は頷くと

「わかりました！ 五分で終わらせます！」

と宣言するが、明久は首を振って

「そんなに待てませんよ！」

と言うと、梯子を登って飛び乗って

「吉井明久、ムラサメ！ 出ます！」

と宣言した

「総員、退避！」

麻耶が命じると、明久の機体を点検整備していた整備士達は物陰に隠れた。その直後、ムラサメは高速でハンガーから出撃した。麻耶は髪を抑えながら、心配そうな表情を浮かべて

「吉井訓練生……無事に帰ってきなさいね」  
と見送った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
「ムラサメ……流石は初音島の最新鋭機！ 凄い加速！」

明久はムラサメを操縦しながら、ムラサメの性能の高さに驚いていた。何よりも……

「この機体……凄い過敏だ！」

明久は機体の操縦に気を使いながら、OS設定をサブモニターで確認した。「バランスーの設定が……マイナス5?! なにそれ!？」

明久は機体の設定に驚いていた。しかし、それも仕方ないだろう

機体のバランスー設定は0を基本に、最大でプラス5からマイナス5まで設定が可能

である

そして、マイナス5というのは、普通に立つのも精一杯の設定である

明久はそんな設定の機体を普通に操縦している義之を、改めて尊敬した

「流石は……初音島の英雄！」

明久は感嘆しながら、戦域へと急行した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『このお！』

『墜ちろ！』

シャルロットと一夏は掛け声と共にビームマシンガンを放ち、一機ずつ撃破した

『こいつら……アータより動きが速い！』

まゆきは焦りを含んだ声音で喋りながら、ビームライフルとミサイルを放ち一機撃破した

義之は無言でビームライフルを二連射して、デイン・レイヴンを一機撃破した

すると

「なるほど……こいつら……」

と呟いた

『大佐？ 何か分かったんですか？』

一夏が問い掛けると、義之は機体のサブモニターを見ながら

「ああ……あいつらの動きから計算した結果……パイロットに対して、14Gの負担が掛かっていることが分かった」

と言った

すると、一夏は驚愕から目を見開いて

『14Gって、直哉の機体と同じ位じゃないですか!』

『そんなの、普通のパイロットに耐えられるわけが!』

一夏に続いて、シャルロットも驚愕の声を上げた

すると、義之は反対側のサブモニターを見て

「熱源探知を掛けてみる……理由が分かる」

と言った

数秒後

『……え? コクピット内に人の熱源反応が無い?』

『無人機だとしても言うの!?!』

シャルロットに続くように、まゆきも驚愕していた

すると、義之が

「恐らくだが……違法改造したんだ」

と言った

μは初音島の天枷研究所が開発、販売しているメイドロボットである  
初音島が公式に売っている別売りのキットやソフトを使えば、介護等も手伝う汎用性  
の高いロボットである

しかし、時々ではあるが違法改造してテロに使われることも確認されている  
そのことにより、時折天枷研究所に抗議の電話が掛かってくるのだが、天枷研究所は  
もちろん関与を否定している

そして、一番怒っているのは麻耶である

麻耶は故沢井琢磨博士の娘であり、μの基本設計は故沢井琢磨博士が関わっているの  
だ

ゆえに、麻耶にとってμは亡くなった父親の作品であり姉妹も同然である

そんなμが違法改造されて、テロに使われるというのは耐え難い侮辱なのだ  
「まったく……ふざけた奴だよ！」

義之はそう言うのと、ビームライフルを二連射して、また一機撃破した  
その時だった

『ブラボー！ 雄二、後ろじゃ！』

という、木下秀吉訓練生の叫び声が聞こえた

義之がサブモニターに視線を向けると、雄二機を二機のデイン・ラファールが狙っていた

雄二機の盾は左腕ごと無くなっており、雄二は必死に避けようとしていた  
だが、一機は重機関銃で狙っていて、もう一機は対空散弾銃で狙っていた

「っ！」

義之も援護しようとビームライフルを向けるが、直感で間に合わないと分かってしまった

その時、彼方から一筋の閃光が走り一機のデイン・ラファールの腕を撃ち抜いた  
それに驚きながらも、義之はビームが来た方向に頭部を向けた

そこに見えたのは、戦闘機形態のムラサメだった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「よし！ みんなは無事だ！」

機体を全速力で飛ばした明久は、モニターとレーダーの表示を見て安堵した  
だが、次の瞬間

「雄二が!？」

二機のデイン・ラファールが雄二機を狙っているのに気付いた

回りの仲間他は他のデイン・ラファールやデインの対処で手が回らず、誰も援護が出来

ないようだ

自分もまだロックオン出来ておらず、間に合わないのか？　と思った

だが

「諦めて……たまるかあ!!」

と明久は雄叫びを上げた

その瞬間、明久の頭の中で何かが弾けた

すると、明久の目からハイライトが無くなり、明久の思考は未だかつて無い程にクリアになった

明久はロックオンに頼らず、目視で狙いを定めて尾翼に内蔵されているビームキャノンの放った

明久の放ったビームは狙い変わらず、デイン・ラファールの腕を吹き飛ばした

すると、そのデイン・ラファールは後退してもう一機のデイン・ラファールは明久の方に機体を向けた

その隙を狙い、明久は通信を開いて

「雄二！　今の内に体勢を立て直して！」

と声を張り上げた

『お前！　その機体は?!』



「僕がこいつらを引きつけるから、早く！」

雄二が驚愕の声を上げるが、明久は遮るように言う。と先ほどの二機を含めて五機の  
デイン・ラファールとデインの混成部隊へと機体を突撃させた

もちろん、デインタイプも待っているだけではない

デインタイプは両手の火器を放ち、明久に対して濃密な弾幕を形成した

だが明久は、機体を降下させて回避し、機体下部のミサイルベイを開くと

「全弾……発射！」

機体を回しながら、ミサイルだけでなく機関砲も発射した

四発のミサイルは一番手前と近くのデインへと、空を走った

近くに居たデインは回避が間に合わず、ミサイルの直撃を受けて爆散した

もう一機は一発は重突撃機銃で迎撃したが、もう一発が間に合わず左腕を犠牲にして

防いだ

次の瞬間、そのデインはコクピットを撃ち抜かれて爆散した

残り三機のデインタイプは機関砲を避けたが、爆煙でムラサメを見失っていた

周囲に目を向けていたら、爆煙の向こうから一発のビームが走り、デインのコクピッ

トを撃ち抜いた

そのことに固まっていると、MS形態に変形したムラサメが右手にビームサーベルを

抜いて爆煙を突き抜けてきた

残っていたデイン・ラファールは突撃機銃と対空散弾銃を向けるが、瞬く間に一機が切り裂かれ、もう一機は左腕の盾でコクピットを潰されて機能を停止させた

「はあつ、はあつ、はあつ！」

コクピット内で明久が息を荒げていると、警告音が鳴り響いた

「っー！」

警告音が指し示した方に視線を向けると、一機のデイン・ラファールが明久に対してミサイルを放とうとしていた

明久はビームライフルを構えようとしたが、次の瞬間

『おらあー！』

隻腕の雄二機が、ビームサーベルでそのデイン・ラファールを切り捨てた

「雄二ー！」

『つたく、ようやく来やがって。遅いんだよ！』

雄二の威勢の良い声を聞いて、明久は笑みを浮かべながら

「ごめんね、機体がダメだったから、この機体を貸してもらったんだ！」

と言った

すると、通信画面が開いて

『吉井訓練生。間に合ったようだな』

と義之の顔が映った

「教官長！ 申し訳ありません。初音島の最新鋭機を借りてしまいました」

と明久が謝ると、義之は笑みを浮かべながら

『構わない。その様子じゃあ、麻耶が許可したんだろ？』

と言った

そして、明久が頷くと

『それならば、俺からは何も言わないさ。さて、残りを片付けるぞ！ 付いて来れるか

!?!』

「はいー！」

義之の言葉に明久が返答すると、義之は頷いてから

『アサルト1より全機に到達！ アサルト隊とブラボー2で敵機の頭を抑える！ 他の

ブラボー隊は敵機を撃破しろ。いいな!?!』

と命令を下した

命令を聞いて、雄二達は斉唱で返した

『全機、続けえ！』

義之が突撃すると、アサルト隊や明久もデインタイプに突撃した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「吉井訓練生のさっきの動き……あれは間違い無く、SEEDか……」

と義之は、目前のデインを撃破しながら呟いた

SEEDと言うのは、人なら誰でも持ちうる進化の可能性である

正式名称は長いので覚えてないが、義之もSEEDを覚醒したことがあった

そのSEED覚醒が有ったからこそ、義之は初音島の守護神と呼ばれるようになったのだ

「つと、今は目の前の敵に集中するか……」

義之はそう呟くと、戦闘に集中した

## 断罪

「この……大バカ者が!!」

戦闘が終わって、数十分後のハンガー内で西村の怒号が響き渡った

その理由は、戦闘が終わった後まで遡る

所属不明部隊による襲撃は、明久や義之達の活躍により多少の被弾は有ったものの、皆無事に帰還

ハンガーで生き残ったことを喜びあった

だが、整備士の本音が島田と姫路を見ると

『昨日の夜に、ハンガーでなにしてたのー?』

と問い掛けたことから、状況は変わった

本音の発言を不思議に思い、西村と義之は二人に尋問を開始した

ちなみに、なぜ本音が二人がハンガー内に居たのかと言うと、本音は昨日、夜に自分の工具のメンテと確認を行った時に工具を一つ、ハンガーに忘れたことに気づいたのだ  
そして、ハンガーに取りに来たら姫路と島田の二人が明久の機体から離れていったらしい

本音は不思議に思いつつも、工具を回収して自室へと戻ったのだ

### 閑話休題

当初、二人は西村と義之からの尋問に対してずっと黙っていた

だが、諦めたのか語り出したのは

《明久の機体に対して、ウィルスを仕掛けた》というものだった

これを聞いた西村は大激怒

大声を上げて、二人を叱ったのである

なお、虚達はハンガーに敵の歩兵が襲撃してきたが、弾達機械化歩兵部隊の活躍により全員無事である

そしてその歩兵はどうやら、傭兵だったようで装備などはバラバラだった

### 閑話休題

そして、姫路と島田の二人がウィルスを仕掛けた理由があまりにも下らなかった

その理由は、嫉妬である

明久が優子を好きになったことを許せずに、明久への意趣返しを含めて行ったのである

それを聞いて、西村は未だかつて無いほどに大激怒したのだ

「貴様らの身勝手な行動で、どれほどの人達に迷惑が掛かったと思っっているんだ!! し

かも、吉井が間に合わなかったら坂本は死んでたんだぞ!」  
「だって……」

「でも……」

「言い訳は聞かん! 貴様らにはほとほと愛想が尽きた!」

西村がそこまで言うのと、義之が西村の肩を掴んで

「西村教官殿、そこまでにしましょう」

と諭した

「大佐殿……しかし……」

義之の言葉を聞いて、西村は渋い表情を浮かべるが義之は首を振って

「処罰は我々ではなく、月詠さんが下します」

義之はそう言いながら、背後に居た月詠に視線を向けた

すると、月詠は無言で二人の前に立ち

「あなた達に対する処罰は……我が社からの追放です」

と宣言した

「なっ……!?!」

「そんな……!?!」

二人は月詠の言葉を聞いて、絶句した

だが、月詠はそんな二人を無視して

「あなた達の行った行動により、我が社に多大な損害を発生させ、しかも、悠陽様のお命まで危険に晒した罪は重いです。今日中に荷物を纏めて、何処へでも行きなさい」

月詠がそう言うと、二人はその場で座り込んだ

月詠はそれを確認すると、義之に身体を向けてから深々と頭を下げた

「大佐殿、此度は我が社の元社員達が多大なご迷惑をおかけしましたことを、深くお詫びします」

月詠がそう言うと、義之は首を振って

「いえ、我々は出来ることをしたままでです。お気になさらず」

義之がそう言うと、月詠は顔を上げて

「このお礼に関しましては、後ほど悠陽様からご提案がありますので」

と言った

「わかりました」

月詠の言葉に義之が頷いた直後、座り込んでいた姫路と島田が明久を睨みつけて

「吉井……っ！ あんたのせいだ……！」

「お仕置きです！」

と声を上げて、明久に飛びかかろうと立ち上がった



その時、乾いた炸裂音が連続して響き、二人の足元に火花が起きた

姫路と島田は数瞬呆然としてから、恐る恐ると音のした方向へ視線を向けた

そこでは、義之が硝煙くすぶる拳銃を構えていた

そして、ふと気づけば義之だけでなく、麻耶はPDWを構えていて、一夏やシャルロットも拳銃を構えていて、二人の周囲を強化外骨格を装着した弾達が囲んでいた

「いい加減にしろ、貴様ら……温情とわからんか？ 次、何かしたら、容赦なく蜂の巣にするぞ」

義之のその言葉の直後、銃を構えていた全員が安全装置を解除した音が響いた  
その状況でようやく諦めたのか両手を上げて、その場で座った

義之はそれを確認すると、拳銃をホルスターに収めて

「五反田準尉、二人を拘束し自室へ連行。二人が自室から出ないように、監視しろ」

「了解！ 御手洗、アルシャービン」

「はっ！」

義之の命令を聞いて、弾は部下の二人に姫路と島田の連行を命じた

命令を受けて、二人は姫路と島田の二人を拘束してハンガーを去った

すると、西村が頭を下げながら

「最後までご迷惑をおかけしました」

と謝罪した

すると、義之は手を左右に振りながら

「いえ、こちらも大人気なかった」

と謝った

そして、視線を虚に向けて

「それで、ウイルスはどうですか？」

「今現在、二人の部屋から押収したウイルスのデータからワクチンソフトを制作してます」

義之からの問い掛けに、虚は手元の端末を見ながら端的に答えた

義之は頷くと、視線を明久に向けて

「吉井訓練生。先ほど活躍、見事だった」

と誉めた

誉められた明久は、恥ずかしそうに顔を赤くしながら敬礼して

「ありがたいお言葉ですが、あの最新鋭機の性能があつたからこそです」

と言った

すると義之は、明久に対して右手を差し出して

「吉井訓練生……君さえ良ければ……初音島に来ないか？」

と提案した

「え……………」

まさかの義之の提案に、明久は固まった

「君は間違いなく、SEED保持者だ」

「SEED保持者……………」

義之の言葉を聞いて、明久は首を傾げた

「俺も詳細は忘れたが、人が持つ進化の可能性とやららしい……………そして君は間違いなく、エースの資質を持っている」

「僕が、エース……………」

義之の言葉が信じられず、明久は呆然とした

「まあ、簡単には信じられないだろう。だが、真実だよ。俺もSEED保持者だ……………そしてそれがあつたからこそ、俺は英雄と呼ばれるようになったんだ」

義之の言葉を聞いて、明久は悩み始めた

「どうする？ 君が望むなら、我が隊に君を迎え入れたい。そちらの彼女と一緒にね」

明久の言葉を聞いて義之が問い掛けると、明久は首を振ってから

「嬉しいお言葉ですが、お断りします」

「いいのか？」

義之の言葉に、明久は頷いて

「ええ……僕はこの仲間達が大好きなんです……ですから、残ります」

「そうか……わかった。だが、気が変わったら……ここに連絡してくれ」

義之は名刺に端末の番号を書くと、明久に手渡した

「はい……ありがとうございます！」

明久は名刺を受け取ると、義之に対して敬礼した

こうして、襲撃事件は一旦幕を閉じたのだった

## パーティー

襲撃事件から二日後

御剣財閥警備部、MS課の食堂

「さて、全員に飲み物は渡ったか？」

義之の言葉を聞いて、食堂に集まっていた全員は頷いた

「そんじゃあ、訓練お疲れ様！ かんぱーい！」

「「「かんぱーい！」「」」」

義之の音頭が続けて、全員はグラスを高々と掲げた

明日を以て、義之達の派遣期間は終了である

よつて、義之達に対しての感謝を込めて、お別れ会が立案されたのだ

西村や月詠も承認したので、MS課の大食堂を貸切にして開催された

机の上には月詠が手配した料理や飲み物が並び、壁や天井には繋げた紙の輪等による  
装飾が施されている

あれからのことを簡潔に話すと、姫路及び島田の両名は月詠が手配した船により、昨日島から去った

そして、襲撃事件の黒幕は月詠が言っていた野心家の男

竹原が首魁と分かった

竹原は、悠陽のような年若い少女が自分より上に立つことが許せず、かなり前から暗殺を企てていたらしい

今回襲撃に使われたMSも、御剣財閥が回収しレストアした機体の中から程度の良い機体を竹原が極秘裏に書類等を偽装して集めていたらしい

そしてその竹原本人は、詳細を把握した月詠がすぐさま本社の警備部隊を動かして拘束

即座にクビとなって、御剣財閥を追い出されたのだった

このことに関して、悠陽から

『此度は我が配下の陰謀に巻き込んでしまい、申し訳ありません。お詫びとしましては、初音島と提携を結びたいと思います』

と言っていた

詳細は義之も知らないが、どうやら、さくらと話し合ったらしい

そこらへんはさくらや純一に任せるとして、義之は残党が居ないか警戒態勢を敷いた結果としては、残党は確認されなかったので、今回の事件は幕引きとなったのである  
そして、二日後の今日、訓練お疲れ様パーティーが開かれたのである

「しかし、明久くんは料理が上手なんだな」

そう言ったのは、パエリアを一口食べた義之である

なお、訓練が終わったので、呼び方は変わっている

「まあ、数少ない趣味なので……しかし、大佐も上手ですね」

義之の言葉を聞いて、明久は苦笑しながら答えると、持っていた料理を見ながらそう言った

明久が持っているのは、義之が作ったグラタンである

「まあ、素材も良かったしな。流石は御剣財閥」

義之はそう言うのと、再び明久が作ったパエリアを口に運んだ

すると、明久の隣に居た優子が

「あたしも料理覚えようかしら……」

と呟き、それを聞いた麻耶が優子の肩に手を置いて

「義之と明久くんが例外なのよ。気にしないで」

と言った

その頃、とある一角では

「……写真、いいですか？」

とムッツリーニが、一夏とシャルロットに問い掛けた

「んお？ 別にいいけど……」

「僕達でいいの？」

シャルロットが問い掛けると、ムッツリーニは頷いて

「……お二人の姿が俺の心に響いた」

と言うと、デジタルカメラを構えてからシャッターを切った

「……どうぞで」

ムッツリーニは操作してから、画面を二人に見せた

「おお……君、上手いね」

「本当だ」

二人はムッツリーニが撮った写真を見て、軽く驚いていた

写っている二人はとても自然で、なんの気負いすら感じなかった

「……いりますか？」

「え？ いいの？」

ムッツリーニの言葉にシャルロットが驚いていると、ムッツリーニは頷いて

「……思い出し一枚」

と言うと、デジタルカメラにコードを繋げた

「ほいほい」



一夏はポケットから携帯端末を取り出すと、ムッツリーニのデジタルカメラと繋げた  
「……送ります」

「了解」

一夏が頷くと、ムッツリーニは送信を開始した

そして、十数秒後

「……完了」

「ん、ありがとう」

ムッツリーニの言葉を聞いて、一夏は端末を操作した

「ん、確かに」

一夏が端末を仕舞うと、シャルロットが取り出して

「僕もいいかな?」

と問い掛けた

「……構いませんよ」

ムッツリーニは頷くと、シャルロットの端末にコードを繋げた

「……送りますよ?」

「お願い」

シャルロットが頷くと、ムッツリーニは再び送信を開始した

そして、十数秒後

「……完了」

「ありがとうね」

シャルロットは頷くと、端末を操作して

「ありがとうね……母さんが死んで以来だから、二年振りかな？」

と言った

シャルロットのその言葉を聞いて、一夏は頭を搔いてから

「今から言うことは、オフレコで頼むな」

と言った

「……わかりました」

ムツツリーニが頷くと、一夏は小声で

「シャルのお母さんはな、二年前のタイタン戦争で亡くなったんだがな、その後にシャルのお父さん……デュノア社の副社長さんがシャルを迎えに来たんだよ」

一夏の説明を聞いて、ムツツリーニは目を見開いた

「……っ！　そうか、軍需産業のデュノア社！」

「そう……シャルのお父さんはデュノア社の副社長だったんだがな……」

一夏が言いにくそうにしていると、シャルロットが一步近づいてきて

「僕のお母さんはね……いわゆる愛人だったんだ」

と言うと、ムツツリーニは目を見開いて固まった

「僕はそれを知らなくって、正妻に見つかつたら叩かれたよ……この泥棒猫の娘が！  
って」

シャルロットの悲しそうな告白を聞いて、ムツツリーニは拳を握り締めた

「で、デュノア社は……まあ、社長だった正妻の金遣いの荒さが原因なんだがな、倒産の危機に陥ったんだ」

デュノア社が倒産になりかけたのは、ムツツリーニも知っている

そこらへんは、御剣財閥の情報で知り得たのだ

「で、その社長は何を考えたのか……シャルを男装させて、初音島に送ったんだよ。技術やデータを盗んでこいってな」

「……外道が！」

一夏の話聞いて、ムツツリーニは憤りを覚えた

彼もタイタン戦争の折に家族を喪つており、ここに来た頃はまるで人形のようなだったが、明久が何度も話し掛けてきて、そこから少しずつ立ち直つたらしい

だから実を言うと、ムツツリーニは明久に恩義を感じている

「で、まあ……軍の訓練校に入つて俺と同室になつたんだがな……そこでトラブルが起

きて、俺がシャルが女の子だって知ったんだよ」

「で、一夏がお姉さんをお願いしたんだ。『シャルルを助けてくれ』って」

「……シャルルというのは、男装時の？」

ムツツリーニが問い掛けると、シャルロットは頷いた

「うん。僕の男装時の名前」

「で、千冬姉から大佐に伝わって、そこから大統領であるさくら様に伝わって、なんか知り合いの人と共謀して、表向きはシャルロットは訓練中の事故で死んだ。ってことになりました」

シャルロットに続いて、一夏が説明すると、ムツツリーニは頷いて

「……大統領が動くか……」

と呟いた

「凄いやなあ……で、シャルロットとして初音島に国民登録して、今は俺と同じ家に住んでる」

「……なるほど」

一通りの説明を聞き終えて、ムツツリーニは少し黙考してからシャルロットに視線を向けて

「……そういえば、EUはユーラシア連合によって併合されたが、お父上は？」

ムツツリーニが問い掛けると、シャルロットは首を振って

「デュノア社諸共、燃えたって聞いた……」

と呟くように言った

「……申し訳ない。聞くべきではなかった」

ムツツリーニがそう言うのと、シャルロットは手を振って

「ううん、気にしないでいいよ」

と言った

すると、ムツツリーニがどこからともなく、数枚の写真を取り出して

「……お詫びとして、これを」

と言つて、シャルロットに手渡した

「ん？ ……わっ!？」

「ん？ ……ちよっ!？」

シャルロットが驚いた事を不思議に思い、写真を覗き込んだ一夏も固まった

なぜならば、そこに写っていたのはパイロットスーツに着替えている途中の一夏だった

たからだ

「おまつ!?! 何時の間に!?!」

「……たまたま、撮影できた」

一夏がガクガクと揺さぶると、ムッツリーニは明後日の方向を見ながらそう言った。ちなみに真実を述べると、撮影したのはムッツリーニが仕掛けた小型カメラである。ムッツリーニは色んな所に小型カメラを仕掛けており、それが撮影した写真を売買しているのだ。

シャルロットに渡したのは、その極一部である

そして、ムッツリーニはなんとか脱出するとすれ違い様にシャルロットの耳元で

「……貴女の恋路、応援してます」

と言うと、脱兎の如く駆け出した

「さて、こちら!! あと何枚ある!?! 全部出せ!!」

逃げ出したムッツリーニを一夏が追いかけると、シャルロットは写真をポケットにし、まい込んで

「ありがとうね……僕、頑張るよー」

と嬉しそうに言った

こうして、お別れ会兼訓練お疲れ様パーティーは過ぎていったのだった

## 驚愕の新人たちと休暇通達

教導任務が終了して数日後、義之達は無事に初音島へと帰還した

そして、更に数日後のことだった

「あー……本日付けで配属となった新人達を紹介する」

と朝の連絡で、義之が言った

「新人……ですか？」

「この時期に？」

義之の説明を聞いて、隊員達は疑問を口にした

とはいえ、それも仕方ないだろう

新人達が着任して、約四カ月

そんなタイミングで、新人が配属となるなんてほとんどの軍人は知らない

「うむ……お前達の疑問も分かる。だが、配属となる連中は風見総合学園の短期特別教育を僅か三カ月でクリアした猛者だ」

と義之が設定すると、ようやく隊員達は納得した

短期特別教育

これは風見総合学園にある教育科目で、望めば誰でも受けられる

そのために、年間の受講希望者は百人を超える

だが、その求められるハードルが非常に高いのである

この短期特別教育はいわゆる、特化型スペシャリストを短期間で育成するための授業である

そのために、この短期特別教育は単位性となっている

ゆえに、単位を満たせば三カ月で望む企業や部隊に配属されることは約束されたも同然だ

要するに、その配属となった者達は僅か三カ月で軍人に必要な技能を習得してワルキューレ隊への配属を希望したのだろう

それを考えると、その新人達は並大抵の努力ではなかった筈だ

なお、年間の合格者は十人居れば良い方である

「では、入れ！」

義之が入室を促すと、ドアが開いて数人の少年少女達が入ってきた

そして、稟はその内の二人を見て固まった

なぜならば……

「それでは紹介しよう。まず、医療班に配属となった、芙蓉楓軍曹と八重桜軍曹だ」



「若輩者ですが、よろしくお願いします！」

稟が護りたいと誓った少女達だったからだ……

その後、義之により

整備班に麻弓Ⅱタイムと時雨亜沙

操舵班に緑葉樹

の配属が告げられた……

数分後、稟は楓と桜の二人を呼び出した

「なんで軍に来た！」

と問い掛けた

「もう、稟君と離れるのは嫌なの」

「だから、稟君が居るこの部隊に来るために、短期特別教育を受けたの」

稟の問い掛けに対して、二人は毅然とした表情で答えた

稟は二人の回答を聞いて、頭を乱暴に掻いてから

「だからって、命の危険がある軍に来るなんて危険過ぎる！」

「それもわかってる……」

「けど、その危険性も理解してここに来たの」

稟の言葉に対して、二人はそう返した

二人の意志の固さを感じたのか、稟は再び頭を乱暴に掻いた  
その時

「稟。いい加減、二人の気持ちを汲んでやれよ」

と言いながら、一夏が稟の肩に手を置いた

「一夏、武……」

稟の振り向いた先には、一夏の他に武も居た

「時雨さんの話を聞いたら、お前。二年近く何の連絡もしなかったらしいじゃねえか」

「それだったら、彼女達が心配するのも仕方ないさ」

一夏と武がそう言うと、稟は深々とため息を吐いて

「確かに……そこは完全に俺の落ち度だな……わかった。ただし、無理はしないでくれ  
よう？」

と言った

稟がそう言うと、楓と桜は嬉しそうな表情を浮かべて

「うん！」

と頷いた

そして、稟達は自分の業務を始めた

それから数時間後

一夏とシャルロットは義之に呼び出された

「三日間の休暇……ですか？」

「そ」

シャルロットの言葉に対して、義之は頷いた

「しかし、なぜ三日間も？」

一夏が問い掛けると、義之は頷いてから

「あー……ほれ、お前達、三カ月も出張教導任務に就いてただろ？ その三カ月間、ずっと出勤扱いだったから、人事部から休暇を入れろって催促されたんだよ」

という義之の説明を聞いて、二人は納得した様子で頷いた

だが実を言うと、出張教導任務に就いていた全員に対して人事部は休暇を取れと言っていたのである

だが、義之とまゆきは三カ月間に書類が溜まり、虚は出張教導任務に持つていった機体のオーバーホール、弾は一応歩兵部隊の隊長なので部下を優先させた

なお、麻耶は義之の補佐があるので無理

ゆえに、一夏とシャルロットが先に休暇を取る形になったのだ

「わかりました……とはいえ、三日間もどうしようかな……」

「だね……さすがに、三日間は手持ち無沙汰かな……」

一夏の言葉にシャルロットが同意していると、義之が捌いていた書類を一旦止めて「なに言ってるの。さくらパークのチケットが有るでしょ」

と言った

すると、一夏とシャルロットは数秒してから

「ああ!!」

と二人して手を叩いた

どうやら、完全に忘れていたようである

「まあ、そういう訳だ。三日間楽しんでこい」

義之はそう言うと、再び書類作業へと没頭し始めた

「了解しました」

「織斑一夏及び、シャルロット・デュノア両少尉は明日から三日間の休暇に入ります！」

二人は敬礼してから、執務室から出ようとドアへと向かった

すると、二人が触れるよりも早くドアが開いて、両手で書類を抱えた麻耶が現れた

二人は麻耶に道を譲りながらも、書類の量を見ると義之に対してエールを送りながら

「失礼しました！」

と退室した

その数秒後

「はい、追加の書類ね」

「つだよ、マジかよー!!」

という、二人のやり取りを一夏とシャルロットは背中越しに聞いた  
こうして、二人のデートが決定した

## さくらパークへ

翌日

一夏とシャルロットの二人は、第3メガフロートこと巨大テーマパーク  
さくらパークに来ていた

このさくらパークのテーマは《一日中遊んでも遊びきれない》であり、それを象徴する  
ようにメガフロート丸々一つを使ってあらゆる遊具やプールなどが設置されている  
極めつけはパーク内にホテルまで完備されており、泊まりがけで遊ぶことも可能な  
だ

「来たな……」

「だね……」

一夏とシャルロットは巨大なゲートを見上げながら、呆然と呟いた

そうしている間にも、次々と二人を避けて人が入っていつている

「ここで止まってても仕方ない。入るぞー！」

「う、うん！」

二人は気合いを入れると、ゴロゴロとキヤリーバックを引きながら受付へと向かった

しかし、そんな二人を影から見ている不審な人影が複数あった  
「手、繋いでるな……」

「繋いでるわね……」

「仲良く入っていききましたわね……」

「入っていったな……」

見ていたのは、箒、鈴、セシリア、ラウラの四人だった

時刻的には既に、勤務開始時間である

しかし、なぜ彼女達が居るのか

先日帰る前に、一夏とシャルロットの予定日欄に二人揃って三日間休暇となっており、シャルロットに至っては端に♪マークが書かれていたので、四人は何かあると感じとり、朝から尾行をしていたのだ（ラウラの手引きによって、二人にはギリギリ察知されない距離を保っていた）

なお、簪と直哉の二人は我関せずを決め込み、真面目に出勤している

「中に入ったぞ……」

「追うわよ……」

「ええ……」

「うむ……」

鈴の言葉に三人は頷くと、どこからともなく武器を取り出した

箒は刀、鈴は柳葉刀、セシリアはスナイパーライフル、ラウラはナイフである

そんな四人を見て、一人の子供が指差しながら母親に問い掛けるが、母親は子供の手を引いてサツサとどこかへ行つた

そして、一夏とシャルロットの二人を見失わないようにと四人が一步踏み出した途端「お前ら……仕事をサボつてこんな所に来るとはい、度胸だ」

この場において、聞きたくない声が四人の耳に入った

その声を聞いて、四人はまるで錆びたブリキ人形のようにギギギと振り向いた

そこに居たのは、彼女達の上官にして部隊隊長の義之と教官

織斑千冬の姿があつた

しかも、二人の背後には軍用高機動車が後部座席のドアを全開にして止まっかけて、四人にはそれが地獄への馬車に見えた

「そんな暇なら、俺と織斑中佐が自ら近接白兵戦の手解きをしてやろう……なに、四時間もやれば逝けるさ」

義之がそう言うのと、それまで腕組みしていた千冬がゆつくりと腕組みを解いた

その瞬間、四人には義之と千冬の背後に二体の阿修羅が見えた

「に、逃げっ！」



四人は捕まる前に逃げようとしたが、時既に遅し

四人の襟首をそれぞれ、千冬と義之が掴んだ

「さあ……逝こうか……」

笑顔ではあるが、目が笑っていない

「……いやああああ!!」

晴れ渡った蒼穹に、四人の悲鳴が響き渡った

その後、ワルキューレ隊隊舎のトレーニングルームから少女達の悲鳴が四時間ぶつ通しで聞こえて、それを聞いた先達達は全員

《ああ……誰かがバカをやったな……》

と察した

なぜなら、数時間ぶつ通し近接白兵戦訓練はもっぱら、懲罰としてワルキューレ隊では有名だからである

その後、四人は死んだ魚のような目をしながら山のような書類を深夜遅くまで裁き続けたとか

こうして、四人の頭には

《仕事をサボったら、精神的に地獄に落とされる……》

と刻み込まれた

そもそも、仕事はサボらないのが普通である

良い子の皆も、仕事は決してサボらないようにしましょう

もしサボっても、当方は一切の責任を負いません

「なあ、なんか聞き覚えのある声が聞こえなかったか？」

「ううん……聞こえなかったよ？」

一夏の問い掛けに対して、シャルロットがそう言う和一夏は首を傾げながらもホテルのフロントに荷物を預けたるとフロント係から番号の書かれた札を貰った

二人は貰った札を仕舞うと、ホテルから出て周囲の遊具を見回すと

「そんじゃあ、遊びますか！」

「うん！」

と駆け出した

## さくらパークでのデート 始まり

「さてと、最初はどこに行くか」

一夏はそう言うのと、マップを覗き込んだ

このさくらパークは大きく分けて、四つのコーナーに分けられている

一つは定番の遊園地系

二つ目はアクション重視

三つ目はプール

四つ目は自然公園となっている

「それじゃあ、最初は定番の遊園地系に行ってみようよ」

シャルロットが提案すると、一夏は頷き

「そうだな。最初は定番から行くか」

と同意して、移動を始めた

そして十数分後、二人は地区の詳細なマップを見ながら

「そんじゃあ、どれから行くか」

と話し合っていた

この地区だけでも、優に二十以上のアトラクションが存在する

これだけでも、中規模の遊園地を超えている

「それじゃあ、最初はジェットコースターから行こうよ」

「そうだな」

一夏とシャルロットが選んだのは、近くのジェットコースターだった

そのジェットコースターは、既に長蛇の列が出来ており、最後尾には三十分待ちという看板があつた

だが、二人はその列には並ばずに入り口に向かいパスを見せると

「どうぞ、お入りください」

と係員は二人を中に入れた

あのプレミアムチケットの特典で、全アトラクションに並ばずに入れるのだ

なお、この時二人には見えなかったが、このジェットコースターの名前は

災厄メイシルシユトルームの渦とあつた

そして、数分後

「いやあ、結構回ってたな」

「だね。数えただけけど、軽く十三回は回ってたよ」

二人は普通に会話しながら歩いているが、出口付近では酔った客達が口元を抑えてい

た

「MSのほうがキツイよな？」

「うん」

二人はMSのパイロットなので、MSのほうに慣れると大したことは無かった

だが、一般人からしたらかなり厳しいのである

「それじゃあ、次はどこに行くか」

「それじゃあ、あのお化け屋敷にしようよ」

一夏の言葉にシャルロットはそう言つて、廃病院を彷彿させるアトラクションを指差した

「OK、行こうか」

「うん！」

二人はそう言うと、そのアトラクションへと入った

このアトラクションは旧水越病院をモデルにしていて、中には薬品の瓶や包帯等が散乱していて、壁には血痕のような跡もある

ちなみに、このアトラクションはなんでも、未知のウイルスによって患者や看護師、医師がゾンビと化したという設定らしい

入り口でレーザー光を出す銃を受け取り、その銃でゾンビを撃ちながらパスワードを

見つけてゴールを目指すらしい

「さて、行きますか」

「うん！」

数分後、二人は係員曰わく最高新記録でゴールした

「確かに、なかなかの迫力だったけど……」

「織斑教官の方が怖かったよね」

本人に聞かれたら、殺されること間違いない言葉である

まあ、本人が居ないから言ったのだが

「さてと、お次はつと……」

と一夏がマップを見ていると、シャルロットが

「あのさ、あそこに入りたいんだけど……」

と指差したのは、いわゆる乗り物系だった

「オーライ」

一夏はシャルロットの提案に乗って、その建物に入った

二人してゴンドラに乗ると、ゴンドラはゆっくりと動き始めた

「うわあ……」

シャルロットは飛んでいる妖精のロボットや、近くの岩場を模したオブジェクトに

乗っている動物のロボットを見て目を輝かせている

考えてみたら、シャルロットが遊園地に来るのは初めてかもしれない

聞いた話だが、彼女はフランスでも片田舎で母親と二人で過ごしていたらしい

だが、その母親はタイタン戦争で亡くなり、その後は父親に引き取られて、もう一人の母親にテストパイロットとして利用されていた

そして、約一年前に男装して初音島に来てからは、長期間軍の訓練校の宿舎で過ごしていた

訓練校では、ほとんど毎日のように訓練があつたために外出が出来るのは稀だった

だが、外出が出来る日であってもシャルロットが外出許可を申請して外出したのは、正体が一夏に露見した後だけだった

そう考えると、一夏としては思わず

(もう少し、気づかかって一緒に出掛けるべきだったかな?)

と首を傾げた

目の前ではしゃいでいるシャルロットを見ると、そう思わざるをえなかった

(今後、休暇を申請する時は誘ってみるか)

一夏がそう思っていると、ゴンドラが落ちたのが分かった

どうやら、もうすぐゴールらしい

かなりの時間考え込んでいたらしい

(さてと、ここからは意識を切り替えよう)

一夏はそう意気込むと、シャルロットと共にゴンドラから降りた

三日間のデートは始まったばかりである



## 少女の慟哭

アトラクシヨンから出ると、一夏はマップを広げて

「次はどこにすつかかな」

と首を傾げた

すると、シャルロットが一夏の服の裾を引いて

「時間も時間だし、ご飯にしない？」

と自分の腕時計を指差した

腕時計は正午少し前を示していた

「そうだな。昼飯にすつか」

一夏はそう言うのと、視線を巡らせた

すると、すぐ近くにフードコートがあつた

「そんじゃあ、俺が買ってくるから。何がいい？」

「それじゃあ、ピラフをお願い」

シャルロットの注文を聞くと、一夏はカウンターへと向かつた

一夏がカウンターへと向かつたのを見て、シャルロットは空いている席を探した

ほとんどの席が家族連れによって満席状態だったが、端のほうに一つだけ空いている席を見つけた

「良かった、空いてる」

シャルロットは安堵した様子で席を確保すると、空を見上げた

綺麗な青空を、鳥が飛んでいった

「考えてみたら、僕も遠い所に来たなあ……」

シャルロットはそう呟くと、タイタン戦争前まで記憶を遡った

シャルロットは産まれてからタイタン戦争までは、母親とフランスでも片田舎で過ごしていた

裕福ではなかったが、母親と二人で静かに、幸せに暮らしていた

学校ではそれなりに友達も居たし、元気に遊んでも居た

それが崩れ去ったのは、タイタン戦争で母親が戦火で死んだ時だった

タイタン戦争終結後、シャルロットはどうしていいか分からず、途方に暮れていた

そんな時、父親の部下を名乗る男が現れて、シャルロットをデュノア社に出迎えた

そして、初めて出会った父親は涙を流しながら、シャルロットを抱きしめた

なんでも、父親がシャルロットが産まれていたのを知ったのは、戦後だったらしい

それまで父親は、方々手を尽くして母親を探したらしい

だが、母親は中々見つからず、軍需企業としてのツテで手に入った生存者名簿の中に、母親の旧姓と同じ名前を持つシャルロットの名前を見つけ出したのだ

父親は結婚した女性に気付かれないように、部下を動かしてシャルロットに迎えを寄越したらしい

その後は父親のおかげで、数ヶ月は平穩に過ごせた

だが、そんなある日

突如として、父親と結婚した女性

つまりは、正妻が自身の子飼いの部下を引き連れて、シャルロットの住んでいた家に押し入ってきたのだ

正妻子飼いの部下達により、父親の部下達は殺されてしまい、シャルロットも殺されそうになった

だが、それを父親がギリギリで止めた

その後シャルロットはまるで、奴隷のような扱いを受け、父親は全ての権限と部下を奪われて閑職へと追いやられた

そんなある日、正妻はシャルロットにパイロットとしての適性が非常に高いことに気づき、シャルロットをテストパイロットとして使うことを決めた

だがE.U軍が求めていたのは、ビーム兵器を運用可能な新型機であり、デユノア社は

ビーム兵器の開発に失敗していた

中々成果を出さない開発陣に業を煮やし、母親はシャルロットを産業スパイとして使うことを決めた

産業スパイは見つかれば、ほとんどの場合で死刑になる

もし見つかっても、知らぬ存ぜぬを決め込めばいい

正妻はそう判断して、シャルロットを敢えて男装させて初音島に送り込んだ

だが誤算だったのは、シャルロットを男装させたスタッフのなかに、父親派の人間が居たことだった

しかもシャルロットが初音島で保護されて、父親派の人間が父親を軟禁されていた屋敷から解放

更に、シャルロットを産業スパイとして初音島に送ったことをマスコミや政府に流したのである

それにより、正妻は失脚

父親が社長の椅子に座ったのだ

だが、その矢先にユーラシア連合がEUと日本帝国に宣戦布告

父親はユーラシア連合の攻撃により、帰らぬ人となってしまった

「考えてみたら、僕にはもう……両親が居ないや……」

改めてそう思うと、シャルロットの目から涙が流れた

そのタイミングで、一夏が両手にトレイを持って現れた

「シャルロット、頼まれたピラフ買って……どうしたの？」

一夏はシャルロットが泣いてるのに気づき、トレイを置いてシャルロットの肩を掴んだ

「え？ なにが？」

シャルロットは泣いていることに気づいておらず、首を傾げた

「シャルロット、泣いてるぞ？」

「え？ ……あれ、おかしいな……なんで？」

一夏に言われて初めて自覚したのか、シャルロットは目元を拭いた

だがそれでも、涙は止まらなかった

「ごめんね、すぐに泣き止むから……」

シャルロットはそう言っ、なんとか涙を止めようとしたが、中々止まらなかった  
それを見て、一夏は少し考えると

「ん」

とシャルロットの頭を優しく抱きしめた

「い、一夏……？」

シャルロットが首を傾げていると、一夏はシャルロットの頭を優しく撫でながら

「泣きたい時は泣いていいんだ……そうじゃないと、壊れてしまうからな」

と言った

「ありがとう……っ、うああああ……っ！」

一夏の言葉を聞いて、シャルロットは一夏の胸の中で泣いた

その涙は、シャルロットが初めて人前で流れた涙だった

一夏はシャルロットが泣き止むまで、シャルロットの頭を撫で続けたのだった

## デート 一日目の終わり

昼食後、二人は新しい目的地に向かって歩いていた

「次は観覧車だっけか？」

「うんー！」

二人が向かっていたのは、世界中で一番高いと噂の観覧車である

一番高い場所まで到達したら、初音島全体を見渡すことが出来るのだ

「凄い並んでる……」

「まあ、俺達には関係ないがな」

シャルロットは並んでる人数を見て呆然とするが、一夏はそれを尻目に係員に近づいた

「パスを拝見します」

係員に促されて、二人はパスを見せて入った

「どんな高さまで行くのかな？」

「案内板によると、高さ八百メートルまで行くらしいぞ」

シャルロットが疑問に首を傾げていると、一夏が入り口で見た看板の内容を見ていた

ので答えた

そう話している内に、観覧車は少しずつ上に登っていった

太陽は季節故かだいぶ沈んでおり、空は茜色に染まっていた

そして、茜色の太陽光が一夏の顔を横から照らしており、シャルロットからは見たら  
(一夏、カッコイいなあ……)

という風に見えていた

シャルロットがポーツと見惚れていると、一夏が外を指差して

「シャルロット、初音島全体が見えるぞ！」

と言った

「え、ほ、本当!?!」

一夏の言葉でハツとしたシャルロットは、慌てて外に視線を向けた

その光景は確かに、初音島全体が見えていた

一年中桜が咲き乱れる、不思議な島

だけど、人と人の繋がりが強く、温もりが暖かい島

シャルロットは生活し始めて僅か一年足らずだが、心の底からこの初音島が好きになつていた

自分を受け入れてくれたことや、何よりも一夏に会えたからである



だから

「絶対に……守ろうね……この島を」

と呟いた

シャルロットの呟きを聞いて、一夏はキョトンとしてから

「ああ……」

と呟いた

数分後、二人が乗ったゴンドラは一番下まで降りたから、二人はゴンドラから降りた  
そして、幾つかの遊具を回ってからホテルへと戻った

「お二人の部屋は最上階の1030号室です」

係員からカードキーを受け取ると、二人はエレベーターに乗った

そして、最上階のボタンを押すと、エレベーターは静かに登り始めた

だが、最上階の一階手前で止まった

二人は一瞬首を傾げるが、すぐに気付いた

ボタンの下に、カードリーダーがあつた

一夏が自分を持っていたカードを通すと、エレベーターはまた動き始めた

そしてすぐに止まると、エレベーターのドアが開いた

二人が降りると、ドアはすぐに閉まった

二人が視線を左右に向けると、今まで見たことないほどに豪華な装飾の廊下が見えた。赤く柔らかい絨毯、シックで落ち着いた雰囲気の家具

額縁に納められた見事な絵画

それを見ただけで、二人は思わず

(場違いだなあ……)

と思つた

「と、とりあえず、部屋に向かうぞ！」

「う、うん！」

気を取り直して、一夏とシャルロットは廊下の壁に掛けられているプレートを見て、自分達の部屋へと向かった

そして、部屋に到着すると、今度はシャルロットが持っていたカードキーでドアを開けた

そして、中に入って二人は固まった

まず、二人だけで泊まるには過剰な広さの部屋

落ち着いた雰囲気ではあるが、明らかに高そうなインテリア

白く柔らかい絨毯

何よりも、キングサイズのベッドが一つに2つの枕

ベッドはそれだけだった

その光景に二人が固まっていると、チャイムが鳴った

「は、はい！」

チャイムで驚きながらも、一夏は返事した

すると、ドアを挟んで

『織斑様、デュノア様、御夕食の準備が整いました』

という声が聞こえた

「は、はい！ わかりました！」

一夏がそう返事をする、ドア向こうの気配は消えた

「何者なんだ……このホテルのボーイは……」

一夏はそう呟くと、隣でポーツとしていたシャルロットに視線を向けて

「シャル、夕食だよ」

と声を掛けると、シャルロットはハツとして

「う、うん！ わかった！」

と言うと、クルリとドアへと向かったが、すぐに止まると振り向いて

「レストランだよね？」

と一夏に問い掛けた

「ああ……確か、一階下だな」

一夏は頷くと、シャルロットと一緒に部屋を出た

そして、エレベーターで一階下に降りると、すぐに目的のレストランが見えた

だが、中に居るのは明らかにスーツやドレスで着飾った人達だった

その光景を見て、二人は

「凄い場違い……」

と呟いた

「というか、俺。スーツなんて持つてきてきてないぞ?」

「僕だって、ドレス持つてきてないよ……」

二人がそう話し合っていると、ボーイが近寄ってきて

「こちらでご利用してあります」

と言いながら、頭を下げた

「え、あるんですか?」

「はい……ドレスやスーツをお持ちでないお客様のために、当方で用意してあります」

シャルロットからの問い掛けに、ボーイは恭しく頭を下げながら答えた

ボーイの説明を聞いて、二人は顔を見合わせると

「お願いします」

と頭を下げた

そして数分後、二人はボーイに案内されてとある一室に通された

そこにあるのは、二つの大きなボックスだった

「こちらの端末に、身長とスリーサイズを入力してください」

ボーイに促されて、二人は端末にそれぞれ入力した

「それでは、デユノア様はこちらへ。織斑様はこちらへどうぞ」

ボーイの説明に従い、シャルロットは右側のボックスに、一夏は左側のボックスに入った

そして、十数分後

「うおー……着慣れないから、凄い違和感……」

一夏は白いスーツを着て現れた

その十数秒後、ゆつくりとシャルロットが現れた

現れたシャルロットが着ていたのは、オレンジ色を基調としながらも華やかすぎずシャルロットの魅力を引き立てるドレスだった

「ど、どうかな……?」

シャルロットが問い掛けると、それまで固まっていた一夏はハッと気を取り直して

「に、似合ってるぞ!」

と言うのが、精一杯であった

「ありがとう一夏！」

誉められたシャルロットは、輝くような笑みを浮かべた

そして、数秒後

「それでは、席にご案内します」

とボーイは案内を始めた

「こちらでございませす」

二人が通されたのは、窓際の席だった

「凄い景色……」

「ああ……」

二人は窓から見える景色を見て、呆然と呟いた

すると、カートを押しながらボーイが現れて

「お飲み物と前菜です」

と言いながら、二人の前にグラスと料理の皿を置いた

「それでは、ごゆっくり」

ボーイは恭しく頭を下げると、静かにカートを押していった

「とりあえず、食べようか」

「だな」

シャルロットの言葉に、一夏は頷いた

数十分後

「美味しかったね……」

「ああ……」

二人はレストランから出て、部屋へと戻っていた

なお、着ているのはドレスとスーツのままである

これは、料理を食べ終わった二人は最初は返却しようとしたのだが、宿泊期間は貸し出すことになっているらしい

しかも、二人の服は既に部屋に届けられているとか

それを聞いた二人は、仕方なくそのままの服装で部屋へと戻った

そして、一つの事実を思い出した

(そうだった……ベッド、一つしかなかった!!)

この部屋には、ベッドが一つしかないという事実

とりあえず二人は、キャリーバックの中から寝間着を取り出して入浴を済ませて着替え  
えた

だが、目の前のベッドが異様な存在感を醸し出している

二人はしばらく沈黙していたが、一夏が先に

「シャル。シャルがベッドで寝ろよ……俺はソファで寝るから」

と言って、身を翻そうとした

だが、その一夏の手をシャルロットが握って

「ダメだよ！ ソファで寝たら、一夏が風邪引いちゃうよ！」

と引き止めた

「だけだよ……」

シャルロットの言葉を聞いて、一夏は躊躇いの言葉を口にした

すると、シャルロットは顔を赤くしながら

「だからさ……」緒に寝よ？」

と告げた

予想外だったのか、ビシリと一夏は固まった

「……一夏？」

シャルロットが上目遣いで名前を呼ぶと、一夏はようやく我に帰り

「い、いいのか……？」

と問い掛けた

すると、ゆつくりとではあるが頷いて



「一夏なら……いいよ？」

と告げた

シャルロットの言葉を聞いて、一夏は決意したのか、ベッドの方に体を向けて

「わかった……一緒に寝よう」

と言った

一夏の言葉を聞いて、シャルロットは笑みを浮かべて

「うん！」

と頷いた

そして数分後、二人は背中合わせではあるが、ベッドに入っていた

「お、おやすみ……一夏」

「お、おう……おやすみ」

二人は緊張感からか、顔を赤くしながら眠りに就いたのだった

## 二日目始まり

二日目、一夏とシャルロットは起きあがるとルームサービスが朝食を部屋で取った  
そして、どこに行くか話し合っていた

「それじゃあ、今日はどこに行く？」

「うーむ……昨日は遊園地エリアに行ったから今日は別の所にするか」

シャルロットの問い掛けに一夏はそう言うと、マップを広げた  
残りはアクシオン重視とプール、そして自然公園となっている

「それじゃあさ、プールに行こうよ」

シャルロットはそう言うと、プールエリアを指差した

プールエリアは室内式になっていて、一年中遊べるようになっていて

今は10月に入っていて、プールとしては季節はずれではあるが、二人は水着を持っ  
てきていた

シャルロットの提案を聞いて、一夏は少し考えてから

「そうだな。行くか」

と頷いた

その後、二人は準備を終えるとプールエリアに向かうことにした

数分後、二人はプールエリア入口に向かっていた

とはいえ、各エリアに入るためには一度中央に向かわないといけないのだが

そして、その中央で二人は意外な人物を見つけた

「ねえ……あれって、直哉だよね」

「んお? ……あ、マジだ。直哉だ」

シャルロットが指差した先を見て、一夏は思わず首を傾げた

「隣に居るの……誰だ?」

「さあ……?」

直哉の隣に、見覚えのない長い黒髪の女性が居たからである

二人で黒髪といえば、同期の箒か同部隊の上官の一人の菊理しか居ないのだ

だが、その二人ではない

二人とは身長が違った

二人が知らないのも、無理はない

直哉の隣に居るのは、日本帝国近衛軍の篁唯衣であった

なぜ、直哉と唯衣が一緒に居るのかというと、唯衣が誘ったのである

過日に買い物に行った際、そのショッピングモールにてくじ引き大会がやっていて、

唯衣が引いた所、さくらパークのチケットが当たったのである

そして唯衣は近くに居た直哉を誘い、直哉も受諾したのだ

「声、掛けてみつか？」

「ううん、やめとこうよ。彼女さんだったら、悪いし」

一夏が問い掛けると、シャルロットは首を振った

シャルロットはそう言うが実際、直哉と唯衣は付き合つてなどいない（唯衣は意識しているが）

そして、二人が話し合っている内に直哉と唯衣の二人は遊園地エリアに入つていった

二人はそれを見送ると、揃つて

「彼女……なのかな？」

「さあ……？」

と首を傾げた

その後、二人はプールエリアに入り着替えることにした

一夏は男なので着替えもすぐに終わり、更衣室出口付近のマップ看板の横で待つことにした

「ねえねえ、あのイケメン。誰？」

「声掛ける？」

「いい身体してるわねえ」

一夏を見た女性達がそう言うが、一夏は自分のことだとは思わずにシャルロットを待つていた（一夏の格好は原作の水着に白いパーカー）

そして、数人の女性が一夏に声を掛けようとした時

「一夏、お待たせ！」

とシャルロットが現れた

そして、シャルロットと親しげな一夏を見て女性達は

「ジーザス！ 神は居ないの!?!」

「やっぱり、彼女位居るわよねえ……」

「負けた……あれは勝てない……」

と落胆した様子で離れていった

その光景を見て一夏は首を傾げ、シャルロットはさり気なくガッツポーズをした

そして、二人してマップを見ながら

「そんじゃあ、どこに行くか」

「流れるプールとかどう?」

と話し始めたのだった

こうして、二日目のデートが始まった

## 二人のデート Y&amp;Nルート

一夏達がプールに行っている時、直哉と唯衣は遊園地エリアに居た

唯衣が直哉を誘った形ではあるが、唯衣は非常に緊張していた

まず、こういう所に来るのが初めてであり何よりも、意識している直哉が居るからだ  
直哉と唯衣の年齢は一歳違いで、直哉の方が年上である

そして今回は、有る意味予想外のデート（唯衣にしては）だった

まさか、寄ったシヨッピングモールでくじ引き大会がやっているとは思わず、しかも、  
自分が特賞を当てるとは思わなかったのだ

特賞を当てると、唯衣はさくらパークのことを直哉に聞いた

そして、微塵も躊躇わずに直哉を誘ったのだ

そして直哉の休暇である今日、さくらパークに来た

唯衣の心臓は緊張でうるさい位に高鳴っており、必死に静めようとしたが無理だった

唯衣は右隣に居る直哉に、視線を向けた

直哉は唯衣とはぐれないようにと、唯衣の右手を優しく握っていた

それが、唯衣の心臓を高鳴らせている理由だった

しかしながら、唯衣は直哉に何があったのか気になっていた

黒かった髪は白くなり、右目は赤く左目には眼帯がしてあり、しかも眼帯の下からは何かの駆動音すら聞こえた

何よりも、今の直哉からは危うい均衡を保っているように感じた

少し触っただけで割れるような、まるでシャボン玉のような危うさを

そして、唯衣が聞こうかどうか迷っていると、直哉は立ち止まり

「で、どのエリアに行く?」

と振り向きながら、唯衣に問い掛けてきた

そこで唯衣は我に帰ると

「どういふことだ?」

と直哉に問い返した

すると、直哉は左奥の大きなドームを指差して

「まず、アレがプールエリア」

と説明を始めた

「次に、アクション系重視エリア」

と指差したのは、右奥側のゲート

「こっちは自然公園系で」

次に唯衣の右側を指し示し、最後に左側を指差して

「んで、定番の遊園地エリアだ」

と説明すると、唯衣はホウと感心した様子で頷き

「エリア毎に分けられているのか」

と呟いた

「ああ……このさくらパークは初音島唯一の一大娯楽施設だからな。経営者の指針故か、1日じゃ遊びきれないがモットーらしい」

直哉がそう言うのと、唯衣は顎に手を当てて

「ふむ……流石に、水着は無いからな……」

と呟くと、直哉が端末を取り出して

「貸し出しが有るみたいだぞ」

と言って、画面を見せた

唯衣がその画面を見ると、色とりどりの水着を着た男女が映っていた

それを見て、唯衣は少し考えてから

「遊園地にしよう」

と言った

「わかった。行こうか」



唯衣の言葉を聞いて、直哉は唯衣の手を握って遊園地エリアへと向かった  
この時唯衣は心中で

(いきなり水着は、恥ずかしい……)

と思っていた

そして、遊園地エリアに入ると直哉はマップを端末に表示させて

「どこから行く？」

と唯衣に見せた

唯衣は端末を見ると、数秒間黙考してから

「では、ここから行こう」

と定番のお化け屋敷を指差した

「あいよ。行こうか、唯衣」

直哉はそう言うのと、唯衣の手を握って歩き出した

「ああ……直哉」

お互いに階級を付けないのは、周囲の人間に自分達が軍人ではないと思わせるためである

だが唯衣としては、直哉に呼び捨てにされたのが嬉しくって、笑顔を浮かべた  
こうして、二人のデートは始まったのだった

## プールハプニング

一夏はシャルロットの提案に乗って、ウォータースライダーに来ていた

このウォータースライダーは、高さ20メートルから一気に滑り降りる物で、直滑降のタイプとグルグルとなってる螺旋タイプがあった

ただ、螺旋タイプは長蛇の列と化しており、最後尾には看板で《30分待ち》と書かれていた

それを見た二人は、軍人としての思考が働いて、全く並んでいない直滑降タイプの方に並んだ

なお、このウォータースライダーのタイトルは《ナイアガラ》と言うらしい

二人がエレベーターで上まで行くと、係員が

「いらつしやいませ」

と頭を下げた

そして、二人が係員に近づくと、係員はスライダー入り口を指差しながら

「二人一組の場合は、彼氏さんが彼女さんをこう、背後から抱き締める感覚で支えてくだ

さい」

と説明して、一夏は頷いた

実際、二人は付き合っていないのだが、些細な問題らしいので一夏は別に否定しなかった

しかも、シャルロットは一夏が否定しなかったのが嬉しかったのか、僅かに頬を赤らめていた

そして、係員に教えられた通りにすると

「それでは、準備はよろしいですか？」

と係員が問い掛けてきたので、二人は頷いた

すると、係員は横にあるスイッチに手を伸ばして

「では、スタート！」

とスイッチを押した

すると、二人の前にあつたバーが上がり、二人は一気に滑り出した

その直後、急斜面を二人は物凄い勢いで滑っていった

二人は見ていなかっから知らなかったのだが、直滑降タイプはなんと80度というほぼ直角だったのだ

それが怖くて、ほとんどの人は螺旋タイプに並んでいたのだ

だが、軍人として色々な訓練を積んだ二人にとっては、急降下など大したことはな

かった

だが

「わぷっ!!」

「おわっ!!」

二人はその勢いのまま、スライダー下のプールに着水

二人の顔に水が掛かった

「シャル、大丈夫……」

一夏の言葉は、途中で止まった

そして、答えようとしたシャルロットは顔を真っ赤にした

なぜなら、シャルロットの水着の上の方が、一夏の手の中にあつたからである

「わ、悪い!」

一夏は慌てて謝りながらシャルロットに水着を返して、着ていたパーカーをシャル

ロットに掛けた

シャルロットは顔を真っ赤にして

「アウアウアウ……」

と言葉を漏らすだけだった

この後、一夏は近くのトイレにシャルロットを連れていき、水着を直させた

そして、シャルロットが出てくると一夏は「すまん」

と深々と頭を下げた

シャルロットはまだ恥ずかしいらしく、顔を赤らめたまま

「一夏つて、たまにワザとやってるんじゃないかって思うよ……」

と呟いた

すると、一夏は狼狽した様子で

「そんなつもりはないんだが、何故かこういう事が起きるんだよ！」

と言った

すると、シャルロットはクスリと笑って

「一夏のラッキースケベ♪」

と言うと、一夏のパーカーを羽織ったまま歩き出した

「シャル、待ってくれよ！」

シャルロットが歩き出すと、一夏は慌ててシャルロットの後を追い掛けていった

そして、二人は次のプールへと向かっていった

## 二人のプールデート

一夏とシャルロットはウォータースライダーから出ると、次のプールへと向かった。到着したのは、巨大な8の字状の流れるプールだった。

「結構、流れが早いね……」

「だな。それに、人も多い」

二人が見ている先では、結構な人数が早いペースで左から右へと流れていつている。もし、普通に入ったらはぐれてしまうのは簡単に予想出来た。

そして、一夏が周囲を見回していると、一カ所で浮き輪の貸し出しをやっていた。

「シャル、アレだ」

「え？ ……あ、なるほど」

一夏の言葉を聞いて一瞬首を傾げるが、すぐに意図を察してシャルロットは頷いた。そして、二人で近づいて一夏は手首に付けていたバンドの裏に刻印されているバーコードを読み取らせて、浮き輪を一つ借りた。

そして、プールに近づいて浮き輪を水面に浮かせると

「シャル」

「うん！」

シャルロットは浮き輪に座るように乗り、一夏はそれを確認すると、自身もプールに入って浮き輪を押し流れるプールに入った

形としては、シャルロットの乗った浮き輪が先頭になり、一夏が引かれているように見える

だが、実際は一夏が押している

「ねえ、大丈夫？ 僕重くないかな？」

心配になったシャルロットが問い掛けると、一夏は笑みを浮かべて

「大丈夫だって。シャルロットは元々軽いし、水に浮いてるから、重さなんて感じないよ」

と一夏は笑みを浮かべた

実際問題、シャルロットは同年代の平均より軽く、しかも水面に浮き輪で浮いているので、大して重さを感じない

そして押していると、シャルロットが

「一夏、この先で二つに別れてるよ」

とシャルロットが告げた

それを聞いて、一夏は少し体をズラして先を見た

すると、確かに先で左右に別れていた

右側の方は、どうやら少し下り坂になっていているらしい

しかも、流れが少し急らしく、人も少なかつた

一夏は少し考えると、シャルロットに視線を向けて

「シャル、中に」

と端的に言うのと、シャルロットは一夏の意図を察して、浮き輪の穴に入った

そして、二人して右側へと向かつた

その直後、二人は倍近い速度で流れ始めた

「結構早いな!」

「だね! これは、結構怖いかも!」

二人が驚くのも、無理はない

二人が居るのは、どうやら地下になっているらしく、薄暗い

しかも、左右の壁に取り付けられているライトが残像すら残す勢いで前から後ろに流

れていく

正直言つて、このルートを考えた奴の正気を疑うレベルである

だが、スリル満点で二人は楽しんでた

しばらく流されていると、少しずつスピードが落ちてきていた



しかも、前方に光が見えてきた  
どうやら、出口が近いらしい

「一夏！」

「ああ、見えてる！」

シャルロットが指差すと、一夏は頷いた

その数秒後、一夏とシャルロットは光へと飛び出した

最初は眩しくて目を手で翳していたが、すぐに視界は治つた

そして、前を見ていると

「お疲れ様です。大丈夫ですか？」

と係員が声を掛けてきた

前方を見ると、遮断機が降りている水路が見えた

どうやら、そこから合流するらしい

そして数秒後、遮断機が上がり

「どうぞ、進んでください」

と係員が告げて、二人は前に進んで合流した

そして後方を見ると、二人は顔を見合わせてから

「もう一回行く？」

「ああー！」

と笑いあつた

まだ、プールデートは終わらない

## 軍人の慟哭

直哉と唯衣の二人は、定番としてメリーゴーランドに乗ってから、コーヒーカップに乗った

そして今は、少し早めの昼食を取っていた

直哉が取りに行っている間に、唯衣は周囲を軽く見回した

一年中桜が咲く不思議な島国でありながら、やはり、日本帝国に近い雰囲気があった紅葉に混じって桜の花びらが舞い、秋空に桜の木が栄えている

最初は違和感を感じたが、今では良いと思っている

そして、そんな初音島に居るからか、唯衣は早く祖国を取り戻したいと思っているいや、それは唯衣だけでなく、全日本人が思っているだろう

その矢面に立つて戦うのが、帝国軍人たる自分の役目だ

と唯衣は自身に言い聞かせた

その時、直哉がトレイを両手に持って戻ってきた

直哉の姿を見て、唯衣は

「後で、直哉に話を聞かないとな……」

と呟いた

直哉と約十年振りに再会して、唯衣は直哉の変貌に驚ろいた

黒かった髪は白く右目は赤に変わり、左目に付けられた眼帯の下からは、何らかの駆動音が聞こえた

確かに、成長することは予想していた

だが、予想外の変貌に驚愕した

再会した時には聞けなかったが、今日こそは聞こうと心に誓っていた

「お待たせ。確か、唯衣はスパゲッティだったな」

「ああ」

唯衣が頷くと、直哉は右手に持っていたトレイを唯衣の前に置いた

「流石に、和食は無かったな」

「まあ、予想はしていたよ」

二人はそう会話すると、手早く食事を始めた

二人共に軍人なので、基本的に食事は早い

だが、唯衣は自身が食べているスパゲッティの味に懐かしさを覚えて、手を止めた  
味付けがなんとなく、母が作ってくれたスパゲッティに似ていたからだ

唯衣の家は古くから続く武士の名家で、日本帝国を昔から守ってきた防人の一族であ

る

それ故か、食事は基本的に和食ばかりだった

だが、何回か母が洋食を作ったことがあった

ハンバーグやスパゲッティなど、母は元々料理好きだったから、色々作っていた父がタイタン戦争の時に、烈火に乗って前線に向かい、帰ってはこなかった

なんでも、現地の民間人の避難の時間を稼ぐために奮戦し、最後の一体と相討ちになつて戦死した

帰つてきたのは、父が残した家宝の刀と家族写真だけだった

覚悟はしていたが、実際にそうなると、唯衣は泣き叫んだ

母はそんな唯衣を優しく抱き締めて、泣き止むまで頭を撫でてくれた

その数ヶ月後、唯衣は正式に帝国近衛軍人の士官となり、父の背中を追い掛けながら、母から料理を教わった

だが、その母もユーラシア連合の侵攻により、生死不明になった

唯衣個人としては、生きていることを信じたかった

だが軍人としては、死んでいると分かっていた

唯衣の家があつた地域は、ユーラシア連合軍のMS部隊のミサイルと砲撃により吹き

飛んだ

部下だった雨宮中尉は氣遣っていたが、その時は外面的には冷静だった

だが、心中では怒りの炎が大きく燃え上がっていた

唯衣は何回も母に対して、避難を促した

だが、母は頑なに『唯衣が帰ってくるべき家を守るのが、私の役目よ』と譲らなかった

(母様……)

唯衣が母を思っていると、直哉が

「どうした？」

と問い掛けた

「む？ なにがだ？」

直哉の言葉の意図が分からず、唯衣は首を傾げた

すると直哉は、唯衣を見ながら

「泣いているぞ？」

と言った

「え……？ つ………なんで？」

直哉に言われて、唯衣は自身の目元に手を持っていき、自分が泣いていることに氣付いて驚いた

「す、すまない……なぜ……？」

唯衣はなんとか泣き止もうとするが、全然涙は止まらなかった  
すると、直哉は立ち上がって唯衣に近寄って

「俺では役不足かもしれないが……」

と言うと、直哉は唯衣の頭を優しく抱き締めた

「な、直哉……？」

唯衣が不思議そうに問い掛けると、直哉は唯衣の頭を撫でながら

「泣くのは、我慢すべきではない……泣きたいなら、泣いていいんだ」  
と告げた

すると、唯衣はグツと齒を食いしばって

「すまない……ありがとう……っ！」

と言うと、静かに泣き始めた

それは、押し殺していた感情の奔流だった

部下やユウヤ達の前では気丈に振る舞い、指揮官として、軍人として、冷静に、しかし熱く戦った

だが、それも限界に達してしまった

軍人としての篁唯衣ではなく、一人の人間として

一人の篋唯衣として、直哉の胸の中で泣いた  
そして直哉は、そんな唯衣が泣き止むまで、静かに、黙って唯衣の頭を撫で続けた  
それは、一人の年頃の少女の慟哭だった



## 占い

直哉と唯衣の二人は、泣き止むと手早く食事を終わらせて、さっさとフードコートから去った

そして、人気の無い場所まで移動すると

「すまない……みつともない姿を見せた」

と唯衣は頭を下げた

「いや、唯衣だつて人間なんだ。泣くのは普通なんだ」

直哉がそう言うと、唯衣は微笑みながら

「そう言ってくれると、助かる……」

と言うと、深呼吸してから

「では、次はどこに行こうか？」

と直哉に問い掛けた

すると直哉は、端末を取り出して

「どこにするか……」

端末に表示されてるマップを見ながら、考え始めた

すると、隣から端末を覗いていた唯衣が

「ここはどうか？」

と一カ所を指差した

「ふむ……行こうか。距離も近いようだ」

唯衣の指し示したアトラクションを見て、直哉はそう言った

唯衣が指し示したアトラクションは、所謂乗り物系だった

数分後、直哉と唯衣の二人は目的の場所に到着

列に並んだ

「しかし、本当に結構な数のアトラクションがあるな」

唯衣がそう言うと、直哉が端末を取り出して

「遊園地エリアだけでも31個有って、全部合わせると、優に百を超えるな」

と答えた

すると、唯衣は感嘆の溜め息を漏らして

「本当に多いな……1日では遊び尽くせないな」

と言った

すると直哉は、端末に表示されてるマップの一カ所を指差して

「だからここに、大きなホテルまで建てたらしい。まあ、日を跨いで遊びに来る人は少な

いらしいがな」

と言った

直哉は気づいていないが、このさくらパークに一夏とシャルロットが来ており、まさしく日を跨いで遊んでいた

「よくここまで大きくしたものだ」

「本当にな」

唯衣の感心したような言葉に、直哉は同意して頷いた

そのタイミングで

「次の方、どうぞ」

と促されて、二人は入った

そして、中に入ると卵型の乗り物に二人で入った

「本日はお越しいただき、誠にありがとうございます。これより、フェイトスカイのご説明を致します」

係員は一礼すると、横のモニター画面を操作した

すると、《フェイトスカイ》というアトラクション名から、説明へと変わった

「このフェイトスカイは、これから空への旅を始めます。お客様方はしっかりとベルトをお締めになり、決して身を乗り出さないようにお願いいたします。尚、最後には隣に

座っている方同士で相性を計り、運勢を占います。お楽しみにしてください。それでは、ごゆっくりとお楽しみくださいませ」

係員が一礼すると、ジリリリという音がしてから、二人が乗った座席がゆっくりと動き出した

そして少しすると、ゲートを超えて青い空が見える空間に出た

「これは凄いな……室内だというのに、本物の空みたいだ」

と唯衣が感嘆した様子で言うと、直哉が頷いて

「本当にな……恐らく、さくら様辺りの技術かな？」

と言った

「さくら様とはもしや、大統領の芳野さくら様か？」

唯衣が問い掛けると、直哉は頷いた

「ああ……さくら様は大統領だが同時に、風見総合学園の学園長でもあるし、生粋の科学者でもあるんだ」

直哉の説明を聞いて、唯衣は感心したように頷いて

「色々やっている方なんだな」

と呟いた

「ああ……それに大のイベント好きでな、一年に四回は必ず何かしらの催しを行うな」

直哉はそう言うのと、端末を取り出して操作してから唯衣に見せた

「これは？」

「去年7月に行われた天の川観察だな。わざわざ、島中の電気を消して、天の川観察をしたんだ」

「研究者らしいイベントだな」

直哉の説明を聞いて、唯衣はそう言った

すると、直哉は再び操作して

「他には、大コスプレ大会や島全体を使ったマラソン大会なんかだな」

と見せた

そこには、色々な服装の人達が街中に居たり、ゼッケンを付けた人達が走っているのが写っていた

「本当にイベント好きなんだな」

「ああ……だからかな、三期連続で当選してるな」

直哉の言葉を聞いて、唯衣は頷いて

「人気になるのも頷ける」

と言った

そして、少しの間アトラクションを楽しんでいると、終わったようで、二人が座って

いた座席は速度を緩めた

すると、機械音声で

『お二人の相性は良好です。ですが、前途多難な道と残酷な真実が待っているでしょう』

と占い結果が告げられて、二人の間のスリットから紙が排出された

それを取ると、同じ内容が書かれてあつた

そして、座席が止まると

「お疲れ様でした。隙間に注意して、ゆっくりとお降りください」

と係員は言いながら、二人のベルトを外した

そして、直哉が先に出てから、唯衣に手を貸して立たせた

「さて、次はどこに行くか」

直哉はそう言うが、唯衣は

(残酷な真実とは、一体……)

と紙に書かれてある占い結果が気になっていた

「唯衣？」

直哉が呼ぶと、唯衣は我に帰り

「いや、大丈夫だ」

と返答すると、次のアトラクションへと向かった

## 迷子の女の子

流れるプールから出た後、一夏とシャルロットの二人は昼食を終えた

そして、次のプールを決めかねていた

「次はどうすつか……」

「そうだねえ……」

二人はマップを見ながら、唸っていた

すると、シャルロットがマップの一角を指差して

「ここはどうかかな？」

と提案した

それを見て、一夏は少し考えてから

「OK、行くか！」

と言うと、目的地目掛けて歩き出した

歩いて数分後、一夏とシャルロットは目的地

波の起きるプールに来た

どうやら、丁度波が発生する時間らしく、かなりの人数が集まっていた

「凄い人数だね……」

「そうだな……はぐれないように、手繋ぐか」

シャルロットの言葉に同意すると、一夏はシャルロットの手を掴んだ

それだけで、一夏に恋する少女、シャルロットは鼓動が早まり、顔が赤くなった

そして、一夏が先導する形で二人は中腹辺りまで進んだ

中腹辺りの人口密度はかなり高く、二人はほぼ抱き合っているような形になっている  
なお、この時点でシャルロットの鼓動はマックスに鳴り響き、顔も真っ赤になっ  
た

軍人としては、本来だったら落ち着くべきだろう

だが、シャルロットにとってはそんな事は二の次である

意中の人物である一夏と、抱き合っている

それにより、シャルロットは半ば妄想の中に浸っていた

その時だった

「シャル！」

と一夏が呼ぶ声がして、シャルロットの意識は現実に戻った

その直後、シャルロットの顔に波が当たった

「わぷっ!?!」



「大丈夫か？ 波が起きるって、放送があつたら？」

「どうやら妄想に浸る余り、放送を聞き逃し、波の直撃を受けたらしい」

（うわあ……！ やっちゃったあ！ 一夏にアホな子って思われてないかな!?）

と半ばパニックになっていると、再び

「来るぞ！ 跳べ！」

と一夏が言つて、シャルロットは反射的にジャンプした

すると、波を飛び越える形になり、不思議な感覚がした

フワリと低重力に浮く感覚だった

感覚としては、エレベーターに近いものがあつた

それがなんだか楽しくつて、シャルロットは年相応の笑みを浮かべて

「アハハハ！ 楽しいね、一夏！」

「ああ！」

シャルロットの笑みを見て、一夏は満足そうに頷いた

シャルロットの笑みは、一夏が望んでいた笑みだった

何にも縛られずに、一人の少女としてのシャルロットとしての笑み

その笑みを見られて、一夏は満足した

数分後波が止まり、二人はなんとか波の起きるプールから出た

だが、シャルロットは自分の水着が軽く引つ張られていることに気づいた

不思議に思い、シャルロットは背後に視線を向けた

「あれ、君は……」

そこに居たのは、一人の小さい女の子だった

大体、六歳位だろう

不安げに瞳を揺らしている

「どうした？」

同じく女の子に気づいたらしく、一夏がしやがんで視線を合わせながら女の子に問い掛けた

すると、女の子は目尻に涙を浮かべながら

「なのはママ……居ないの……」

と呟くように言った

「そっか……一夏」

「ああ、探してやるか」

シャルロットの意を汲んで、一夏はそう答えた

もちろんのことだが、このプールエリアにも迷子センターはある

だが、その迷子センターは少し離れた場所に有り、今から行ったら、この近くに居る

だろう母親とすれ違ってしまう可能性が高い

それだったら、この近くで探した方が見つかる可能性は高い

そして、一夏は女の子に視線を合わせると

「君の名前は？」

「……ヴィヴィオ」

一夏の問い掛けに対して、女の子

ヴィヴィオは眩くように名乗った

「OK、ヴィヴィオちゃん。お母さんは俺達が探してやるからな」

「だから、安心していいよ」

二人がそう言うと、ヴィヴィオはおずおずと頷いた

その後、背の高い一夏がヴィヴィオを肩車して、ヴィヴィオの母親を探すことにした

「ヴィヴィオちゃんのお母さん！ どこですか!？」

「ヴィヴィオちゃんのお母さん！」

「なのはママー！」

と三人で呼び掛ける事数分後、長い茶髪をサイドポニーテールにした若い女性が駆け

寄ってきて

「ヴィヴィオ！」

と安心した様子でヴィヴィオの名前を呼んだ

「なのはママー！」

一夏が下ろすと、ヴィヴィオは母親

高町なのはに駆け寄って、飛び付くように抱き付いた

すると、なのはもヴィヴィオを抱き締めながら

「ごめんね、人波で手を離しちゃって……」

と謝っていた

すると、ヴィヴィオは首を振りながら

「ううん……あのお兄さん達のおかげで、大丈夫だったよ」

と答えた

ヴィヴィオの言葉を聞いて、なのははヴィヴィオを抱き上げながら立ち上がって

「今回はありがとうございました。私が手を離しちゃって、はぐれちゃったんです」

と頭を下げた

すると、一夏とシャルロットの二人は手を振りながら

「いえ、当然の事をしたままでです」

「僕達としても、見過ごせなかつたんで」

と言うと、二人はヴィヴィオに顔を向けて

「良かったな。お母さんが見つかって」

「もうはぐれちゃダメだよ？」

と言った

すると、ヴィヴィオは頷いてから

「ありがとうございます！」

と謝辞を述べた

その後、一夏とシャルロットの二人は、去っていく高町親子を見送りながら

「随分と若いお母さんだったな……」

「うん……」

と話し合っていた

しかし、それも仕方ないだろう

ヴィヴィオの母親、高町なのはの見た目は、大体10代後半から20代前半といった

所で、ヴィヴィオは大体、六歳位

もし、産んだとしたらかなり早くに産んだ計算になる

しかし、実際は違う

ヴィヴィオとはある任務の際に、保護した子供なのである

その後、ヴィヴィオがなのはに懐いて、なのはもヴィヴィオがまるで本当に自分の子

供のように思ったのである

そして、家族の了承も得ずに、なのははヴィヴィオを養子として引き取ったのだ  
なお、その際に兄と喧嘩したが、O☆<sup>高</sup>HA☆<sup>家</sup>NA☆<sup>式</sup>SHI☆<sup>決</sup>にて和解(?)した  
そして、今日は休暇を取ってヴィヴィオと一緒に遊びに来ていたのだ

しかし、波の起きるプールにて握っていた手を離してしまい、ヴィヴィオとはぐれて  
しまったのだ

皆さんも、迷子には気をつけましょう

そして迷子を見つけたら、迷子センターまで連れて行ってあげてください  
それだけでも、十分に親が見つけやすくなります

#### 閑話休題

そして、高町親子が見えなくなると、二人は遊びに戻っていった

まだ、終わるまでは長い

## それぞれ終わりの終わり

ヴィヴィオをなのはに会わせてから、一夏とシャルロットの二人は遊びまわった中には、よく考えたなあ。というプールもあった

空は茜色に染まり始めていて、二人の体には疲労が蓄積してきていた

一夏はグツと背伸びしてから、シャルロットに顔を向けて

「そろそろ上がるか」

と提案した

シャルロットも、ストレッチをしながら

「そうだね……少し疲れたし、いいかもね」

と同意した

こうして、二人は更衣室へと向かった

そして数分後、先に一夏が出てきて、遅れて数分後、シャルロットが出てきた

そして、ホテルへと戻る途中でクレープを買った

二人はベンチに座り、クレープを食べ始めた

「やっぱり、疲れた体には甘い物だな」

「うん。おいしいね」

一夏の言葉にシャルロットは同意しながら、クレープをパクついた  
そして二人は食べ終わると、紙をゴミ箱に捨ててから立ち上がった

「今日だけで、随分と泳いだな」

「だね。一年分泳いだ感覚だよ」

二人はそう会話しながら、ホテルへと戻った

すると、フロアに居たボーイがスツと近寄ってきて

「織斑様、デュノア様。水着をお預かりします」

と言いながら、恭しく頭を下げた

「え、でも……」

ボーイの言葉にシャルロットが戸惑っていると、ボーイが

「こちらでクリーニングして、明日にはお渡しいたします」

と告げた

すると、一夏とシャルロットは数瞬ばかり顔を見合わせると

「わかりました」

「お願いします」

と濡れた水着が入っているバッグを、ボーイに渡した



「承りました」

ボーイは二人からバッグを受け取ると、現れた時と同じようにスツと下がっていった  
ボーイが下がっていくのを見て、二人は思わず

「あのボーイ、何者なんだろ……」

と呟いた

何せ、近寄ってくるまで一切気配を感じさせないのだ

軍人たる二人からしたら、自分の能力を疑うのと同時に、ボーイの正体を疑った  
だがそれを問い掛けても、ボーイはこう返すだろう

「私は、当ホテルのボーイです」

と

そして、二人は気づいていなかったが、そのボーイの名札には《杉並》という名前が  
彫られてあつたり……

閑話休題

そして、部屋に戻った二人は食事の時間までノンビリすることにした

水泳というのは、普段使わない筋肉を使うために、意外と疲れるものなのだ

こうして、二人の二日目は終わった

場所は変わって、遊園地区画

そこでは、唯衣と直哉の二人が最後にと観覧車に乗っていた

観覧車はゆつくりと上に乗っていき、もうすぐで頂上である

二人が見ていたのは、茜色に染まった初音島だった

季節はもう少しで冬になるのに、桜が咲き乱れている

それが唯衣にとっては不思議で、直哉にとっては普通だった

観覧車に乗ってからは、二人共一切言葉を発していない

直哉としては話題が無く、唯衣としては聞きたいことが有るのだが、なかなか踏み切れずにいた

そして頂上に達して、降り始めようとした時、観覧車がガゴガゴという音を立てて止まった

「あっ!？」

止まった際に各籠が大きく揺れて、唯衣は座っていた椅子から倒れそうになった

だがそれは、素早く近寄った直哉が支えた

「大丈夫か？」

「ああ……助かった」

直哉の言葉に、唯衣が返答しながら椅子に座り直す

『只今、降りるお客様が倒れたために、緊急停止致しました。安全確保の為に、少々お待ち

ちくどきませ』

という放送がかかった

どうやら、トラブルらしい

「これは時間が掛かるな」

直哉はそう言うのと、唯衣の隣に座った

唯衣は直哉が隣に座ったのを意識して、顔を赤らめた

だが、すぐに

(今がチャンスだ)

と思った

唯衣は一旦目を閉じてから、眩くように

「直哉……お前に何があつた？」

と問い掛けた

すると、直哉は静かに唯衣に視線を向けた

「10年前に会つた時は、お前はそんな髪と目じゃなかった。何があつた……？」

唯衣がそう問い掛けると、直哉は天井に視線を向けて

「今から約八年前、俺は家族を殺されて、そして……誘拐された」

と語り出した

唯衣は口を開きかけたが、すぐに自制させた途中で口出しすべきではないと思ったからだ

すると、予想した通りに直哉は語り出した

「そして誘拐された俺は、研究所に連れていかれた……そこでは、俺と同じように世界中から誘拐してきた人間が大勢居た……」

直哉は其処まで語ると、一時辛そうにしてから

「そこでは、人体実験がされていた……」

と語った

「人体実験……」

唯衣が漏らすように呟くと、直哉は頷いて

「奴らは人体実験を繰り返して、人を超えた人を作ろうとしていたんだ……だが、あのタイタン戦争が起きた」

直哉はそう語ると、目を閉じて

「そこで研究は変わった……普通の人間じゃあ扱えないMSを動かすための、生態CPUの研究に……」

「生態CPU……?」

唯衣が呟くと、直哉は頷いて

「普通の人間じゃあ扱えないMSでの部隊……通称、00部隊……生還率、生存率が共に無い事から付けられた部隊だよ」

直哉の説明を聞いて、唯衣は言葉を失った

「そして俺達は普通の人間には扱えないMSに乗って、激戦地へと送られた……そして、戦う中で一人、また一人と倒れていって、俺も機体を撃破された時は、いよいよ死ぬると思ったよ……精神は崩壊仕掛けてたが、家族に会える……そう思ったら、涙が出たよ……」

直哉がそこまで語ると、唯衣は口元を両手で覆った

直哉はそんな唯衣の頭を撫でると、微笑みを浮かべて

「そんな時だったよ、助けられたのは……千冬さん率いる部隊にね」

と言った

「千冬さん……？」

「ああ……ここ、初音島の中佐だよ……タイタン戦争時はユーラシアに派遣された部隊の隊長役を担っていた」

直哉の説明を聞いて、唯衣は少ししてから

「ユーラシアに派遣されていた、ということとは……直哉に人体実験したのは……」

と直哉に顔を向けた

すると、直哉は頷いて

「ああ……俺を強化人間にしたのは……ユーラシア連合だ……」  
と告げた

その数秒後、放送で運転が再開される旨が通達されて、観覧車は再び回り始めた  
会話が終わった後は、二人はずっと黙っていた

だが、二人の中でユーラシア連合に対する復讐が始まった瞬間だった……

## デートの終わり

さくらパークでの三日目

一夏とシャルロットの二人は、起きると荷物を纏めてチエックアウトを済ませた  
そして、その荷物を入園ゲート付近にあるコインロッカーに預けて、中央に来た

「今日はどうしようか……」

「そうだなあ……」

二人はマップを見ながら、真剣に唸っていた

二日間で二人は、遊園地エリアとプールエリアを回った

残っているのは、自然公園エリアとアクション重視エリアが残っている

最終日はゆっくりと自然公園エリアで過ごすか

それとも、軍人らしくアクション重視エリアでひと暴れするか

二人としては、非常に悩みどころだった

一応疲れてはいるが、大したことはない

だが、明日からの軍務を考えると、自然公園エリアでのんびり過ごしたほうが良いの

かもしれない

そして数秒後、二人は顔を合わせると

「いっせーの、で、指差すか」

「そうだね」

と提案した

「いっせーの、せ！」

そして、掛け声の後に二人が指差したのは……

「やっぱりか」

「明日からを考えると、のんびりしところか」

二人が指差したのは、自然公園エリアだった

根が真面目な二人らしく、アクシヨン重視エリアで遊んで疲れを残すよりかは、自然公園エリアでのんびりして、疲れを取ることにしたようだ

二人は自然公園エリアに入ると、本当にのんびりと歩いていた

自然公園エリアは芝生などにより、青々とした草原が広がっていて、その草原を子供達達が駆け回っている

そして、その草原の一角では、ビニールシートに座った親達が走り回っている子供達を見守っている



そんな光景を見ながら、一夏とシャルロットは歩き続けた

今の二人は、周囲の人達から見たら、どう見えているのだろうか

仲の良い友人か

それとも……

(僕としては、恋人に見えていてほしいなあ……)

シャルロットはそう思いながら、隣の一夏の顔を視線のみで見上げた

一夏はまっすぐな性格で、曲がったことが許せない

だが、堅つくるしいという訳でもない

ある程度は譲歩もするし、妥協案も出す

だが、最善を尽くそうと努力する

シャルロットは、そんな一夏に惚れた

少し子供っぽい所もあるが、それもまた一夏の特徴だろう

そして、鈍感である

それも、神懸かった鈍感だ

一夏率いるストラトス隊に所属している全少女達は、一夏に思いを寄せている

しかし、一夏はその思いに気付いていない

感づいてすらいない

その事に少女達は気付いていて、一夏に積極的にアピールしている（箒と鈴は分かりにくい）

だが、一夏はその神懸かった鈍感で、微塵も気付いていない

それが少女達をヤキモキさせている

そして願わくば、気付くなら、自分の思いであってほしい。と、全員は思っている  
だが、それは何時になることやら……

それが悩ましくって、シャルロットが溜め息を吐くと

「溜め息なんて吐いて、どうした？」

と一夏がシャルロットに問い掛けた

それにハツとして、シャルロットは両手を振りながら

「ううん、何でもないよ？ ちょっと疲れ気味なだけだよ」

と返答した

それを聞いて、一夏は頷いてから

「まあ、二日間遊びまくりだからな。疲れが溜まってるんだな」

と言った

そして、周囲を見回すと

「おう？ あそこに、ちょうど良い木陰が有るぞ」

とある方向を指差した

シャルロットがその方向に視線を向けると、そこには少し大きい木が一本有った

二人はその木に近付くと、根本に座った

秋の風は少し肌寒いが、葉っぱの隙間から差し込んでくる太陽の光がポカポカと心地よかつた

シャルロットがそれを心地よく感じていたら、微かに寝息が聞こえてきた  
ふと隣に視線を向けると、そこでは一夏が木の幹に背中を預けて寝ていた

それを見たシャルロットは、クスツと笑うと呟くように

「お疲れ様。一夏」

と言った

こうして、二人の三日間のデートは静かに幕を降ろした

## 宣戦布告

あれから何事もなく時は過ぎ、12月中旬

珍しく大統領執務室からは、さくらの怒った声が響いていた

「だから！ あれは正当な人道的支援だつて言ってるでしょ!? その前は、正当防衛！

そっちが、こっちのMSを撃墜したから、こっちもやり返したんじゃない！」

さくらはそう言いながら、左手で机をバンバンと乱暴に叩いた

もし、美秋やアイシア。他の秘書官が見たら、啞然とするだろう

それほどに、さくらが怒るといふのは珍しいのだ

「ボク達は、JEU艦隊から亡命したいって言われたから、それを受け入れたの！ その

亡命者達を君たちが攻撃してきたから、こっちは守るために攻撃したんじゃない！ 頭

が堅いなあ！」

どうやら、話題は数ヶ月前に起きたJEU艦隊防衛戦らしい

ということとは、相手はユーラシア連合の外交官だろうか

すると、さくらが片眉を上げて

「え？ もう、これ以上は話す意味がない？ 武力行使って……こら！ 切るなあ！」

「どうやら相手は一方的に電話を切ったらしく、さくらはワナワナと受話器を見ると「もうっ！」

と悪態を吐きながら、受話器を叩き付けるように戻した

そして、深々と溜め息を吐くと

「うにゃあー……困ったことになっちゃったなあ……」

と呟くように言うと、少ししてから受話器を取りボタンを押して耳に当てて

「あ、やよいちゃん？ お兄ちゃん居る？ ちよつと、面倒なことになっちゃったんだあ

……」

と少し弱気な声で、会話を始めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それから、数日後

「これはどういった茶番だ!!」

と怒鳴ったのは、初音島統合防衛軍の閣僚の一人である

そして、憤っているのは、その閣僚だけではなかった

たった一人を除き、ほぼ全員が怒りを露わにしていた

なぜならば……

「我々ユーラシア連合は、以前初音島の一方的な攻撃により、被害を被った。よって、初

音島に以下の要求をするものである。

一つ、初音島は、所有するあらゆる技術をユーラシア連合に無償で明け渡すこと  
二つ、現政権及び、全軍の解体

三つ、全国土を明け渡し、属国となるべし。以上の要求に、72時間以内に従わない場合、武力によって制圧する……茶番にも程があるわあ!!」

閣僚は持っていた紙を読み上げると、それを握り潰して、机に叩きつけた

それは、ユーラシア連合が送ってきた事実上の降伏勧告だった

しかもそれを肯定するように、モニターには夥しい数のユーラシア連合艦隊の映像が表示されている

総数、約60

しかもその内の一隻は、アークエンジェルに酷似していた

ただし、色はアークエンジェルと違って黒系に塗装されている

どうみても、アークエンジェル級なのは間違いない

「監視衛星によれば、占領した日本帝国領土より、60余りの艦艇が出撃したのを確認しております……観測した速度から計算した結果、到着するのは……今月、12月30日未明かと……」

それは、ユーラシア連合が告げた72時間の1日前

そして、降伏勧告をしてきたのは朝の7時

つまりは、12月31日にユーラシア連合は攻撃を仕掛けてくる

しかも、ユーラシア連合は言わずと知れた大国であり、初音島は小国

軍事力には、激しい差があった

初音島は中立国連盟を結んでいるが、他の国はユーラシア連合という大国相手に尻込みしており、動かないのは目に見えていた

政府から派遣されてきた閣僚は、ユーラシア連合と何とか和平交渉をしたいと言うが、軍の閣僚は一蹴した

そして、会議が紛糾していると、それまで黙っていた純一が立ち上がった  
すると、それまで紛糾していた会議室が一瞬にして静まり返った

「政府は、繰り返しユーラシア連合へ会談要請を」

純一がそう言うと、政府の官僚は

「それでは、和平を？」

と首を傾げるが、純一は首を振って

「全軍に第二種非常態勢を宣言する……」

と告げた

それを聞いて、官僚や閣僚達は息を飲んだ

「これより我々は……ユーラシア連合と戦争に入る！ 整備隊には、各防衛設備の点検整備をさせろ！」

「「「はっ！」「」」」

### 第二非常態勢

それは、事実上の交戦下に入る一歩手前だった

そして、これが発令された場合、全軍人は一切外出が規制され、別命あるまで自宅か寮での待機となる

こうして、初音島は危機を迎える



## 出撃準備

12月30日早朝、初音島の領海ギリギリ手前にユーラシア連合の艦隊が到着  
それまでの間に、初音島政府は再三に渡り会談を要請したが、ユーラシア連合は全て  
無視

よつて、初音島政府は午前10時に初音島全土に対して避難勧告を発令  
それに合わせて、初音島統合防衛軍は第一種態勢を発令  
それにより、全軍人は所属隊舎へと集結

出撃のための最終準備へと始めた

「あなた達、今は速さよりも確実性をお願いね！」

「……はっ……」

虚の言葉を聞いて、整備士達は返答しながら整備に駆け回っていた  
今回は彼らにとつても初めてとなる、大規模対人戦闘だ  
しかも、負けたら初音島はユーラシア連合の奴隷となるのは目に見えている  
中には、ユーラシア連合に対して怒りを露わにしている軍人も居る  
だが、そんなことで仕事を仕損ずるような彼らではない

軍人として、感情の制御の仕方は心得ている

何よりも、自分達の整備如何によっては、搭乗し出撃したパイロット達の運命が決まる

だから、機体に怒りをぶつけるような真似は絶対にしないし、手抜きやミスもしないやることは何時もと同じように、機体を万全にすること

だから、彼らは互いにフオーローしあい、整備後に他の整備士や班長が確認する  
そうやって安全策を複数設けて、万全性を上げる

そして、整備士達が願うのはたった一つだけ

《パイロット達が全員、生きて帰ってくる》

それだけだ

機体は壊れても、部品があれば治せる

だが、パイロット達たる軍人はそう簡単には治せない

それは、医療技術が発達した今も変わらない

義肢や人工臓器は出来たものの、パイロットが即死したら意味はなく、また心のキズ  
までは治せない

だから、パイロット達には絶対に帰ってきてほしい

そうすれば、暖かく出迎えるし、機体も必ず直す

それが、整備士達の真摯な願いだった

場所は変わり、市街地

市街地では歩兵が装甲車、高機動車に搭載されてるメガホンを使い避難誘導が行われていた

『落ち着いてください！ 慌てないで！』

『本島のシエルターにはまだ余裕があります！ 大丈夫です！』

『入りましたら、係員に氏名をお教えください！ その後、タオル等を支給します！』

軍人達の誘導に従い、市民は次々と地下シエルターへと入っていく

その表情は一葉に、不安に染まっている

その表情を見て、軍人達は全員

〈絶対に、ユーラシア連合を撃退する〉

と心に誓っていた

それが、自分達軍人の役割と彼らは理解していた

そもそも、初音島統合防衛軍は志願式を採用しており、全員の士気は非常に高い

更に言うと、今回のユーラシア連合が送ってきた降伏勧告状は全員に公開されており、内容を知った全員は激怒した

なんと身勝手な降伏勧告なのかと

だからこそ、彼らの士気は今や最高潮と言っても過言ではない

身勝手なユーラシア連合に、目にもものを見せてやると息巻いていた

そして、午後6時半過ぎ

本島地下シエルターに全市民の収容を完了

全防衛設備の整備及び点検も終わり、改めて全軍に臨戦態勢が敷かれた

そして運命の時は近づき、朝6時少し手前

ワルキューレ隊舎のブリーフィングルームには、全隊員が集まっていた

早朝だというのに全員の目はバツチリと覚めており、既にパイロットスーツに着替え終わっていたり、腰に道具を入れたポーチを付けていた

そして最後に、前のドアが開いてパイロットスーツ姿の義之とヘッドセットを装着した麻耶が入ってきた

それを見ると、最前列に立っていたみちるが

「総員、敬礼！」

と号令を掛けると、全員一斉に敬礼した

何時もだったら、義之は手をヒラヒラと振って止める所だが、今日は違った  
義之は真剣な表情で壇上に上がると、全員を見回してから

「お前達。分かっているとと思うが、後約一時間でユーラシア連合と交戦を始める」

と喋り初めて、全員黙って聞いていた

「相手のユーラシア連合は、言わずと知れた大国だ……厳しい戦闘になる……一応、お前達には選択肢を与える」

義之はそう言うのと、教壇の上に紙束を置いた

「これは退役許可証だ。今なら、まだ市民に戻れるぞ？」

義之がそう言うが、誰も取りに來ない

「大佐……今更、そんなのは不要です」

「俺達は全員、守るために軍に入りました。今更、戻ることは出来ません」

みちるを皮切りに、次々とそんな声が上がった

それを聞いて、義之は退役許可証を背後に立っていた麻耶に渡して

「お前達の覚悟、確かに確認した。最後に命令を出す……全員、必ず生きて帰れ！　いいな!？」

「「了解！」」

義之の命令を聞いて、全員は一斉に敬礼した

そして、ワルキューレ隊隊員は全員、自分の戦場へと向かった

# 開戦

運命の12月31日早朝6時

初音島は未だかつて無いほどに、静まり返っていた

例年通りならば年末年始に行われるイベントにより、朝から街中に人が賑わっている筈だった

だが、ユーラシア連合からの事実上の宣戦布告により、年末年始のイベントは中止  
全島民に避難勧告が発令された

後約一時間で、ユーラシア連合との戦争が始まる

そして、初音島統合防衛軍は既に、臨戦態勢に入っていた

臨海線ギリギリには、艦艇群と艦載MS部隊が集結

各部隊は配置完了

全防衛施設も稼働状態にあった

もちろんだが、戦わないで済むなら、それが一番良い

だが、待機している全軍人は、戦わないで済むとは思っていないかった

ユーラシア連合は初音島政府が再三会談を要請したというのに、全て無視してきてい

る

この時点で、ユーラシア連合は戦う気だと分かっていた

だから、全軍人は家族や知人、恋人と思い思いの方法で過ごした

最後になるかもしれない、家族や知人、恋人との触れ合い

だが死ぬ気はなく、生きて帰ろうと思っていた

そして、ユーラシア連合を必ず撃退し、新しい未来あしたを迎えると

それが、統合防衛軍全軍人の総意だった

場所は変わって、統合防衛軍総司令部

そこに、大統領の芳野さくらと統合防衛軍元帥の朝倉純一は詰めていた

なお、さくらはこの戦いが終結したら、引責辞任を表明するつもりらしい

なんでも、この戦いを未然に防げなかったからだとか

とはいえ、さくらにも無理だったのだから、誰にも防げなかったらというのが、純

一の考えだ

そして、それまでモニターを睨んでいた純一はさくらに視線を向けて

「新型の進捗状況はどうなっている？」

と問い掛けた

すると、さくらは携帯端末を取り出して操作してから

「一番早く完成するのが、10かな。次に09で12は武装がね……」  
と説明した

数字は型番だろう

さくらの説明を聞いて、純一は少し黙考してから

「その10の完成は、開戦には？」

と問い掛けるが、さくらは首を振って

「どんなに頑張っても、開戦には間に合わない……多分、戦闘中になると思う……」

と答えた

それを聞いて、純一は腕を組んだ

今、天枷研究所で建造されている三機の新型機

それら三機は、今のMSとは比較にならない性能を有しており、もし一機でも投入されたら、戦闘は有利に進む所か、勝つことすら可能だろう

だが、その希望の新型機はまだ完成していない

それどころか、それまで初音島統合防衛軍が保つのかどうか……

不安な考えに至るが、純一はそれを頭を振って追い出した

元帥たる自分が、そんなことでどうするのかと

なお、今回の顛末を知ったのか、JEU艦隊の斑鳩から軍を動かすと打診があった



だが、純一はそれをやんわりと断った

受け入れると決めたのは、我々なのだから、今回のことは我々が責任を取ると  
なお、同盟を結んでいる神界と魔界からも同様の打診があつたが、こちらも断つた  
いくら同盟を結んでいるとはいへ、要らない不安要素は無くすべきだろうと

本音を言えば、両方の申し出は嬉しく、戦力も喉から手が出るほど欲しい所だ

しかし、宣戦布告を受けたのは初音島であり、JEU艦隊と神界・魔界の双方には関  
係ないことだ

それに、無抵抗で負ける気も無いし、そもそも負けるつもりはない

だが、戦力差が有りすぎるのも事実だ

こちらの戦力はMSが約九百と少し

多脚戦車が約百二十少々

戦闘機も同様だ

それに対して、ユーラシア連合の戦力は、更に増えており、MSは約二千を超えてい  
るだろうと報告が上がってきている

戦闘機もかなりの数を投入してくるだろうし、多脚戦車もそうだろう

何よりも、不安要素がユーラシア連合の旗艦と思われる黒いアークエンジェル級だ

性能はアークエンジェルと大差なさそうだが、恐らく艦載MSは、ユーラシア連合が

開発したという新型のガンダムタイプだろう

報告によれば、5機も存在しているらしい

それら新型の性能は、天枷研究所の技術者達がある程度は予測しているが、どれも初音島の現ガンダムタイプを上回っていると告げてきていた

それを聞いて、兼ねてから発案されていたガンダムタイプ強化改修計画、少数生産を行おうとしていた

だが、その計画を起こす前に宣戦布告されて、計画は事実上の無期限延期になった  
だから今唯一の希望が、開発されている三機の新型ガンダムだった

初音島の平和の象徴として、初音島が有するあらゆる技術を投入し、更に、一つの画期的技術を投入した

そして、そのフラグシップ機が件の10だ

だから、10の方は09や12よりも人数を多めに投入して開発していたのだが、それでも間に合わなかった

だが、諦めるにはまだ早い

この世の中、何が起きるのか分からないのだ

もしかしたら、新型ガンダムを投入せずに初音島が勝つかもしれない

幸いにも、新しい正式量産機にMVF-11・ムラサメが採用されて、すでに配備さ

れている

採用されたムラサメは、量産型機としては世界で初めての完全可変式機だ

戦闘機としてもMSとしても使える有用な機体で、戦闘機の数で肉薄し、あつという間にMS形態に変わって攻撃し、また離脱するという、一撃離脱戦法も取れる

そうこうしている内に時は経ち、間もなく運命の時間

午前7時になろうとしていた

場所は変わって、ユーラシア連合艦隊側旗艦

アークエンジェル級2番艦、ドミニオン

その艦橋に、豪華な装飾が施された軍服を纏った色白な男とそれに寄り添うように銀

髪の美女が居た

男の名前は、マクシミリアン・ジーナス

ユーラシア連合現大統領の次男であり、今回のユーラシア連合艦隊の総指揮官だ

そして、その隣に立っている銀髪の美女の名は、セルベリア・ブレス

マクシミリアン・ジーナスの副官を勤めると同時に、MSパイロットでもある

セルベリアはモニターに表示されている時間を見ると、マクシミリアンに

「殿下、間もなく時間です。なお、初音島からは再三に渡って会談の要請が来ております

が」

と告げた

が、マクシミリアンは眉一つ動かさずに

「会談要請など捨て置き……」

と告げた

そして、時計が7時を示した

その直後、マクシミリアンは右手を掲げて

「全軍、攻撃を始めよ」

と告げた

それを受けて、セルベリアは深々と頭を下げてから

「畏まりました……全軍、攻撃を開始せよ！」

と告げた

それを聞いて、マクシミリアンが座っている席の下の副艦長席に座っていたメガネを

掛けた老人

ベルホルト・グレゴールが、メガネを上げてから

「ミサイル発射管、全門装填！ 目標、初音島艦隊、発射あ!!」

と宣言した

こうして、初音島とユーラシア連合の戦争は始まったのだった

## 対ユーラシア連合 その1

「ユーラシア連合軍、攻撃開始!!」

通信将校の一人が悲鳴混じりに報告すると、幕僚の一人が机を叩いて

「こちらの再三に渡る会談要請を無視するとは!?!」

と悪態を吐いた

だが、元帥たる純一は慌てずに

「迎撃開始! 並びに、全軍出撃!」

と号令を下した

その数瞬後、対空ミサイルやガトリングによる弾幕

更には、MSによる迎撃が始まった

ビームやミサイル、弾丸がミサイル攻撃に当たる度に空中に炎の華が咲いた

だが、中には弾幕をすり抜けたミサイルもあり、それらが次々とその破壊力を発揮した

沿岸部に展開していたのは、本来だったら破棄する予定だったアストレイを戦術AIにて動かしている無人機だ

大した損害ではない

「本番は、ここからだ………」

純一がそう呟くと、それを肯定するようにユーラシア連合軍の一部が突出し始めた

「オーディーン1接敵！」

通信将校のその報告を聞いて、純一は拳を握りしめた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ちいつ、数は多いなっ！」

義之の視界の先には、軽く二十以上のユーラシア連合MS部隊が展開していた

機種は、今現在ユーラシア連合の主力機体のダガーLとウインダムだ

「お前ら！ 着いてこい！」

「「「了解！」」」

義之の命令に、義之の後ろに展開していたムラサメ一個中隊のパイロット達は返答した

今義之は、お馴染みのワルキューレ隊ではなくムラサメの一個中隊を率いていた

「落ちろっ！」

義之はそう声を上げながら、素早くビームを三発連射した

義之の放ったビームは、外れることなく三機のMSを葬った

そして、ムラサメ隊もただ着いてくるだけではなかった

義之が撃つた直後、続くように次々と砲撃を放った

ミサイル、機関砲、ビームが次々とユーラシア連合軍に殺到

結果、ユーラシア連合軍機は次々と爆発した

だが、ユーラシア連合軍とてやられてばかりではない

ビームライフルや翼下に懸架されてるミサイルランチャー、ガトリングスマッシュを一齐に発射

義之は勿論回避したが、ムラサメ隊の内の一機が主翼にビームを受けてバランスを崩し墜落していく

だが、すぐに戦闘機形態からMS形態に変形して体勢を立て直した

しかし、それにより僅かながら隙が出来た

そしてその隙を見逃さずに、一機のダガーLがビームカービンを連射

その内の一発がムラサメの胸部に直撃

そのムラサメさ短く紫電を放ったのち、爆散した

その光景を見て見て義之は

「多分、初の戦死か……………」

と眩きながら、手早く機体を操作して敵機を撃破していった

『流石は英雄だ……………』

『あの数の敵機を、ほとんど一人で……………』

率いていたムラサメ隊のパイロット達はそう言うが、義之は違和感を感じていた

「少なすぎる……………」

軍本部の見立てでは、ユーラシア連合軍は初音島の三倍以上の戦力を投じてきたはずだ

だが、今しがた戦ったのは約二倍程度

しかも、腕も大したことはなかった

はつきり言つて、拍子抜けもいいところだった

「まるで、訓練生みたいな感じだったな……………」

義之がそう言つた時だった

『大佐！ あれを!!』

と一機のムラサメが下を指差した

義之が視線を向けると、海中から次々と潜水艦が浜辺や沿岸部に乗り上げるように接岸していたところだった

「あれは、帝国軍のそうりゆう式型とひりゆう式型潜水艦？」

ストライクのサイドモニターには、せの潜水艦が占領された帝国軍の主力潜水艦だと



表示されていた

だが、データ表示には約40%違う形になっていると表示されていた

その表示に義之が首を傾げていると、潜水艦の前側の上部が観音開きに開いていた  
「まさか!？」

義之の危惧した直後、その予想通りに潜水艦の中には数機ずつMSが格納されていた  
「あつちが本命かつ！」

潜水艦の中から出てきたのは、バスターダガーやデュエルダガーといった旧式機だった

だが旧式とは言っても、運用次第では新型機に勝てることもある

しかも、潜水艦は一隻ではなく、軽く見積もっても三十はある

「俺はあつちを援護する！ お前らは空から支援しろ！」

『『『『了解!』』』』』

義之はムラサメ隊のパイロット達が返答するよりも早く、スラスターを全開にしていた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『くっっ！ こいつらっっ！』

『水月、突っ込まないでよ?』

焦る水月に苦言を呈したのは、デュエルASに搭乗しているまゆきだ

まゆきはビームライフルを連射して、三機のMSを撃破したが、焼け石に水だった

まゆきや水月が撃破しても、次々と新しい機体が向かってくる

『こうなったら、美夏が姿を消して切り込んでくる!』

『危険ですよ、天枷中尉!』

逸る美夏を、部下となったあきらが諫めた

だが、その時

『上空からMSが一機接近! これは……ストライク!』

バスターに搭乗していた菊理がそう言った直後、ビームの雨が降り注ぎ、瞬く間に展

開していたユーラシア連合MS部隊の機体を貫いた

「オオオオ!」

義之は裂帛の気合と共にビームサーベルを抜刀

盾も利用して、乱戦を始めた

それを見て、まゆきや水月達も突撃

ユーラシア連合のMS部隊もまゆき達を迎撃しようとするライフルを構えたが、その隙を

義之が見逃すわけではない

義之はサーベルと盾を使い、次々とユーラシア連合軍を撃破していく

ユーラシア連合軍も義之を撃破しようとしてライフルを構えたが、味方誤射《フレンドリーファイア》を恐れて攻撃出来なかった

その隙にまゆき達が突撃し、ユーラシア連合軍MS部隊は完全に混乱状態に陥った結果、ものの短時間でユーラシア連合軍の奇襲部隊は全滅した

「歯ごたえなかったな」

『いやあ、助かったよ。弟くん！』

まゆきがそう言うと、義之は苦い顔を浮かべて

「やはり、遅い……………」

と呟いた

上空から突撃した時、義之は三機のMSを撃破した

だが、義之としては五機のMSを撃破するつもりだった

そのために、トリガーも5回引いた

だが、実際に発射されたのは三発だけだった

ユーラシア連合軍との戦闘は、始まったばかりである

## それぞれの思い NAU

ユーラシア連合と初音島統合防衛軍が開戦して、早一時間

両軍は一進一退の攻防を繰り返していた

その光景を、新アメリカ連邦のアラスカユーコン基地の海兵隊仕官

リリア・シエルベリ大尉はテレビで見っていた

その表情は真剣で、行く末を見守っているようだった

そこに、同じNAU陸軍の男性仕官

デリック・アイアンサイド少佐が現れて

「気になるか、シエルベリ大尉？」

とリリアに問い掛けた

「アイアンサイド少佐」

リリアがアイアンサイドの名前を呼ぶと、アイアンサイドはリリアの隣に吸って、

コーヒーの入った紙コップを差し出した

「ありがとうございます、アイアンサイド少佐」

リリアはコーヒーを受けとると、一口飲んでから、再びテレビを見て

「気になりますね」

と言った

画面では、桜が咲いている初音島の至るところで爆発が起きている

しかし、なぜ彼女が初音島で起きている戦争を見ているのか

普通だったら、他国での戦争は関係ないという考えを持つ軍人がほとんどだろう

中には、《その国が好きだから、気になる》

という軍人も居るだろう

そして、リリアはそれだった

タイタン戦争の時、彼女の所属していた最初の部隊は欧州方面に派遣された

NAU軍の戦法は、膨大な数の機体と潤沢な補給を活かした圧倒的弾幕を形成しての

暴風を彷彿させる射砲撃戦闘である

しかしこの戦法は、《補給が万全にされる》ことが大前提である

だが、リリアの所属していた部隊を載せていた艦隊は、数度に渡り、タイタンの妨害により補給が滞った

その結果、弾薬や部品類が減る一方で、タイタンとの戦闘を余儀なくされた

そして、ある戦いでリリアの所属していた部隊と艦隊は壊滅

リリアは脱出出来た艦のクルーと一緒に、救命ボートに乗って海を漂流した

それから数日後、リリア達が乗っていたボートは、近くを航行していたNAU海軍の原子力空母

ジョン・F・ケネディに保護された

そして暫定的にだが、その空母預かりとなっていた海兵隊ブラックナイブス隊に所属することになった

そしてそのブラックナイブス隊が所属していたJFKに、アジア大陸に上陸作戦が発令された

JFKはその命令に従い、アジア大陸へと部隊を上陸させた

しかし、そこでもまた補給線が寸断される事態が発生

部隊だけでなく、艦隊も全滅

彼女一人が生き残ったのだ

その後、彼女は一人無人の廃都市を歩いた

だが彼女は、生きることが諦めてなかった

緊急用ビーコンと携帯用救急キットを肩から下げて、彼女は一人でアジア大陸の横断を始めた

彼女がそのような行動を取ったのは、訳がある

ブラックナイブス指揮官

ダリル・マクマナス大尉が、彼女だけを逃がしたのである  
『お前は生きろ』

と言って、指揮官権限で機体の操縦権を奪い、オートパイロットで装着された増槽《ド  
ロップタンク》とバッテリーの続く限り、遠くまで逃がしたので

最初彼女は

『私も最後まで共に戦う』

と言った

だが、それをダリル・マクマナスは一喝すると

『一人でも生き残れるなら、絶対に生きろ』

と言って、彼女を逃がしたので

その時、ダリル・マクマナスを含めて、他の部隊はもはや損傷が大きく、生き残れる  
確率が低かったのだ

たった一人、リリアだけを残しては

そして、ダリル・マクマナスやブラックナイブス隊、他の海軍MS隊の思いに押され  
て、リリアは生き残るために歩いた

そして、携帯食料も尽きかけて、ビーコンのバッテリーも危うくなった時、リリアは  
アジア大陸に派遣されていたまりもの部隊に保護された

そこから暫くの間、リリアはまりもの部隊に同行する形でNAU軍との合流を目指した

その間、リリアはまりもから

『パイロットならば、死んでいった仲間達のことを誇らしく語り継いでやれ』と教わった

死んでいった仲間達のこと縛られるのではなく、仲間達がどうやって戦い死んでいったのかを、後世に教えていってやれと

それを教わったりリリアは源隊復帰すると、後輩や部下達に最初の部隊の仲間達や、ブラックナイブス隊、海軍の部隊がどうやって戦い散っていったのかを誇らしく語った

一人でも多く、彼らの思いと、散っていった仲間達のことを覚えていてほしくて

それと、リリアがまりもの部隊で学んだことはもう1つあった

それは、格闘の重要性である

リリアはその時まで、NAU軍学校で習った射砲撃戦闘を守って戦ってきた

しかしそれは、潤沢な補給があつて初めて成り立つ戦法である

戦争というのは、いわばシナリオの無い劇だ

何が起こるかなど、当然予測出きるわけがない

ある程度予測出きるとはいえ、その予測通りに進むわけがない



たった一発の弾で兵士が死ぬこともあれば、何発撃とうが、当たらない場合もあるたとえ凄腕のメカニックが整備しようが、急に壊れることもある

リリアはそれを学んだ

例えば、祖国が万全の補給態勢を敷こうが、襲撃されたら物資は失われる

そして、物資が来なければ、弾が切れて、自慢の射砲撃戦闘も出来なくなる

弾が切れたら格闘戦しか無くなるが、N A U軍では射砲撃戦闘ばかり偏重して教えられるために、格闘戦は最低限しか教えられない

だから、格闘戦が得意というパイロットはほとんど居ない

しかし、格闘戦を使うことにより、弾の消費を抑えられることを学んだ

それを行っていたのが何を隠そう、初音島の部隊だった

初音島のMSはビーム兵器を標準装備しているが、実弾米兵装も少なからずある

しかし初音島の部隊は、射砲撃戦闘だけでなく格闘戦闘も行うことで継戦能力を上げていた

その戦い方は、N A U軍学校では習わなかったことだった

そして、射砲撃戦闘には致命的な欠点があった

それは、混戦になると、味方誤射になりかねないために、下手に撃てないのだ

事実、最初に所属していた部隊も、それで壊滅した

格闘戦闘の重要性に気付いたリリアは、源隊に復帰すると、格闘戦闘能力を磨いた。そして、彼女に部下が宛がわれると、彼女は口を酸っぱくするほどに、格闘戦闘の重要性を説いて教育した。

その結果、彼女率いるブラックナイブスは軍一番の戦死が少ない部隊となった。そして今、彼女が恩義を感じている初音島がユーラシア連合軍により、戦火に焼かれている。

「ユーラシア連合め……」

人知れず、リリアは呟いた。

リリアは今回の戦争の理由を、知り合いの情報屋から聞いていた。

だから、ユーラシア連合のやり方を知って、恥知らずと思った。

その時だった。

警報音が鳴り響き、窓からは即応MS部隊のリーオーMk-IIやエアリーズMk-IIが次々と出撃していくのが見える。

それを見て、リリアは持っていたカップのコーヒーを飲み干すと立ち上がった。すると、同じようにコーヒーを飲み干したアイアンサイド少佐が

「最近、やたらとスクランブルが増えたな。また、ユーラシア連合だろ」

と溜め息混じりに告げた。

アイアンサイド少佐の言った通り、ここ約一ヶ月程はユーラシア連絡絡みで緊急出撃が多いのだ

ユーラシア連合がどういった目論見でこんなに手出ししてくるのかは知らないが、どうせ碌なことではないだろう

リリアはカッパをゴミ箱に捨てると、アイアンサイド少佐に向き直って

「行きましよう」

と言って、ロッカー目掛けて駆け出した

心中で、初音島の軍人達にエールを送りながら

## それぞれの思い

御剣セキュリティーサービスの食堂

「初音島が侵攻されてるって、本当!？」

任務から帰った明久は報告を手短に済ませると、食堂に赴いた

そこでは、同僚の雄二や恋人の優子達がテレビを見ていた

「本当よ、見て」

優子はそう言うのと、テレビ画面を指差した

テレビに映っていたのは、戦火に焼かれている初音島だった

一ヶ所で爆発が起きる度に、どちらかの兵士の命が消えていつている

戦争は、命の削りあいだ

どちらかの命が尽きるまで、戦いは終わらない

「教官……………」

明久が囁くように呟くと、優子が明久の手を優しく解した

気づいてみれば、どうやら強く握り過ぎて、爪が食い込んで流血していたらしい

明久は優子に微笑むと、再びテレビを見た

そこでは今もなお、激しく閃光が瞬いている

明久は心中で、義之達の無事を祈った

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、初音島近海のユーラシア連合艦隊

その内の一隻

MS空母、シチルストイ

その甲板には今、新しくウインダムが中隊規模、12機が格納庫から上がったところだった

『CPよりバオフエン中隊。発艦まで、あと420秒です』

「了解」

通信将校の言葉を聞いて、パイロット

ツイ・イーフエイ  
崔亦菲は機体の最終確認を始めた

正直言えば、この作戦に彼女は乗り気じゃなかった

しかし出撃を拒否すれば、人質になっている家族がどうなるかわからないし、国籍を剥奪されて、身の毛もよだつような非道な実験に使われるのが目に見えている

ユーラシア連合において、彼女のような元中国人や韓国人といった人々は、人間扱いされていない

奴隷

もつと悪く言えば、家畜や道具同然だった

国籍を得るには、軍に入り、功績を上げないといけない

しかし、その数少ない功績も、結局は上官たるロシア人に奪われて、その上官の出世に使われる

「今はまだ、その時ではない……」

彼女がそう呟いた直後、通信画面が開いて

『バオフエン中隊、出撃してください！』

と通信将校が告げた

それを聞いて、彼女は操縦桿を掴んで

「了解、出撃する！」

と返した

そして、通信を切ると

「鈴……あなたは今、そこに居るの……？」

と呟いた

自身の妹のような、小柄な少女を思い出した

そして、彼女率いるバオフエン中隊はリニアカタパルトによって宙に射出された

その妹分が敵軍として展開している、戦場に向けてその妹分が、敵に居るとは予想もしないで……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

再び場所が変わり、ユーラシア連合艦隊旗艦

アークエンジェル級2番艦、ドミニオン

その艦橋<sup>ブリッジ</sup>にて戦況を確認していたマクシミリアンは

「予想外に手こずらせてくれるな。初音島は……」

と呟いた

それを聞いて、隣に立っていたセルベリアは

「どうやら、かの英雄率いる部隊による抵抗が激しく、友軍に大きな被害が出ている模様です」

と報告した

それを聞いて、マクシミリアンは少し考えると

「セルベリア……あいつらと共に出撃しろ……かの英雄を討てば、初音島は瓦解するだろうからな」

と告げた

「はっ！」

その命令を受けて、セルベリアは艦橋ブリッジから出た

そして、長い通路とエレベーターを歩いていって、ドミニオンの格納庫ハンガーに辿り着くと「お前達！ 殿下から御命令が下った！ 全機出撃し、初音島を蹂躪！ 英雄率いる部隊を壊滅させるぞ！」

と告げた

それを聞いたのは、六人の女だった

そして、その女達の背後にはそれぞれ、ガンダムがあった

セルベリアはオレンジ色に塗装された一機のガンダムの前に立った

その機体には、巨大な大剣が二本も装備されていた

セルベリアがその機体を見上げていると、整備員が駆け寄ってきて説明を始めた

並び立つガンダムの一機

深緑に塗装されたガンダムの前に立っていた少女は、パイロットスーツの胸元を開く

と、小さなロケットを取り出した

そして、そのロケットの蓋を開いて中の写真を見た

そこに映っているのは、幼い自分と仲良く写っている一人の少年だった

少女は蓋を閉じると、そのロケットを握りしめて

「直兄……行ってくるね……」



と言うと、自機に乗り込んだ  
そして、戦場にて想いは交錯する……

## 対ユーラシア連合戦 悲しき邂逅

開戦してから、数四時間後

外側第六メガフロート

第三防衛線、第七区画

『ロータス、ギャンブル！ 敵右翼部隊の頭を処理しろ！ ハーミット隊が孤立するぞ！』

この区画の防衛線の指揮を任されたトマホーク1

永田信二大尉は自身も迫ってきた敵MS二機を撃墜しながら、指示を出した

『ロータス1、了解！ 小隊、続けえ!!』

『ギャンブル1、了解!』

ロータス隊隊長、荒井裕太中尉は部隊を率いて突撃

ギャンブル隊隊長、新田佳代子中尉は部下達と共に支援砲撃を始めた

『HQより、第三防衛線第七区画各部隊へ。応援部隊出撃まで、約360秒!』

『トマホーク1より全機！ 応援部隊が来るまで、約八分だ！ なんとしても持ちこたえろ!』

永田大尉がそう言った直後、永田大尉の機体の近くに一機後退してきて『簡単に言いやがる！ だったら、何でもいいから支援をよこせてんだ！』と悪態を吐いたのは、トマホーク2  
千葉彰人少尉だった

『トマホーク2！ 11時の方向の敵機を落とせ！』

『了！ 失せろ、野獣共があああ!!』

永田大尉の指示に従い、千葉少尉は指示された方向にビームを連射した  
しかし、撃破しても即座に新しい敵機が現れる

『畜生！ キリがねえ!!』

『ハーミット1、急げ！ そう長くは持たないぞ!』

部下の悪態と共に、新田中尉は一機の敵をビームサーベルで切り裂いた  
すると、ビームライフルで一機を撃破したハーミット1

アンナ・カーチス中尉が

『私に構うな！ 防衛線を維持し………』

喋っている途中でバズーカの直撃を受けて、爆散した

『ハーミット1!? 畜生つ!!』

『くっ………うおおおお!!』

千葉少尉が悲しみの叫び声を挙げた直後、頭の無い一機のアストレイ2型が突出した『無理をするな、ハーミット4！ 後退して、整備を受けてこい!!』

それを見た永田大尉がそう言うが、そのパイロット

ハーミット4、デイツク・オールター少尉は止まらずに一つのコンテナを保持して

『離れて下さい！ このコンテナを誘爆させます！』

『バカな!? そのコンテナは……………貴様も吹き飛ぶぞ!?』

デイツク少尉が保持したコンテナを見て、新田中尉は驚愕の声を挙げた

デイツク少尉が保持したのは、MLRSの予備ミサイルが満載のコンテナだったからだ

すると、ビシヤツという音がしてから

『頭を吹き飛ばされた時、コクピット内で小爆発が起きましてね……………そう、長くは保ちそうにないんだ……………だったら、連中を目一杯巻き込んでやりますよ!』

と言って、更に加速した

『よせ！ 下がって、治療を……………!』

『離れて……………後は頼みます!』

千葉少尉が後退するように促すが、デイツク少尉はビームライフルをコンテナに向けた

『つつ！ 全機、退避！』

永田大尉の指示に従い、付近の友軍は離れて構えた

その直後、激しい爆発が起きた

数秒後、爆煙が晴れた先には……………

多少減ったが、それでも倍以上のユーラシア連合軍機が居た……………

『ちつくしよおおおおお!!』

まるで、ディック少尉の捨て身が無駄だったと言われた気がして、千葉少尉は叫んだ

『クソツたれが！ 数が多すぎるっ！』

『つつ！ しまった！ 敵の歩兵部隊がつ!?!』

『報告しろ!』

ギャンブル3

飯田薫少尉の言葉を聞いて、永田大尉は報告するように促した

『敵の歩兵部隊の侵攻を確認！ あの方向には、民間人が避難したシエルターへの入り

口が!?!』

『つつ、なんだと?! H Q！ 敵の歩兵部隊の侵攻を確認！ 繰り返す、敵歩兵部隊の侵

攻を確認!』

飯田少尉の報告を聞いて、永田大尉は一瞬息を飲んでから直ぐ様に総合司令部へと報

告した

『H Qよりトマホーク1、詳細を報告せよ!』

『ユーラシア連合軍の歩兵部隊の上陸、侵攻を確認。その侵攻方向には、民間人の避難したシエルターへの入り口がある! 民間人の安全を確保しろ!』

『了解! 付近の友軍歩兵、機械化歩兵部隊を向かわせる! そちらでも、対処を!』

H Qとの通信が切れると、永田大尉は少し考えてから

『ギャンブル1、部隊を率いて防衛線の維持に勤めろ! こっちはもう二機やられて、戦力は半減してる! 俺の小隊は間に合わない!』

『そうは言うが、こっちだって二機やられてる! ロータス隊はなにを………つつ!』

ロータス隊のマーカーが一つも無いだど!』

『全滅した! 応援部隊が今、こっちに向かってきてる! それまでなんとか………しまっ!?! ガアアアア!?!』

『た、大尉!』

永田大尉のアストレイ二型が爆発し、残ったのは三機だけになった  
すると、飯田少尉の機体と千葉少尉の機体が近くに着地して

『中慰! もう、俺達しか残っていません! 後退しましょう!』

飯田少尉の悲鳴染みた上申を聞いて、新田中慰は数瞬黙考してから

『ギャンブルーよりHQ！ 第三防衛線第七区画は、もはや壊滅した！ 応援部隊がまだなら、後退の許可を!!』

と言った

『HQよりギャンブルー！ 後三分持ちこたえて下さ……いえ、待つてください！ それに急速接近する友軍部隊確認！ これは………ワルキューレ・ストラトス隊!』  
と総合司令部の通信将校が言った直後、上空から飛来してきた一機のアストレイ三型がビームサーベルでウインダムを一機切り裂いた

するとそれに続くようにビームの雨が降り注ぎ、次々と敵機を撃破していった  
そのあつという間の光景に、新田中慰達は固まった

そうしてる間に、隊長機らしいアストレイ三型が近寄ってきて

『貴官らは後退して、部隊の再編を！ ここは、自分達が引き受けます!』

通信が繋がり、若い少年

一夏がそう言った

『分かった！ すまない!』

新田中慰はそれに従ったほうがいいと判断し、二機を率いて離れた

一夏は三機が離れて、そして、付近に敵機の反応が無くなると

『オールストラトス<sup>レポート</sup>隊全機、報告!』

と報告するように促した

『ストラトス2、問題ない!』

『ストラトス3、大丈夫に決まってるでしょ?』

『ストラトス4、問題ありませんわ!』

『ストラトス5、問題ないよ!』

『ストラトス6、大丈夫だ!』

『ストラトス7、大丈夫!』

『ストラトス8、無事だ』

全員の無事を確認して、次の指示を出そうとした

その時

『つつ! 11時の方向から、中隊規模接近!』

とセシリアが言った

そちらに視線を向けると、確かに十数機のユーラシア連合軍MS部隊が近付いてきていた

『あたしが前に出るわ!』

鈴はそう言うやいなや、スラスターを吹かして突撃した

『03!?! ちいつ!!』



一夏は舌打ちするが、直ぐ様に支援を開始  
他の機体も支援を開始した

しかし、一機のウインダムが弾幕を突破

ビームサーベルを抜いた

『はっ！ 上等よっ！』

鈴は舌なめずりすると、その敵機を迎え撃った

相手はビームガトリングを盾で防ぐと、ビームサーベルで斬りかかった

鈴はそれを、ビームサーベルで防いだ

そして、つばぜり合いをしながら、お互いの足の脛がぶつかった

すると

『……た達に怨みは無いけど、これ以上同胞はやらせない！』

と鈴に聞き覚えのある声が聞こえた

その声を聞いて、鈴は息を飲んで

『その声……イー姉!?!』

と叫んだ

すると、相手

ツイ・イーフェイ  
崔亦菲も、息を飲んで

『その声……鈴!? あんた、初音島の軍に!?』

と驚いていた

すると、鈴は一夏達に聞かれたくないと思ったのか

『通信回線、358!』

と言うと、自分から周波数を変えた

そして、少し間を置いてから

『イー姉、どうして!?』

と悲しそうな声で問い掛けた

『こうするしか……こうするしか無かったのよ! 私のお母さんは、足が不自由で、逃げ出すことも出来なくて! 連合内じゃあ、私達元中国人、韓国人は奴隷同然で! 軍しかまともな仕事が無くて! 作戦も参加拒否したら、家族がどうなるかわからない!』  
崔亦菲ツイ・イーフェイはそう言いながら、鈴にビームサーベルを繰り出した

『イー姉……!』

『あんたこそ、どうして初音島の軍に! 中華料理屋を手伝うって!』

鈴はつばぜり合いを維持しながら

『一緒に生きたい奴が出来たから! そいつの近くに居たいから! あたしは、軍に入った! それに、店はお姉ちゃんに任せた!』

と答えた

それを聞いて、ツイ・イーフエイ崔亦菲は笑みを浮かべて

『ふふ……鈴木、そんな年頃かあ………ただ、それとこれは別よ………！ あたしは、引けない！』

『イー姉………！』

ツイ・イーフエイ崔亦菲の言葉を聞いて、鈴木は悲しそうな表情を浮かべた

そして、戦いは続く

どちらかが力尽きるまで………

悲しき戦いは続く………

## 交差

「よし……次だ」

一機のウインダムを撃破した義之はそう言うと、レーダーを見た  
すると、その義之機に接近してくる敵MSの反応を捉えた

数は二機

どうやら、分隊エレメントのようだ

「二機か……動きは悪くないが……っ！」

義之はそう言いながら、二機の攻撃を簡単に避けていき

「動きが読めるんだよ！」

と言いながら、素早く一閃

その二機のウインダムを、あっという間に切り裂いた

数秒後、その二機のウインダムは紫電を放つてから爆散した

「んー？ なーんか、知ってる奴のような気がするが……いつか」

義之は僅かに首を傾げたが、すぐに気を持ち直して機体を動かし

なお、義之のそれは当たっていたのだ

その二機のウインダムのパイロットは、実は御剣を追い出された後にユーラシア連合に所属した島田と姫路の二人だったのだ

では、その二人は死んだのかと思われるだろうが、生きているのだ

二人は運良く機体の緊急脱出装置が作動

海に着水したのだ

「まさか、私達が負けるなんて……っ！」

「真正面から挑んだからよ！ 次は、ロックオンしないで、不意打ちすれば！」

二人がそう言ったタイミングで、近くを兵隊を陸揚げしたのだろう

ゴムボートが通りがかった

二人はそのゴムボートに助けをもらうと、一番近いMS空母

シチルストイへと向かった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『クソッ！ 誰でもいい、鈴を援護出来ないか!?!』

『無理だよ！ 鈴と敵の動きが激しくって、味方誤射しかねないよ!』

一夏からの問い掛けに、シャルロットはそう返した

事実、二機は激しく動き回っており下手に攻撃したら鈴を撃破しかねなかった

その時だった

直哉機が盾を構えて一夏の前に出た直後、二発の砲弾が盾に当たった

『なに!?!』

『レーダーに反応なんて!?!』

一夏と箒は驚くが、直哉は無言だった

だがその表情は、険しかった

直哉には、ある確信があった

敵は、自分が知ってる相手だと

『見つけましたわ! 10時の方向、距離約四千!』

とセシリアは言いながら、データリンクで捕捉した敵機の映像を共有した

全員に見えたのは、緑色に塗装された右手に大きな鎌を持って、甲羅を背負った印象の機体だった

その機体を見て、直哉は目を見開いた

直哉はその機体を、よく知っていたからだ

そして、その機体から感じる気配を……

「あいつは、俺がやる!」

『直哉!?!』

一夏の驚く声を聞き流し、直哉は最高速で突撃した

敵は迎撃のためだろう、その甲羅の両側面のレールガンを次々と連射した

直哉はそれを最低限の動きで避けきると、ビームサーベルを抜刀

斬りかかった

敵機も座して待っているわけではなく、右手で持っていた鎌でビームサーベルを防いだ

二機の間で激しく火花が散り、二機のボディに当たる

敵機は直哉機を押し飛ばそうとしたのか、鎌を両手で保持した

その直後、直哉は敵機の右手を掴んだ

そして

「まどか円夏……円夏だな!」

と声を上げた

すると、接触回線を通じたらしく、敵機パイロットの息を飲む音がして

『なお兄……? なお兄!』

と敵機

フォビドウン・ガンダムのパイロット、織斑円夏の声が聞こえた

直哉はつばぜり合いを装いながら、フォビドウンに更に肉薄し

「なぜだ! なぜ、円夏がフォビドウンに乗ってるんだ!」

と円夏に問い掛けた

すると、円夏はすすり泣くような声で

『あのタイタン戦争で、なお兄が編成された第一次ファントムペインは全滅したって聞いて……一時期は強化人間計画エクステンデッドプランは終わりそうになった……だけど、三人……セルベリア大佐、スコール少佐、オータム中尉があのタイタン戦争で、凄まじい戦果を上げたから、計画は続行されて……今から約半年前に私を入れて更に三人が完成体として軍に供給されたの……そして私が、フオビドゥン・ガンダムのパイロットに選ばれたの……適性コクインが高いから……繭と組ませれば、大きな戦果を上げられるって!』

「繭だど!?! あの計画まで、同時に組み込んだのか!?!」

円夏の言葉を聞いて、直哉は驚愕した

その計画は、強化人間計画と同じように倫理を真つ向から否定した計画だった

「まさか……残る二人は、シエスチナとビャーチエノワか!?!」

『そう……ソードカラミティに乗ってる!』

円夏の言葉を聞いて、直哉は歯噛みした

下手したら、何も出来ぬまま負けると

「ちつくしよおお!!」

直哉の叫びが、狭いコクピット内で木霊した





合軍、マクシミリアン殿下が配下の大佐だ』

「初音島統合防衛軍特務部隊、ワルキユーレ隊長。桜内義之大佐だ」

義之はセルベリアが名乗ったから、礼儀として名乗り返した

だが、油断は一切していない

油断出来る相手ではないと、知っているからだ

『要件はひとつだけだ……貴様の命、貰い受ける』

「てめえなんぞに、やれる命じゃないんだよ」

二人はそう言うと、互いに構えた

今ここに、両軍のエースパイロットの戦いが始まる

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

少し時は遡り、とある艦上では

『殿下……遅くなりましたが、全軍の準備、整いました』

『うむ……』

と会話が行われていた

そして、紫色の機体その目を光らせて

『諸君！ 今、大恩ある初音島に危機が訪れている！ 恥知らずに攻めいつてくるは、言

わずと知れた大国。ユーラシア連合！』

と演説を始めた

周囲には様々な色合いの機体が展開しており、演説を無言で聞いている

『初音島は流浪の身と化した我々を受け入れてくれただけでなく、逗留地や食料、医療品などを融通してくれた……その大恩ある国を見捨てていいのか？ 否！ 断じて否だ

！ 今ここで、あの美しき桜の咲き誇る国を見捨てたら、我々子孫末代までの恥ぞ！』

その演説が進む度に、展開している機体から

いや、機体だけでなく艦隊からも気迫が滲み出す

そして、紫色の機体はビームサーベルを抜刀すると、高々と掲げて

『行くぞ、諸君！ 我に続け!!』

と宣言すると、万雷の如くに雄叫びが響き渡った

## 烈士たち

「つく、強いっ……！」

義之は相手が振り下ろした対艦刀を、ビームサーベルで軌道を変えることで防いだ  
しかし、相手

セルベリア・ブレスが駆るソードカラミティの方が、性能が高い  
性能が高いだけなら、義之の技量で倒せるだろう

それは、ウインダム戦で実証されている

ウインダムの性能は、ストライクと同等か少し高い位だ

しかし、そのウインダムを義之は難なく撃破していた

しかし、目の前のセルベリア・ブレスはそうはいかなかつた

機体性能、そしてパイロットたるセルベリア・ブレスの腕

その両方が合わさって、義之を圧倒していた

『これで、終わりだ！』

セルベリア・ブレスはそう言うと、両肩のビームブーメラン  
マイダス・メツサーを投擲した

「そのことは、よく知ってるよ！」

義之はそう言いながら、ビームサーベルと楯でマイダス・メツサーを弾いた

マイダス・メツサーはブーメランという形状上、避けても戻ってきて背後から機体に襲い掛かる

故に、避けるよりも弾くのが正解だった

義之は、それを熟知していた

ストライクのストライカーパックの一つ

ソードストライクの武装の一つだからだ

そして、マイダス・メツサーを弾いた直後、ストライクの目前に対艦刀を振り上げた

ソードカラミティの姿があった

どうやら、マイダス・メツサーを投げたと同時に前に出たらしい

「しまった!？」

『終わりだ、英雄!』

義之は相手の策に気付いたが、時既に遅し

対艦刀が、ストライクに振り下ろされた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

直哉と円夏の戦いは、まだ続いていた

互いに武装を振るい、何とか傷を付けないように倒そうとしていた  
その時だった

『M、何時まで一ヶ所で遊んでるのかしら?』

と女の声が聞こえた

『スコール!!』

「スコール少佐か!」

円夏の通信画面に見えたのは、金髪の美女

スコールだった

スコールは嫌な笑みを浮かべて

『数で押されてるのかわからないけど、手伝ってあげるわね』

と言った

『待て、スコール! 逃げて直兄! プラーフカが、プラーフカが起動する!』

「プラーフカだど!」

直哉が驚愕した直後、フォビドゥンガンダムの眼が赤く光り、円夏の後ろから不気味な蒼い光が溢れた

次の瞬間、アストレイの右腕が飛んだ

フォビドゥンがその鎌で斬ったのだ

「くっ!？」

直哉は急いで距離を取ろうとしたが、フォビドゥンは付かず離れずを維持していたそれは、セシリアがスナイパーライフルで狙っていることに気付いているからだ  
それだけじゃない

今円夏は、未来を予測しているのだ

少しでも離れたら、自分に向かってセシリア達の砲撃が殺到すると  
だから、直哉に近い方がいいと

そうすれば、一番脅威度が高い直哉機を葬ることが出来ると

『アハハハハハハハハ!』

「ちいっ!」

直哉は距離を離そうと左手の楯を突き出したが、フォビドゥンは軽やかに回避  
鎌の石突きで直哉機のコクピット部分を叩いた

「ガハッ!？」

その衝撃で、直哉の意識が一瞬途切れた

その隙を突いて、フォビドゥンは直哉機の左肩を掴んだ

『あれでは、援護出来ませんわ!』

『あの野郎、直哉を楯に!』

直哉を楯にされては、一夏達に手出しは出来なかつた

円夏には、それも予測出来ていた

それが、プラーフカの効果だった

プラーフカ

それは、二人が互いにリーディング、プロジェクションと呼ばれる超能力を使い、互いの思考を読み、更に自分の思考を相手に投射するということを繰り返し行うことにより、因果量子論を用いて、擬似的に未来を見ることを可能にしているのだ

だが、フォビドウンに乗っているのは人間は円夏のみ

《人の形を保っているのは円夏》のみだ

円夏の座っているシートの後ろには、楕円形の白い機械があつた

大きさは、約1m足らず

その中に、人の脳髓が入っているのだ

リーディングとプロジェクションは、最低でも脳髓があれば行える

薬物と電極による信号で実行させるのだ

しかし、リーディングとプロジェクションは多大な負荷が掛かる

円夏は休めば大丈夫だろうが、機械に納められた脳髓は休めない

実質的に、使い捨てなのだ



だったら、その脳髄はどうやって集めているのか

それが、強化人間計画と同時期に立案された計画

ボールサインナトミイ

π 3 計画だった

遺伝子調整により人工的に二つの能力を持った子供達をクローニングで大量に作り出し、一定値の能力を出した個体から脳髄を摘出し、機械に納めるのだ

人道だけでなく、倫理観も無視した計画

それが、π3計画だった

そして、ソードカラミティに乗っているクリスカとイーニアはその個体だ

彼女達は自分の意思でそれを発動させることが出来るので、特別に機体に搭乗させているのだ

直哉を楯にしたフォビドゥンは、至近距離でビーム砲

フレズベルグを撃とうとした

その証拠に、砲口にエネルギーが収束してきている

『直哉あー!』

それに気付いて、一夏がスラスターを吹かした

しかし、間に合わない

砲口の光りが臨界になった

正にその時、山吹色の機体がフォビドゥンに斬りかかった  
フォビドゥンは直哉機から手を放し、距離を取って現れた敵目掛けてプレスベルグを  
放った

その一撃を、山吹色の機体

龍閃は敢えて前に出て回避

ビームサーベルをフォビドゥン目掛けて振り下ろした

その一撃を、フォビドゥンは更に距離を取って回避した

そのフォビドゥン目掛けて、一夏達からの砲撃が殺到

フォビドゥンは楯を展開して防御

不利と悟ったのか、離れていった

それを確認してか、龍閃はゆっくりと意識朦朧となっていた直哉機に歩み寄った

『龍閃ってことは、帝国近衛軍!?!』

『なんで、彼らが?』

『待って、帝国近衛だけじゃない! 帝国軍もEU軍も展開してる!』

簪機が指差した先では、烈空やジントーナーDADVが共に戦っていた

『一体、何が……』

一夏達は現状を把握しきれず、呆然としていた

その間に、龍閃は直哉機の肩に手を置き

『無事だな、直哉』

と龍閃のパイロット

篁唯依は語りかけた

ここから、どんでん返しが始まる

## 更なる援軍

「なっ……龍閃？ しかも、紫だと？ まさか!？」

死を覚悟した義之だったが、ソードカラミティの一撃は横合いから現れた紫の龍閃により軌道を逸らされて助けられた

『大事ないか、英雄殿?』

「やはり、斑鳩殿!?! なぜ!?!」

動かないでと伝えた相手たる帝国軍

しかも、帝国の頭領たる斑鳩が自ら出てくるとは思っていなかった

『大恩ある初音島を見捨てたら、それは我等末代迄の恥……故に、我等は動いた』

「しかし!?!」

斑鳩の言葉を聞いて、義之は嘔みついた

すると、斑鳩の龍閃の周囲に近衛軍の龍閃が次々と着地してきた

『それに、動き出したのは我等だけではないようだ』

斑鳩はそう言いながら、ある方向を指差した

その先に見えたのは、アークエンジェルに造型がよく似た艦艇だった

「あれは………ディーヴァ!？」

『どうやら、かの王達も動いたようだな……英雄殿、後退して整備を』

斑鳩にそう言われて、義之は改めて機体の状態を再確認した

龍閃のビームサーベルによって、対艦刀の軌道は逸らされた

しかし、無傷とは言えなかった

左腕は肩から切り飛ばされ、コクピットハッチも切り裂かれて外が見えてしまつていた

義之は、これ以上の戦闘は出来ないと判断して

「………御厚意に甘えさせていただきます。御武運を」

と言つて、機体を立ち上がりさせて基地への帰投コースに入った

その義之機を狙つて、セルベリアはスキュラを撃とうとした

だがそれは、斑鳩機のビームライフルによつて妨げられた

『邪魔だてするか、亡国の将よ』

『殺らせんよ、ユーラシアの魔女よ……我等の武技、篤と味わえ』

その会話を皮切りに、双方は激突した

場所は変わり、初音島司令部

「なんだ! 一体、何が起こっている!？」

「前線からの報告では、帝国軍と帝国近衛。ならびにEU軍が展開している模様です！」

オペレーターの報告を聞いて、司令部に詰めていた幕僚達がざわめいた

「JEU軍だと!？」

「確か、戦力提供は断った筈だ」

幕僚達がそう話し合っていると、更に

「待つてくださいい！ 更に所属不明の艦艇が出現！ これは……神界魔界合同近衛部隊、旗艦ディーヴァです！」

とオペレーターから報告が上がった

「ディーヴァだと!？」

「ディーヴァから全周波数にて、映像が発せられています！」

「モニターに回せ」

オペレーターの報告を聞いて、純一は静かにそう命じた

それを聞いて、オペレーターはメインモニターに映像を表示させた

そこに映ったのは、神王ユーストマと魔王フォーベシイだった

『繰り返しこの場に居る総員に伝える』

『我々神界と魔界は、只今を以てユーラシア連合との交流条約を全て破棄。並びに、初音島の援護を始める！』

その二人の演説に、幕僚達は言葉を失っていた  
その時

「オーデイーン1、後退を開始！ 機体中破！」

とオペレーターから報告が入った

それを聞いて、純一は眉をひそめた

その時だった

司令部のドアが開いて、一人の女性軍人が駆け込んできて

「さくら様！ 10式が完成しました！」

とさくらに報告してきた

「本当に!？」

「はっ！ 只今、最後の電装系の確認中です！」

それを聞いて、さくらは少し黙考して

「09と12の作業員を、10式に回して！ 最優先！」

と命じた

それを聞いて、女性軍人は司令部から駆け出した

すると、純一が

「さくら」

とさくらに声を掛けた

すると、さくらは

「お兄ちゃん、切り札が完成した……だから、義之君を90番ハンガーに呼んで」

と伝えた

それを聞いて、純一は頷いて

「オーデイーン1に90番ハンガーに来るように伝えろ！」

とオペレーターに言った

場所は再び変わり、デイーヴア艦内

「さて、嬢ちゃん」

「後は頼むよ」

「はいな」

ユーストマとフォーベシイの言葉を聞いて、艦長席に座っていた少女

八神はやては頷いて

「艦内の総員に到達！ 総員、第一種戦闘配置！ 対艦対MS戦闘！」

と到達した

その直後、はやての眼前にモニターウィンドウが開いて

『それじゃあ、俺達も出撃します』



とシオンが言った

それを聞いて、王達ははやての肩越しに

「頼むぜ、シオン」

「稟ちゃんを守ってくれよ」

と言った

その命令を聞いて、シオンは敬礼するとモニターウィンドウは閉じられた

そして、デーヴァのカタパルトハッチが開いて

「ラウンズより、ラウンズ隊に通達！ 我等ラウンズ隊は王命に従い、初音島の援護。並びに稟様を守るために出撃する！ 俺からの命令は、一つだけだ……全員、生きて帰れ！」

とシオンは部下達に命じた

すると、サブモニターに部下達の顔が映り

『了解！』

と返答してきた

すると、オペレーター兼メカニックのシャリオ・フィニーノの顔が映り

『リニアカタパルト、システム正常。進路、オールクリア、ラウンズ隊、発進どうぞ！』

と告げてきた

それを聞いて、シオンを自機の操縦桿を握り締めて

「ラウンズー、ガンダムAGE2ノーマル。出撃する！」

と告げると、出撃した

AGEガンダム

この機体は、前大戦時に初音島からの技術提供により神界と魔界が独自に開発を成功させた機体だった

この機体はパイロット毎に機体構成を変更出来る機体なのだが、その根幹を為しているのが機体名にも使われているシステム

AGEシステムだった

このAGEシステムは、パイロットのデータから最適な機体構成を導きだし、パーツを作り出す独立システムだ

そして、神界魔界合同近衛部隊はガンダムAGE2ノーマルを含めて全機がAGEガンダムのみで構成されている精鋭部隊だ

数は、僅かに10機足らず

だが、その全員が一騎当千の手練れ達だった

一機は艦の甲板から狙撃で市街地に居たワインダムの足を撃ち抜き、一機は素早い動きで接近しビームサーベルで切り捨て、ある二機は同じ軌道で二機のダガーLに近づい

ては手足を繰り出して撃破した

そしてシオンは、MA形態で地面スレスレを飛んでいたかと思っただら一気に上昇し、ビームライフルを素早く連射し数機撃破した

彼らによつて、ユーラシア連合は蹂躪されていた

それを聞いて激怒していたのは、ユーラシア連合旗艦

アークエンジェル級二番艦・ドミニオンの艦橋に居たマクシミリアンだった

「ええい！ 何をしているか！ 相手は小数だぞ!」

彼が激怒しても状況が変わる訳がなく、むしろ少しずつ押され返されていた

それに苛立ち、マクシミリアンは席のアームレイカーを叩いた

その時だった

艦が大きく揺れたのだ

艦橋に居たクルーはなんとか耐えた

そして、副艦長席に座っていたグレゴールが

「何事か!」

と声を荒げた

すると、オペレーターが

「9時の方向から、JEU軍艦隊が接近中！ 先ほどの当艦の左隣に布陣していた艦

艇が砲撃の直撃を受けて、轟沈したものです！」

と報告した

こうして、ユーラシア連合は追い詰める側から追い詰められる側に立場を変えていつていた

## その名は

「唯依……なのか……？」

未だに意識が朦朧としていた直哉は、頭を軽く振りながら問い掛けた  
すると、サブモニターに唯依の顔が表示されて

『ああ、そうだ……、直哉……』

唯依はそう言うと、直哉機を助け起こした  
すると、一夏達が近寄ってきて

『悪い、ストラトス8。フォロー出来なかった』  
と謝ってきた

それに対して、直哉も

「いや……俺も位置取りが悪かった。すまない」  
と謝罪した

その直後、周囲に次々と白と黒の龍閃が着地し

『ホワイトファンング2よりホワイトファンング1。付近の安全は確保した』  
と、オーブンチャンネルで通信が入った

『分かった』

部下たる兩宮京子中尉あまみやきょうじの報告に返答すると、唯依は数瞬黙考してから

『私達が君達を護衛する。だから、彼を連れて後退しろ。彼は機体の整備。そちらは、最低でも補給が必要の筈だ』

と告げた

『よろしいのですか?』

一夏がそう問い掛けると、唯依は

『構わない。我々は、恩に報いるために動いた。ならば、ここで貴官等を置いて離れて、それが理由で貴官等が全滅したとなったら、我々は我々を許せなくなる』

と返した

それを聞いて、一夏が迷っていると

「一夏……ここは、彼女の提案に乗ろう」

と直哉が言った

『直哉、だが……』

「確かに、俺達は特務部隊だ……他国に規模を知られる訳にはいかないだろう……だが、俺の機体は損傷し、色々とギリギリだ……それにお前達は推進材や弾を消費している……その状態で、俺という保護対象パツケージを守って基地まで帰投するのは危険だ……そうなっ

たら最悪、誰かが残って足止めするしかない……もしそれで、お前達の誰かが犠牲になつたら……俺は自分を決して許せなくなる……」

直哉がそう言うのと、一夏は数秒程黙つた

そして

『貴女の提案に、乗らせてもらいます』

と返答した

『了承した。ホワイトフアング1より全ホオールワイホトフワイアトフフアアンンググ中隊！ 彼等を中心に  
フォーメーション・サークルワン  
 円形防衛陣形。彼等を彼等の基地まで護衛する』

『了解！』

唯依が命令すると、ホワイトフアング中隊は素早く陣形を取つた

その動きだけで、ホワイトフアング中隊の練度が自分達より上だと分かつた

そして、ラウラ機が乗っていたSFSに直哉機を同乗させた

直哉機のストライカーパック

フライトパックが機体が倒れた拍子に壊れたらしく、エラーが表示されていたからだ

ストライカーパックをパージしたら、最高速度は大幅に落ちる

だから、SFSに乗つたのだ

少しでも、リスクを減らすために

そして、二隊は移動を開始した

『ふっ！』

千冬機は短い呼気と共に、日本刀型実体剣

タイガーピアスを振り下ろした

その斬撃により、千冬達が布陣していた本島に居た最後のダガーLは真つ二つになつた

今、彼女が乗っているのはガンダムアストレイ・レッドフレーム・レプリカである

この機体は、千冬の要請により、レッドフレームの予備部品を使って作られた機体だ故に、その性能はオリジナルと遜色ない

元々、レッドフレームというのは近接戦闘に比重を置いて開発された機体である

そこに千冬の刀剣術が合わさって、並大抵のパイロットでは太刀打ち出来ない

そんな千冬機の近くに、緑色の機体

ガンダムアストレイ・グリーンフレームが着地してきた

『織斑中佐、そちらも終わったようだな』

『神宮寺中佐か。無事で何よりだ』

グリーンフレームに乗っているのは、神宮寺まりも中佐だった



彼女は前タイタン戦争、その初音島攻防戦の最中に被弾し負傷  
本来ならば、パイロットを引退している筈である

しかし、軍は彼女の腕を惜しんだ

故に、彼女専用の機体を用意した

それが、グリーンフレームである

グリーンフレームは戦闘支援A Iを搭載しており、パイロットの癖を学習し、例えパイロットの反応が遅れたとしても、最適な行動を取ることが可能なのだ

そんなグリーンフレームには、専用の武装が製作されていた

それは、ツインビームライフルである

これは、ビームサーベルを付けたビームライフルを二挺装備しているのだ

その専用武装と支援A I

そして、神宮寺まりもの技術の三つが合わさり、グリーンフレームは高い戦闘力を有しているのだ

その時、四機のアストレイニ型がグリーンフレームの前に着地した

『神宮寺中佐。ウォードッグ小隊、全機帰還しました』

『(´)苦勞、龍浪』

ウォードッグ小隊

それは、前タイタン戦争の時に彼女が自ら率いた精鋭部隊である  
龍浪響大尉を小隊長に、千堂柚香中尉、美桜乃雫少尉、エレン・エイス少尉です四  
名で構成されている

彼等ウオードッグ小隊は遊撃部隊として行動していて、戦場を駆け巡っていたのだ  
その時、千冬機の近くに居たアストレイ二型

山田真耶大尉が

『織斑中佐、こちらに接近してくる友軍機確認……これは……ストライクです！』  
と報告してきた

それと同時に、千冬達も捕捉したらしく機体のある方向に向けた

そして思わず、息を飲んだ

ストライクが損傷していたからだ

『ストライクが……損傷!?』

『そんな……』

損傷しているストライクを見て、ウオードッグ小隊のエレンと雫両名が絶句していた  
その時、ストライクがホバリングしたかと思ったら、赤い光がストライクに照射され  
た

すると、ストライクがゆっくりと降下していった

そして、ストライクが見えなくなると

『今のは確か……』

『トラクタービーム……だな』

と千冬とまりもが呟いた

トラクタービーム

これは、照射した対象を安全に格納庫に収容するためのシステムである

無傷の機体なら、普通に着陸させれば済む話である

しかし、損傷しているととなるとバランスもおかしくなるし、何が起きるかわからない  
以前は緊急着陸ネットを使用していたが、施設が壊れたり、パイロットが衝撃でむち打ちになる事もあった

それを無くすために考案・採用されたのが、このトラクタービームである

トラクタービームを採用しているのは、世界広しと言えど、初音島位なものだろう

『この付近で、トラクタービームを使っているのは……』

『天枷研究所だ』

龍浪が思い出すように呟いていると、まりもが場所を答えた

すると、千冬が

『とすると……噂のアレが完成したのか?』

と呟いた

『織斑中佐、アレとは?』

と真耶が問い掛けると

『私も噂で聞いたただけだが、天枷研究所では現行のあらゆるMSを上回る機体を開発していると聞いたんだ』

と千冬が答えた

『そんな機体が、本当にあるんですか!?!』

『見てみたいですねえ!』

千冬の話の聞いて、エレンと雫が興奮した様子で声を上げた

『落ち着け、貴様ら! 無駄話している暇は無くなった! 新たなお客さんだ! 盛大に歓迎してやれ!』

まりもがそう言うと、全員は構えた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「敵MS隊、多数接近! 対空レーザー機銃、追いつきません!」

とオペレーターが言うと、大和型三番艦信濃艦長、安部雅春は

あべまさはる

「対MS近接防衛、手動制御! 艦尾VLS並びに艦側ミサイルランチャー開けえ!」

と号令を下した

その直後に、轟音が鳴り響いた  
すると

「敵MS隊、散開回避！ 本艦から離れます！」

とオペレーターが報告してきた

だが、そのオペレーターが矢継ぎ早に

「敵MS隊、チャフ及びフレア放出！ 高密度………レーダーアウト！」

と報告した

しかし、安部は慌てることなく

「全艦、アータリンク照準！ 全砲一斉射！ 撃てえ！」

と号令した

その命令に従い、信濃に付き従っていた艦隊はあらゆる砲を撃った

今彼等は、MS約一個中隊を率いてユーラシア連合艦隊に攻撃を仕掛けていた

数の差は圧倒的

だが、それがどうした

初音島とて、圧倒的数の差だというのに勇敢に立ち向かい耐えている

ならば、我等も水浮く屍の覚悟で奮闘するのみ

その為に、立ち上がったのだから

「重巡プリンツ・オイゲン、第一主砲大破！ 火災発生なれど、戦闘続行！」

「駆逐艦リベツチオに打電、プリンツ・オイゲンのカバーに入れ！」

「了解！」

「戦艦ローマ、艦橋に被弾！ されど、戦闘続行！」

「羽黒、カバーに向かいました！」

「右舷第一装甲板、廃熱追いつきません！」

「面舵一杯！ 敵艦隊に左舷を向けろ！」

安部はそう指示すると、艦長席の受話器を取つて

「小沢提督、安部です！」

と別行動中の大和に通信を始めた

『安部君か、戦況はどうなっているかね？』

「はっ！ 全艦未だに脱落無し、奮闘中です！」

大和艦長、小沢晴信おざわはるのぶからの問い掛けに、安部はそう返した

『うむ……して、通信の理由はなにかね？』

「はっ……今こそ、我等の大和型の真の姿を見せる時と愚考します！」

小沢からの再びの問い掛けに、安部はそう答えた

そう、大和には最高機密があった

それを知っているのは、僅か一握り

『真の姿か……』

「はっ！ 使える力を使わずに後悔するよりも、使って後悔した方が百倍マシであります！ 何より、斑鳩殿下より『あらゆる力を使い、全力を尽くせ』と言われております」

安部の言葉を聞いて、小沢はしばらく目を閉じて黙考した

そして、意を決したらしく目を開いて

『良からう。大和型の真の姿……今こそ、世界に見せつけよ！』

と告げた

「はっ！」

安部は敬礼すると、受話器を戻した

そして、オペレーターに視線を向けて

「駆動炉の出力、どうなっているか!？」

と問い掛けた

それに対して、オペレーターは画面を変えて

「駆動炉、出力100%で安定！ 問題ありません！」

と報告した

それを聞くと、安部は再び受話器を取って

「艦内の全クルーに通達する！ 本艦はこれより、世界中に真の姿を晒す！ 各員の  
層の奮闘に期待する！」

と告げた

そして受話器を戻すと、大声で

「信濃、離水上昇！ ピッチ角60！ 操舵手、以後の回避行動は任せる！ 艦底部の主

砲並びに機銃展開せよ！」

と矢継ぎ早に指示を出した

そして今ここに、その艦が真の姿を晒す



## 降臨

天枷研究所

地下90番格納庫前

「まさか、またここに来るなんてな……」

義之は前タイタン戦争が始まる前に、ストライクを受領する時にこの90番格納庫に  
来たのだ

この90番格納庫に来たのは、それ以来久しぶりだった

今義之の両側前には二人の整備員居り、二人の手にはそれぞれ色違いのカードキーが  
握られている

その整備員達は、互いに顔を見合わせると

「大佐、扉を開けます」

「よろしいですか？」

と義之に問い掛けた

「頼む」

義之がそう言うと、二人は顔を見合わせて頷き

「1、2の3…」

とタイミングを合わせて、カードキーをスラッシュャーに通した  
すると、巨大な扉が重厚な音を立てながらゆっくりと開いた

開ききると、整備員達が振り向いて

「中へどうぞで」

と言った

それを聞いて、義之は無言で中に入った

ある場所まで入ると、扉が閉まった

一瞬部屋の中が真っ暗になったが、すぐに電気が点灯

義之はそれを左腕を目の前に上げて耐えると、その機体を見た

PSが入っていない証の鉄灰色の装甲

特徴的なツインアンテナと、デュアルアイのガンダムを

「この機体……ストライクの後継機か？」

「その通りです、大佐殿」

義之の眩きに対して、誰かが答えた

声のした方向を見ると、50代半ばと思われる男性技士が居た

その男性は、天枷研究所に於いてさくらの補佐をしている人物だった

その男性は、義之の隣に立つと

「型式は、G A T X 1 0 A。機体名はフリーダムです」と説明した

「フリーダム……」

義之は眩きながら、自由の名前を冠した機体を見上げた  
すると、男性が

「この機体は、初音島が有する全ての技術を投入して作られた、大佐専用機です」と言った

「俺専用機？」

「はい。OSからフレーム強度、武装……それら全て含めて、大佐の運用データから得られた情報を基に、開発しました」

義之の問い掛けに対して、男性がそう答えた

「そして、MSの中では破格のシロモノも搭載しました……」

「破格のシロモノ？」

義之が問い掛けるが、男性は頷いて

「申し訳ありませんが、私からは説明出来ません。大佐御自身の眼で御確認ください」と言った

そして、一步下がると

「初音島を、よろしくお願いいたします」

と敬礼した

義之は返礼すると、フリーダムのコクピットに乗り込んだ

そして、機体を起動させた

すると、HUDにOSの起動シークエンスが表示されたのだが

GENERATIOM

UNSUBDUED

NUCLEAR

DRIVE

ASSAULT

MODULE

と表示された

義之はその一文を見て、驚愕した

「ニュークリア……核駆動なのか!？」

核融合炉は、確かに存在する

しかし、そのサイズはとて大きく、MSに搭載出来るとは思っていなかった

義之が驚いていると、HUDにさくらの顔が映った

「さくらさん!？」

『義之くん、先に言っておくけど、これは録画だよ』

画面に映ったさくらに義之は問い掛けようとしたが、その言葉に口を閉じた  
考えてみたら、今のさくらには余裕は無いだろうことが予想出来た

『OSの起動シークエンスを見た義之くんならもう分かっていると思うけど、フリーダムを含めた三機には常温核融合炉が搭載されてるの』

さくらの説明を聞いて、義之は目を見開いた

常温核融合炉

それは、前歴たる西暦1945年にイギリスで理論のみ発表された機関だった

しかし、技術的な問題で当時は誰にも見向きもされず、西暦中に於いても結局開発は不可能とされた

そして、太陽歴に入ってもどこの国も採用したという話は聞いたことがなかったのだ  
『その常温核融合炉を、僕たちはMSに搭載出来るサイズの開発にも成功して搭載したの。つまり、理論上だったら半永久的にエネルギーの生成を可能としているの。でも、時間内発電量を超えるエネルギーを使ったらエネルギー切れになるから、気をつけて』

さくらがそう説明すると、サブ画面に10分毎の発電量が表示された

義之がそれを確認すると

『お願い、義之くん……初音島を、守って』

とさくらは言いながら、頭を下げた

そこで映像が終わり、外の光景が見えた

そして義之は、PS装甲のスイツチを入れた

それにより、フリーダム装甲は鉄灰色から白黒青に変わった

それを確認したからか、フリーダムの上のハッチが次々と開いていく

そして、全部開いたからか

『進路、オールクリア……フリーダム、出撃どうぞ！』

とオペレーターが言ってきた

それを聞いて、義之は操縦桿を握り締めて

「オーディーン、桜内義之……フリーダムガンダム、出るぞ！」

と言つて、スラストペダルを踏んだ

そして、蒼翼の機体は祖国の平和を掴むために降臨する

## 流転

義之がフリーダムで出撃する、少し前

最外周部人工島

その倉庫郡の一画に、ユーラシア連合所属のMS部隊が居た

左肩には、部隊章がペイントされている

炎によって熱せられている剣が

部隊名・ジャール大隊だ

『ターシャ、ザルカの様子はどうか？』

と問い掛けたのは、ジャール大隊指揮官

フィカーツィア・ラトロワ大佐である

『応急処置は済ませました。しかし、一度母艦に帰還する必要があります』

と答えたのは、ターシャこと、ナスターシャ・イヴァノワ大尉だ

その年齢は15歳と幼いが、真面目な副官である

そんな彼女は、被弾し負傷した部下の様子をラトロワに報告した

それを聞いて、ラトロワは数瞬黙考してから

『よし、母艦に帰投するぞ。政治将校も、どさくさ紛れで始末出来たしな……それに、そろそろ本国で同志達が動く頃合いだ』

と告げた

それを聞いて、ターシヤは

『わかりました。ザルカの機体は、どうしますか？』

と問い掛けた

その問い掛けに、ラトロワは

『放棄しろ。重荷になる』

と命じた

『了解。ザルカを、私の機体に乗せます』

ターシヤはそう言うと、ザルカと呼ばれた少年を背負った

ザルカの見た目は幼く、大体12歳位だろう

しかも、腕には特殊な模様の布を巻いている

ザルカは、ダルクス人である

実を言うと、ジャーナル大隊の殆どはユーラシア連合にて身分が低い者達で構成されている。ユーラシア連合にて正式にロシア人と認められているのは、ラトロワとターシヤ含め



て、たった三人だけだ

しかも、その内の一人は戦死している

ラトロワが戦鬪のどきくきに紛れて始末したのだ

そもそも、なぜ政治将校が部隊に居たのか

その理由は、ラトロワが軍上層部に信用されていないからだ

彼女、ラトロワ大佐はユーラシア連合内部では、数少ない人種差別しない人物だ

それに、彼女にはダルクス人の夫と子供が居たのだ

しかし、その夫と子供は特殊警察により強制労働所と軍キャンプに送られてしまった

その理由が、たった一度だけ政府に対する不満を溢しただけなのに、政府に対する不

穏分子と判断されたからだった

勿論だが、ラトロワは密告はしていなかった

しかし、家に盗聴機が仕掛けられていたのだ

それを知ったのは、二人が連れてかれた後だった

夫は木工品にて生計を建てていたのだが、夫が作るのとは違う木工品が置いてあつた

のだ

それを砕くと、中から盗聴機が出てきたのだ

そして、その盗聴機は政府が使っているのと同じだった

つまり、政府はラトロワを信用していないのだ

そして、夫と子供が連れてかれて少しすると、部隊に政治将校が配属されたのだ  
機体の優先操縦権限を有する、政治将校が

それ以降、ラトロワはその政治将校を廃除するタイミングを伺っていた  
それが、この戦闘中だった

本国で、ラトロワが所属する反乱軍が決起するだろうこの時

ラトロワは以前から、ユーラシア連合の人種差別はおかしいと感じていた  
そして、夫と子供が連れてかれたのを契機に、反乱軍に接触  
実働部隊の指揮官の一人にまで登り詰めた

死んでしまった、二人の仇と国を変えるために

『ザルカ、収容完了しました!』

『よし……ジャール大隊は、母艦シチルストイに帰投するぞ!』

『了解!』

ジャール大隊はラトロワの指示に従い、母艦シチルストイに帰投を始めた  
時は戻り、シチルストイでは

「ちよつと! 何時まで待たせる気よ!?!」

「もう一時間は待ってますよ!?!」

とある二人

姫路と島田の二人が騒いでいた

そんな二人が居るのは、シチルストイのとある小部屋だ

二人はシチルストイに入ると、機体を渡すよう要求

用意するまで、待つていてくださいと案内されたのが、その部屋だった

しかし一時間待つているのに、未だに部屋で待たされていた

二人が騒いでいると、部屋の入り口に居た警備兵が

「ただ今当艦は、帰投してきた機体の補給や整備を優先しております。貴女方の機体の用意は後回しになっています」

淡々とそう告げた

すると二人は、警備兵に詰め寄り

「なんで、ウチ達の機体の用意が後回しになってるのよ！」

「そうですよ！ おかしいです！」

と喚いた

その時、部屋のドアが開いて

「艦長命令よ、お客さん」

と第三者の声が聞こえた

ドアから入ってきたのは、パイロットスーツを着た女性  
亦菲だった

鈴と戦っていた彼女は、味方がある程度撤退したのを確認すると離脱

シチルストイに消耗した弾薬と推進材を補給しに戻っていたのだ

「そもそも、アンタらの所属は沈んだボーリンダ。この艦にとつては外様よ……そんな  
アンタらより、所属機体のほうが優先なのは当たり前でしょ？」

亦菲の言葉に、二人は口をつぐんだ

彼女が言ったことは、道理である

普通は、所属機体のほうが優先だ

そのことに二人がイライラしていると

「軍曹、その二人は放っておけ。そろそろ、動くぞ」

と亦菲が言った

それを聞いて、警備兵は背負っていた小銃に弾を込めた

そして、亦菲と一緒に部屋から出た

そのことに首を傾げていると、スピーカーから一瞬ノイズが流れてから

『鳥籠は開け放たれた。繰り返し、鳥籠は開け放たれた』

と放送が流れた

その直後、艦内で銃声が鳴り響いた

## 落日1

フリーダムで出撃した義之は、違和感を覚えた

「これは……どういうことだ？」

その理由は、ユーラシア連合軍同士が争っていたからだ

その光景に驚いていると、サブモニターにノイズが走ってから一人の女性が映し出された

フィカーツィア・ラトロワ大佐の姿が

『同志達よ！ 今こそ立ち上がる時である！ 無能な政権や上官達に反旗を翻せ！ 今我等、自由ユーラシア軍の手で、我等の国を作る時がきた！』

と、宣言した

「つまり、反乱か……どつちがどつちだ？」

と義之が呟くと、HQから通信が繋がり

『HQより友軍全機に通達する。IFFのデータ更新を行う！』

と言ってきた

そして、更新自体は一瞬で終わった

すると、先程まで敵と表示されていたユーラシア連合の一部の敵が味方と表示されていた

「こいつは……事前にデータが提供されたのか？」

義之のその考えは、ある意味当たっていた

それは、反乱軍

自由ユーラシア軍の賭けだった

上陸させた歩兵

そのうちの数人に、IFFデータを記録させていたチップを持たせていたのだ

更に、本国で起きる解放作戦の計画書も

それを持たせて、統合防衛軍に投降させたのだ

もちろん、中には戦死してしまった者や投降は許さないと政治将校に射殺された者も

居た

しかし、一人が投降に成功

データチップを渡せたのだ

それを、純一含めた将校や幕僚達も確認した

当然ながら、罨やデタラメだという声が上がった

しかし、純一は信じたのである

それは、杉並から教えられた情報だった

ユーラシア連合内にて、不穏な動きあり

特に、旧中国圏内や一部前線基地が顕著と

そして今、純一の指示で友軍設定させたのだ

「ならば、俺がやることは一つだ」

義之がそう言った直後、義之の頭の中でSEEDが弾けた

次の瞬間、義之の前にあつた計器

レーダーがせり上がった

その中から、義之は視認にて次々と敵をロックオンした

これが、G A T T X I O A

フリーダムガンダムの機能

マルチロックオンである

これは、義之がSEED使用であることを前提に開発された機能である

マルチロックオンだけではなく、フリーダムの全てが義之の全力に合わせて開発され

ていた

ストライクでは追い付けなかった、SEEDの反応速度

その反応速度に、フリーダムは完全に対応していた



ロックオンした数は、全部で50機

「いけ」

義之はそう言いながら、トリガーを引いた

次の瞬間、フリーダム全武装から次々と砲撃が放たれた

そして、正確無比に敵を撃ち抜いた

正確に、コクピットを撃ち抜いた

「凄いな、フリーダム……俺の思った通りに動いてくれる！」

義之はそう言うのと、フリーダムを急速前進させた

場所は変わり、ドミニオン艦橋

そこは完全に、阿鼻叫喚の様相を呈していた

「シチルストイを始めとして、空母5、巡洋艦10、更に複数の艦艇が離反した模様！」

「第10機甲中隊、交信途絶！ 第8機械化歩兵大隊、味方陣地を爆破！」

「サーベル大隊、ジャール大隊に敗北！ 壊滅しました！」

と次々と入ってくる報告に、マクシミリアンはアームレイカーを叩いた

すると、一人のオペレーターが

「敵大和型、浮上!!」

と言った

それを聞いて、マクシミリアンはメインモニターを見た

そこには、三隻の大和型が海面から浮上し艦底に更に複数の砲門を開いていた  
そうそれこそが、大和型の真の姿だった

海上艦ではなく、アークエンジェルと同じ特装艦だったのだ

三連装55センチビーム砲《カグツチ》が合計5門

ミサイル発射管55門

60ミリ機銃が50門

まさに、浮遊要塞だった

しかも、それが全部で三隻も

その対処を考えていると、別のオペレーターが

「前線より報告！ 敵に未確認機体が一機！」

と報告してきた

「メインモニターに映せ！」

「少々お待ちください……：CGでの補正ありますが、映します！」

グレゴールの指示から少しして、メインモニターに一機のMSが映された

蒼い翼を持つ、ガンダムが

「初音島の新型機だ?!？」

「このタイミングでか!？」

と二人が驚いた直後、そのガンダム

フリーダムから。次々と閃光が放たれた

その直後

「だ、第17大隊、交信途絶！ 更に、第9中隊もです!？」

と信じられない報告が上がった

「バカな……今の攻撃で、同時にやったというのか!？」

グレゴールは信じられなかったのか、怒声を張り上げた

すると、オペレーターが

「本国から緊急通信です！ 本国の旧中国領、並びに一部前線基地にて反乱!！」

と報告してきた

「なに!？」

「その反乱軍は自由ユーラシア軍を名乗り、収容所を次々と解放！ 本国は混乱状態の

もようです!！」

その報告に、マクシミリアンは唇を噛んだ

なぜ、こうなったのか。と

すると、今度は別のオペレーターが

「衛星が占領した日本帝国、並びにEU領にて黒煙を確認！　どうやら、戦闘が起きているもようです！」

と報告してきた

次々と入ってくる絶望的な報告に、マクシミリアンは頭が追い付かなくなっていた。それに止めを刺したのは、メインモニターに映った映像だった。

最初は、ノイズ混じりだった

しかしノイズが収まってみれば、映ったのは黒髪の男だった

「なんだ、こいつは!？」

「これは……宇宙からです！　宇宙から全周波数で流されています！」

グレゴールが問い掛けると、オペレーターはそう答えた

マクシミリアンはその時、あることに気付いた

その男の右肩の付け根辺りに、特徴的な模様の布が巻かれていることに

その柄を見て、マクシミリアンはその男の正体を察した

「ダルクス人か……っ！」

とマクシミリアンが憎々しげに呟いたタイミングで

『我々、ダルクス解放同盟。カラミティ・レーヴェンは、ユーラシア連合に対して宣戦布告する!』

と告げた

## 悲しき事実

「反乱か……やはり、酷いんだな。ユーラシアは」

そう言ったのは、愛機

烈空弑型の中に居た、ユウヤ・ブリッジスだった

ユウヤは反乱が起きたユーラシア連合を見て、まるで他人事のように思えたしかし、彼にとっても他人事ではなかった

ユウヤの祖国、NAUでもユーラシア連合ほどでは無かったが、人種差別があった白人至上主義者である

ユウヤが最初所属していた部隊は、その白人至上主義者が隊長を勤めていた故に、ユウヤを含めた黄色人種や黒人は酷い扱いを受けていた

その部隊は、今は存在していない

その原因は、表向き事故として処理されている模擬戦にあった

それは、ユウヤを含めた有色人種による小隊対、その隊長率いる小隊による模擬戦その模擬戦、ユウヤ達が勝った

その直後、その隊長を含めた全員が実弾を使ってユウヤ達の小隊を攻撃

ユウヤ以外全員死亡という、悲惨な事態になってしまったのだ

ユウヤは使えないと判断したライフルを捨てて、ビームサーベルを戦闘出力にして、鎮圧部隊が出るまで耐えたのだ

結果、隊長が率いていた小隊は全員撃破されて死亡

その後の調査で、隊長とその部下のしていた悪行が全て判明

全員の資産は全て凍結

部隊は解散となった

その後、ユウヤは技術試験隊へ転属

そして、若干の人間不信に陥っていたユウヤは、そこで喧嘩を多発

更にある事件を起こしてしまい、その部隊での居場所を無くしていた

そんな時に、その部隊の上官が烈空式型開発計画への出向を打診してきた

そしてユウヤは、もう1つの祖国、日本を知った

当初は、最初の部隊での不等な扱いの原因と逆恨みしていた

しかし、度々ぶつかりながら唯依や整備兵達と接していく内に日本人の性質を知った

そして式型が完成し後はN A Uに帰るだけだった

そんな矢先に、ユーラシア連合からの宣戦布告

それにユウヤは、部隊と共に残って帝国軍と共に戦った

今となつては、居心地の良さすら感じている

それに少し考えてみれば、恐らくN A Uでは死亡扱いされてるだろうだからユウヤは、このまま帝国軍と共に戦おうと思つた

その時ユウヤは、機体のレーダーとセンサーが自機に近付いてくるユーラシア連合軍機体が居ることに気付いた

その方向を見てみれば、両肩を赤く塗つたガンダム

ソードカラミティが近付いてきていた

「ユーラシアのガンダムタイプか!？」

そう確認したユウヤは、両手にビームサーベル

試製虎徹を構えた

そして、相手が振り下ろしてきた対艦刀を弾いて、肉薄

肘打ちを放つた

しかしその一撃は盾で防がれて、腕を捕まれた

「野郎、放せ！」

とユウヤが声を上げた直後

『やっぱり、ユウヤだ!』

と聞いたことのある声が聞こえた



「その声……イーニアか？」

『ユウヤ!』

ユウヤが呆然とした声でその名前を呼ぶと、サブモニターにイーニアの顔が映った

「イーニア、お前……ユーラシア連合軍の軍人だったのか!？」

『クリスカも居るよ!』

ユウヤの言葉にイーニアがそう返すと、もう一つのサブモニターにクリスカの顔が映った

『戦場以外で出会っていれば、こんなことにはならなかっただろうにな』

「そうだな……今の俺は帝国軍預りの軍人で、お前らはユーラシア連合軍の軍人だ……だったたら、やることは一つだ……」

ユウヤはそう言うと、ソードカラミティの腕を振り払い、虎徹を構えた

そして、ソードカラミティを見ながら

「行くぜ、セカンド式型……この戦いで、お前を評価してない連中を見返してやろうぜ!」  
と言った

すると、式型もそれに答えるように、駆動音が高まった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わり、ワルキューレ隊ハンガー

「何処の部隊でもいいから、整備要請を受け入れて！ 倉庫から、使える部品は全部持ってきてなさい！」

「ほら、そこ！ ケーブルを出しっぱなしにしない！ 直ぐに片付けて！」

「はい！」

と、ハンガー内では怒号が響き渡っていた

その時、麻弓が

「大尉！ ストラトス隊が帰還してきます！ 一機中破してるようです！」

と言った

それを聞いて、虚は

「上部ハッチ開放！ 8班、退避！」

と指示を出した

すると、ハンガーの上部ハッチが開いて、そこからストラトス隊

更に、帝国近衛軍ホワイトファンク隊が入ってきた

「帝国近衛軍？ なんで？」

と薫子は困惑したが、直ぐに中破している機体

ストラトス8に気付いた

「大尉！」

「片腕を損失に、ストライカーパックが破損。それに、胸部装甲にも損傷が見られるわね」

虚はそう言うと、着地したストラトス8

直哉機に駆け寄って、端末を機体に繋げた

そして、インカムに手を当てて

「神埼少尉、聞こえる？ 聞こえるなら、コクピットハッチを開けてください！ 神埼少尉！」

尉！」

と言った

すると、聞こえたのは

『ア……ガ……ギイ……』

と苦悶の声だった

それを聞いて、虚は顔を蒼白にして

「まさか……禁断症状!？」

と言った

すると、唯依機が直哉機に歩み寄り

『整備兵達、離れていろ!』

と言うと、直哉機の胸部装甲を掴んだ

それを見て、虚を含めた整備兵は離れた

それを確認し、唯依は直哉機の胸部装甲を無理矢理外し、シャツターを見るとコクピットから出て

「はあー！」

と刀で、シャツターを切り裂いた

その刀は帝国近衛軍で標準装備として採用された、高周波刀だった

その切れ味は凄まじく、強化外骨格の装甲すら切り裂くのだ

唯依はシャツターが落ちたのを確認すると、刀を放り投げて中に入り

「直哉！ しつかりしろ、直哉！」

と直哉の肩を掴んだ

しかし直哉はそれに答えず、体を強張らせながら苦悶の肩を出していた

そんな直哉に肩を貸して、唯依は

「ストレッチャージャー急げ！」

と声を張り上げた

すると、登ってきた虚が肩から下げているバッグの中から拳銃型の無針注射を取り出して

「すいません、ちょっと退いてください」

と言つて、直哉のパイロットスーツの前を開けた

そして、無針注射の先端部を直哉の体に押し付けて、引き金を引いた  
すると、装着していた薬剤が直哉に注入された

それから数秒後、直哉の体から力が抜けて、苦悶の声は途切れた

唯依はそれを確認して安堵しながら、虚に視線を向けて

「技術大尉殿、1つ聞きたい……彼、直哉が苦しんでいたのは……直哉に施された強化施術が原因だな？」

と問い掛けた

その問い掛けに、虚は一瞬驚いたものの

「ええ、そうです」

と答えると、外に顔を出して

「医療班、なにをグズグズしてるの！ 早くストレッチャーを！」  
と怒鳴った

その数十秒後、楓と桜の二人がストレッチャーを運んできて、それを確認した唯依は  
自機の掌に直哉を乗せると、ゆっくりと下ろした

そして、直哉をストレッチャーに乗せると虚が

「彼は、特殊治療室に搬送！ そうしたら、束博士を呼んで！」

と指示を出した

「了解しました！」

楓と桜は敬礼すると、ストレッツチャーを押し始めた

すると、機体から降りてきたらしい一夏が近寄り

「大尉……直哉に施された強化施術って……どういうことですか？」

と虚に問い掛けた

それに対して、虚は言いにくい様子で口をつぐんでいた

すると、ハンガーに麻耶が現れて

「神崎直哉少尉は……ユーラシア連合によって強化人間にされていたのよ……」

と言った

それを聞いて、一夏が言葉を失っている

「その施術に使われただろう薬物……その禁断症状か？」

と唯依が麻耶に問い掛けた

その表情は、怒りに満ちていた

すると麻耶は、沈痛な表情で

「ええ、そうです……出た薬物反応は、全部で約十数種類……それら全ての類似パターンは、国際法で使用を禁止された薬物に似ていました」

と言った

その直後、唯依は拳を近くの柱に叩き付けていた  
すると

「それと、あのガンダムタイプと戦っていた時、彼……左目の生態デバイスを使った形跡  
があります」

と麻耶が言った

「生態、デバイス……？」

「ええ……自身の脳の一部と外科的手術で繋ぎ、凄まじい演算能力を得るの……その変  
わり、脳に大きな負担が掛かるの……下手したら……廃人化するわ」

麻耶のその説明を聞いて、拳を握り締めて

「クソつたれがあああああ!!」

と怒鳴った

## 落日2

「づあー」

稟は気合いの声を上げながら、一機のウインダムを撃破した

すると、稟機の周囲に三機のガンダムが着陸してきた

すると、通信が繋がり

『稟様、御無事ですか?』

とシオンの声が聞こえた

「シオン……少佐ですか。自分は無事です」

稟がそう言うと、シオンは

『稟様、普通に話してください構いませんよ』

と苦笑した声で言った

すると稟は

「仮にも軍人なので、階級はそちらが上です」

と返した

それを聞いて、シオンは



『筋は通す、ということですか。流石は稟様です』

と言った

そして、一拍すると

『では、土見少尉。機体に損傷が見えるが、大丈夫か？』

とシオンは問い掛けた

それに対して、稟は

「敵の攻撃で、頭部に損傷あり。センサー類と通信に一部不良が起きてます」

と返した

確かに、稟の機体の頭部

アンテナに損傷があった

『了解した。それならば、一度帰還して、整備を受けた方がいいだろう』

シオンがそう言った直後、白が基調色に砲撃戦主体らしいガンダムが頭部を上げて

『ラウンズ1、2時の方向から接近する機影確認。数1』

と言った

『02、識別は？』

『識別は、統合防衛軍……バッケージ護衛対象の僚機の様です』

と女性仕官

なのはが言った直後、狙撃ライフル装備機体が着地した

「柏木か！」

『良かった！ 土見、無事だったんだ！ 少し前からIFF信号が着いたり消えたりだったから、心配してたんだよ！』

晴子のその言葉を聞いて、稟は再度確認した

「どうやら、IFFにも、異常が起きているようだ

「すまない。頭部が損傷してな……それが原因みたいだ」

『わかった。一旦、皆に通信するね』

晴子はそう言うと、稟との通信を一旦切った

そして、数分後

『茜と通信できた。一旦、ハンガーに集まろうだって』

「了解した」

『では、俺達がカバーしよう』

「ありがとうございます」

その会話を最後に、稟達は移動を開始した

場所は変わり、最前線のビル街

今そこを、一機の損傷したダガーIが味方陣地目掛けて後退していた

しかし、その進路上

あるビルの屋上に、強化外骨格を装備した部隊が展開していた

『隊長、ターゲット通過まで、あと五秒です』

「全ユニット、用意」

強化外骨格部隊隊長

五反田弾はそう言うのと、ある装備を保持した

そして、五秒後

「飛べえ!!」

と指示すると、反対側のビル目掛けて強化外骨格のスラスタを拭かした

それに驚いたのか、一瞬ダガーLのスピードが落ちた

その直後、反対側のビルや弾が居たビルの別の階の窓ガラスを突き破りながら同じよ

うに強化外骨格が飛び出してきた

よく見ると、飛んだ全強化外骨格は太いワイヤーを持っていた

強化外骨格が飛んだことにより、ダガーLの進路上に、数本のワイヤーが張られた

そのダガーLはワイヤーに気付かなかったのか、止まれなかった

それにより、そのワイヤーは見事にダガーLに次々と絡まった

そして、強化外骨格部隊が隠れた直後

轟音を起こして、ダガーLは残骸に成り果てた

「はっはー！ やり方次第だが、歩兵でもMSを撃破できるんだよ！」

ダガーLが残骸になったのを確認すると、弾はそう言った

弾が使ったのは、対MS用の爆導策である

これは、対象機体に絡み付くと、ワイヤーに取り付けてある高性能爆薬が炸裂

相手の機体の強度にもよるが、敵機体を撃破出来る装備だ

制作されたはいいが、余りにも運用が難しかったのだ

故に、爆導策は技術研究廠の倉庫に眠っていたのを、弾は思い出したのだ

それを義之に頼んで、部隊に配備したのである

この爆導策により、弾の部隊はMSを数機撃破していた

大戦果と言っても、過言ではないだろう

「全<sup>オール</sup>ユニット、<sup>リポート</sup>報告！」

弾がそう言うのと、部下から次々と報告が舞い込んでくる

なお、口答による報告をしなくとも、強化外骨格にはデータリンクが標準装備されて

いる

強化外骨格の損耗具合から、兵士のバイタルに到るまで全て確認できる

しかし弾は、部下達の声が聞こえるからと、口答報告を好んでいた

妹が居るからか、面倒見が良く、更に頭も回る

だから弾は、ワルキューレ隊の歩兵部隊の一部隊長を任せられていた

「……ふむ」

部下からの報告を聞くと、弾は数秒ほど黙考した

そして

「一度、整備と補給を受けに後退する！ 遅れるなよ!？」

と指示を出した

『了解!』

部下の斉唱を聞いてから、弾は移動を開始した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わり、統合防衛軍本部

そこには、様々な報告が舞い込んできていた

内容の良い報告から、悪い報告まで

「ユーラシア連合軍の戦力、当初の約四割まで減少。ユーラシア連合軍は、第二防衛ラインまで後退を開始しました!」

「我が軍の損耗率、約半数! 予備戦力で帰還したのは、約三割!」

「第28特設機動中隊から、応援要請来ました!」

「第11特化大隊から戦力を抽出し、向かわせろ！」

「了解！」

という有り様だった

その報告を聞きながら、純一は

(後一手……後一手足りない)

と思っていた

それは、勘だった

(後一手、決定的なことが起きれば……この戦争は、終わる)

勘だったが、純一はそう確信していた

その時だった

「元帥、さくら様！ 宇宙から全周波数で映像が送信されています！」

と一人のオペレーターが言った

「何処から分かるか!？」

「場所は……L4コロニーからです！」

「メインモニターに回せ」

純一が指示した数秒後、メインモニターに映ったのは、一人の男だった

黒い軍服とマントに、特徴的な模様が刺繍された布を肩に巻き付けていた

「ダルクス人か……」

『重ねて申し上げる。我ら、ダルクス解放軍……カラミティ・レーヴェンは、ユーラシア連合に対して宣戦布告する！』

純一が相手の人種を特定した直後、モニターに映っていた男はそう言った

『私の名は、ダハウ……カラミティ・レーヴェンの総帥である。我々は、この50年……ユーラシア連合の弾劾とも言える圧政に耐えてきた……しかし、それも最早限界だ。言われなき罪で、我が同胞達は殺されてきた……聞け、地球に居る同胞達よ！ 今こそ立ち上がる時である！ 武器を取り反逆せよ！ 私は今ここに、ダルクス人の為の国……ダルクス独立国の建国を宣言する！』

とダハウが言った直後、モニターの向こう側から凄まじい雄叫びが聞こえた

『我々は既に、L4コロニー群を制圧した。そしてこれより、降下作戦……ラグナロク作戦を実施する！』

それが、戦乱の時代の始まりだった

## 終結

状況は刻一刻とユーラシア連合の悪化に向かっていた

それに対して、初音島防衛側は好転してきていた

幾つもの奇跡が重なり、それらが初音島に味方していた

予期してなかった、幾つもの援軍

ユーラシア連合の内政悪化

そしてなにより、最新鋭ガンダムの投入

それらにより、純一は戦争の終結を確信した

純一は総合司令室にて、腕組みしながら

「それで、所属不明部隊はこちらの援護をしているのだな？」

とオペレーターに問い掛けた

すると、一人のオペレーターが

「はい、間違いありません。型式不明ですが、三機。ユーラシア連合と交戦している。と

報告が来てます。かなりの技量のようです」

と答えた



それを聞いて、純一は

「……警戒だけは継続し、その三機には攻撃しないように通達しろ」

と言った

天秤は完全に、初音島側に傾いていた

場所は変わり、ユーラシア連合軍旗艦

ドミニオン

「殿下、これ以上は！」

と言ったのは、グレゴールだった

それを聞いたマクシミリアンは、乱暴にアームレイカーを叩いて

「全軍……撤退する……」

と悔しそうに命じた

それを聞いて、グレゴールは頷いてから

「信号弾上げろ！ 撤退する!!」

と命じた

その後、ドミニオンから撤退信号弾が打ち上げられ、ユーラシア連合は撤退

帰還した戦力は、投入時の約三割だったという

なお、ユーラシア連合本土で起きたクーデターにより、旧中国領は、自由ユーラシア

軍が完全制圧

その領内に居た政治家は、一人残らず囚われた

そして、ユーラシア連合により制圧された帝国本土は潜伏していた帝国軍の残存部隊による一斉襲撃により、奪還

EU領も同じく、残存部隊が奪還

そして、カラミティ・レーヴェン

彼等は電光石火の降下作戦を実施し、ユーラシア連合領だった旧アイスランド領とカムチャツカを完全制圧

宇宙では、L4コロニー群を完全制圧

月面のグリマルディクレーター基地との中間宙域には、資源小惑星を使った宇宙要塞ボアズを配置した

機体は新型機体のザクウォーリアーとグファイグナイテッドと判明した

しかし、ユーラシア連合の悲劇は止まらなかった

何処からかは不明だが(トレンチコートが特徴の男性曰く)、最重要機密だった強化人間計画とJ13計画の情報が漏洩

世界中に、ユーラシア連合が非人道的な所業をしていることが伝わった

これに対し、世界各国は声高に非難したが、ユーラシア連合は沈黙し続けた

初音島防衛軍の損失は、約六割に達した

戦闘機部隊と多脚戦車部隊は、ほぼ全滅

歩兵部隊は、約半数が死傷

MS部隊で無事なのは、実質ワルキューレ隊のみだった

ワルキューレ隊でも多数損傷や負傷兵は出たものの、死者は無し

危険だった直哉は、一週間意識不明だったが、復帰

この戦争

通称、第二次初音島攻防戦は事実上の初音島の勝利で幕を下ろす

翌新太陽暦74年1月1日に、大統領芳野さくらは辞任を表明

だが、誰も大統領に立候補しなかったために、さくらの続投が決定

これに関して、さくらは

『求められたのなら、ボクは頑張るよ！』

と言って、再び大統領の席に座った

そして初音島は、ユーラシア連合に対して会談を要求するが、ユーラシア連合は全て

無視

ユーラシアも初音島も、軍備の再編に奔走する

初音島の再編に関して、帰国後に再建された日本帝国とEU、神界魔界。更に御剣財

閥から次々と支援が送られた

そして新太陽暦74年5月初頭に、初音島は世界で初めて軌道エレベーターの開発を発表し、開発を開始

それに併せて、低軌道衛星に宇宙ステーション  
アマノミハシラの建造を開始した

そして世界は、再び戦火に焼かれることになる

## 第二部

## プロローグ

新太陽暦74年8月某日

宇宙、低軌道衛星ステーション《アメノミハシラ》

その周囲を数機のガンダムが動いていた

型式、G A T I X 1 0 5 E

機体名、ストライクE

型式、G A T I X 1 0 2 2

機体名、ブルデュエル

型式G A T I X 1 0 3 A P

機体名、ヴェルデバスター

型式、G A T I X 3 0 3 A A

機体名、ロツソイージス

これらの機体は全て、初音島のガンダム

その発展機体である

もちろん、運用しているのは初音島の部隊

ワルキューレ隊である

ワルキューレは今現在、アミノミハシラの警護並びに新型ガンダムの試験運用を並行して行っていた

新型ガンダムは、天枷研究所の肝いり計画

GE計画によって開発された機体である

そしてこれら新型ガンダムは、少数生産されて全てがワルキューレ隊に配備されている

ガンダム運用部隊、ワルキューレ隊

とはいえ、全機がガンダムではない

以前より数は減ったが、アストレイ三型も運用している

そして前から変わったのは、アストレイ三型が制式採用されたことだ

今現在、初音島は軍備再編に着手している

その一例で、アストレイ三型を制式採用

パイロットの補充を急いでいる

四機のガンダムが、アミノミハシラを一週した時だった

『CPよりレーヴアティン隊へ通達する。こちらに接近する機影を確認。数1。確認し

てほしい』

と通信が来た。

『レーヴァティーン1、了解。こちらでも確認しました。機体は、ダガーL。恐らく、ユーラシア連合の脱走兵と思われる』

『CP了解。恐らく、まだ居ると予想される。警戒せよ』

レーヴァティーン1

涼宮茜の報告に、CP

涼宮遥はそう返した

茜が乗っているのは、ロツソイージスである

イージスは元々、指揮官機として設計・開発された機体である

だから、レーダーと通信範囲は格段に広い

そしてそれは、ロツソイージスにも受け継がれている

前身機よりも二割増しになったレーダーは、敵を確かに捉えた

『この数は……脱走兵じゃない！ それに、普通のダガーLじゃない！ ダークダガー

Lが12機！』

と茜が言った直後、ストライクEが前に出て

「01！ 俺が時間を稼ぐ！ 本隊に救援要請を！」

とパイロット

稟が言った

すると、ヴェルデバスターが前に出て

『茜、私と土見でやるから、お願い！』

とパイロット

晴子が言った

それを聞いて、茜は少しすると

『わかった。ジャミングの範囲を抜けるまで後退する！ 多恵！』

『了解！ 二人には、私から通信するね！』

とブルデュエルのパイロット

多恵は言った

残る二人

麻倉と田倉の二人は、アストレイ三型だが別方面の警戒に向かっていた

多恵はその二人に報せるために、機体を進ませた

二機を見送ると、稟は両手にビームライフルショーテーターを構えて

「それじゃあ、柏木。何時も通りに頼むぞ」

と言った



すると、晴子も構えて

『任せてよ、相棒！』

と返した

新太陽暦74年8月現在

ユーラシア連合は持ち前の物量で、軍備を再編させると直ぐ様戦端を開いた

だが、以前よりも数は少ない

だが、異様な戦果を挙げる部隊を前に出して動いていた

通称、フアントム・ペイン

その部隊は、一般パイロットの域を越えた力を見せつけた

各国は共同歩調で、対ユーラシア連合包囲網を形成

しかしユーラシア連合は、特にダルクス軍と積極的に交戦

アイスランドとカムチャツカは、嘗てない程の激戦区と化していた

地球圏は、戦火に焼かれていた……

## 不期遭遇戦闘

『レーヴァテイン1よりCP！ 誰でもいいですから、至急応援を頼みます！ 敵は、

フロントム・ペインと思われる！』

と茜は報告するが、返ってくるのはノイズのみ

こうしてる間にも、稟と晴子は戦っている

その数の差は絶望的だった

相手は、分かってるだけでも中隊規模

恐らく、まだ居る可能性が高い

それを考えたら、茜は胸が締め付けられた

『お願い……誰でもいい……救援を！』

と茜が何度目か分からない催促をした

その時だった

『こちらホワイトフアング1……カバーする』

と女性の声が聞こえた

その直後、茜機の直上を一機の山吹色の機体

帝国近衛軍、龍閃宇宙戦仕様が走った

更にその後、約10機の白や黒の龍閃

そして、一機のガンダムが走った

GAT-X12A

名前は、テストメント

そのパイロットは、テストメントのGに唯一耐えられるパイロット

神崎直哉だった

テストメントはストライクの拡張版機体とも呼べる機体であり、核動力でありながらもストライカーパックに準拠している

更に、今装着しているストライカーパックはテストメント専用ストライカーパック

デイベインストライカーだった

このデイベインストライカーは変形機構を有するストライカーパックで、飛行、アームと複数の形態になれる優れものである

しかしそれ故に、コストが高い

だから量産されず、テストメント専用とされたのだ

第二次初音島攻防戦の時には、そのデイベインストライカーと主武装の開発が間に合わなかったのだ

主武装、複合ピストルである

マガジンを交換することにより、実弾とビームの撃ち分け

更に、銃身下に銃剣が付いている

それを二丁、脚部装甲に収納している

さらに手首装甲にビームサーベルを予備含めて、三本装備

全体的に近接戦闘に重視に設計された機体となっている

そこで、遠距離戦闘の不利を覆すために最高速度はフリーダムを越えた設計がされた  
常に100を超えるGに、機体に搭載されたAIにより相手の分布と装備から算出・表  
示されるコース

それを乗りこなせると判断されたのが、直哉だけだったのだ

実際、義之ですらGに耐えられずに意識を失ってしまった

それに直哉は

『強化人間の面目躍如だな』

と言って、数人に叩かれた

それが居たということは、恐らく試験巡航中だったのだろう

そこに、フリーダムと赤い機体

G A T T O X 0 9 A

機体名、ジャステイスが来た

ジャステイスのパイロットは、みちるとなった

まゆきは自ら、ブルデュエルを選んだ

これは、まゆき曰く

『あたしは、指示出しとか得意じゃないから』

と言っていた

確かに、指示出しならばみちるの方が的確なのだ

これに、親友の音姫は

『副隊長の一人として、いいのかな……』

と溜め息混じりに溢していた

閑話休題

その直後に、多恵機と二機のアストレイ三型が合流

茜は引き返した

そこには、凄まじい数のダークダガーと黒い105ダガー

スローターダガーが展開していた

なお、スローターとは殺戮を意味している

全部で、36機

大隊規模だった

それに対して、こちらは約二個中隊規模

だと言うのに、茜は不思議と勝てると確信していた

その証拠に、今一機のスローターダガーの頭ををテストメントがデイバインストライカーのクローで潰し、その機体の留めを山吹色の龍閃がした

更にストライクEとヴェルデバスターが息のあった連携で、三機のダークダガーLを撃破した

そこに、茜達四機も乱入

十数分の乱戦の後に、フロントム・ペインは全滅したのだった

すると、義之が

『これほどの数に、広範囲ジャミング……母艦が居る可能性が高いな』  
と言った

すると、晴子が

『しかし大佐。レーダーに反応はありません。熱源にも』  
と言った

更に言えば、肉眼にも映っていない

だが、みちるが冷静に

『レーヴァテイン5、忘れたか？ 我々は、その前例が居るだろう』  
と言った

それを聞いて、稟が

『ブリッツとAGF天美夏……』

と言った

それを聞いて、茜が

『ミ、ミラージュコロイド！』

と声を上げた

それを聞いたホワイトファング1

篁唯依が

『つまり、ミラージュコロイドを使ってる艦艇を、連合が有してる……と？』

と問い掛けた

その問い掛けに、義之は無言で頷いた

レーダーにも肉眼にも映らない艦

これほど、秘匿行動に適した艦はないだろう

移動も熱源センサーに反応しない温度のガスを使えば、一切反応しないことになる

恐らく、速度はそれほど出ないだろう

だが、隕石やデブリの陰に隠れながらだったら、発見するのは困難だろう  
しかし、見付けられないわけではない

初音島は、対ミラージュコロイド用のセンサーを開発していた

ミラージュコロイドデテクターである

しかし、これの運用は非常に難しかった

まず、これの運用はストライカーパック準拠機体ならば可能である

しかし、エネルギーを莫大に使うのだ

バッテリー形式の機体だと、約二十分が限界だった

勿論だが、戦闘すれば更に短くなる

『とりあえず、一度帰投するぞ』

『了解』

義之の指示に従い、MS隊はアメノミハシラに帰投した

この時義之達は、まだ近くにそのミラージュコロイドを使用母艦

連合呼称、ガーテイルー級が居るとは予想していなかった

この時撃つていけば、どうなっていたのか

それを、この時は分からなかった



## 強化人間

ファントム・ペインを撃退したワルキューレ隊とホワイトファング隊は、アミノミハシラに帰還した

世界初の低軌道ステーション、アミノミハシラ

今現在、出来ているのは約四割程

その建造には御剣財閥も関わっている

そして、一行が機体から降りると

『お帰り、義之』

と麻耶が来た

その後には、ノーマルスーツを着た整備兵達が続々と入ってくる

そしてテストメントのコクピットからは、直哉が出てきた

『神崎少尉、テストメントはどう？』

『やはり、加速性能が素晴らしいですね。しかし、もう少し遠距離戦闘用の武装が欲しい

ところですよ』

虚に問い掛けられて、直哉はそう答えた

それを聞いて、虚は

『今本国の天枷研究所で、専用ライフルを開発してるわ』

と言った

それを聞いて、直哉は

『それは楽しみですね。では』

と敬礼し、虚から離れた

そして、義之達に続いてハンガーから出た

その後、義之達はパイロットスーツを脱いで話していた

「今回ののは、どういう奴等か分かるか。神崎少尉」

「恐らくですが、強化人間でも……所謂成功個体は居ないでしょう……動きが中途半端でしたから」

義之に問い掛けられて、直哉はそう答えた

すると、義之は

「つまり、失敗個体……と？」

と問い掛けた

すると直哉は、僅かに俯いて

「ええ……恐らく、俺と同類かと……自我が崩壊仕掛けていたか、崩壊した個体かと

……」

と答えた

それを聞いた唯依は齒を鳴らして

「外道共が……」

と声を漏らした

確かに、それは道を違えた所業だった

すると、義之が

「すまん、神崎少尉……辛い戦いをさせている」

と謝罪した

すると、直哉は

「いえ……同類を倒すのが、俺の役割でしょう……第一期フロントム・ペインのたつた一

人の生き残りの俺の……」

と言った

第一期フロントム・ペイン

タイタン戦争にて投入されたのは、108人

機体は、デュエルダガー

普通のパイロットでは扱えない機体で、増加兵装フォルテストラを装備する機体も

あつた

それらは危険で生還が望めない戦域に投入され、直哉以外は全員が死亡したのが確認された

直哉も助けられたのは、本当に偶然だった

直哉が居た部隊が投入された場所と、ユーラシア大陸に派遣された千冬率いる部隊がたまたま近い戦域で戦っていたこと

そして千冬の部隊が、逃げたタイタンを追撃したこと

何より、撃破された直哉機がコクピット部分をたまたま外して無事だったこと

これらが重なり、直哉は救助された

しかも、直哉が初音島国民として登録が残っていたこと

そこから直哉は、さくらと束が筆頭として治療が施され、織斑家で一年掛けて自我を取り戻した

その後は、千冬を説得し防衛軍訓練校に入隊

現在に到る

「その第一期ファントム・ペインの指揮官だったのが、スコール・ミューゼル、オータム。そして……セルベリア・ブレス」

その三人は、第二次初音島攻防戦の際にもMSパイロットとして出撃

多大な戦果を上げていたらしい

特にセルベリア・ブレスは、ストライクに乗っていた義之を追い詰めた

その腕の高さは、折紙付きだろう

そして、スコールとオータムの二人は副隊長二人を含むGATを相手に互角に戦った

その前に戦ったアストレイ隊は、幾つか全滅している

その強さは、かなりだろう

そして、直哉機と戦ったフォビドゥン

織斑円夏

千冬に問い掛けたら、答えた

一夏の、双子の妹と

今は居ない千冬と一夏の両親

織斑百春

織斑秋十

この両親が、円夏を連れて消えたということだった

そして調べてみたら、両親は薬物学博士だった

それも、人体に深く関わる薬物

恐らく、ユーラシア連合から接触があったのだろう

そして、円夏を連れてユーラシアに向かった

「そして、π3計画か……」

「俺が知っているのは、その根幹を為す繭……コクーンを作るのに、クローンを大量に作り出し、また犠牲にした。という位です……」

余りにも、人道を無視した計画

それをして、何を目指したかったのか

だが最早、それは世界中に知られた

今は名ばかりの国連も、ユーラシア連合に対して制裁を決めた

だが、ユーラシア連合は未だに大国

多少の制裁などは、意味を成さない

どうすればいいのか

「今俺達が考えても、仕方ない……出撃した各員は、詳細をレポートにして各代表に提出してくれ」

「了解」

義之のその言葉を最後に、一堂は解散

部屋に向かった

その後直哉は、戦闘詳細を纏めて、義之宛に送った

そして、背伸びをしているとノックされた

「どうぞ？」

と直哉が入室を促すと、ドアが開いて長い黒髪が見えた

その主

篁唯依の肩には、小さいシオルダーバッグがあつた

唯依はそのシオルダーバッグを下ろすと、中から注射器を取り出して

「直哉、薬を打つぞ」

と言つた

「すまん。本来、帝国近衛の筈の唯依にさせて」

「仕方ないだろう。お前は、医務官資格が無いし、此処の医務官も忙しいからな」

直哉が謝罪すると、唯依はそう言いながら注射器の中に薬液を規定量まで満たした

そして、気泡を抜くと唯依は直哉の腕を掴んだ

そして、消毒を済ませると注射を手早く済ませた

その後、注射器を仕舞うと唯依は

「簡単には、治らないのか……」

「ああ……まだ掛かる見込みだ」

唯依の問い掛けに、直哉はそう答えた

それは、直哉に施された強化施術

それに使われた薬物の、禁断症状だった

今しがた唯依が打ったのは、その禁断症状を緩和する薬である

未だに、完治の目処は立たない

だが、少しでも禁断症状による激痛を抑えるための薬である

それをさくらが、唯依に預けたのである

そして唯依は、注射器を仕舞うとシヨルダーバッグを肩に掛けて

「また後でな」

と言って、部屋から出たのだった



## 緊急事態

それが起きたのは、9月頭だった

「間違いないんだな？」

「ええ……アイスランド領ではキノコ雲が。カムチャツカでは、巨大な機体が確認されたわ」

義之の問い掛けに、麻耶はそう言いながら会議室のディスプレイに写真を表示させた。その会議室に居るのは、アメノミハシラに駐留してる全軍人だった

国籍や所属する軍はバラバラだ

だがそこに集まっているのは、対ユーラシア連合の名の下に集った者達だ。その実力は、折り紙付きである

「まず、アイスランドのキノコ雲のほうですが……核ではないことが人工衛星により確認されています。恐らくは、気化爆弾だと思われませう」

麻耶はそう言いながら、人工衛星で観測されたのだろうデータを表示した。そして次に、遠目だが起爆した後の写真も表示された

よく見れば、キノコ雲が二つある

「二発も使われたのか……アイスランドで戦闘は？」

と問い掛けたのは、唯依である

すると麻耶は

「欧州連合軍の報告では、確認されなかったそうです」

と言った

そして最後に表示されたのは、無惨な光景のアイスランド領だった

もはや、生き残りは絶望的だろう

アイスランドに展開していたダルクス軍は、全滅

更に言えば、アイスランドには数多の民間人が居た

それも、全員死んだだろう

そして、新しく画像が表示された

それは、人工衛星から撮影されたのだろう

上からだった

街は灰塵に帰していた

そして街中には、巨大な機体が居た

「……いつは……MAか？」

と言ったのは、シオンだった

シオンは地上から物資を運んできたタイミングだった

「はい……推測では全長は60mに達するそうです」

「デカッ」

麻耶の言葉に絶句したのは、御剣警備MS隊の明久だ

今現在、アミノミハシラに所属しているのは一個中隊規模だ

明久は、その第一小隊長としてそこに居た

今現在、御剣グループでは新型MSの開発計画が進行しているらしい

「今から衛星にて撮影した映像を流します」

麻耶はそう言うと、パソコンを操作した

すると、映像が始まった

それは、海側から侵攻してきた

その動きから察するに、ホバーで移動しているらしい

その時、上部のビーム砲を撃った

その一撃は凄まじく、一撃で街並みが吹き飛んだ

すると、山沿いの基地から次々と機体が出撃してきた

ザクフライトとグファイグナイテッド

そして新型機のバビがその巨大機体に攻撃を開始

だがその攻撃の悉くが、光の膜に防がれた

そして、機体の全身に配置されている火器を一斉解放  
ダルクス軍の機体は、全て撃破された

短時間で、出撃してきた師団規模が壊滅

カムチャツカは、炎に飲まれた

映像が終わると、義之が

「なんて機体だ……」

と呟いた

すると唯依が

「まるで、破壊の化身だ」

と呟いた

その時

「まさか、デストロイ……か？」

と直哉が首を傾げた

「デストロイ？」

「ああ……桜内大佐」

唯依の問い掛けに頷くと、直哉は手を上げた

すると義之は、直哉に視線を向けて

「どうした、神崎少尉」

と直哉の名前を呼んだ

すると直哉は、映像の機体を指差して

「恐らくですが、その機体の名前はデストロイかと思われます」

と言った

全員の視線が直哉に集まる中、直哉は

「その機体は、自分が覚えている限りですが……強化人間専用機体です」

と言った

「強化人間専用機体……」

「はっ……強化人間を生体CPUとして、扱う機体です」

義之がオウム返しに言った後、直哉がそう言った

すると、会議室がざわめいた

「自分が居た時は、機体のOSと強化人間を直接繋いで動かすと聞いてましたが、当時は挫折。第一期ファントム・ペインはデュエルダガーにて出撃しました」

直哉の説明を聞き、義之は苦い表情を浮かべ

「機体のOSと直接繋ぐ……どうやるか分からんが、胸糞悪い話だな……その感じだと、

生体CPUとして使われた強化人間は使い捨てか……?」

「恐らくは」

義之の問い掛けに、直哉は頷いた

そして義之は、少し考えると

「麻耶、今の話を簡潔に纏めて各国に送れ」

と麻耶に命じた

それを聞いた麻耶は、端末を取り出した

そして義之は、キノコ雲の写真を表示させて

「問題は、これだな」

と言った

「なにが問題なんですか、桜内大佐」

とシオンが問い掛けると、義之は

「今確認した限りでは、ユーラシア連合軍各基地からも、人工衛星からも発射した形跡は

無いらしい」

と言った

その言葉に、また会議室がざわめいた

「もしかしたら、車両により現地に運びこんで、という方法かもしれんが、現状は不明だ」

義之はそう言ったが、それは限りなく難しい  
気化爆弾は、製造が難しい

それだけでなく、ダルクスの検問はかなり厳しいと確認されている  
「まあ、俺達がああだこうだと言っても仕方ない」

義之のその言葉で、会議は終了

各員は部屋に戻った

混迷の時代

この後どうなるのかは、誰にも分からない  
だが、戦火は広がる一方だった

## 指令

9月末日

それは、再び確認された

「大佐！」

「落ち着け！ 状況は？」

義之が会議室に入るとざわめき、義之は一喝すると麻耶に問い掛けた  
すると麻耶は、パソコンを操作して

「御覧ください。自由ユーラシア連邦領内にて撮影された写真です」  
と言った

すると正面スクリーンに、キノコ雲が写された

その場所は、今現在自由ユーラシア連邦と呼ばれている国  
その対ユーラシア連合前線基地のあった場所だった

「自由ユーラシア連邦軍からの発表では、基地を中心に半径10kmが壊滅……生存者は、確認されないと」

麻耶のその報告に、再び会議室がざわめいた



「……攻撃方法は？」

「ミサイルではありません。それが、宇宙から投下された」と

義之の問い掛けに、麻耶はそう答えた

「人工衛星は？」

「その宙域を通る、投射式人工衛星は確認されていません」

麻耶の報告を聞いて、義之は腕組みした

（人工衛星ではない。考えられるのは、宇宙に機動兵力を展開。それが、気化弾頭を投下した。しかないか……）

すると、麻耶が

「大佐」

と声を掛けた

それにより、義之の意識は現実に戻り

「恐らくだが、ユーラシア連合の特務機。または、特務艦が、投下した可能性が高い」と言った

義之のその話を聞いて、三度会議室がざわめいた

すると、明久が

「大佐、その特務機か特務艦とは、なんでしょうか？」

と問い掛けた

すると義之は

「恐らくだが……ミラージュコロイドを装備した機体か艦になる」

と言った

それに対して、唯依が

「機体は分かりますが、艦……ですか？」

と問い掛けた

その問い掛けに、義之は頷き

「理論上は可能だ……麻耶」

と言つて、麻耶に視線を向けた

すると、麻耶は頷いて

「ミラージュコロイド粒子の精製エネルギーやコストは非常に掛かりますが、可能です。

もし、アークエンジェルサイズで作ろうとしたら、予想ですが、10兆単位は下りませ

んが」

と言った

その説明を聞いて、絶句した

その金額は、日本帝国の国家予算の四割に達するからだ

それだけの金額、簡単には使えないだろう

しかし、戦術的価値は高い

隠密行動により、此方が気づかぬ間に懐まで入られる

「そうだったら、見つけられないわね……」

と言ったのは、優子だ

彼女は、明久達御剣財閥MS部隊CPチーフとして着任している

すると、義之が

「いや、見つける方法はある」

と言った

義之の言葉に、全員の視線が集中した

すると義之は、頭を掻いて

「本来は、我が国の重要機密だが、俺の権限で開示する」

義之はそう言うのと、自身のIDカードをパソコンのカードリーダーに通した

すると、スクリーンにその名前が表示された

「ミラージュコロイド・デテクター？」

と唯依が呟くように言うと、義之は頷いた

「これは、ミラージュコロイド粒子から発せられる独自の波長を捉える機器だ。これを

使うことにより、ミラージュコロイドを使っている機体や艦を見つけることが出来る」

その説明を聞いて、ワルキューレ隊以外は誰もが固まっていた

なにせ、ミラージュコロイドは初音島が作り出した世界最高のステルスである

そのミラージュコロイドを展開している機体を見つけるのは、実質不可能と言われている

実際、今ミラージュコロイドを有しているAGF天美夏（ミナのこと）

それと度々演習したが、他の国の軍は見付けられた試しが無かった

そのミラージュコロイド展開機を、見つける装備があつたのだ

「だが、これには欠点がある。エネルギー消費が激しいことだ。もし、このミラージュコロイド・デテクターを装備・使用しながら戦闘した場合、通常のバッテリー式機体は、約20分でエネルギーが切れる」

義之がそう言うと、唸り声が聞こえた

それは、仕方ないだろう

たった20分しか、エネルギーが切れるのだから

しかも、戦闘は必然的だろう

それを考えると、単機で動かす訳にはいかないだろう

誰もがそう考えた時

「なれば、そのセンサーは自分が運用します」  
と直哉が前に出た

「神崎少尉……」

「自分の機体は、大佐や伊隅中佐と同じく核駆動機です。エネルギーの心配は解消されます。更に、もし見つかっても機動性で逃げ切ることが可能かと思われます」

直哉がそう言うと、誰もが沈黙した

確かに、理には叶っている

しかし、危険さは変わらない

だが、直哉の腕は会議室に居る誰もが知っていた

そこに、テストメントの核駆動と規格外とも言える高い機動性

それらが合わさり、単機で一個中隊は楽に相手出来る程だった

すると、義之が

「アホか。誰が、単機で行動させると言った」

と言った

そして義之は、唯依に顔を向けて

「篁中尉。貴官の部隊で、彼の護衛。頼めるか」

と言った

それを聞いた唯依は、真剣な表情で

「無論です、大佐殿。大事な部下殿の護衛、我が中隊にお任せを」

と告げた

それを聞いて、義之は頷き

「では、篁中尉。貴官にミラージュコロイド・デテクターを運用する我が部下の護衛を任せる」

「はっ！」

義之の命令に、唯依は敬礼で答えた  
すると義之は

「近いうちに、本国に頼んでミラージュコロイド・デテクターを上げてもらおうように頼む。他の部隊は、篁中尉から要請があつたら、直ぐに動けるようにしておけ！」

と言った

こうして、宇宙での戦いは始まった

## 捕捉

ミラージユコロイドデテクターが送られてきたのは、約二週間後だった

更には、テストメント専用のライフルも送られてきた

その二つを装備し、テストメントとホワイトフアング隊は特務艦が居ると予想された宙域に向かった

そこから投下すると、落下地点は自由ユーラシアの領内に落ちることが導き出されている

『ホワイトフアングよりレーヴァティン8、どうだ?』

『こちらレーヴァティン8、微弱な反応ならある……近くを航行したか?』

唯依の問い掛けに、直哉はそう答えた

その後

『デテクターに感アリ! ブルーアルファの方向、距離800!』

と直哉が声を上げた

その後、唯依が素早くビームライフルを構えて連射

その内の一発が命中したらしく、一隻の艦が姿を現した

サイズや見た目は、アークエンジェルに近い艦だった

するとその艦のカタパルトが起動し、中から次々とMSが出撃してきた

『ホワイトフアング2、レーザー通信で近くを航行しているアークエンジェルに連絡しろ！』

『了解！』

唯依副官

雨宮薫は返答すると、アークエンジェルに通信を開始

そして、敵艦とMS隊と交戦を開始した

相手の機体は、ダークダガーLとスローターダガーだった

艦はMS隊を出撃させると、直ぐ様反転

離脱しようとした

ホワイトフアング隊と直哉も追おうとしたが、敵MS隊に邪魔されて追えなかった

特に直哉機は、普段のディバインストライカーではなくミラージュコロイドデテク

ターを装備している

ミラージュコロイドデテクターが損傷したら、アメノミハシラの修理は難しい

だから直哉は、普段より大きく回避機動を取っていた

『このバスターライフル……撃ってみるか！』



直哉はそう言うのと、一機のダークダガーLを蹴った後、新ライフル

バスターライフルを離脱していく艦

ガーテイルーに向けた

バスターライフルはエネルギーパック式を採用しており、Eパックは共通規格を使っている

そしてテストメントの腰部装甲には、内蔵式Eパック保管庫

並びに、充電プラットがあつた

それにより、Eパックがエネルギー切れになつても再充電し使用出来るようにした

そしてバスターライフル

これは、通常出力で撃つことも出来る

だが何よりも、撃つ出力を変えることで艦艇に大打撃を与えることも出来るようにしたのだ

それが、テストメントに不足していた火力を補う策だつた

出力は、通常ライフルと同じ出力たるEパック20%から、最大で100%まで可能だつた

直哉はこの時、出力を80%に調整

離れていくガーテイルーに対して放つた

その一撃は、間に入ったスローターダガーを貫通

ガーティールーの右舷前部に命中した

『ちいっ！ スローターダガーが割って入ったからか、狙いが逸れた！』

直哉の狙いは、ガーティールーの艦橋だったのだ

しかし、外れてしまった

その時、一機のダークダガーLが直哉機にビームライフルを向けた

だがその機体は、唯依機によって両断された

『レーヴァテイン8！ 悔しいが、今は敵MS隊をやるしかない！』

『そうだな。数が多すぎる』

唯依の提案に従い、直哉はEパックを交換しながら従った

多少数は減ったが、相手は二個中隊規模が出撃してきていた

数で劣っているために、囲まれたら被弾は必至である

離れていくガーティールーから視線を外し、直哉機とホワイトフアング隊は敵MS隊

と交戦に集中した

そしてガーティールーが離れた時、アークエンジェルから救援MS隊が到着

数分後、敵MS隊は全滅した

そして直哉機とホワイトフアング隊は、新造されたイズモ級戦艦一番艦

イズモに着艦

アメノミハシラに帰還した

アメノミハシラに帰還後、直ぐに会議が行われた

「大佐、こいつが、見つけた艦です」

直哉はそう言つて、スクリーンに映像を映した

ガーテイルーを見て、義之は

「こいつ……やはり、隠密行動に比重を置いて造られてるな」

と言つた

すると、帝国軍所属となつたユウヤが

「大佐、その言葉の理由は？」

と問い掛けた

すると義之は、レーザーポインターを使って

「まず、艦の両側面に装着されている、これだ」

とガーテイルーの両側面に付けられている、タンク部分を指し示した

「これは、低温ガス噴射機構だ。これを使うことで、熱源探知に反応され難くなつてい

る」

「なるほど……」

義之の説明を聞いて、シオンが納得した様子で頷いていた

そして義之は、続けて

「次に、艦首部分。この艦はアークエンジェルをモデルにしているようだが、アークエンジェルの切り札たるローエン格林は装備されていないようだ。その代わりに、ゴッドフリートが四門に増えている。恐らく、艦搭載機を速やかな発艦をするのと、陽電子反応を感じさせないためだろう」

と言った

「この艦は、仮称でファントム・ネストと呼ぶ。逃げ隠れが得意なファントム・ペインにお似合いな名前だろ？」

「そうですね」

義之の言葉に、みちるが頷いた

そして義之は、麻耶に視線を向けて

「麻耶、データを纏めたら、各国にデータを送れ」

と命じた

それを聞いて、麻耶は端末の操作を開始

それを見て、義之は

「各員は、直ぐに動けるようにしておけ！」

「了解！」

義之の言葉を聞いて、会議室に居たメンバーは敬礼した  
これが、ガーテイルー級との最初の交戦になる

## 宇宙からの脅威

フアントム・ペインとの戦いは、長く続いた

特に地上では、態勢を立て直したアイスランドのダルクス軍が積極的に攻勢に出た  
それにより、アイスランドに近いユーラシア連合領

ノルウェーを制圧

そこを足掛かりにして、ウクライナ・ベラルーシに侵攻を開始した

なお、EUは領土侵犯してくるユーラシア連合の迎撃に注力しており、その中には帝  
国軍の欧州派遣部隊も参加していた

そして宇宙では、義之達がガーティイ・ルー相手に戦っていた

その中で分かったのは、ガーティイ・ルー級が複数建造されていたこと

確認した限り、数は四隻

その四隻を義之達は、フアントム・ネスト1〜4と呼称

約二ヶ月の間に、八回交戦

その間に、一隻に大破級のダメージを与えることが出来た

その艦には逃げられたが、その艦から漏れ出た物資のコンテナを回収した

そのコンテナの中から、驚くべき物が見つかった

「核だど!？」

「ええ……しかも、それをMSで運用出きるようにされたストライカーパックも発見しています」

唯依が驚愕の声を上げると、麻耶がそう言った

するとモニターに、そのストライカーパックが映された

その見た目は、二基の巨大ミサイル発射基をくっ付けたようなものだった

搭載弾数は、もちろん二発

どうやら、大量破壊兵器運用専用ストライカーパックだと分かった

それを仮称で、マルチストライカーとした

「恐らくは、このマルチストライカーを使って気化弾頭を投射していた可能性が高いです」

「それで、今回は核か……フザケたことを……」

麻耶の報告を聞いて、シオンはそう言った

すると、明久が

「その、コンテナの中には何発分あったんですか?」

と問い掛けた

すると麻耶は

「発見したコンテナ六個の内、核が入っていたのは四個……その中には、全部で十六発見付けました」

と言った

それを聞いて、会議室に集まっていたメンバーは全員驚いていた

十六発

それだけあれば、主要国家に大打撃を与えることが可能だからだ

「それだけの数の核……どうするつもりだ……」

「やはり、地球か？」

「だが、地球の各都市に落としたり、恐らくは各国が報復に出る可能性が……」

と会議室に居た軍人が喋っていると、義之が手を叩いた

そして、全員が顔を向けると

「今一つに仮定して後で違ったら、固まってしまう可能性が高い。仮定はするな」

と義之が言った

確かに、人は予想外の事態になるとパニックに陥りやすくなる

それを防ぐには、幾つかのパターンを想定するか、むしろ想定しないている

というのもあった



「それに、奴等は核まで持ち出してきた……これを使われたら、地球は大変なことになる」

義之のその言葉を聞いて、誰もが気を引き締めた

確かに、もし核が自国に落ちたらどうなるか

大被害は間違いないだろう

「ここに居る貴様らならば、それをさせぬ方法は分かるだろう？」

義之がそう問い掛けると、全員は姿勢を正した

そして義之が

「悪鬼共が無辜の民に手を出そうというのならば、我等はそれを防ぐ盾となり、悪鬼共を滅ぼす刃となれ！ その為に居るのが、我等軍人だ！」

「はっ!!」

義之の言葉を聞いて、全員は敬礼した

そして、アメノミハシラ駐留部隊は、動いていく

## 悲劇

「こんな作戦……やだよ」

と呟いたのは、改修された機体

ロートフォビドゥンのコクピットに居た円夏である

彼女がそう言った理由は、これから行われる作戦にあった

その作戦を知らされた後、彼女はどうしても乗り気にはなれなかった

それどころか、否定的ですらあった

だが彼女には、拒否権はない

彼女を含む強化人間には、人権など無いのだから

「こんなの……虐殺だよ……」

彼女がそう言った直後

『252R、発進せよ』

と言われ、彼女の機体は射出された

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わり、アメノミハシラ

「なんだと!？」

麻耶からの報告を聞いて、義之は思わず椅子から立ち上がった

今義之が居るのは、有重力ブロックの執務室である

「それは本当か!？」

「はい……自由ユーラシア領上海と香港は……壊滅しました」

義之の問い掛けに、麻耶はそう言つて端末を机の上に置いた

「両都市は、完全に見せしめでしょう……そこには、部隊は駐留していなかった。とのとでしたから」

「これは……」

麻耶の報告を聞きながら見た端末の画像を見て、義之は言葉を失った

高層ビルが建ち並んでいた都市だった上海と香港が、灰塵に帰していた

「死者は不明……しかし、最低でも20万人は下らないとのことです」

麻耶の報告を聞いて、義之は机に拳を叩き付けた

「街の警官が送つたという写真が、これです」

麻耶はそう言つて、端末を操作

画像を表示させた

それを見て、義之は

「こいつらは……機体形状と色は大分変わってるが……あの時の機体か」  
「はい。本国の天枷研究所からは、改修機体だろうと」

義之の言葉を聞いて、麻耶はそう言った

義之は少しすると

「今残っているのは」

と麻耶に視線を向けた

すると麻耶は

「試験巡行中のロスヴァイセ隊以外は、全員居ます」

「大至急集めろ」

麻耶にそう言うと、義之は部屋から出た

そして数分後

「集まったな」

会議室に、急遽集められた全員が居た

「大佐殿。一体、何が？」

シオンがそう問い掛けると、義之は

「今から約三時間前……自由ユーラシア領の上海と香港が……壊滅した」  
と言った

その言葉に、誰もが言葉を失った  
すると、麻耶が

「こちらを見てください」

と先ほど、義之に見せた画像をスクリーンに表示させた  
それを見て、何人かが絶句した様子だった

「こんな……」

「街が……」

すると、直哉が

「これをした相手の画像は、ありますか？」

と問い掛けた

すると、麻耶が

「こちらです」

とその機体の画像を表示させた

その画像を見て、唯依が

「この機体は……あの時のガンダムの改修機体か」

と言った

彼女の家、篁家は機体開発をしていた家である

だから彼女も、機体構造に長けている

だから彼女は、一目で画像に写ったのが改修機体だと気付いた

「確認された新型は、全部で五機。ただし、二機は同型機体だ」

義之がそう言うのと、その四機の画像が写された

どれもこれも、禍々しい見た目の機体だった

「実質、この五機で二都市は灰塵に帰した……死者総数は、今のところ不明だが……最低でも二十万人が死んだらしい」

義之のその言葉に、誰もが憤りを見せた

なんの為に、二十万人もの人々を虐殺したのか

「恐らくだが、見せしめの形が主だろう」

義之はそう言うのと、何人かが壁に拳を叩き付けた

彼等からしたら、正気を疑うことだからだ

すると、義之が

「もしかしたら、大気圏突入作戦をするかもしれない」

と言った

「その時は、君たちにも協力を要請するかと思う……頼むぞ」

「了解！」

義之の言葉を聞いて、集まっていた軍人は敬礼した

## 理不尽な暴力

それは、上海と香港が壊滅した数日後だった

アメノミハシラ内に、甲高い警報音が鳴り響いた

『全MSパイロットは、大至急ブリーフィングルームに集まれ！ 繰り返す！ 全MSパイロットは大至急ブリーフィングルームに集合せよ！』

その放送が流れたのは、宇宙では分かりづらいが深夜一時

宿直以外は、軒並み寝ていた時間だった

だと言うのに、たった五分足らずで全員がブリーフィングルームに集まっていた

その理由は、備えていたからに他ならない

「集まったな」

と言ったのは、義之である

全員、真剣な表情を浮かべている

「状況を説明する。今から約30分前に、自由ユーラシア領の仁川にデストロイを含めたファントム・ペインMS隊が襲撃してきた。これを自由ユーラシア軍が迎撃を開始したが、長くは持たないと連絡が来た。これを受けて、我々は降下作戦を行う。何か、質



問はあるか？」

義之がそう問い掛けて見回すと、明久が手を上げて

「配置はどうなってますか？」

と問い掛けた

すると、義之が頷いて

「それは、今から説明する」

と言つて、パソコンを操作した

すると、スクリーンにその配置が映った

「突入部隊は、我々ワルキューレ隊とホワイトフアング、アルゴスだ。MSSの諸君は、

アメノミハシラの防衛の為に残ってもらいたい」

と義之が言った

すると、今度は麻耶が

「今、既に格納庫では各機体の地上戦仕様には換装を行っています。確認し搭乗した後に  
大気圏突入カプセルに機体を収容。アークエンジェルで突入コースに投入します」

と説明した

そして、義之が

「では、要員は格納庫に向かえ！」

「了解！」

義之の号令を聞いて、パイロット達は走り出した

そして、約10分後

アークエンジェルは、衛星軌道に到着していた

これから、MSが入った大気圏突入カプセルを投入するのだ

『投入開始！』

音姫の号令の直後、アークエンジェルのハッチから次々と突入カプセルが突入コースに投入された

突入カプセルは少しして赤熱化気流に包まれた

そしてカプセルは、大気圏突入を開始した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

少し前、自由ユーラシア領仁川

ここでは、自由ユーラシア軍が防衛戦闘を繰り広げていた

とはいえ、その戦闘は押されていた

自由ユーラシア軍が使っているのは、ダガールの改修機たる殲8型

そして、ウインダムの改修機のチエルミナートルだ

両機は原型機よりも機動性と格闘性に比重を置いて改修してある

だがそれでも、ガンダムに押されていた

五機のガンダムと、M A デストロイに

『隊長！ あのデカブツ、攻撃が効きません！』

『近づこうにも、回りに居るガンダムタイプに邪魔されて、近づけません！』

『分かってる！ だが、今我々が下がるわけにはいかない！』

部下に反論したのは、中隊の隊長をしている崔亦菲<sup>ツイ・イーフェイ</sup>である

彼女の部隊は、市民が退避するまで時間を稼ぐことを目的としていた

しかし、展開したのは二個大隊の内、既に二個中隊が壊滅的被害を受けていた

彼女の部隊には、その生き残りも合流しているが、既に一個小隊が中破相当のダメー

ジがあつた

彼女自身は、進攻してきたスローター・ダガーを数機撃破していた

しかし、それは焼石に水だった

それを嘲笑うように、デストロイを含めたガンダムが被害を拡大させていた

『今こちらに、各国の精鋭部隊が向かっている！ その部隊が来るまで、何とか堪えろ

！』

『了解！』

崔亦菲の指示を聞いて、部下達は気合いの声を上げて突撃していった

市民を守るために  
ユーラシア軍の暴虐から、  
守るために

## 対峙

『た、隊長ー!?!』

『脱出しろお!』

『CP! このままでは、長くは!?!』

その報告を聞いて、ラトロワは歯噛みした

はつきり言ってしまうえば、相手の戦力が予想出来る以上だった

『ターシャ、市民の避難状況は!?!』

『八割が完了しました! しかし、残り二割が戦火で逃げ遅れています!』

ラトロワの問い掛けに、副官たるナスターシャ・イヴァノワ大尉はそう返した

しかし、データリンクで見た味方残存戦力が心許なかった

残存戦力は、残り四割

たった一時間足らずで、半分以上が撃破

もしくは、戦闘不能にされた

その時だった

『大佐、下がってください!』

と部下の声が聞こえた

その直後に、凄まじい密度の迎撃弾幕が形成された

その方向から来るのは、赤い機体だった

『あの形状は……フォビドウンの改修機か!?』

『各機に到達! あれに、ビームライフルは意味を成さない! 格闘戦だ!』

『了解!』

ナスターシャの言葉を聞いて、ジャール大隊のパイロット達はビームサーベルと脚部  
ビーム刃を展開

接近を計った

しかし、それをロートフォビドゥンは増設された火器で次々と迎撃

近づいても、大鎌で切り裂かれた

そしてロートフォビドゥンは、フレスベルグを発射

それは不規則に曲がり、ナスターシャ機の足を吹き飛ばした

『ターシャ!?!』

『大佐、逃げてくください!』

ターシャがそう忠告するが、最早遅かった

気付けば、フォビドゥンが鎌を振り上げていた

ラトロワはビームサーベルで防ごうと反射的に入力していたが、間に合わないと分かった

だがその時、不意にフォビドウンが後退

その直後に、一機のガンダムが現れた

そのガンダムは背部のストライカーパックが可変し、アームとなつてフォビドウンの居た場所に伸びていた

もちろん、そのガンダムの手にはビームサーベルがあつた

識別は、G A T T X 1 2 A

つまりは

『初音島のガンダムか!?!』

援軍が来たということだ

『こちらは、ワルキューレ隊のものだ! 無事で!?!』

『すまん、助かった』

ストラトス8

直哉の問い掛けに、ラトロワはそう答えた

そして直哉は、油断なくビームサーベルを構えながら

『こいつの相手は、こちらが引き受ける! 部下を回収し、後退を!』

と告げて、フォビドゥンに突撃した

その間に、ラトロワは機体から脱出してきたナスターシャを自機に收容し、部隊と一緒に後退を開始した

それと入れ替わるように、次々とMS隊が前進してきた

それは正しく、待ちに待った援軍

精鋭部隊の到着に、防衛部隊の士気は一気に上がった

しかし、ラトロワの指示

防衛ラインの維持を遵守

敵部隊との交戦は、降下部隊が中心に行った

その中で、直哉はロートフォビドゥンに積極的に交戦していた

以前は、自身の油断と機体スペックの差で負けてしまった

しかし、今は直哉自身もガンダムパイロット

しかも、乗っているのは初音島の有する機体の中でも最高峰の一機たるテストAMENT

神罰の名を与えられた機体は、正に神罰を与えんとその能力を全解放した

何時もは緑色のデュアルアイが赤に変わり、装甲の色も白を基調にした配色から赤地

に白い逆十字に変わる

そして最後に、胸部の排熱ダクトが全開になり、白い湯気が一気に吐き出された



その直後、馬鹿げた加速でテストメントが突撃を開始した  
それこそが、テストメントの完全解放

高い耐G体質が与えられた直哉でも、長くは使えない切り札  
その最高Gは、優に15を越える

直哉の体重は、約80kg近い

直哉の体に、常に1・2t近い重量が掛かる

それは、ゾウと何ら変わらない重さだ

しかも、その重さが掛かるのは前からだけではな

激しく動く機体の動きにより、一瞬にして変わる

そんな全開解放

直哉だけでなく、機体にも相応の負荷が掛かる

だから、発動したら短期で勝負を決めなければなら

でなければ、機体とパイロット

双方が再起不能になりかねない

『行くぞ……円夏！』

『アハハハハハハハ!!』

今ここに、双方全開の戦いが始まった

## 狂気の中の涙

「あああああああ!!」

『アハハハハハハハ!』

直哉は気合いと共に雄叫びを上げて、円夏は狂ったように笑っていた

直哉は円夏を解放するために

円夏は、直哉を殺すために全力で戦っていた

直哉は、戦いながらロート・フォビドウンの性能を改修前と比較していた

(最低でも、三割増しは堅いか……もはや、別物の機体だっ!)

ロート・フォビドウンの性能の高さを量り、直哉は驚愕した

(テストメントでも、割かしギリギリか……特に、ゲシユマイティツヒ・パンツァーの出

力が高いのが厄介だっ!)

その出力の高さは、ビームサーベルにも効果を及ぼしていた

流石にライフルの時のように曲がりにはしないが、長さが僅かに短くなる

しかし、ライフルが効かないために接近戦を強いられていることには変わらない

だが元々、フォビドゥンは電撃戦を重視されて設計開発されているために白兵戦はか

なり強く作られている

そのフォビドウンに接近戦を挑むというのは、かなり分が悪いことになる

特にテストAMENTは、近接戦闘ではビームサーベル位しかフォビドウンに有効打を与えることが出来ない

しかしそれは、フォビドウンにも言えることだった

フォビドウンがテストAMENTに有効打を与えることが出来るのは、フレズベルグしかない

しかしフレズベルグは、撃つのにタイムラグがある

だから、勝つためには近接戦闘しかない

だから直哉は、勝つためにテストAMENTの全機能を解放した

自身に悪影響を与える、大G戦闘を

直哉の耐G体質は、第一期ファントム・ペインの中でも特筆して高いものだった

故に直哉が搭乗させられていたデュエルダガー・FS装備機はスラスターのリミッターが解除させられていて、高い機動性を発揮出来るようにしていた

だがそれでも、約8Gが限度だった

しかし、今のテストAMENTの最大Gは16Gを叩き出している

約二倍

前に乗っていた三型は、安全のために約15Gにしていた  
それ以上は、いくら強化人間の直哉でも危なかったからだ  
だが、今の状況では悠長なことを言ってもらえなかった

防衛に出撃した自由ユーラシア軍は、実質壊滅状態

しかも、無線を傍受した限りではまだ避難中の民間人すら居る

自分の安全を優先している場合では無かった

軍人たる自分が、逃げ惑う民間人を守るために全力を尽くす

それは、当たり前のこと

だから直哉は、危険だから使わないでと言われた全力解放を使った

最善を尽くすために

「つああああ!!」

『アハハハハハ!!』

二機の戦闘は、自由ユーラシア軍の兵士達からしたら人外の域だった

互いに激しく動き回り、死角に回り込んで武器を振るう

特にテストメントの機動は、正しく人外と呼べた

だからか、一人のパイロットが

『ば、化け物だ……』

と呟いた

それは、直哉にも聞こえていた

(ああ、化け物でいい……俺は、生態兵器なのだからっ!!)

直哉は口端から血を吐き出しながら、ロート・フォビドゥンに肉薄し続けた

それに対して、ロート・フォビドゥンは繭の力を発揮

直哉の機動を読み、攻撃を回避

直哉機に対し、ニーズヘグ改を繰り出した

それを直哉は機動で回避したり、ビームサーベルで弾いたりした

その光景を、一夏達は他のファントム・ペイン隊と戦いながら見ていた

『あの機動……長くは保たないはずだ!』

『誰でもいい、直哉のカバーに!』

『無理よっ! こいつら、動きが今までの奴等よりいい!!』

『強化人間の成功个体か!?!』

『……つつ、乱数機動! 回避っ!』

今彼等の戦っているファントム・ペインは、今まで戦ってきた強化人間よりも動きは

速い

しかし、成功个体かと言われるても答えは否である

それらの強化人間もまた、失敗個体だった

しかし、蓄積されたデータによりフィードバックされた技術は以前の比では無かった結果、失敗個体とは言えどもその強さは高くなっていた

しかし、その強化人間にする為の人間は何処から確保しているのかそれは、 $\pi 3$ 計画の応用だった

$\pi 3$ 計画のクローニング技術

それを使い、次々と産み出していたのだ

だからフロントム・ペインには、数多くの強化人間が供与されているのだそれは、 $\pi 3$ 計画を知る各国も予想している

だから今、その研究所強襲作戦を立案中だった

強化人間を産み出させないために

『アハハハハハハハ!!』

円夏は狂笑しながら、直哉機を撃破しようと攻撃を繰り返す

しかし、その両目からは涙が零れていた

それはまるで、彼女の心を現すように

(誰でもいい……私を止めて……この殺戮を、終わらせて!!)

未来予知と戦闘衝動、殺戮衝動に体を突き動かされながらも、円夏は祈っていた

狂気の終焉を

自身の死を

終わるには、死しかないのか  
それは、まだ分らない

## 新たな機体

降下ポッドで大気圏降下した部隊は、仁川全域に広がってファントム・ペインと交戦していた

『大佐、今のところはデストロイは確認されていません』

『わかった。しかし、気を抜くな。奴等を止めなければ、無辜の民が傷つくことになる』  
『了解！』

義之の言葉を聞いて、ワルキューレ隊と近くに展開したアルゴス隊はファントム・ペインMS隊に突撃した

その中でホワイトファンング隊は、道中に居るファントム・ペインMS隊を撃破しながらストラトス隊との合流を目指していた

特に唯依は、ガンダムと戦っている直哉が気になっていた  
直哉が戦っているのは、性能が約三割増しになっている精鋭機

その予想性能は、直哉が駆るテストAMENTとほぼ互角

ならば直哉は、テストAMENTの全力を解放するだろうと唯依は予想していた  
確信的な予想を



その時

『01、前方距離二千にて高速戦闘している反応を捕捉！』

と二番機から通信がきた

それを聞いた唯依は、反射的に機体のレーダーを前方に指向

その反応を捉えた

そして、息を飲んだ

『なんだ、この速さは……予測Gが、16を越えている!?!』

『急ぐぞー！ どうやら、敵の部隊も近づいているようだ!』

『了解!』

唯依の言葉を聞いて、ホワイトフアング隊は速度を上げた

場所は変わり、宇宙

アミノミハシラ

そこで明久達MSSの面子は、テレビを見ながら待機していた

とはいえ、テレビの内容は全く頭に入っていない

戦況がどうなってるのか、気になっているのだ

その時だった

突如として、甲高い警報音が鳴り響いた

その直後

『パイロット各員は、第三会議室に集合せよ！ 繰り返す！』

と放送が聞こえた

それを聞いた一同は、居たレクリエーションルームから次々と出ていった

そして、第三会議室に集まると

「集まったな、状況を説明する」

と西村が言った

その直後、モニターが点灯

付近の状況が表示された

「今このアメノミハシラに、ファントム・ペインと思われる所属不明部隊が近づいてきている。その数は、約三十」

西村が説明すると、赤い光点が幾つか表示された

そして、西村は

「なお未確認だが、その内の二機がガンダムタイプと予想される。他の機体とは、速度が違うようだ」

と言った

すると、会議室に集まっていたMSSの面子は不安そうにざわめき始めた

「ガンダムタイプだと?」

「そんな……主力が誰も居ないのに……」

「ここまでなのか……」

と

それを、西村は落ち着かせようとした

すると、坂本雄二が立ち上がり

「てめえら! なに情けない声を出してやがる! ここ、アミノミハシラは世界で初めての軌道エレベーターの宇宙ステーションだ!」

と喋り始めた

「俺達は、その世界初の場所の防衛を、あの英雄から任されたんだ! だったら、その信頼に応えろ! それに、俺達を鍛えたのは誰だ!? あの英雄だろうが! その英雄に鍛えられた俺達が、高々幽霊野郎共に負ける訳がないだろうが!」

と言った

そして、最後に

「それに、新しい機体も回してもらえた! 後は、俺達次第だろうが! 気合い入れろ!!」

と言った

すると、会議室に居た一軍から関の声が上がった

なお、新しい機体というのは初音島から払い下げられたアストレイ二型を御剣財閥独自に改修した機体だ

便宜上、アストレイ二型改としている

それを、このアメノミハシラに配備しているのである

そして雄二は、全員の士気が回復したのを確認すると

「課長」

と西村を見た

そして西村は頷くと

「総員、出撃用意！」

と指示を下した

それを聞いて、パイロット達は次々と会議室から出ていく

そして最後に、明久が出ようとした

すると、西村が

「吉井」

と明久を呼び止めた

「なんででしょうか」

と明久が問い掛けると、西村は少し躊躇ってから

「着いてハハ」

と言つて、会議室から出た

その後を着いていき数分後、あるハンガーに到着した

「ハハ」は……」

「入れ」

西村はそう言つて、カードキーでドアを開けて明久を招き入れた

そして中に入ると、格納されていた機体がライトアップされた

それは、ストライクに酷似している機体だった

「この機体は……」

「GATMMS108……ライゴウガンダムだ」

明久が絶句していると、西村がそう言つた

「ライゴウ……ガンダム」

「ああ。初音島の技術提供を基に御剣財閥が独自に開発した機体だ」

確かに、型式は初音島と同じGAT

その後のMMSというのが、御剣財閥が開発したことを示しているのだろう

「初音島のストライカーパックも使えるが、独自開発したパックも使える……この機体

を、吉井……お前に託す」

「これを、僕が!？」

西村の言葉を聞いて、明久は驚愕した

なぜ、自分なのかと

「吉井、お前の腕は今の中ではダントツだ。それは、成績で示されている」

そう言った西村の目には、自信の光に満ちている

「この機体のパイロットの選出は、俺に一任されている……だからこそ俺は、お前に託す

……」

「僕が……この機体を……」

そう言って明久は、ガンダムを見た

そして、少し考えると

「分かりました、乗ります」

と返答した

それを聞いて西村は

「わかった……木下姉、OSデータの移行を手伝ってやれ」

と言った

すると、一角から優子が現れて

「了解」

と敬礼した

こうして、宇宙でも戦いが始まった

## ライゴウガンダム

『明久はどうした!?!』

『それが、ハンガーにも居なくて……』

雄二からの問い掛けに、部下の一人が困った様子で返答した

その時、一発のビームが一機の二型の横を通り過ぎた

『仕方ねえ! 全機、交戦開始! ヤラれんなよ!?!』

『了解!』

雄二の指示を聞いて、部隊は突撃

戦闘が始まった

敵はやはり、フロントム・ペインだった

主力は、見慣れたスローター・ダガー

だが、その中で二機

確かに、ガンダムが居た

『あれは、確か……』

『……カラミティとレイダーだ!』



秀吉が思いだそうとしたら、康太がそう言った

そして、それは正しくカラミティとレイダーだった

しかし正確には、その簡易量産試験機だった

装甲は変わらず、TPS装甲

しかし、武装の幾らかは簡易化されていた

レイダーの場合、ミヨルニルと頭部ビーム砲が無くなり、更にスラスタも幾つか廃された

そしてカラミティは、胸部ビーム砲の出力低下

肩のビーム砲を片方廃し、Eセル式になっている

そうして、この宙域に投入された

連合からしてみたら、ただの試験に他ならない

だが、宛がわれたパイロット達にしたら違った

『今度こそ、あいつの鼻をへし折ってやる!』

『私たちが、勝つんです!』

量産型レイダー、島田美波

量産型カラミティ、姫路瑞希

この二人はもはや、目的と手段が変わっていることすら気付いていなかった

そして二人の指示に従い、スローター・ダガーは攻撃を開始した  
その頃、明久は

「OS設定、移行……完了、調整開始」

優子の調整を見守っていた

今はただ、冷静に待つのが仕事だと分かっていたからだ

そして、待つこと数分

「明久、いいわよー」

と優子から声が掛かった

それを聞いて、明久は目を見開いて近くに漂っていたヘルメットを掴んだ

そして、壁を蹴って機体

ライゴウガンダムに取りついた

「多分、最初は違和感を感じると思うけど……」

「大丈夫、なんとかするよ」

優子の言葉で明久はそう言っ、ヘルメットを被った

そして、コクピットに入った

すると優子が

「バックはどうする？」

と問い掛けながら、端末を手渡した

そして、専用パックやストライカーパックのデータを見て

「エールを借りよう。専用の癖が強そうだから、慣れるのに時間が掛かりそう」と言った

それを聞いて優子は

「すいません、御剣の者ですが、そちらのエールを貸してほしいんですが……」  
とヘッドセットで、会話を始めた

そして、少しすると

「許可降りたわ！ 機体を起動、先の前ハッチに進んで！」

と前方のハッチを指差した

「了解！」

明久はそれを聞いて、コクピットを閉鎖

OS 起動スイッチを押した

そして、表示されるのは

General

Unilateral

NeuroLink

Dispersive

Autonomic

Maneuver

頭文字を繋いで、GUNDAM

それを見て、明久は

「まさか、僕がガンダムに乗るなんてね」

と呟いた

すると、起動を確認したからか

『キヤットウオーク、解放！』

と優子の声が聞こえて、ライゴウガンダムの周りにあつたキヤットウオークが離れた

それを確認した明久は、ゆっくりとライゴウガンダムをハッチにまで進めさせた

そして、ハッチの中に入ると

『ライゴウガンダム、確認！ エールストライカー、装着！』

と頭上のハッチが開き、エールストライカーが降りてきた

そして、エールストライカーは何の問題もなく装着された

それを明久が確認すると

『ハッチ解放、リニアカタパルト、システム正常、進路、オールクリア！ 出撃、どうぞ

！  
』

と促された

それを聞いた明久は、レバーを握り

「ライゴウガンダム、吉井明久……行きます!!」

と告げた

その直後、ライゴウガンダムは漆黒の宇宙に放たれた

## 覚醒

『あれか……』

戦闘を確認すると明久は、ライゴウガンダムのスラスターを噴かした

その加速は、アストレイの比ではなかった

『凄い加速……流石は、ガンダム！』

エールの加速も相まって、明久の体には体験したことのないGが掛かる

しかし明久は、ライゴウガンダムを意のままに操縦

一機のスローターダガーに近づいて

『ええーい!!』

と気合い一閃

ビームサーベルで、腰から切り裂いた

切り裂かれたスローターダガーは、数秒後に遅れて爆発した

すると

『このIFFは……明久か!?!』

と雄二から通信が繋がった

『ごめんね、設定に少し時間が掛かった!』

明久はそう返答しながら、ビームライフルでまた一機のスローターダガーを撃墜  
そして、不用意に近付いてきた一機のコクピット部分に盾を叩き込み潰した

その時、明久は直感に従って、機体を少し下がらせた

その直後に、一発のビームが走った

それを撃ったのは、量産型カラミティだった

『あれは、カラミティ……簡易型か』

『他にレイダーも居る。気をつけろ』

雄二がそう言った直後、雄二の隣に居た二型の頭部が吹き飛んだ

『ぐおおおっ!?!』

『須川、下がれ!』

雄二はそう言うのと、須川機を襲撃した敵

レイダーにビームを撃った

しかしレイダーは、持ち前の機動で回避

MS形態に変形して、腰部のマシンガンを構えて撃った

しかし、今更マシンガン程度に当たるメンバーではない

全機回避した

しかしレイダーは、近くを漂っていたスローターダガーが装備していたビームライフルを回収

使い始めた

しかし明久は、怯むことなく進んだ

すると、カラミティが胸部ビーム砲を発射

それを明久は、機体を僅かに傾けるだけで回避

そして、ビームライフルを撃った

それは、無造作な一発

普通だったから、牽制にしかならないだろう

しかしその一発は、カラミティが構えたバズーカ砲に直撃

吹き飛ばした

カラミティはバズーカを爆発する直前に放したので無事だったが、武装を一つ失った

しかしそれが切っ掛けになったのか、カラミティとレイダーは連携を開始

明久機に迫った

雄二達はスローターダガーと交戦していて、援護は期待出来そうにもない

ならば、一人でやるしかない

『負けるか……負けてたまるかああああ!!』



明久がそう雄叫びを上げた直後、明久の頭の中でソレが弾けた  
全人類が持っていると言われる進化の可能性

S E E D

それが弾けた直後、明久の思考は一気にクリアになった

それを示すように、カラミティとレイダーの砲撃を最低限の機動で回避

二機に迫った

この戦いを終わらせるために

そして何より、アメノミハシラに居る大事な<sup>優</sup>子<sup>子</sup>を守るために

## 混迷の戦場 地上

仁川での戦闘は、まだ続いていた

その原因となったのが、現れたデストロイだった

デストロイは攻防備わったMAで、更に厄介だったのが遠隔兵器  
仮称ドラグーンだった

それは縦横無尽に宙を走り、自由ユーラシア軍を葬っていた

しかし自由ユーラシア軍は、最後の一機になろうが、逃げる民衆のために戦う気概で  
留まっていた

既に、少なくない犠牲が出ていた

その怒りを気力に変換し、暴虐の化身に向き合っていた

『この、デカブツがあああああ!!』

『てめえらなんかに……てめえらなんかにイイイイ!!』

『畜生があああああ!!』

しかしまた、一個小隊がビーム砲の直撃で消し飛んだ

そこに、英雄達が舞い込む

『オーディーンより、オーディーン、アテナ、アストレア、スクルド各隊に通達する！  
車掛かり！  
ホイールラッシュ 周囲のザコを蹴散らし、あのデカブツの足を止めるぞ！』

『了解!!』

義之の指示に従い、四隊がまるで風車のような動きをしながらデストロイの周囲に展開していたスローターダガーを撃破

そして、デストロイに迫った

しかしデストロイに放った攻撃は、全て防がれた

その正体は、デストロイの各所に設置された防衛兵器

陽電子リフレクターだった

その防御力はなんと、アークエンジェルに搭載されている破城砲

ローエン格林を防ぐことが出来るのだ

それにより、デストロイに向けて放った攻撃の全てが防がれた

『なんで防御力なの!?!』

『弱音厳禁ですよ!』

あきらの弱音を聞いて、由夢がそう言いながら向かってきていたミサイルを迎撃した  
その時、デストロイが動きを止めた

『なんだ!?!』

『一体、何を!?』

デストロイが動きを止めたことを怪しんで、一同は一度動きを止めて構えた。すると、それまで足が生えた貝のような見た目だったデストロイが変形を開始した。そして、真の姿を見せた。

ドーム状の中から現れたのは、特徴的なデュアルアイとV字アンテナ

そして、それまで逆関節だった足が前を向いて、飛んでいたドラグーンは巨大な両手となる。

それは、まさしく

『が、ガンダムだと!?』

『こいつ、ガンダムタイプだったのか!?』

デストロイの正体は、可変式MAだったのだ。

デストロイは両腕を掲げると、両腕だけでなく全身の火炮を一斉に解き放った。その弾幕は、正に暴虐の嵐と言えた。

ワルキューレ隊は散開しながら、乱数回避

なんとか無事に、回避した。

しかし、自由ユーラシア軍は回避が遅れた。一個中隊が吹き飛んだ。

更に、避難民をトラックも消し飛んだ。

たった一斉射で、仁川だった街の三割が焼け野はらに変わった  
それを見て

『ワルキューレ隊！ こいつをこれ以上進ませるな！ なんとしても、足止めしろおお!!』

と義之が、叫ぶように指示を下した

それを聞いて、ワルキューレ隊は斉唱と共に突撃した

破壊の名を冠した暴虐の化身を、撃破するために

『アハハハハハハハハ!!』

『お、オオオオオオオアアアア!!』

場所は変わり、仁川の町外れでは狂笑と雄叫びが、その戦域を支配していた

互いに死角を突いて攻撃するが、それは共に空を切る

そして、二人の戦いは徐々に限界が近づいていた

円夏はまるで、泣くように目から血を流していて、直哉は口端から血を流していた

円夏は未来予測が脳に禍負荷を与え、直哉はGが体にダメージを与えていた

そして、直哉の援護にきたホワイトファンング隊は、カラミティとレイダーの改修機体

ブラウカラミティとゲルプレイヤーの二機と交戦していた

ブラウカラミティは、その圧倒的火力で濃密な弾幕を形成

ゲルプレイダーは、強化された機動で空を駆け巡り、凶悪な見た目になったハンマーを繰り出した

ホワイトフアング隊はそれを回避しつつ、その二機に攻撃を加えていた  
数では勝っているのに、決定打を与えられずにいた

それを可能としたのは、それぞれ強化された機体と更に施された強化施術だった  
フアントムペイン、第一MS小隊

セルベリア隊

セルベリア隊は、他の部隊とは違い成功個体のみで構成されていた

勿論だが、強化施術が成功したからとはいえ、一概に強いとは言えない

たとえ強化施術が成功しているとはいえ、その技量を使いこなせなければ意味はない  
しかしセルベリア隊は、それら全てをパスした隊員のみで構成されている

MSの性能だけでなく、パイロット達の技量が合わさって、たった二機で精鋭一個中隊に匹敵していた

『くっ……近付けん!』

『大尉、ここは一度後退したほうが!』

『ならん! 今我々が後退したら、ストラトス隊が挟撃される!』

副官雨宮の言葉に、唯依はそう返した

直哉以外のストラトス隊は、スローターダガー隊と交戦しており、確かに二機を通したら挟撃されるだろう

そうだったら、ストラトス隊に少くない被害が出るだろう

それを、唯依は是としなかったようだ

しかし唯依は、サブモニターに表示されていたある情報に目が向けられていた

それは、直哉のリアルタイムバイタルデータだった

直哉の体には、大Gによるダメージが蓄積

もはや、一刻の猶予もなかった

しかし、二機が邪魔で直哉の援護が出来なかった

(頼む、勝ってくれ……直哉！)

唯依には、そう祈ることしか出来なかった

戦局は、どうなるのか……

## 混迷の戦場 宇宙

「はあああああああー!」

気合いの声を上げながら、明久はビームサーベルを一閃した  
だがその一撃は回避され、二機

簡易型のカラミティとレイダーから砲撃が放たれた

その砲撃を、明久は最小限の機動で回避

すると、その回避先にカラミティの第二射が放たれていた

それを明久は、ビームサーベルで弾いた

それを見て、雄二は

『ビームサーベルで弾いた!?!』

と驚愕していた

どうやら、ビーム砲をビームサーベルで弾くとは予想してなかったらしい

それはどうやら、相手も同じだったらしい

動きに、明らかに動揺が見てとれた

その隙に、明久は左手に持っていたビームライフルを二連射



一発は、カラミティが持っていたバズーカを吹き飛ばし、もう一発はレイダーが片手に持っていたライフルを撃ち抜いた

ピンポイントにだ

明らかに、武装のみを撃ち抜いた

しかしその時、一機のスローターダガーが明久の背後に回り込み、ビームサーベルを抜刀していた

雄二はカバーしようとしてビームライフルを構えようとしたが、それより早くスローターダガーの胸部をビームサーベルが貫いた

それは、明久が右手のビームサーベルを逆手持ちにしてコクピットを貫いたのである  
そして明久は、そのスローターダガーを蹴り飛ばし、別に近づいてきていたスローターダガーにぶつめた

その直後、明久が貫いたスローターダガーが爆発

ぶつかったスローターダガーは、爆発に飲まれて損傷

その機体の頭を、明久は蹴り飛ばして破壊

そして明久は、カラミティとレイダーに接近していった  
それをカラミティとレイダーは、砲撃を放って迎撃する

しかし、当たらない

明久は、最小限の動きのみで回避し接近していく

そして、すれ違い様に

「ぜあつ!!」

一閃

たった一閃で、二機の頭部が切り飛ばされた

そして明久は、機体を即座に反転させてビームライフルを連射

カラミティとレイダーを、胴体だけ残した

不殺で、二機の戦闘能力のみを奪う

それは、相手の三倍の力量がなければ不可能とされる

つまり明久は、現戦場では最強の戦闘力を有していることになる

そして明久は、武装を仕舞うと二機を曳航しようと近づこうとした

次の瞬間、極太の閃光が走った

見てみれば、一隻の艦

ガーティール級が主砲を撃ちながら近づいてきていた

「あのカラーリングは……ファントムネスト3か!」

義之達は、四隻のガーティール級をカラーリングで識別していた

最初に邂逅したのは、青紫を基調としたカラーリングだった

そして今居るのは、紺色を基調にしていた

そのガーテイルー級は、全主砲を順番に撃ちながら前進

それを明久は、回避しながら大きく後退した

すると、ガーテイルー級のハッチが二つ開いて中からワイヤーが射出されて漂っていた二機にくつついた

その直後、そのワイヤーが巻き取られて二機はガーテイルー級に収容された  
すると、開いていたハッチが閉鎖されてガーテイルー級は回頭

戦場から離れていった

それを明久は、敢えて見送った

なぜならば、まだ残存のスローターダガーが居たからである

その撃破を優先したのだ

そして、ガーテイルー級が離脱していった十数分後にスローターダガーは全て撃破された

そして、明久達は損傷機体は出たものの、撃破された機体は無し

数人の負傷者は出たが、無事に生還したのだった

## 一つの戦いの終結

「ぐっ……オオオオアアアア!!」

直哉は幾度目かの突撃をしながら、冷静に

(もう、長くは持たないな)

と思考していた

それは、自分だけでなく円夏もだった

双方共に、体が限界間近だった

直哉はGで

円夏は、未来予測による脳の過負荷で

その証拠に、互いに動きが鈍くなってきていた

しかしそれでも、自由ユーラシア軍パイロットからしたら、人外の域だった

そして直哉は、暗くなってきている視界をなんとか維持しながら

(俺は、持って後五分……円夏も同様だろう……)

と考え始めた

そして、サブモニターに見えている唯依達の戦いを見て

(唯依達は、まだ持つか……)

と判断した

実際は紙一重の攻防だが、直哉は唯依達を信じた

そして

「さあ、決着を着けようか……円夏!!」

と言って、ペダルを思い切り踏み込んだ

そして、メインモニター隅に表示されるのは赤く《危険》の文字

その理由は、予想表示されたGが

18Gだったからだ

その証拠に、直哉は今までで最大のGでシートに押し付けられ、視界が狭まっていく

しかしそれを、碎けんばかりに歯を食い縛り耐えた

そして見えたのは、間近に迫ったフォビドゥンだった

それを見た直哉は、高速でデイバインストライカーをクローにして、まずフォビドゥ

ンの肩を掴ませた

そして、両手に持ったビームサーベルを振るった

それにより、右腕と左足は切断され、フォビドゥンはバランスを崩した

しかしその時、フォビドゥンのフレズベルグの砲口が臨界に達していた

その直後、放たれたフレズベルグによりテストメントの頭部が吹き飛んだ

しかし直哉は、直ぐ様モニターにサブカメラの映像を回した

映ったのは、なんとか逃げようとしているフォビドゥンだった

だが直哉は

「に……逃がすかああああ!!」

と血を吐き出しながら叫び、ビームサーベルを頭に突き刺し、体当たり

そのまま、フルスロットルを維持し

「アアアアアアア!!」

フォビドゥンの背後にあつた廃墟に、突撃した

それにより、直哉が被つていたヘルメットのバイザーは碎け散つた

そして直哉は、自機と共に廃墟に突っ込んだフォビドゥンを見て

「勝つた……」

と呟いて、意識を手放した

正確には、脈拍が停止した

それに気付いたのは、サブモニターに直哉のバイタルを表示させていた唯依だった

「つつ!!? 間に合え!!」

唯依はそう言いながら、レバー横に追加で設置された赤いボタンのカバーを開いて

「戻ってこいっ!!」

と言って、スイッチを押した

その数秒後、微かにだが直哉の脈拍が再始動した

それを見た唯依は内心で、深々と安堵の息を吐いた

そして、動かない直哉機を見て

(パイロット、機体共に、直哉はもう戦闘不能だ。早く帰投させて、治療を受ける必要がある)

と判断した

そして、メインモニターに視線を戻した

するとどういふことか、ブラウカラミティとゲルプレイヤーの動きが鈍っていた  
もしかしたら、ロートフォビドゥンが撃墜されたのが響いているのかもしれない

そう判断した唯依は、思わず

「貴様らにも、仲間意識があつたようだな」

と呟いた

そして、ライフルを放った

それにより、カラミティが両手に持っていたバズーカの内の右手のが破壊された

それにより、動きが鈍った隙を見逃さず、唯依は踏み込んだ

「はああああー！」

そして、気合い一閃

ビームサーベルを振り下ろした

その一撃により、ゲルプレイダーが保持していたミヨルニル改を切り裂いた

その直後、ゲルプレイダーは素早く変形

ブラウカラミテイの両肩をクローで掴んで離脱していった

それを見た部下達が

『逃がすか！』

と言つて、追撃しようとした

しかし

「いい、追うな」

と唯依は制止した

『大尉……』

「下手に追撃して、未確認のもう二機と戦う訳にはいかない。今は、直哉機を回収しつつ、ストラトス隊と合流するぞ」

『了解！』

唯依の判断は正しいだろう



唯依達も、二機との戦闘でエネルギーと推進材を大分消費していた  
精鋭揃いのホワイトフアング隊とは言え、油断は出来なかった

その後唯依達は、直哉機の回収に向かいつつストラトス隊を援護し、合流  
この時、義之の攻撃によりデストロイは撤退していった

こうして、地上戦も幕を下ろしたのだった

## 命の価値

「開けるぞ！ 担架は待機している！」

と言ったのは、唯依である

戦闘終結後、唯依は義之に上申して自由ユーラシア軍に医療班を要請した  
そしてこれから、テストメントのкокпитハッチを開けるところだった

直哉の心肺が一度止まったために、一刻を争うと判断したのである

唯依の思いと直哉が心配だったからか、義之は直ぐ様自由ユーラシア軍に医療班を頼んだ

そして現場指揮官だったラトロワも、それを快諾

医療班を向かわせた

そして医療班が担架を所持したのを確認した唯依は、義之から教えられたパスワードを入力した

その数秒後、ハッチが強制解放された

その直後唯依は、体をкокпит内に滑り込ませた

そして、息を飲んだ

直哉のヘルメットのバイザーが、血で真っ赤になっていた

唯依は逸る心を抑えきれず、ヘルメットを脱がした

直哉の顔色は、もはや蒼白だった

唯依は直哉の体を押さえていたシートベルトを外し、肩で直哉を担いで

「今から降りる!」

とワイヤーガンで、ゆっくりと降りた

医療班の保持していた担架にゆっくりと寝かせ、医療班を見ると

「後を頼む」

と言った

すると、班長らしい男性が

「最善を尽くします」

と言つて、医療班を進ませた

しかし、直哉の胸元に脈拍を計る機械を着けた班員が

「なんだ……二重に映る!?! 不整脈になつてるのか!?!」

と声を上げた

すると、義之が

「彼は……ユーラシア連合によって強化人間にされています……一つは、人工心臓です」

と説明した

それを聞いた班長が

「増血剤を用意！ それと、生理食塩水！」

と指示を出した

その間に、みちるが直哉機が押し付けたロートフォビドゥンに取りついて

「ハッキングします」

と端末の操作を開始した

そして、約十秒後

「開きます」

とみちるが言った

その直後、ロートフォビドゥンのコクピットハッチがゆっくりと開いた

開ききった直後、数人の兵士が小銃を突き付けた

そして、困惑した

中では、小柄な少女が意識を失っていたからだ

すると、義之が中に入り

「こいつだな」

とシートの後ろに有った機械に、銃弾を数発撃った

すると、自由ユーラシアの兵士の一人が

「大佐殿、それは？」

と義之に問い掛けた

すると義之は、拳銃を仕舞いながら

「こいつは、繭……ユーラシア連合が研究している、狂った物さ」

と言つて、まず円夏をゆつくりと下ろした

そして

「医療班、この娘も頼む。恐らく、脳への禍負荷が原因だ」

と言つた

すると、医療班の一人が

「敵ですよ!？」

と驚愕していた

すると、義之が

「復讐心に囚われるな……強化兵にされているのは、同じ人間だ……それにこの娘は、我が国の国民だ……保護する」

と告げた

織斑円夏の名前は、実は初音島の国籍に一回登録されていたのだ

織斑一夏の双子として

しかし、直哉とほぼ同時期に行方不明になっていた

二人揃って、ユーラシア連合によって強化人間にされていたのだ

直哉は自我崩壊の影響で、その研究所の場所は覚えていなかった

しかし、円夏は自我の崩壊はしていない

もしかしたら、場所を知っているかもしれない

なんとしても、助ける必要があつた

その時

『スクルド3よりオーデイン1。接近する大型の艦艇を複数確認！ 所属は……：NA

U海軍、第七機動艦隊！』

と機体に搭乗していた由夢から、通信がきた

どうやら、NAU海軍の艦隊が近付いてきているらしい

すると、オープンチャンネルで

『こちらはNAU海軍第七機動艦隊旗艦、ジョン・F・ケネディ艦長のジョージ・オルス  
トンだ。どうやら戦闘は終わってしまったようだが、物資は入り用かな？』

と男性の声が聞こえた

その時

「班長、大変です！ 増血剤が足りません！」

と声が聞こえた

それを聞いた義之は

「救援感謝します。医療品が不足しています」

と告げた

それを聞いたジョージ・オルストンは

『了解した。出せる医療品だけでなく、艦内の手術室も使ってくれ』

と言った

それを聞いた義之は、感謝の言葉を告げて

「重傷者はJFKで手術が出来るぞ！ 搬送用意!!」

と声を張り上げた

その時、JFK甲板からMSが大型のコンテナを持って飛んできた

そしてゆっくりと下ろして

『医療品です。使ってください！』

『こちらは、食料品です！』

と言った

それを聞いて、兵士達はコンテナを開放

中から医療品や食料品を出して運び始めた

すると、一人の兵士が

「班長！ 増血剤です！」

「よし、持ってこい！」

と医療班のテントに持っていった

すると、一機のリーオーが背部に大きなバックパックを背負って着地し

『このバックパックには、手術室があります！ 使ってください！』

と女性

リリア・シエルベリが言った

そのバックパックは、NAUが新しく開発した移動手術室だった

それにより、戦地や被災地でも高度な手術が出来るようになっていた

ジョージ・オルストンはそれを、独断で投入したのだ

失われそうな命を救うために

「移動が困難な重傷者を、あの手術室に！ 移動が可能なのは、JFKの方に！」

『了解！』

ラトロワの指示を受けて、医療班だけでなく全自由ユーラシア軍

そして、駆け付けたNAU海軍も動いた



命を救うために

## 目覚め

デストロイの撃退に成功し、直哉の治療を自由ユーラシア軍に委託した後義之は、自由ユーラシア軍のレーザー通信機を借りてアミノミハシラとの通信を試みた

そして、通信を始めて十数分後

『……こちら、アミノミハシラ！ 大佐ですか!?!』

とノイズ混じりに繋がった

そして義之は

「ああ、そうだ……地上はこちらが勝ったが、一人重傷……そちらはどうだ？」

と告げた

すると管制官は

『こちらにもフアントムペインが襲撃してきましたが、MSSのMS隊により撃退出来ました。ライゴウガンダムに乗ったパイロットの活躍が大きいです』

と言った

それを聞いた義之は、少ししてから

「やってくれたか、明久君……やはり、惜しい人材だな」

と呟いた

『なにか、仰いましたか?』

「いや、何でもない。すまんが、そちらから本国に通信を頼む。大至急、東博士とそのチーム。それと医療品や食糧の物資を送ってくれと」

すると管制官が

『まさか、重傷を負ったのは……神崎少尉ですか?』

と問い掛けてきた

すると義之は

「ああ……テストメントの全機能解放で、長時間戦闘を行った……今は自由ユーラシア軍の医療班が治療しているがな」

と告げた

それを聞いた管制官は

『大至急、本国に知らせます』

と言つて、少し黙つた

そして、少しすると

『お待たせしました。本国に知らせました。大至急、向かせるとのことでした。他に、何かありますか?』

と問い掛けてきた

それを聞いた義之は

「テストメントの修理と……ああ、敵パイロットを一人捕縛した……それに関しては、今そちらにデータを送る」

と言つて、端末をレーザー通信機に繋げた

少しすると、管制官が

『これは……我が国の国民ですか!?!』

と驚愕していた

それを聞いた義之は

「ああ……どうやら、神崎少尉と同時期に誘拐されていたようだ……これに関しては、軍と警察の無能だな」

と自虐した

すると管制官は

『大佐はまだ、所属してない時期です……ですが、軍の責任には変わりませんね……』  
と返した

確かに、誘拐を許したというのは軍と警察の責任に他ならない

恐らく、純一や軍の高官

更には、当時の警察関係者は何らかの責任を取る形になるだろう  
「今送ったデータも、本国に送信しておいてくれ」

『了解しました。大佐達の帰還を、心より御待ちしています』

その言葉を最後に、通信は終わった

義之は通信がキッチンと切れたのを確認してから、通信機を返却

そして、あるテントに向かった

その入口には、機体から降りたまゆきとみちるが居た

その手には、ハンドガンとPDWがある

「見張り御苦労」

義之がそう言うと、みちるが

「中のパイロットは、治療の甲斐あり熱は収まりました……しかし、未だに信じられませ  
ん……まさか、あそこまで幼い上に……織斑中佐に似ているとは」

と言った

それを聞いた義之は

「そこまでか？」

と問い掛けた

すると、まゆきが

「瓜二つだよ……流石は、姉妹だね」

と言った

彼女達も、千冬から指導を受けた生徒達である

その二人が言うのだから、本当だろう

二人の言葉を聞いて、義之は少し黙考した

するとみちるが

「少し前に、意識が回復しています……話をしてみますか？」

と言った

それを聞いた義之は

「もう、戻ったのか？」

と驚いた表情で問い掛けた

するとまゆきが

「私達だって、驚いたよ。まさか、一時間たらずで意識が回復するなんてね……しかも、

大人しいんだよ」

と言った

それを聞いて、義之は

「二人は引き続き、外で見張りを頼む」

と言つて、中に入った

中に入ると、少女

円夏は、大人しくベッドに寝転がつていた

そして義之に気付いたらしく、視線を向けていた

義之は、ベッド横に置かれていたイスに座り

「起きたか」

と声を掛けた

すると円夏は、軽く頷いた

円夏の手足は、手錠でベッドに繋がっている

「君の名前は、織斑円夏……で、いいんだな？」

と義之が問い掛けると、円夏は

「はい、そうです……」

と呟くように、返答した

すると義之は

「まず、先に謝らせてくれ……君や神崎少尉が誘拐されたのは、我々軍に責任がある……」

済まなかつた」

と頭を下げた

そして、頭を上げて

「君のことは、神崎少尉から話がある程度聞いた……君は、数少ない成功個体……なんだね？」

と問い掛けた

すると円夏は

「間違いありません……私は、第二期強化人間計画……更にπ3計画個体です」

と言った

それを聞いた義之は、あることを聞くことにした

それは

「君や神崎少尉が強化施術を施された場所は……覚えているかな？」

強化人間計画の根幹

狂った計画の本拠地だ



## 目的の場所

戦闘が終結した翌日昼過ぎ、なんとか直哉は峠を越えた

しかし、未だに余裕が無いのは事実だった

直哉だけではなく、直哉の機体

テスタメントも、中破レベルのダメージがあったからだ

見た目の損傷は頭部だけだが、機体内部に機能全開のダメージが大きかった特に、強引な軌道変更を行った下半身とスラスタに高いダメージがあったそれを直すには、本国かアメノミハシラに帰還するしかないだろう

そして、直哉が治った理由は

「いやあ、間に合って良かったよ」

と言った、一人不思議の国のアリスというべき服装の女性

その名前は、篠ノ之束

初音島が世界に誇る天才の一人で、箒の姉である

彼女はロボット工学の天才だが、人体工学にも長けている

そして何より、さくらと一緒に直哉に投与された薬物の特定をした人物だ

故に、さくらが大統領として忙しい今は彼女が頼りだった

「すいません、東さん。ここまで来てもらって」

「いいよー。丁度暇してたから……それに、この子も直さないとね」

義之に返答した後、東はそう言つて駐着されているテストメントを見上げた

テストメントの開発には、彼女も関わつたのだ

ある意味、テストメントは子供のような感じだろう

そして東は、ジツとテストメントを見て

「これ、相当無茶したね……何分位、機能解放したの？」

「記録によれば、二十分近くです」

東の問い掛けに、義之はそう答えた

すると、東は

「そうなる……オーバーホールした方が良いレベルだね……」

と呟いた

そして、自分が乗つてきた音速ジェット機の無線で何か話した

そして終わつたらしく、振り向き

「今、本国に長距離輸送機を要請したよ。それで、テストメントと直哉君を一度本当に帰還させよう」

と言った

「どうやら、本国たる初音島に通信していたらしい

「俺達は、その輸送機の護衛をしましょう」

義之がそう言うのと、束は頷き

「それで……二人目は？」

と義之に問い掛けた

その問い掛けを聞いて、義之は

「こちらです」

と束をテントに案内した

そのテントの入口には、みちるとまゆきの代わりに唯依とその副官の雨宮が居た

義之はその二人に

「何か異常は？」

「ありません」

「大人しいものです」

義之の問い掛けに、二人はそう答えた

それを聞いてから義之は、束と一緒に中に入った

中に入ると、円夏はベッドに腰掛けていた

その両手両足には、手錠がある

円夏に抵抗する意思も逃げる意思も感じられなかったので、拘束を簡易的な物に変更したのである

その円夏の顔を見て、束は

「なるほど、よく似てる……確かに、ちーちゃんといっくんの姉弟だね」  
と言った

なお、ちーちゃんというのは千冬

いっくんとは、一夏のことだ

実は束には一つ、重大な欠点があつた

それは、コミュニケーションだ

束は極限られた人物としか、話したがらないのだ

その限られた人物の中に、義之も入っていた

何が義之を気に入ったのか知らないが、それがフリーダムが開発出来た要因の一つだと、さくらは言っていた

「初めまして、円夏ちゃん……」

「初めまして、篠ノ之束博士」

束が呼び掛けると、円夏はそう言いながら頭を下げた

すると、束は

「多分、よし君に教えたと思うけど。もう一回聞くよ……ユーラシア連合の強化人間研究所の場所は……どこ？」

と問い掛けた

すると円夏は、ジッと束を見て

「強化人間研究所の場所は……ロドニア」

と告げたのだった

## 帰投

仁川での戦闘から、三日後

降下部隊は、一路初音島に到着

機体の修理や整備を始めた

その中で、一番時間が掛かるのは、やはりテストメントだった

テストメントはフレームが歪んでいたり、スラスト類が焼き付く寸前だったりしていた

修理には、最低でも二週間は必要だと分かった

更に、直哉自身も重症だった

直哉は、今も意識が戻っていない

下手したら、脳に障害が起きている可能性も僅かだがあった

それにより、直哉はしばらく戦線離脱を余儀なくされた

しかし、待っている暇は無かった

なにも、ユーラシア連合の強化人間計画とπ3計画の根幹をなす場所

研究所が判明したのだから

だから、他の機体の修理と整備は急ピッチで進められていた

「おら、そこ！ 終わったら、器具はすぐに片付けろ！ 邪魔になる！」

「誰か、A-304のパイプを持ってきてくれ！ 大至急！」

「やべー！ 電パチの予備バッテリーが無くなった！ 新しいのはどこだ!？」

天枷研究所のハンガーは、喧騒に包まれていた

それを見ながら、さくらが

「10式は、一日もあれば大丈夫……09も、同じくらいだね」

と各機の修理予定を確認していた

そして、隣に居た束に視線を向けて

「他の機体は？」

と問い掛けた

すると、束は

「大体、長くても四日あれば大丈夫なレベルだねー。まあ、なんとかなるよー」

と答えた

そして二人の視線は、ある一機に向けられた

頭が無くなり、装甲が完全に外された機体

テストメントに

「問題は」

「テストメント……かぁ……」

二人はそう言うと、モニターにテストメントの状態を表示させた

頭部全損

各関節、損耗度危険域

スラストー、焼き付き寸前

フレーム、全体的に大幅な歪み

最早、廃棄寸前のレベルだった

しかし、廃棄する訳にはいかない

テストメントの建造に、かなりの予算を費やした

それだけでなく、今後は更に激戦化が予想される

今は、一機たりとも戦力を失うわけにはいかない

「これは、予想以上の損耗だなあ」

「だねえ……戦闘データ見たけど、秒間コマンドが20越えてたよ……完全に、想定ギリギリの域だよお」

二人はそう言って、頭を掻いた

さくらと束に二人は、初音島が世界に誇る天才科学者だ



その二人が、当時有していた技術の粋を投入したのが、09、10、12の三機だった

まさか、その内の一機

超高速戦闘機たるテストメントが、こんなに損耗するとは予想していなかったのだ  
それほどに、その三機は自信作だった

「とりあえず、予備部品を使って修理をするけど……」  
「フレームもだから、最低でも二週間……か……確実に、ロドニア襲撃作戦には間に合わないね」

ロドニア襲撃作戦

それは、円夏から得た情報から立案された作戦だった

ユーラシア連合が行っている、狂気染みだ研究

強化人間計画とπ3計画を破壊するために、今純一が各国軍と共同で立案している作戦である

ユーラシア連合に移設の時間を与えないために、一週間以内に作戦が遂行される予定である

しかし、テストメントの修理には二週間掛かる

どう頑張っても、間に合わないのは目に見えている

それだけでなく、直哉だ

「それで、直哉君は？」

「手術は、無事成功……でも、何時目覚めるかは」

さくらの問い掛けに、束はそう返した

それを聞いて、さくらは

「そっか……ダメだなあ、ボクは……どうしても、嫌な予想ばかりしちゃう……」

と言つて、椅子に深々と座つた

今の直哉の保護責任者は、さくらとなっている

ある意味、孫とも言えるのだ

そういう意味では、義之とは義理の家族関係である

その義之は、久しぶりの地上隊舎で、怒濤のように書類を捌いてる真つ最中である

すると、束は

「束さんにはよく分からないけど、これだけは言えるよ……一国の当主として。そして、親として……クヨクヨはしてられない……でしよう？」

と言つた

それを聞いたさくらは、残っていたコーヒを一気に飲み干して

「そうだね……」

と言って、立ち上がった

そして

「今回の戦闘データから得られたデータで、機体を強化しよう。それが、ボク達に出来ることだよ！」

と言って、頬を叩いて気合いを入れたのだった

それから四日後、作戦を遂行するために義之達は再び宇宙に上がった  
狂った研究を、終わらせるために

## 作戦開始

そこは、漆黒にして真空の宇宙

宇宙服を着ないで外に出たら、人は生きていけない空間

そのある一ヶ所に、嵩隻の大型艦が航行していた

その先頭を航行しているのは、不沈艦と誉れ高き白亜の巨艦

アークエンジェル

その後方を航行しているのは、青い同型艦

アークエンジェル級二番艦として就航した、メタトロン

その艦長には、長らくアークエンジェルの副艦長として音姫を補佐してきた雪村杏が

着任

操舵を、緑葉樹

殆どが新人で、この航行が初実戦になる

しかし、選んでる暇はなかった

この作戦を成功させないと、ユーラシア連合との戦闘は長期に亘って続くことになる

そうなれば、国力の差で初音島は立ち行かなくなることは明白だ

今は、純一とさくららの手腕でなんとか保たせているだけだ  
各国や御剣財閥は、支援を表明しているものの、長期になれば各国の負担も馬鹿にな  
らない

そういう観点からも、短期で決着を着けなければならぬ

そして、ロドニア研究所襲撃作戦は、その要となる作戦だ

今のユーラシア連合の主力たる、ファントム・ペイン

そこに戦力となる強化人間を供給しているのが、ロドニアの研究所なのだ

そこを叩けば、ファントム・ペインに

ひいては、ユーラシア連合に大打撃を与えることが出来る

そして、悪くて停戦

よくて、ユーラシア連合の解体にまで持っていく

それが、各国の意見だった

そして、メタトロンの後方で横一列に並んでいるのは、帝国軍が世界に誇る特装艦

大和型の大和、武蔵、信濃の三隻である

この三隻は、帝国に帰還した後に改装を受けた

具体的には、MSの運用能力の強化だ

以前は、一個中隊しか運用出来なかったが、区画の整理と少人数で運用可能なシステ

ムの構築をした結果、二個中隊の運用を可能とした

そして何より、艦首の特装破城砲

その名前は、ナルカミ

初音島全面協力のもとに、大和型の三隻に実装された陽電子砲である

放射能汚染はギリギリまで抑え、威力はアークエンジェルのものに比べて、単純威力は三倍に達する

これだけでも、大和型の性能は倍以上は確実に上がっている

その大和型を、帝国は惜しみ無く全て投入することを決定した

実を言えば、この大和型の改良艦を建造していたのだが、最終調整が間に合わずに投入を断念していた

その改大和型とも呼べる艦は、紀伊型

その紀伊型は、二隻建造されている

単純な性能ならば、今の大和型の三割増し

搭載MSの数は、一個大隊になる

投入出来ていれば、大幅な戦力強化になっただろう

しかし、無いものねだりしても仕方ない

そして、その大和型の後ろに布陣しているのは、神界魔界近衛軍旗艦「ディーヴァ」

ここまでは、大気圏突入する特装艦艇である

その後方には、大気圏突入カプセルを搭載したシャトルが航行している

その大気圏突入カプセルには、欧州連合から選抜されたMS部隊が搭載されている

先に特装艦艇隊が突入し、その後大気圏突入カプセルを突入させ、間断なくMS部隊を展開させる作戦となっている

もちろん、無事に突入出来るとは思っていない

その時の状況に合わせて、臨機応変に動く

『今作戦の旗艦、アークエンジェル艦長。朝倉音姫です。皆さん、聞いてください……この作戦の如何によつては、世界の嵩性は大きく変わります……そして作戦の結果は、皆さんの働き次第です……皆さんの奮闘に期待します!!』

音姫がそう言うと、友軍のオープンチャンネル回線は

『了解!!』

の声に支配された

それを聞いた音姫は、少し間を置いてから

『作戦開始!』

と宣言

それを聞いた特装艦艇隊は、降下を開始した

## 挺身

精銳連合艦隊は、特装艦を先頭に大気圏降下を開始した

特装艦隊は、赤熱化気流を伴いながら降下していく

『全艦、予定通りの軌道を降下中……後方シャトル艦、カプセル切り離しまで後120秒』

その報告を聞きながら、各艦は予定軌道から外れないように、操舵していた  
その時、極太の閃光が特装艦隊の間を走った

『今のは!』

『このエネルギー値は……陽電子砲です! 恐らく、地上からの砲撃です!』

オペレーターがそう言った直後、また一発の陽電子砲が間を走った

どうやら、照準が甘いらしい

だがもし当たれば、いくら特装艦とは言っても人溜まりもない

『陽電子砲を対空砲台として使うか!』

『しかも、今の発射間隔……一基ではないな!』

武蔵の艦長



安倍がそう言った直後、また一発が放たれた

徐々にだが、狙いが近くなってきた

直撃するのも、時間の問題だろう

『回避機動を取れば、作戦に支障を来す……どうするか!?』

と大和の艦長

小澤が歯噛みした

そこに

『貴艦等は、コースを維持せよ!』

と若い男性の声が聞こえた

そして、特装艦隊の間を一隻のシャトルが先行降下した

『ネウストラシムイ!? 何を!?』

『ここは、我々に任せていただく!!』

音姫が問い掛けると、ネウストラシムイ艦長

ラフィード・エッテル少佐は勇ましく言いながら、更にシャトルを先行させた

よく見れば、降下カプセルが外れている

それを見て、誰もが気付いた

エッテル少佐は、盾になる気なのだ

『エツテル少佐！ 幾らなんでも、無茶です！』

『後は、頼みます!!』

音姫が制止し、エツテル少佐がそう言った

その直後、陽電子砲がネウストラシムイに直撃

ネウストラシムイは、炎の華を咲かせた

『エツテル少佐あ!!』

『全艦、降下カプセルを分離！ 特装艦隊の前に出る!!』

『了解!!』

ネウストラシムイの轟沈により、新たな旗艦となったシャトル

アルトリンデの艦長

アルトリウス・バンデル少佐の指示の直後、降下カプセルを装備していた全シャトル

が次々と降下カプセルを分離

特装艦隊の横を通り過ぎて、前面に展開を始めた

『なにを!』

『貴方達を無傷で戦場に送り届けることこそが、我等が任務』

はやてが問い掛けた直後、一隻のシャトルがまた陽電子砲の直撃を受けて爆散した

『世界の未来を決める貴艦等を送り届けることは、我々にとっては、最大の名誉だ!』

『その名誉を、傷付けさせはせん！　そして貴艦等のことも、傷付けさせはせん!!』  
シャトルの艦長達が言う度に、一隻、また一隻と轟沈していく

それを、特装艦隊の艦長達と乗組員

そして、MSパイロット達は歯噛みして見ることしか出来なかった

『世界の未来を……子供達の明るい未来を……あいつらに奪わせないでくれ!!』

そして、彼等のその行為は、決して無駄ではなかった

最後の一隻が轟沈した数秒後、赤熱化気流が収まった

それを確認した音姫は

『フリーダム、ジャスティス、出撃！　陽電子砲台を、破壊せよ!!』

と告げた

それを受けて、開いたカタパルトからフリーダムとジャスティスが出撃

スラスターを噴かして、降下していった

## ロドニア戦 開戦

音姫の号令の直後、指示を受けた二機

フリーダムとジャスティスが出撃し

「伊隅！」

『はっ！』

二機同時に、全武装を展開

そして、二機同時に全武装解放

フルバーストを放った

これ以上、犠牲を出す訳にはいかないのだ

二機の砲撃の直撃を受けて、地上に配備されていたローエン格林砲台、六基が吹き

飛んだ

すると、数多くのMSが展開

砲撃を開始してきた

しかし、義之は慌てずに

「オーディーンより、全軍に通達！ MS隊、全機出撃！」

と告げ、音姫がMS部隊の出撃を命じた

その直後、全特装艦からMSが次々と出撃

降下戦闘を開始した

『気張ってけ！ 強行降下だ！ 少しでも機動を失敗すると、地面とぶつかるぞ！』

『そんなミスするかよ！』

アルゴスー、ユウヤ・ブリッジスの言葉に2番機

タリサ・マナンダルは、荒い口調で返答した

だが、その裏にあるのは自信だ

タリサ・マナンダルはタイタン戦後にパイロットになったが、とある山岳民族の血を

継いでおり、身体能力は高い

その高い身体能力と生来の反射神経

その二つにより、彼女は幾多の戦闘を潜り抜けてきた

まさに、自信の裏打ちである

そして彼女は、搭乗機として与えられた高機動パックを装備しているアストレイ式型を空中で縦横無尽に操り、地上からの砲撃を容易く回避

お返しとばかりに、ビームライフルを撃った

彼女が撃ったビームは、地上で砲撃していたバスターダガーに直撃

撃破した

それを皮切りに、次々と降下部隊は地上のMSを撃破していく

『このままならー!』

と壬姫が声を挙げた

だが、その直後

『大佐! 地下から、高エネルギー反応! 推定、MA!』

とみちるが告げ、それと同時に極太の閃光が地表を突き破って天目掛けて走った

その一撃は、回避するまでもなく、命中しなかった

だがその一撃は、別の用途のために撃ったのだろう

恐らくは、ハッチが何らかの要因で開かなかつたのを、砲撃で吹き飛ばしたというところだろう

そして、地下から巨体がその姿を現した

破壊の名を冠した漆黒の機体

デストロイ

それを見た義之は

「あいつは、俺と伊隅が撃破する! 他は、出てくる他の敵を!」

と指示を下して、伊隅機と共にデストロイに突撃した

場所は変わり、少し離れた場所

そこで唯依は、一機のスローターダガーを切り捨て、その援護に来ていたらしい、デュエルダガーの胸部に蹴りを叩き込んだ

その蹴りでコクピットは潰れて、デュエルダガーは膝を突いた

そして、唯依は

「この戦い、なんとしても勝つぞ！ 降下艦隊の挺身を、無駄にしないために！」

『了解!!』

烈迫の気合いを伴いながら、部下に激を飛ばしていた

そしてまた、不用意に近付いてきた別の機体を切り捨てた

その後、ある地下から出てきた機銃台にビームライフルを撃った

その直撃を受けて、機銃台は爆発した

それを見ながら、唯依は

(動けない直哉の代わりに、私は戦う！)

と思った

そして彼等は、狂った研究を行っている施設の破壊を開始したのだった

## ロドニア戦 投入

義之とみちるは、デストロイに肉薄した

それは、前回の戦闘から得た情報からだった

デストロイは防御力と火力に優れているが、機動性と格闘戦能力が低かった  
近接用兵装は、バルカン砲のみ

そして実弾攻撃では、PS装甲は簡単には破れない

ビーム系近接用兵装が無いデストロイにとって、接近戦は正に鬼門だった  
だからだろう

デストロイは、全身の全火器を解放し、二機を近づけまいとした

だが二機は、高い機動力を活かして、その砲撃を回避

デストロイに迫った

するとデストロイは、バリア

陽電子リフレクターを展開した

どうやら、それで二機の肉薄を防ぐつもりらしい

それを見た二機は、ビームサーベルを抜刀



一閃した

すると、デストロイが展開していた陽電子リフレクターは容易く切り裂かれた

陽電子リフレクターは、陽電子砲を含む射砲撃には無類の防御力を誇るが、ビームサーベル等による格闘攻撃には非常に弱かったのだ

そのことを、デストロイのパイロットは知らなかったらしい

ホバークラフトで後退し、距離を取ろうとした

だが、速度で二機に敵う訳がない

デストロイは容易く二機に近づかれ、攻撃を許した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ゴッドフリート、ポイントSSE、12、14、05に撃ち込んで！ 少しでも、MS部隊の支援！」

「了解！」

音姫の指示を受けて、ゴッドフリートが地上に次々と撃ち込まれた

砲撃を敢行しているのはアークエンジェルだけでなく、特装艦隊全艦で砲撃している

そんな特装艦隊を攻撃しようと、出撃してきた敵MS部隊が近付いてくる

だが

『させるかよー！』

『せあー!』

それは、付近に配置されていた味方MS隊により、防がれた  
それを確認しつつ、音姫は

「まだ突入口は見つからないの?」

とななかに問い掛けた

すると、ななかは

「まだです……!」

と返答した

それを聞いて、音姫は

「早く見つけて! 陸戦部隊を入れて、制圧しないと!」

と言った

今回の強襲作戦は、まずMSで敵地上戦力を掃討

そして、発見、または空けた突入口から陸戦部隊を投入し、研究所を制圧する

という作戦になっていた

そのために、各国から精鋭陸戦部隊を選抜

各艦の艦底部格納庫のホバー装甲車内にて、今か今かとその牙を研ぎ澄まして待つて

いた

その時だった

前方右上上空に、白い信号弾が上がった

それを見た音姫は、思わず体を前のめりにした

すると、ななかが

「ホワイトフアングーより通信！ 突入口の確保に成功！ 陸戦部隊を投入せよ！」

と言った

それを聞いた音姫は

「各艦に通達！ 陸戦部隊を投入せよ！」

と指示を下し、渉を見て

「渉君、艦の高度を下げて！」

「了解！ 高度50まで下げます！」

音姫の指示を受けて、渉はアークエンジルの高度を半分まで降下を開始

すると、ななかは

「陸戦部隊に通達！ 間も無く、貴部隊を投入します！ 最終確認を開始せよ！」

と告げた

ふと気付けば、全艦の高度が規定の高度になっていた

それを見て、音姫は

「陸戦部隊、降下！」

と指示を下した

その直後、各艦の艦底部から次々とホバー装甲車が降下を開始

それを見た音姫は

「各MS部隊に通達！ ホバー装甲車を、突入ポイントまで援護！ 敵地上戦力を近づ

けさせないで！」

と言った

その指示を受けて、戦域の連合部隊は激しく動き出した

何としても、陸戦部隊を突入させるために

## 破壊、倒れる

「伊隅、ブレイク！」

『了解！』

みちるは義之の指示に従い、デストロイを中心にして散開

デストロイに間断無く、ビームサーベルを繰り出した

しかし、相手は仮にも重装甲

しかも、時折自身の被弾を無視してミサイルの雨を降らしてくる

しかも、少しでも正面に位置すると、胸部と頭部のビーム砲を撃ってくる

しかし、二機は回避

そして

「今だー！」

と義之機が、頭部に深々とビームサーベルを突き刺した

しかも、ビーム砲を発射しようとエネルギーを溜めていた時にだ

その損傷とエネルギーの逆流が起きて、デストロイの頭部は爆発した

だが、それでも倒れずに攻撃してくる

それを見て、義之は

「コクピットは頭かと思つたが、違つたか」

と呟いた

どうやら義之は、頭部がデストロイのコクピットと予想していたらしい  
だが、デストロイは稼働している

「ということほだ」

『胸部ですか』

義之とみちるはそう言うのと、動きだした

しかし、デストロイも無抵抗ではない

両手を飛ばし、遠隔砲台<sup>ドラグーン</sup>として攻撃してくる

それを二機は、回避か防御

そして、ビームサーベルで切り捨てた

そしていよいよ、デストロイ本体

その胸部に、二機のビームサーベルが突き刺さった

その数秒後、デストロイは膝を突いて転倒

爆発したのだった

「これで、甚大な被害をもたらしたデカブツは撃破したな」

『では私達も、味方の支援に行きましよう』

みちるの言葉に頷き、義之は地上で戦っている味方の支援に向かった

場所は変わり、ホワイトフアング中隊

彼女達は、接近してくる敵部隊を撃破していた

だが、その敵の波が止まらなかった

「01より02、エネルギーはどうだ!？」

『現在、約6割です! 他も同様です!』

『03より01! 敵さん、しつこいですね!』

「突入されたくないようだ! だが、陸戦部隊が来るまで敵を排除し続けろ!」

『了解!』

唯依の指示を受けて、ホワイトフアング中隊は新に接近してきた敵部隊の迎撃を開始

そして唯依は、マップを確認した

(陸戦部隊が到着するまで、後約300秒……これならば、行けるか?)

と唯依は、内心で首を傾げた

その直後、アラートが鳴り響いた

そのアラートを聞いて、唯依は反射的に上を見上げた

そこに見えたのは、青い塗装のガンダムタイプ

「量産型レイダーか!!」

それは、宇宙で明久達が交戦した量産型レイダーだった

しかも、一機だけではない

全部で、一個中隊規模

それを見た唯依は

「全機、機動格闘戦だ! 帝国近衛の勇猛さを、諸外国のパイロット達に見せつけろ!」

と号令を下した

『了解!』

唯依の指示に従い、ホワイトフアング中隊のパイロット達は世界最高峰と名高い機動格闘戦を開始

そして、唯依は

「彼等から得たデータからでは、性能は互角というところだな」

と比較していた

それは、MS開発に携わってきたからこそその性でもあった

「だが、油断は禁物だ……行くぞ!」

そう言つて唯依は、ビームサーベルを構えた

その直後、量産型レイダーは右手に機関砲



左手にビームサーベルを構えて、突撃してきたのだった

## ロドニア戦 突入

「はあああああ!!」

唯依は烈迫の気合いとともに、量産型レイダーに対して、ビームサーベルを振るった。その一撃をレイダーは、地面を滑るような機動で回避

そしてすぐさま、片手に持っていた機銃を撃った

しかし、唯依は

「今更、当たるか!」

と言つて、前に進むように回避した

そして今度は、逆袈裟に切り上げた

その一撃は、回避が遅れたことよつて、レイダーが持っていた機銃を切り裂いた

レイダーは、直ぐ様機銃を投棄

すると、足下に落ちていたビームライフルを拾い上げて、撃つてきた

しかし、その一発を唯依は

「はあああああ!」

と、ビームサーベルで弾いた

流石にビームをビームサーベルで弾くとは予想してなかったのか、レイダーは固まった

それを見た唯依は

「隙だらけだ!」

と、ビームサーベルでレイダーの胸部を突き刺した

すると唯依は、ビームサーベルを抜いて、一気に下がった

その直後、レイダーは爆散した

そして唯依は

(性能的には、初音島で見たレイダーより低いな……それに、幾らか簡略化もされていた……)

と考察した

そして

「各員、報告!」

と告げた

実は、唯依が撃破したのは二機目だったのだ

すると、副官から

『いちら02。被弾無し』

と報告がされた

その後、続々と部下から報告が相次いだ

結果、ホワイトフアング中隊には被弾無し

上々の結果だった

そこに

『陸戦部隊、来ます！』

陸戦部隊が乗ったホバー装甲車が到着

ドアを開けて、中から続々と各国から選出された精鋭陸戦部隊が現れた

そして、通信で

『陸戦部隊、128名。これより突入する！』

と隊長らしき人物が告げてきた

すると、音姫が

『了解、武運を祈ります』

と言った

それを聞いた直後、陸戦部隊は突入していった

陸戦部隊は、初音島、帝国軍、欧州連合から選出され、それぞれ半数近くが強化外骨

格を纏っている

その強化外骨格を纏った兵士が前に出て、ドアやバリケードを破壊突破  
その強化外骨格部隊を撃破しようと、敵兵士がRPG等を構えた

しかし、それをみすみす見逃す彼等ではなかった

敵が照準を付けている間に、無駄なく弾を叩き込む

そして、大きなドアの前に到着

すると、弾が

『破碎突破します！』

と言って、左腕に固定されてる盾の内側に装備されている杭打ち機を構えた

そして

『ぜあ!!』

と気合いの声と共に、ドアに叩き付けた

その直後、ドアは轟音と共に吹き飛んだ

それを見た一人の兵士が、小銃を向けて

「GOOGOGO!!」

と声を張り上げた

それを聞いて、数人が奥に雪崩れ込んだ

そして、息を飲んだ

なぜならば、そこが研究区画らしいのだが、異様としか言えない光景だったからだ  
薬液が満たされたあるシリンダー内には、様々なコードが繋がれた子供が力なく浮い  
ていて、また別のシリンダーには電極が刺された脳髓が浮かんでいた

そして、そういったシリンダーが、大量に並んでいたのだ  
それを見た一人が

「クソツたれが……っ！」

と悪態を吐いた

すると、隊長らしき人物が

「平気でこんなことをする奴等だ……殲滅して、こんな研究所、徹底的に破壊するぞ！」

と気炎を吐いた

『了解!!』

その隊長の言葉に、全員が斉唱で答えた

否やがある訳がない

何せ、この中の何人かは結婚し、子を設けている

こんな光景を見て、怒らない訳がなかった

そして

「予定通り、別れるぞ。手筈通りに」

と隊長が言つて、各国の部隊に別れて進み始めた  
徹底的に、殲滅と破壊するために

## 陸戦部隊の戦い 1

『第二分隊は右へ。第三は左に。第四は第一と一緒に来い』

『了解』

弾の指示を聞いて、初音島の陸戦部隊は研究所を移動していた

時々、セキュリティらしい無人ロボットが出てくるが、それにやられるようなメンバーではない

悉くを破壊し、奥に進んでいった

だが、その途中で

『初音島の、聞こえるか?』

『こちら初音島。どうしました?』

帝国の陸戦部隊から、通信が来た

『どうにも敵の抵抗が弱いと思ったら……トンでもないことが起きてた……映像送る』

『……つつつ!』

送られた映像を見て、弾は息を飲んだ

被検体らしい子供が手にナイフやメスを持ち、血に濡れた床に倒れている



その近くには、刺されたらしい研究者や兵士が倒れていた

『どうやら、子供達の反乱が起きたらしい……死んでから、数時間つて所だ』

『しかし、納得しました……道理で、敵の兵士が中々来ないはずです』

帝国陸戦部隊の報告に、弾は納得していた

突入して十数分経ったが、最初しか敵兵士と戦っていない

その理由が、強化人間達の反乱ならば、納得出来るのだ

『今がチャンスだ。一気に制圧するぞ』

『ですね。これを逃す手はありません』

二人はそう通信すると、全体通信で

『こちら初音島陸戦部隊の五反田弾少尉です。どうやら、この研究所で強化人間達の反乱が起きている模様。敵兵士もその対処に追われてると思われます。今のうちに、一気に制圧します！』

と告げた

その直後、突入した陸戦部隊は一気に動いた

それまでは、なるべく静かに移動していたが、最早意味無いと素早く動き始めた

それまでは控えていた壁の破碎突破も行い、閉じられていた防火壁も破碎突破

その時になり、ようやく敵兵士と遭遇した

だがその敵兵士は、強化人間らしい子供の一人を犯そうとしていたらしく、ズボンを脱ごうとしていた

それを見た弾は

『汚ならしいモノを、見せようとすんじゃねえよ!!』

と強化外骨格の足で、思い切り蹴った

蹴り飛ばされた敵兵士は、骨が折れたらしく、下肋骨辺りを抑えてのたうっている  
すると煩いからか、一人が機銃を斉射

その敵兵士を始末した

そして、別の兵士がその子供を見て

『意識を失ってますが、無事です』

と弾に報告してきた

それを聞いた弾は

『その子、背負えるか?』

とその兵士に問い掛けた

すると、その兵士は

『大丈夫です。大体、40kg位です。問題ありません』

と答えた

その兵士はワルキューレ陸戦部隊では比較的新人だが、約70kgの砂が入った袋を担いで走れるように鍛えていた

『よし、だったら担いでろ……お客さんが来たぜ!』

弾がそう言った直後、奥の通路から敵兵士の団体がやってきた

それを見た弾は、慌てずに

『グレネードと80mmHE以外の兵器使用自由! 撃ちまくれ!!』

と指示を下し、それに従って強化外骨格を纏った兵士達は機銃掃射を始めた

数では相手の方が上だが、強化外骨格を纏っていない

そんな兵士が、強化外骨格を纏った部隊に勝てるわけがない

あつという間に、突入してきた敵兵士は肉片に変わった

『曲がり角の向こうに、まだ居るな……アイリーン伍長』

『了解』

弾が名前を呼ぶと、強化外骨格を纏った女兵士が、右メインアームに大戦斧を装備

そして、突入

『遅い!!』

まず、入り口付近に居た敵兵士は、斧で斬殺

その直後、左メインアームに装備していた80mm砲のAP弾を、敵が作ったらしい

バリケードに連射

完全に制圧した

『敵残存兵確認されず、どうぞぞ!』

『よし……今入手した情報だと、この奥にこの研究所の火器保管庫があるようだな……』

女兵士が制圧している間に、弾は近くの据え置き端末をハッキング

研究所の地図を入手し、確認していた

『そこに爆薬を設置するぞ……他も、どうやら順調らしい』

弾はそこに遠隔起爆式爆薬を設置することを決めて、IFF情報をその地図に重ねた  
他の陸戦部隊も、続々と奥に入っていた

まだ、陸戦部隊の戦いは始まったばかりだった

## 陸戦部隊の戦い2

『敵の強化外骨格部隊、確認！ 数は5！』

『複合装甲持ちは、斜めに構えろ！ 機銃、撃ちまくれ！ 黙らせろ!!』

『了解！』

指揮官たる弾の指示に従い、前面で巨大な盾を保持していた強化外骨格は、持っていた盾を斜めにした

それで、敵の弾を受け流すのだ

そして、その盾の間から機銃の銃口を突きだし、機銃を掃射した

ケースレス無薬莖の20mmという大口径が、通路の壁に孔を穿ち、更には敵の強化外骨格を孔だらけにしていく

そして、最後の一機の強化外骨格が倒れたのを確認したら

『GOGOGO！ ちんけなバリケードなんぞ、ぶち壊せ!!』

と弾が指示を下した

その直後、巨大な斧や機銃を叩き込んでいった

その結果、机を積み上げて作ったバリケードを破壊突破

弾率いる部隊は、そこに到達した

弾薬集積所に

その弾薬集積所には、人間用だけでなくMS用の弾薬も置いてあった

それを見た弾は

『爆薬を仕掛けるぞ。第一から三人程、通路を見張るぞ』

と言つてのけた

それを聞いて、部下二人が弾と一緒に通路脇に立った

もちろん、その二人が持っていた爆薬は他に手渡してある

そして弾は

『こちら初音島！ 各国の状況はどうか？ こちらはただ今、敵弾薬集積所に爆薬を設置中だ』

と各国の部隊に通信を始めた

『こちら帝国！ こっちは、敵のハンガーを一ヶ所制圧！ 今爆薬設置中！』

『こちらはEU……メイン研究フロアを完全制圧した……ああ、くそ……嫌なモンを見ちまつたぜ……夢に見そうだ……』

帝国はMS用のハンガーを一ヶ所制圧したらしく、そこに爆薬を設置中

だが、EUからの報告は気落ちしていた

『何がありました？』

『狂気としか言えないぜ……映像、送る』

弾が問い掛けると、EUは記録した映像を転送した

それを見て、弾は思わず拳を握りしめた

最初に映ったのは、直前に施術をしたらしい血塗れの手術室

次に映ったのは、様々な機器のプラグが開かれた脳に刺された子供の遺体

そして最後に、戦闘訓練したのか

全身蜂の巣状態で解剖された子供の遺体

『こんなの……常軌を逸してるとしか言えないぜ……』

『気持ちに分かるぞ、EUの……だからこそ、俺達が終わらせるんだっ！』

同じ映像を見ていたらしい

帝国軍兵士が、怒りを滲ませた声で言った

『ですね……つと……グランドソナーに感アリ……つちい！ 奴等、無人兵器を投入し

てきやがったか！ すいません、通信を切ります！』

『了解した。武運を祈る』

通信を終えると、弾は

『爆薬の設置はどうなってる！』

と部下に問い掛けた

すると、爆薬設置班から

『もう少々御待ちください！　ここ、中々広いので時間が掛かります！』

と返答がきた

それを聞いた弾は

『急げよ！　奴等、無人兵器を投入してきやがった。爆薬を設置し終わった奴から迎撃に來い！』

と指示を下した

そして、近くの部隊二人に

「河崎、御手洗、迎撃用意！」

「了解！」

「派手にやりますよ！」

弾の指示を聞いた二人は、それぞれ武装を構えた

その直後、全長2mの巨大なカニのような機械が現れた

『カスタスだど!?　あのハサミには捕まるなよ！　チエーンソーで刻まれるぞ！』

『流石は、狂った連中だ！　無人兵器まで狂ってやがる！』

『80mmAP、撃ちます！』



その砲撃を皮切りに、無人兵器迎撃戦闘が始まった

## 陸戦部隊の戦い3

『ちい！ しつけえってんだよ!!』

『今ので、何機目だ!?!』

『八機目だ！ まだ来るぞ!』

弾薬集積所での戦闘は、熾烈化していた

爆弾設置を終えた隊員達が、続々と合流

ユーラシア連合が投入してきたカ斯塔スを、武装で迎撃していた

しかし、ユーラシア連合は何機持ってきたのか、かなりの数のカ斯塔スを投入してきていた

通路には、陸戦部隊が撃破したカ斯塔スの残骸が転がっている

すると、最後の一人が

『設置、終了しました!』

と報告しながら、部隊に合流した

それを聞いた弾は

『よしっ！ 強行突破するぞ!』

と言った

それを聞いた何人かが、機銃掃射をしながら戦斧を展開  
それを確認した弾は

『行くぞ！ 遅れるなよっ!?!』

『了解!』

弾も戦斧を展開し、先頭になって突撃した

その後に、初音島の部隊も続けて突撃

ユーラシア連合が投入したカスタスを、戦斧で破壊

そして、先頭の弾は曲がり角を曲がると

『動きが遅え!!』

と言いながら、カスタスに指示を出していたらしい兵士を、戦斧で両断した  
その直後、弾の頭上を後続が飛び越えて

『吹き飛ばせ!!』

『今なら、ただの的だ!』

と言いながら、カスタスの入っているコンテナを次々と80mm APで砲撃  
破壊した

『分派した部隊と合流するぞ!』

『了解！』

弾の言葉に、第一・第四分隊の隊員達は斉唱で答えた

そして、移動しながら

『こちら初音島！ 爆弾の設置完了！ こちらは脱出を開始しました！ 各国はどうか！？』

と通信を始めた

すると、ノイズ混じりに

『こちら帝国！ こっちも、これから脱出を開始する！ 行き掛けの駄賃だ！ 派手に壊してやるぜ！』

『EUも脱出する！ こんな狂った研究、もう終わりだ！！』

と聞こえた

どうやら、無事に脱出を始めるようだ

それを確認した弾は、別れた分隊に通信を繋げて

『第二、第三！ 脱出するぞ！ 爆弾は設置したな！？』

と問い掛けた

すると

『ようやくですか！ こっちは、エレベーターシャフトに仕掛けましたよ！ 脱出に向

かいます！』

『こつちは、詰め所らしき所に仕掛けました！ 今から合流を目指します！』

と聞こえた

どうやら、無事らしい

その通信を聞いて、弾は安堵した

『無事でなによりだ、バカ共！ こんな所でくたばるんじゃねえぞ!? こんな所で死んだら、バカみてえだろうが!!』

『確かに!』

『まだまだ、俺達にはやることが山積みですからな!』

弾の言葉を聞いて、楽しそうに返答がされた

もちろん、道中に出てくる敵は全て撃破している

そして、ある程度進むと

『隊長!』

『無事で何よりです!』

と別れた分隊と合流出来た

弾は、損傷はしているが、数は減っていないことを確認し

『それはこつちの台詞だ! さあ、各国の部隊と合流するぞ!』

と言つて、また移動を開始した

そして、最初の研究フロアに入ると

『初音島のか!』

『どうやら、そちらも無事みたいだな』

と帝国とEUの部隊も到着した

その二隊も、傷は負っていたが脱落者は居ないらしい

『全員無事で、何よりです』

『だな』

『さあ、脱出しよう! 地上はどうやら、優勢らしい』

三人はそう言つて、それぞれ部隊を率いて外に向かった

そして、外に出ると

『こちら陸戦部隊! 回収を願う!』

と言いながら、信号弾を上げた

終わりは、近づいていた

# ロドニア戦 終結

『ん……陸戦部隊が、出てきたか』

と言ったのは、光輝く信号弾を見た義之だった

信号弾は無事脱出を示す、青い信号弾だった

すると、義之は

『予想より、敵の数が少なかったな……』

と呟いた

実は地上はもはや、完全に連合部隊の制圧下だった

義之達の予想では、苦戦必至

新型機の出現すら予想していた

しかし、実際に出撃してきたのは、全て旧型機だった

『伊隅、どう思う?』

『なんらかの理由で、戦力を抽出していた可能性が高いです』

義之の問い掛けに、みちるがそう答えた

その予測を聞いて、義之は

『確かに、その可能性が高いか……』  
と納得した

そうしている間に、陸戦部隊の回収にMS部隊が向かった  
陸戦部隊が乗ったホバートラックを、MS部隊が回収  
母艦に帰投する手筈になっている

その警戒に、別の部隊が展開

レーダーだけでなく、赤外線探知も並行して行っていた

実は、この時のみちるの予測は当たっていた

ユーラシア連合は宇宙で、ある計画を遂行していたのだ

そしてその蛮行は、アメノミハシラが確認していたのだが、この時の義之達には知る  
由もない

この時、唯依は赤外線探知で地上をくまなく探査していた

強襲作戦で怖いのは、突入時と撤退時である

突入時は言わずもがな、敵からの迎撃

撤退時は、もう少しで帰れるという気の緩みで敵の接近に気付かず、不意討ちの一撃  
を喰らう確率が高いのだ

それを未然に防ぐために、赤外線探知でくまなく見ていたのだ



とはいえ、敵の被害は甚大

もはや、まともな戦力は残っていないだろう

それを裏打ちするように、無事に陸戦部隊の収容が完了

M S部隊にも、帰投するように通達がきた

それを受けて、M S部隊は各自母艦に帰投を開始した

問題は欧州連合だったが、そちらはアークエンジェルと二番艦たるメタトロンに収容

離脱を開始した

対空ミサイルランチャーや機銃、砲台は全て破壊してある

連合部隊は、悠々とある程度離れた

その時、広域で爆発が次々と起き始めた

爆弾の起爆が始まったようだ

その爆発を、参加した全員はモニターで見続けた

そして、一際大きな爆発が起きて、火柱が昇った

それを見届けて、艦隊は狂気の研究所

ロドニアから、無事に離脱したのであった

突入開始して、約一時間と強

退路は、自由ユーラシア軍が確保している手筈だ

その時、誰かがポツリと

「あばよ、狂った研究所……」

と呟いた

こうして、狂った研究

強化人間の研究をしていた唯一にして、一大研究所

ロドニア研究所は、消滅したのであつた

そうして、戦士達はその身を休めるのであつた

次の戦いのために

## 一歩

義之達がユーラシア連合の凶行を知ったのは、ロドニアから離れた翌日だった

「核だ?!」

「はい、アメノミハシラで確認されました。間違いありません」

義之の言葉にそう返したのは、通信手のななかだ

その通信は、複数の人工衛星を中継して、アメノミハシラから送られてきたようだ

「しかも、一発ではなく、複数発使われた模様です」

ななかが続けて説明すると、義之は額に手を当てた

そして、少しすると

「どこで使用されたか、分かるか？」

と問い掛けた

するとななかは

「まだ解析中ですが、予測ではダルクス軍の宇宙要塞……ボアズかと」

と答えたのだった

そして、ロドニアでの作戦から数日後、一行は初音島に帰還

修理を開始した

艦艇や機体の修理には、最低でも数日を要する

その間作戦参加要員は、準備や休みをすることになった

その中で唯依は、ある病院

水越総合病院の廊下を歩いていた

目的地は、直哉が居る病室である

その直哉だが、つい先日を意識が回復

今現在、リハビリ中だという

本当ならばまだ療養すべきだが、看護師立ち会いの下でリハビリに励んでいるようだ

「落ち着きが無いというべきか……」

両手に見舞品を持ちながら、唯依は思わずそう呟いた

その見舞品だが、ストラトス隊のメンバーから頼まれた物が大半だが、自分のもある

そして、受付から聞いた部屋に到着

唯依は、ノックした

すると、中から

『どつどつ』

と入室を促す声が聞こえた

それを聞いた唯依は

「失礼する」

とドアを開けた

そして見えたのは、上半身裸の直哉だった

タオルを持つていることから、どうやら汗を拭いているらしい

唯依は、なんとか平静を保ちながら

「直哉……着替えてる時は入れるな」

と忠告した

すると直哉は、少し間を置いてから

「ああ……それもそうだな」

と同意した

そして、病衣を着込んで

「見舞いか？」

と唯依に問い掛けた

すると唯依は

「ああ……これが、ストラトス隊の隊員達からだ」

と言って、3つの紙袋を台の上に置いた

それを見た直哉は

「分かった、後で確認する」

と答えた

そして唯依は、最後の紙袋を置きながら

「それで、こちらが私からだ」

と言った

それを聞いた直哉は

「ありがとう」

と言葉少なげに、感謝の言葉を告げた

そして直哉は、ベッドに腰掛けた

すると唯依は、近くの椅子に座った

そして、直哉に

「作戦の結果は、聞かないのか？」

と問い掛けた

その問い掛けに、直哉は

「唯依達が帰ってきた……なれば、答えは自ずと分かる」

と言った

そして、小さく

「これで……俺の同類は産まれなくなったな……」

と呟いた

その言葉を敢えて聞き流し、唯依は

「直哉……もうリハビリしていると聞いたが」

と直哉に問い掛けた

すると、直哉は

「ああ……強化人間とはいえ、動かないでいると鈍るからな……だから、リハビリしている」

と答えた

それを聞いた唯依は、苦笑しながら

「真面目なお前らしいが……無理はするなよ？」

と言った

それを聞いた直哉は

「近々、更に大規模作戦が起きそうだから……それには、参加しないと……テストメ  
ントも、改修された」

と言って、端末を手に取った

そしてその端末を、唯依に差し出した

それを見た唯依は

「いいのか？ 機密だろうか？」

と直哉に問い掛けた

すると直哉は

「どうせ、遅かれ早かれ見ることになる……」

と言った

それを聞いた唯依は、端末を受け取った

そして

「これは……最新技術の塊だな……装甲はVPS装甲？」

「PS装甲の上位らしい……エネルギーの消費や装備による電圧の変化……それにより、PSに回すエネルギー量が変わり、装甲に回す最適化されたエネルギーでPS化する……それが、VPS装甲らしい」

唯依の疑問に、直哉はそう答えた

すると唯依は

「素晴らしい……流石は初音島だ……これなら、長時間戦闘も可能だ……それに、対G緩和機構としてリニアシート……掛かるGを三割も減らすのか」



と言った

端末に表記されている対比データから、割り出したようである

「さくら様と東博士には、頭が上がらないな……丁度二週間で改修を終わらせてるからな……」

そう、さくらと東の二人は、テストメントの改修をジャスト二週間で終わらせたのだ  
最新の技術を全て投入し、性能は二割増し

機体は直ったのだから、後は直哉次第

だから直哉は、ジツとしてられなかったのだ

早く復帰したいと

だから直哉は、医師に頼みナノマシンを投入

治療と並行しながら、リハビリを開始したのである

「私も先程聞いたばかりだが……ユーラシア連合が、ダルクス軍のボアズに、核を使った  
そうだ」

「核だ?!?」

唯依の言葉を聞いて、直哉は驚愕した

まさか、核を使うとは思ってなかったのだ

「恐らく、次はコロニーだ……」

「尚更、ゆっくりは出来ないな……」

直哉はそう言うのと、外を見た

そして直哉は

「医師に相談だな……退院、早めないとな」と呟いた

そして、全員は動き始めたのだった

## ボアズ

時は遡り、義之達がロドニアの強化人間研究所を陥落させる少し前

ダルクス軍宇宙要塞　ボアズ指令室

「Y318ポイントの敵、引き返します！」

「深追いはするな。損害を報告させて、再編成を急がせろ」

「Nフィールドから、救援要請！」

「第338防衛中隊、出撃。向かわせろ」

指令室内では、矢継ぎ早に指示が下されていた

その理由が、今から数十分前からユーラシア連合軍が攻めてきたからである

その迎撃により、指令室は騒がしくなっていた

だが、状況は僅かだがダルクス軍の方が優勢気味と言えた

そもそも、ユーラシア連合軍の進軍速度が、それほど高くないのも挙げられる

それを映像で見ていたボアズ司令官

バームは、後ろに居た副官

ダルクムに

「ダルム、どう思う？」

と問い掛けた

すると、ダルムは

「恐らくは、威力偵察かと思われます」

と答えた

それを聞いたバームは、うむと頷き

「その可能性が高いな……幾らなんでも、進軍の勢いが弱い」

と呟いた

二人が見ている戦況マップには、未だに第一防衛線すら突破していないことが表示されている

そう思っても、不思議ではないだろう

だが、その時

「敵の一部戦力が、第一防衛線を突破！」

と報告がされた

それを聞いたバームは、冷静に

「落ち着け！ 詳細を報告しろ！」

と言った

すると、一人の女性通信士が

「第一防衛線右翼を、敵MS部隊が突破。CG補正付きですが、正面に映像出します！」  
と言った

その数秒後、メインスクリーンにそのMS部隊が映しだされた

その先頭に居るのは、四機のガンダムタイプ

それを見たバームは

「ユーラシア連合のガンダムタイプか！ 第138特化大隊を回せ！ 足止めさせろ！」

と指示を下した

そして続けて

「余力のある部隊は!？」

と通信士に問い掛けた

すると、先ほどとは別の通信士が

「第446機動中隊です！」

と答えた

それを聞いたバームは

「第446中隊を援護に向かわせろ！ 奴等のデータ収集、急げ！」

と指示を下した

その指示に従い、数人の通信士達が忙しなく計器の操作を始めた

その時だった

副官のダルムは

「待ってください……ガンダムタイプの後方のMS部隊は……ウインダム？」

と目を細めた

それを聞いたバームは、一人の通信士に

「ガンダムタイプ後方のMS部隊を拡大しろ」

と指示した

それに従い、そのMS部隊が拡大表示された

それは、二基のコンテナを背負ったかのような印象のウインダム隊だった

「なんだ、あの部隊は……」

「武装は……ビームライフル位のようにです」

バームとダルムは、メインスクリーンに表示されているウインダムを見て首を傾げた

その武装を見て、最初は補給物資を運んでいるのかと思った

だが、それが覆されたのは数秒後だった

背負っているコンテナ

その側面に、核を示すマークがあったからだ

「まさか!？」

「核運用部隊か!? 予備部隊全てを投入しろ! あの部隊を最優先撃破!!」

敵の目論みに気付き、バームは怒鳴るように指示を下した

それを受けて、出撃ハッチから次々とMS部隊が出撃

更に、要塞砲の過半数がその方向に砲撃を開始した

しかし、それを嘲笑うかのようにガンダムタイプが次々とMS部隊を撃破

第二防衛線まで食い込んできた

それを見たバームは

「本国に至急電! 当要塞の陥落は最早確実……なれど、我等は奮闘す!」

と言った

それを聞いて、指令室の要員は全員敬礼した

どうやら、覚悟を決めたらしい

この十数分後、ボアズは核攻撃を受けて陥落した

しかし、ボアズの奮闘は決して無駄ではなかった

ボアズは陥落する寸前に、収集したガンダムのデータを全て本国に送信

最早、大量破壊兵器の応酬は止まらない段階になった

## 備え

研究所襲撃から、約一週間後

「……という訳で、本日で復帰だ」

「ご迷惑をおかけしました。神崎直哉少尉、復帰します」

直哉が、正式に源隊復帰を果たした

そんな直哉に、各々言葉を投げ掛けていると

「まだ話しは終わりにじゃないぞー」

と義之が言ったので、黙った

全員が黙ったのを確認すると、義之は

「我々は二日後、宇宙<sup>ソラ</sup>に上がる……目的地は、L4だ」

と語り始めた

そして義之は続けて

「既に聞いている通り、我々がロドニアの研究所を破壊した時、ユーラシア連合がダルクス軍の宇宙要塞ポアズを攻撃……多数の核により、ポアズを攻略した」

と言った



それを聞いて、何人かが表情を曇らせた

義之はそれに気付いているが、敢えて流し

「我々の目的は、ユーラシア連合の次の目的だろう……ダルクス国の攻撃の阻止だ」  
『はっ!!』

義之の言葉を聞いて、全員は姿勢を正しながら斉唱した

自分達の行動次第で、ダルクス人達数百万の命が終わるか救われる

ならば、やるしかない

彼等はそう思った

全員の斉唱に満足したのか、義之は満足そうに頷いた

そして、全員を見回して

「さてその前に、全員に丸一日の休暇を与えることになった」

と言った

「次の戦場は、かなり離れたL4だ……一度上がれば、簡単には戻ってこれない……更に、三つ巴の戦闘が予想される……だから、明日は丸一日休暇だ。家族と過ごすもよし。恋人と過ごすもよし……思い残すことの無いようにしろ」

義之はそう言つて、全員に休暇許可書を渡した

それを受け取った何人かは、不安そうな表情で空を見上げた

正確には、遙か彼方のL4を思っていた

未だに交戦したことのないダルクス軍

出来れば、ダルクス軍とは交戦したくはない

ダルクス軍

正確には、ダルクス人は半世紀に亘って、ユーラシア連合から弾圧され続けた

その彼等は、ユーラシア連合に反旗を翻した

だがユーラシア連合は、そのダルクス軍の独立を許さなかった

態々、莫大な費用を掛けて核を月面のユーラシア連合軍基地

グリマルディ基地に運んだ

ボアズの攻略に多大な数を使っただろうから、補給には時間が掛かるのは目に見えて  
いる

だから、時間との勝負になる

もう一週間経っている

更に、L4に到達する時間を考えれば、かなりギリギリになるだろう

恐らく、到着した時は戦闘の真っ最中になる確率が高い

「この戦争……終わらせてやる……」

と言ったのは、誰だったのかは分からない

約一年間続いた、ユーラシア連合との戦争

たった一年だが、余りにも多くの人間が死んだ

計算では、約二億近い人達が死んだ

その大部分が、ユーラシア連合軍ファントム・ペインによって出たことになっている  
たった一年の戦争にしては、余りにも多くが亡くなった

「終わらせるんだ……亡くなった人達のために……」

誰かのその言葉を最後に、彼等は解散

隊舎から出た

そして後悔しないために、歩き出す

## N & Yの一日 その1

翌日、直哉は唯依と共に居た

休暇を、唯依と一緒に過ごすようだ

なお唯依だが、黒いロングスカートにベージュ色の半袖シャツを着ている

そんな二人だが、ショッピングモールを歩いている

とはいえ、買い物は目的ではない

所謂、デートである

その時、唯依はある店の前で止まった

そこは、写真店だった

「どうした、唯依？」

直哉は問い掛けた後、すぐに気付いた

女性が椅子に座り、その右後ろに男性が寄り添うように立っている一枚の写真

それを、唯依は見ていた

それに気付き、直哉は

「撮るか」

と言つて、唯依の手を取つた

「な、直哉!？」

唯依が驚いている隙に、写真店に入店した  
すると、受付にいた女性店員が

「いらつしやいませ」

と頭を下げた

すると直哉は

「二人で写真を撮りたいんですが」

と言つた

それを聞いた女性店員は

「承りました。どういった形式にしますか?」

と言つて、端末を手渡した

その端末には、様々な形式の写真撮影が載っている  
その中から直哉は、先程見た形式を選ぼうとした

だがそれより先に、唯依が

「これ……いいだろうか」

とある形式を選んだ

それを聞いた女性店員は

「これで構いませんか？」

と問い掛けてきた

すると直哉は

「構わない」

と言った

それを聞いた女性店員は

「承りました。少々お待ちください」

と言つて、下がつていった

それを見送つた直哉は、唯依の方を見た

よく見ると、唯依は顔が真っ赤になつている

そんな唯依の頭を、直哉は優しく撫でた

それから数分後、先程の女性店員と別の女性店員が来て

「男性の方は、こちらに」

「女性はこちらに来てください」

と、二人を別の部屋に案内した

そうして、十数分後

「む……やはり、着なれないな……」

直哉は、純白のスーツを着ていた

だが着なれないために、違和感を感じているようだ  
すると案内した女性店員は

「よくお似合いですよ」

と笑顔で言った

それから数分後、直哉が入ってきたドアが開き、純白のウエディングドレスを着た唯依が現れた

「彼氏さん、どうですか？」

と言ったのは、唯依を案内した女性店員だった

少しすると、直哉は

「よく、似合っているぞ……唯依」

と誉めた

誉められた唯依は、恥ずかしそうに頬を染めながらも、微笑んだ

その後二人は、別の店員がセットした撮影部屋に入り、撮影を始めた

すると、男性撮影者が

「それでは、男性の方。女性を抱き上げてください」

とオーダーしてきた

それを聞いた直哉は

「行くぞ、唯依」

と一言断つてから、唯依をお姫様抱っこした

すると、男性撮影者が

「女性の方は、男性の首に腕を回してください」

と言ってきた

それを聞いた唯依は、小声で

「すまん、直哉……」

と謝罪してから、直哉の首に優しく腕を回した

その顔は、恥ずかしさから真っ赤になっている

それを見た男性撮影者は、数枚撮影

そうして、写真撮影は終了した

二人はスーツとドレスを脱ぐと、個室に通された

「どうぞ。こちらが、撮影された写真のデータです」

と女性店員が、二人の前に端末を置いた

「現像しますか？ それとも、端末にデータを送りますか？」



と女性店員が問い掛けると、唯依は

「この写真は現像を……二枚お願いします」

と女性店員に頼んだ

それを聞いた女性店員は

「承りました」

と言つて、片方の端末を操作した

恐らくは、現像するようにしたのでろう

そして残りの写真データは、二人の携帯端末に移すことにした

そうして、残りの写真データを移し終えた時、二枚の写真を持った店員が入ってきた

そして、二人の前にその写真を一枚ずつ置いて

「お待たせしました」

と軽く頭を下げた

その写真は、椅子に座った唯依の右後ろに直哉が居る写真だ

それを一枚ずつ、二人は懐に仕舞った

その後二人は、お金を払って退店

また、街に繰り出したのだった

## NとYの一日 その2

写真店から出た二人は、更に歩いた

その二人の行き先は、特に決まっていな

すと、唯依が

「次は、L4か……」

と空を見上げた

それを聞いた直哉は

「そうだな……今まで、行ったことない宙域だな……」

と同意した

二人共に、行ったことがあるのは中立都市国家

ガリアがある月まで

L4は、更に奥に進むことになる

L4宙域は、資源小惑星や資源採掘に向けた隕石群があるために、重工業が盛んな宙

域である

ユーラシア連合はそこにダルクス人を強制移民させて、劣悪な環境で働かせていた

その理由は、ダルクス人が有していた金属加工技術だ  
ダルクス人は昔から特殊な金属加工技術を有しており、特殊砲弾や艦の装甲等に使わ  
れてきた

なお、その権益の殆どは基地関係者や上級士官達に独占されていた

そして、働いていた者達に払われるのは微々たる金銭だけ

しかし彼等ダルクス人は、機会を待ち続けた

M S 製造技術

軍事技術を、少しずつ盗んでいった

そうして組織されたのが、カラミティ・レーヴェンだった

ユーラシア連合への災厄となるべく、その名が付けられた

だが、今やその本拠地たるコロニー・ダルクスの手前までユーラシア連合の切っ先は

迫っていた

「この戦争……早く終わらせないと……」

「ああ……そうだな……」

二人はそう言って、また歩き出した

そして、到着したのは初音島本島の名物公園

さくら公園だった

さくら公園はその名前の通り、桜が多く生えている

目玉と言っても言いだろう

正しく、初音島を象徴する公園だ

そこに到着すると、何やら騒がしい

すると直哉が

「ああ……桜祭りか」

と言った

それを聞いた唯依は

「桜祭り？」

と直哉に顔を向けた

すると直哉は

「初音島が独立した日を記念して行われるようになった祭りだ……そうか、今日だったか……」

と言つて、ある方向に向かった

その先

噴水のある広場にて、出店が多く並んでいた

しかも、太鼓櫓も組まれている

「懐かしいな……何年振りだ……？」

直哉はそう言つて、近くのベンチに腰かけた

その隣に、唯依も座つた

その前を、数人の子供達が元気に走っていく

それを見た直哉は

「……昔、一夏達と来たな……」

と呟いた

どうやら、自分達と重ねたようだ

「直哉……」

「いかなな……懐かしんでる場合じゃないのにな……」

唯依の言葉を聞いて、直哉はそう言いながら首を振つた

そして、本格的に祭りが始まったようで、太鼓が叩かれ始めた

それを見た唯依が、立ち上がり

「直哉」

と直哉の方に、手を差し出した

それを見た直哉は、唯依を見上げた

すると唯依は

「一緒に、店を回ろう」

と言った

それを聞いて、直哉は

「そうだな」

と同意し、唯依の手を掴んで立ち上がった

そうして二人して、様々な出店を回った

その後、少し離れた静かな場所に来た

すると唯依が

「なあ、直哉……この戦争が終わったら……私と一緒に、日本に来てくれないか？」

と問い掛けたのだった

## NとYの一日 その3

「帝国に……俺が？」

唯依の言葉を聞いた直哉は、不思議そうに首を傾げた  
すると、唯依は

「今の私は、篁家の当主だ……家臣の者達からは、早く世継ぎをと言われて……」  
と語りだした

確かに、それが彼女の立場になるだろう

今の篁家は、彼女しか居ない

父親は早くに亡くし、母親はユーラシア連合の侵攻時に死去している

しかも彼女は、軍人

軍人は、何時死ぬか分からない

ならば、早く世継ぎたる子供を残すのが道理となる

「しかし、私とて女だ……誰でもいい訳ではない……」

唯依はそこまで言うと、直哉を見て

「だから直哉……私と帝国に来てくれ……」

と言った

すると、直哉は

「……しかし、俺は初音島の軍人で、強化人間だぞ？」

と問い掛けた

確かに、一般の軍人ならば問題は無いかもしれない

しかし彼女は、栄えある近衛の軍人だ

しかも、今や名が売れている筆家の当主

普通は、許されないだろう

「そこは、斑鳩様に話を通してある……優秀な軍人の血が入るならば、寧ろ歓迎する……  
だそうだ」

現帝国の政威大將軍

斑鳩古城が許可したならば、誰も文句は言えないだろう

「特に今は、帝国四軍は建て直しが急務だ……」

帝国陸、海、航空宇宙、近衛軍

この四軍は、以前のユーラシア連合の侵攻から続く戦闘でその戦力は大幅に低下  
約一年経った今も、その戦力は以前より少ない

特に数が少ないのは、近衛軍だ



元々近衛軍の数は、他の三軍に比べて少ない

だから、近衛軍の建て直しが最優先事項の一つに挙げられている  
しかし、そう簡単にはいかない

近衛軍は、要求される技能が他の三軍より高い

よしんばその要求技能をクリアしても、一般軍からの選抜だけでは成り立たない  
だから、長い歴史を持つ家が上に立つ必要がある

その一つが簗家となる

その簗家を、絶やす訳にはいかないのだ

「だから……」

そこまで言うとは唯依は、俯いた

自分が無茶を言っているという自覚が、確かにあつたからだ

そんな唯依を見て、直哉は

「……流石に、直ぐに返事は出来ないな……」

と呟いた

そして、唯依の頭に手を置いて

「だがまあ、何にせよ……この戦争を互いに生き残ったらだな……」

と言って、撫でた

「俺たちは、軍人なんだ……生き残ることも、大事だ……先のことでも大事だがな……だから、唯依……生きよう……生きて、地球に帰ってくるんだ……」

「ああ……そうだな……」

直哉の言葉を聞いて、唯依は頷いた

そうして二人は、ゆっくりとさくら祭りを見て回った

自分達が守っている光景を、再確認するために……

## 出発

「我々はこれより、一度アメノミハシラに上がった後、L4まで向かう！」

と言ったのは、ワルキューレ隊の前に立っている義之である

「向かうL4宙域は、我々にとっては未知の領域だ……恐らく、かつてない激戦が待っているだろう……だが、諸君ならそれを生き残り、帰ってこられると信じている」

義之の演説を、ワルキューレ隊のメンバーは静かに聞いている

そして義之は、最後に全員の顔を見回して

「またここで……生きて会おう!!」

と敬礼した

『了解!!』

義之の言葉を聞いて、全員は斉唱と共に敬礼

その直後、全員は走り出した

これから、離陸前の最終確認を行うのだ

荷物に忘れはないか

機体や備品、部品はキチンと固定されているか

そして何より、遺書は残したか

生きて帰るつもりだが、何時死ぬか分からない

だから、残しておくのだ

何より、無事に帰ってきたら処分すれば良い話である

そうして、最終確認を終えて全員乗艦

白亜の巨艦と青き巨艦が艦首を空に向けて、特装破城砲を発射

形成された真空のチューブの中を、装着したブースターを全力で噴かして天に向けて

走っていく

それを、地上から見送る人々

その誰もが、この下らない戦争の巻く引きを願っていた

一年以上に渡って続く、世界規模の戦争

有史以来、都合何度目かの戦争

その終結を、見送った人々は願ったのだった

そして、打ち上げから約数時間後、二隻はアメモミハシラに接続

その後、続々と各国選抜の精鋭部隊が集結

部隊再編の後に、即座にL4に向けて出発した

その頃、月面のユーラシア連合基地から夥しい数の艦隊が出発していた

その行き先は、義之達と同じくL4

その艦隊の中には、ガーティール級が複数存在していた

その数は、四隻

どうやら、全て投入してきたらしい

そして艦隊旗艦は、黒き巨艦

ユーラシア連合が建造したアークエンジェル級

ドミニオンだった

そのドミニオンの艦橋には、ユーラシア連合軍側の総指揮官として、マクシミリアンが座っていた

そのすぐ傍には、副官としてセルベリアが居る

すると、艦長席に座っていたグレゴールが

「殿下、準備完了。何時でも行けます」

と準備が終わったことを告げた

それを聞いたマクシミリアンは、立ち上がると

「栄えある連合軍兵士達よ……時は来た……一年に渡った穢れたダルクス人共との戦争も、間も無く終わる……不当に占拠されたL4は、奴等の血で洗浄しよう……悪辣な悪鬼共を、皆殺しにするのだ……全軍、進撃！」

と演説した

それを聞いたグレゴールが

「全軍進撃開始！ 艦隊、第三戦速！ 目標宙域、L4！」

と指示を下し、先にドミニオンが動き出した

そしてユーラシア連合軍も、L4宙域に向かい始めた

最終決戦は、間近に迫っていた

# ヤキン・ドゥー工攻防戦

地球を離れて、数日後

L4宙域

そこには、二つの軍隊が展開していた

片方は、独立のために立ち上がった虐げられてきた民族の軍隊  
ダルクス軍

もう片方は、圧倒的武力を有する大国

最早、悪逆の国と名高き軍

ユーラシア連合軍

その両軍が、今展開出来るほぼ全軍を展開

正面から睨み合っていた

そして、両軍の総指揮官は同時に

『戦闘、開始！』

と号令を下した

示し合わせた訳ではない

偶然であり、必然だった

だが双方共に、降伏と和平交渉という二つの選択肢は無い

ダルクス軍側は、自由を手にするために

ユーラシア連合軍側は、貴重な駒収録を手にするために

そして、両軍は激突した

『俺に続け！ あのを畜族共を攻撃する！』

『了解!!』

ダルクス軍の先頭に立っているのは、黒い装甲に特徴的なダルクスの模様と赤いラインが入った新型機

ドム・トルーパー

そのパイロットは、ダルクス軍総指揮官たるダハウを支える三人の一人

ジグ少佐だった

ジグ少佐はまだ若いながらも、パイロットとしての腕

そして、前線指揮が卓越していた

そのため、最新鋭機たるドム・トルーパーが与えられた

そのドム・トルーパーは、多少癖が強いが攻防優れた機体だ

まず、近距離用にビームサーベルが一本



更に、バズーカとビームライフルの機能が合わさった複合砲  
防御用にビームシールド

そして何より、攻防一体の特殊装備

スクリーミング・ニンバス

このスクリーミング・ニンバスは、攻防一体の特殊装備だ

特殊なエネルギーフィールドを前面に展開することにより、相手からの攻撃は防衛

しかし、相手に触れると相手を攻撃、撃破出来るのだ

しかしそのフィールドを形成するのに、エネルギーを多量に使うために乱発は出来ないのが難点だろう

しかし、その性能は破格である

今も、すれ違い様に一機をビームサーベルで両断

更に、素早く構えた複合砲で一機撃破した

そのジグ率いる一個中隊は、グフ・イグナイトッドとザク・ウォーリアーの混成部隊だ

そしてジグを含めた三人の部隊は、他の部隊とは異なり機体が黒系に塗装されている

その全員が、ダルクス軍の中でも精鋭部隊だ

それは、動きによって証明されている

一機のグフ・イグナイテッドは、ビームマシンガンを撃ちながら接近し、すれ違い様にビームソードで両断

そのグフ・イグナイテッドを狙ったウインダムを、一機のザク・ウオーリアーが巨砲オルトロスで砲撃、撃破した

その連携は、かなりの物だった

事実、その一個中隊だけで三隻の艦が沈んだ

それを確認したジグは、更に進もうとした

その時

『ジグ、作戦は覚えているな？』

と問い掛けられた

気付けば、ジグ率いる中隊の後方に、別のドム・トルーパー率いる一個中隊が居た

そのドム・トルーパーのIFFを見て、ジグは

『グスルグさん……』

とそのドム・トルーパーのパイロットの男の名前を呼んだ

グスルグ

彼もまた、ダハウを支える三人の内一人だ

そんな彼だが、元々はJEU軍422部隊の古参パイロットの一人だった

422部隊では、古参兵の一人として7

クルト・アーヴィングが来るまで、部隊を取りまとめていた

クルトが来てからは部隊の指揮権を移譲し、クルトにアドバイスしたりする立場に落ち着いた

しかしユーラシア連合が、EU領に侵攻を開始

撤退してくる友軍の支援を度々していた

そんな中、EUの技研から無反動砲用の弾が送られてきた

グスルグはその弾が、どうしても怪しかった

だからグスルグは、整備兵が居ないタイミングで弾頭を開けてみた

そして見たのは、化学兵器

ガス弾だった

もちろん、それは国際法で使用が禁止されている代物だ

それを、まだ民間人の避難が終えてない区画の近くで使えという指示

その民間人は、避難が後回しにされていたダルクス人達だった

つまり、ダルクス人ならば見殺しにしている上級将官が居るといふことに他ならない

それを知ったグスルグは、その弾を二度と使えないように破壊し、422部隊の下か

ら姿を眩ました

そして、ダルクス軍に合流

功績を挙げ続け、ダハウを支える立場になっていた

『分かっていきます……しかし、あんな物を使わないといけないのは……』

『ユーラシア連合の連中は、遠慮なく核を使う……核を、コロニーに撃ち込まれる訳には  
いかん……ならば、使う方がいい……俺は、ダハウを信じる』

グスルグはそう言って、一隻のアガムムノン級の艦橋にバズーカを撃ち込んだ

そこに

『なるべく、突出しないで頂戴ねえ』

と女の声が聞こえた

『リディアか』

『リディアさん』

グスルグとジグは、女性

リディア機を見た

本名、リディア・アグーテ

彼女はダルクス人ではないが、ユーラシア連合内では奴隷同然の扱いを受ける民族出  
の女性だった

一応は軍属になっていたが、心からユーラシア連合を憎んでいた

だからダハウ達を支援し、武装蜂起した際には指令部の指揮所に仕掛けた爆弾で指揮官を爆殺

カラミティ・レーヴエンの所属となる

階級は中佐で、ダハウの補佐やMS部隊の指揮を執っている

『アレがお披露目になるまで、後少し……突出して、巻き込まれないようにねえ』  
『分かっている』

『はい！』

リディアの言葉に頷き、二人は部隊と共に動き出した

それを見送ると、リディアは

『さてと、私も仕事をしましょうか』

と言って、付近の部隊の指揮を始めたのだった

## 災厄の閃光

「ふん、ダルクス人め……この戦力差に、諦めればいいものを……」

と吐き捨てるように言ったのは、ドミニオン艦橋で戦況を見ていたマクシミリアンだった

すると、グレゴールが

「戦力差を理解しきれていないのでしよう。下浅な輩ですからな」

と言った

その時

「オレンジベータ・インディゴ85チャリーに、所属不明部隊確認！」

とオペレーターから報告が上がった

それを聞いたグレゴールは

「どここの所属か分からののか！」

と問い掛けた

それを聞いたオペレーターは、コンソールを叩きながら

「お待ちください……今……初音島、JEU、自由ユーラシア軍です！」  
と報告した

それを聞いたマクシミリアンは

「ふ……やはり来たか……予定通り、セルベリア達を向かわせろ」

と指示を下した

それを聞いたオペレーターは、先に出撃していたセルベリア隊にマクシミリアンの指示を伝えた

そしてマクシミリアンは、グレゴールに

「グロリーイ隊はどうなっている」

と問い掛けた

するとグレゴールは、手元のモニターを見て

「現在、約八割出撃。残りも発艦中です」

と伝えた

それを聞いたマクシミリアンは

「急がせる。あの岩を破壊すれば、奴等には何も出来ない」

と言った

それを聞いたグレゴールが指示を出すのを見ながら、マクシミリアンは自身の勝利を

疑っていなかった

(研究所を失ったのは痛い、再建すれば済む話……我らユーラシア連合の勝利は磐石だ)

と思っていた

その時、艦橋内に警告音が鳴り響いた

「何事か!?!」

グレゴールが素早く問い掛けると、オペレーターが

「アガル、バツカス、ザルコーの三隻が、初音島のガンダム三機の奇襲を受けています  
!」

「なんだと!?!」

オペレーターの報告にマクシミリアンは思わず、腰を上げた

その三隻は、グロリーイ隊

核投射部隊の母艦艦隊だった

少し時は遡り、その三隻が停泊している宙域

そこ目掛けて、三機のガンダム

フリーダム、ジャスティス、テストメントの三隻が高速で突撃していた

しかし、最高速度ではテストメントが頭一つ抜けている



そのテストメントと同速を出すために、フリーダムとジャステイスにはある兵器が装備されていた

それは、三隻と共に秘匿されて開発されていた増加兵器名を、ミーティア

隕石の名を与えられた増加兵器を装着することにより、二機の最高速度はテストメントに互するところまで迫っていた

しかも上がったのは、速度だけではない

全体的攻撃力も、大幅に上がっている

十数門にも及ぶ対艦ミサイル発射管

そして、対艦ビームソードを兼ねた大口径ビーム砲

それらにより、一機で艦隊や大軍と互角に渡り合えるのだ

フリーダムとジャステイスはそれを装着し、核投射部隊の母艦艦隊を強襲した

『少尉の読み通りだったな!』

「奴等ならば、一番安全な所に大事な艦隊を配置する……つまり、核配備艦と旗艦!」

『しかも、主力部隊を囷にして三隻のみで奇襲……見事な策だ』

「ありがとうございます!」

義之、みちる、直哉の眼下では三機のアガメムノン改級から続々とマルチストライ

カー装備機が出撃していく

その位置を予測し、三機による強襲を発案したのは直哉だった

三機の性能と、直前に発表されたミーティア

それを鑑みて、可能だと判断したのである

「大佐、トリガータイミング同調しました!」

「了解した! 伊隅!」

「こちらも大丈夫です!」

三人がそう言った直後、護衛部隊や艦隊から迎撃が始まった

しかし、既に遅い

『発射!!』

義之の言葉の直後、三機から次々と砲撃が放たれた

テストメントは今回の攻撃のために、両肩に使い捨て式のミサイルポッドを増設してある

三機から放たれたミサイルとビームは、三隻に次々と直撃

三隻は、耐えきれなくなり巨大な炎の華を咲かせた

『後何機居たのか分からんが、これで後続と補給線は絶った!』

「後は、各個撃破すれば!!」

義之に続いて、直哉はそう言ってライフルのEパックを交換した  
その直後だった

『大佐！ イエローベータの方角を!!』

とみちるが言ってきた

その方角を見て、義之は言葉を失った

何故ならば、ヤキン・ドゥーエの間に、巨大な建造物があったからだ

『なんだ、あれは!?! なぜ気づかなかった!?!』

流石に予想外だった義之は、そう言いながらも予定を変更

離脱軌道に入った

その巨大建造物の直径は、十数kmにも達するだろう

今まで気づかなかったのが、不思議でならない

『もしや……ミラージュ・コロイド?』

『ユーラシア連合が知っていたんだ。元支配コロニーだったL4にデータがあっても、

おかしくはないか……!』

みちると義之がそう言っている間にも、その巨大建造物は動いていた

三角垂状の物体が台座状の物体の前で、停止

そして、PS装甲を起動させた

『まずいか!? 全軍、退避!!』

それを見た義之は、味方周波数でそう叫んだ  
それを受けて、主力部隊も緊急離脱を開始

その数秒後、破壊の閃光が放たれたのだった……

# 決断

## 巨大建造物

ジエネシスから放たれた破壊の奔流は、ユーラシア連合軍艦隊に直撃

直撃を受けたユーラシア連合第八機動艦隊は、消滅した

『な……なにが……』

『全軍、一時後退!! 指定ポイントに後退する!!』

予想外過ぎる光景にみちるは固まり、義之は即座に後退を指示

MS隊や艦隊は、その指定ポイントに向けて反転し離脱を開始した

ダルクス軍の最優先目標はユーラシア連合軍のようで、離脱する連合軍には攻撃して

こなかつた

そのために、宙域からの離脱に成功

指定ポイントにて、態勢の立て直しが始まった

「あれは恐らくですが、核が爆発した際に出るガンマ線を使ったレーザー兵器です」

と説明を始めたのは、麻耶である

「アークエンジェルの観測器機が、ガンマ線を観測しました……あの兵器は、内部で核爆発を起こさせて、その際に発生するガンマ線を何回もコヒーレントさせて、レーザーとして放つ兵器だと思われます」

麻耶のその説明を聞いて、会議をしていた一同は黙つといたすると、義之は

「もしそれが……地球に放たれたら、どうなる？」

と問い掛けた

すると麻耶は

「……撃たれた場所によりますが……ほぼ確実に、10億人以上の人々が死に、動植物も壊滅的打撃を負います……」

と辛そうに説明した

それを聞いて、ざわめきが走った

その被害予想は、未だかつてない被害だった

しかし、ヨタ話だとも否定出来なかった

その威力は既に見ていた

膨大な数のユーラシア連合軍の、第八機動艦隊が容易く消滅していた

今回は第八機動艦隊が狙われて、その後方には地球は無かった

だがもし、ユーラシア連合の艦隊が狙われて、その後方に地球があつたらどうなるか  
ほぼ間違いなく、麻耶が言った通りの被害が出るだろう

そしてそうなったら、憎しみの連鎖が止まらなくなり、戦火が拡大する  
そうなったら、取り返しが着かない

「……ユーラシア連合は、月基地から増援を受けるだろう……こちらにも、戦力を増やす  
かないか……」

義之がそう言うのと、映像で会議に参加していた大和艦長

小澤提督が

『しかし、こちらに予備戦力など……』

と濁した

すると義之は

「……出したくなかったが、御剣警備部隊を呼ぶしかない……」

と告げた

実を言えば、アメノミハシラに寄った際に、何人かが

『自分達も、共に行きます』

と言ってきたのだ

しかし、義之が

『君達の仕事は、平和になった後に来る……それまでは、生きるんだ』

と言つて、アミノミハシラに残してきた

彼等はMS戦力を有しているが、軍隊ではない

彼等は警備会社であり、戦うことが仕事ではない

彼等の仕事は、民間人を守ることだと

だから、残してきた

しかしもはや、手段を選べる段階ではない

ユーラシア連合が戦力を増やすことを予見し、ダルクス軍も増やす筈である

そうなつたら、数で劣る連合が不利になる

少しでも不利を減らすためには、こちらも数を増やすしかない

苦渋の決断だった

そして、義之の決断に否の声は上がらなかつた

だから義之は、オペレーター席に座っているななかに

「アミノミハシラに繋ぎ、彼等を向かわせるように言つてくれ……」

と言つた

この選択でどうなるかは、今の義之には分からない

しかし、少しでも早くこの戦争を終わらせるには、これしかなかつただろう



事態は、最終局面になる  
次の戦いが、最終決戦だ  
誰もが、そう疑わなかった

## 最終準備

「月基地からの増援は!?!」

「後四時間程で、第一次がこちらに合流します」

マクシミリアンの問い掛けに、グレゴールが冷静に返答した

それを聞いて、マクシミリアンは

「第二次はどうなっている!?!」

と問い掛けた

それを聞いて、グレゴールは

「ただ今出撃準備中とのこと……第二次以後は、準備が完了次第出撃すること」

と返答した

それを聞いたマクシミリアンは、ドツカリと席に座った

そして

「あの劣等民族め……いつの間に、あんな物を造り上げた……」

と呟いた

すると、グレゴールが

「まったく予想が着きません……諜報部の怠慢ですな」

と言った

それを聞いたマクシミリアンが

「この作戦が終わったら、人員の大幅な刷新をしよう。無能な輩は、全員極刑だ」

と憤慨した雰囲気を感じずに、蔑むように言った

それを聞いたグレゴールは、同意するように

「それが宜しいかと」

と頷いた

それを聞いたマクシミリアンは、少し黙ると

「第一次増援が合流したら、出撃する」

と言った

それを聞いたグレゴールが、視線を向けると

「第一次増援が合流すれば、規模は前回より増える……その後の逐次増援を持つてして、

圧倒的数で圧殺する……降伏など知ったことか……奴等は、皆殺しだ」

と怒りを滲ませながら、そう言った

場所は変わり、ヤキン・ドゥーエ

そのこの司令室では

「ミラーブロックの換装はどうなっている」

「はっ！ 後四時間程で、セカンドミラーと換装出来ます！」

ダルクス軍総帥たるダハウの問い掛けに、通信将校の一人がそう言ったそれを聞いたダハウは

「急がせつつ、確実にやらせよ。第二射で終わらせる」

と言った

すると、戻っていたグスルグが

「照準は、何処にするんだ？」

と問い掛けた

その問い掛けに、ダハウは

「……ユーラシア連合の月面基地……グリマルデイだ」

と言った

それを聞いて、リディアが

「その第二射で終わらなかつたら、どうするのかしら？」

と問い掛けた

するとダハウは、暫く間を置いてから

「……地球を撃つことになる……ユーラシア連合首都……モスクワにな……」  
と言った

それを聞いたジグが

「しかしそれでは、無辜の民が大勢死ぬことになります！ 地球も、膨大な放射能汚染に犯されます！」

と言った

すると、それを聞いてダハウが

「分かっている……しかし、我々は世界に示さねばならんだ……我々の本気を」

と苦々しく言った

どうやら、ダハウとしても無用な犠牲は出したくないようだ

「それに、奴等が投降すればいい話だ……第二射を受けてなお、継戦する意志があればな……」

「……はっ……出すぎたことを言いました……」

ダハウの言葉を聞いて、ジグはそう言って静かに下がった

それを見たダハウは

「そう……奴等に、継戦するという意志を無くさせればいい……」

と呟いた

そして、近くの士官に

「天帝はどうだ」

と問い掛けた

すると、その士官は

「はっ！ 今現在、最終調整中とのことですよ！」

と告げた

それを聞いて、ダハウは

「技師達には、焦らず確実に。と伝えろ」

と言った

それを聞いた士官が頷くと、ダハウは静かに戦力配置を考え始めたのだった

## 一つの終わり

「大佐！ お待たせしました！」

『待っていたよ、吉井君』

連絡を受けてから、きつちり四時間後

明久達選抜メンバーが、義之達に合流

それを受けて、義之達はヤキン・ドゥーエに向かって出撃した

その少し前に、ユーラシア連合がヤキン・ドゥーエに向かって進撃を開始

最終決戦の幕が開いた

『出撃！ 生きて帰れよ!!』

その言葉の直後、MSが次々と出撃

連合部隊は、砲火の真ん中に突撃していった

『核部隊が居る筈だ！ そいつらを優先しろ！』

『了解！』

義之の指示に、明久達は返答した

その直後、明久の近くをビームが数発走った

そのビームが来た方向を、明久は視認した

その先に居たのは、二機のガンダム

『カラミティとレイダー……い！ ファントム・ペインか!?!』

その二機は、ダルクス軍を撃破しながら明久機に迫ってくる

それを見た明久は

『この先に、行かせない!!』

その二機の足止めを決意

スペキュラムストライカーの推力を最大にして、その二機に突撃した

そして明久は

『まさか……僕のことを知ってる……?』

と呟いた

その理由は、二機の動き

その二機の動きを、明久は知ってる気がした

『だけど……負けられない……負けられないんだ!!』

明久がそう言った直後、明久の中でそれが弾けた

SEEDが



その証拠に、明久の目からハイライトが消えていて、明久の思考はクリアになった  
それにより明久は、カラミティが撃ったバズーカを頭部バルカン砲で撃墜

レイダーが放ったミヨルニルは、スペキュラムストライカーに付けられていたミサイ  
ルポッドで迎撃・破壊した

『こんな戦争に……なんの意味があるんだ!!』

明久はそう言うと、ビームライフルを連射

しかし相手二機は、ビームを回避

明久機に、砲撃を放った

しかしその砲撃を、明久は砲撃の隙間を通って回避

その二機に、接近を計った

だが二機は、一度散開して明久機から離れ、距離を取った

その直後、レイダーが変型しMA形態へ移行

明久機に突撃してきた

ある距離まで近付くと、機関砲を撃ってきた

だが明久は、その砲撃を盾で防御

そしてスレ違い様に、素早く抜いたビームサーベルを一閃

レイダーの右半分を切断した

その一撃で、レイダーは戦闘機能を失い機能停止

それに動揺したのか、カラミティが次々と明久機に砲撃を放ってきた

だが明久は、バズーカはバルカン砲で迎撃

ビーム砲は盾で防ぎながら、間合いを詰めた

そんな明久機を近づかせまいと、更に砲撃を放ちつつランダム機動を始めた

だが明久は、冷静に狙いを定めてビームライフルを発射

その一発で、カラミティのバズーカを破壊

バズーカの爆発でバランスを失ったタイミングを狙い、一気に肉薄

まず、盾で胸部を強打

その直後に、頭に蹴りを放った

それで完全にバランスを失ったカラミティに明久は、次々とビームライフルを撃った

そのライフルにより、カラミティはもはや胴体を残すのみとなり、力なく漂うだけに

なった

それを確認した明久は、あることを確認するために、その二機に近づいた

『まさか……』

そう呟きながら明久は、その二機のハッチを開けた

そして、コクピットの中で負傷していたパイロットを見て

『あつてほしくなかつたけど……やっぱり、そうだったんだ……』  
と呟いた

なにせ、カラミテイのパイロットは姫路瑞希

レイダーのパイロットは、島田美波だったからだ

最早、二人の命は風前の灯火だろう

どうやらコクピット内で爆発が起きたらしく、姫路は胸部に鉄片が

島田は、腹部を長い鉄パイプが貫通していた

それを確認した明久は、太もものホルスターから拳銃を抜いて

『……理由は聞かないし、どうせ喋れないでしょ……だから、今……終わらせるね』

と言つて、拳銃を向けた

その時、二人の口が僅かに動いたが、明久は聞かずに引き金を引いた

明久が撃った銃弾は、確かに二人の眉間を貫通

二人の命を終わらせた

二人を射殺した明久は、無表情で機体に戻りコクピットに入った

そして、ポツリと

『……バカだなあ……二人は……戦場に、戻ってくるなんてさ……理由はどうあれ……』

戦場から、離れられたんだからさ……』

というと、主戦域に向かった  
ヘルメット内で、涙を流しながら

## 激突

「やはり、かなりの数だなー」

直哉はそう言いながら、テストメント改を駆っていた

すれ違い様にビームサーベルでダークダガーIIを切り捨て、振り向いてビームライフルを発射

一機のウインダムを撃ち抜いた

「だが、問題は核部隊だ……」

直哉はそう言いながら、周囲を見回した

その直後、直哉機にビームの雨が降り注いだ

「この攻撃は!?!」

直哉はそう言いながら、視線を上に向けた

そこに居たのは、二機のガンダム

「ブラウカラミティ……ゲルブレイダー!!」

円夏と部隊を組んでいた、二機のガンダムだった

その二機を見て、直哉は

「とういことは……スコール少佐とオータム大尉か!!」

とその二機のパイロットを見抜いた

ユーラシア連合軍ファントムペイン第一部隊所属、スコール・ミューゼル少佐  
同、オータム・グライド大尉

数少ない強化人間の成功個体

そういう点では、直哉より格上の存在である

機体性能は、ほぼ互角

最高速度では、テストメント改に軍配が上がる

「援軍は、期待出来そうにないか……だが!」

ストラトス隊の中では、頭一つ抜きん出た性能のテストメント改

それ故に、ストラトス隊では単機運用が決まってしまうていた

だが、悲嘆する気は毛頭無い

何故ならば、仲間他にも居るのだから

そして何よりも

「負ける気もない!」

直哉はそう言うと、二機に向けて突撃した

場所は変わり、義之とみちる

二人は二度ミーティアを装着して、ユーラシア連合軍とダルクス軍が入り乱れた戦域を縦横無尽に駆けていた

二機が駆け抜けた後には、幾つもの炎の華が咲き、数多の残骸が宙を漂っていた。たつた二機に、その宙域のほぼ全てのMSが圧倒されていた

それは機体の性能もあるが、一重に、二人の操縦技能が卓越しているからに他ならぬ

ミーティアを装着した二機は、最早MAと言っても過言ではない見た目とサイズになっっている

そんな大型機体を二人は、通常のMSを超えた速度で乗りこなしていた。勿論だが、今二人を膨大なGが襲っている

だがそのGも、テストメントより低い13G。それを知った二人は、何がなんでも操縦しようと決めた

直哉は命懸けで16Gという前代未聞のGに耐えて、ガンダムを一機を撃破している。強化人間の失敗とされ、使い捨てられるはずだった直哉がだ

ならば、普通の健常なパイロットたる自分達に出来ない道理はない！

「伊隅！」

『ハッ!!』

そうして二機は、すれ違い様にそれぞれ砲撃をしていた艦を一隻ずつ撃沈  
更には、周囲に居たMS隊を中隊規模吹き飛ばした

だが、その直後

「つつっ! 散開!!」

『つつっ!!』

義之達の居た場所を、幾多のビームが走った

回避した二機は、ほぼ同時に攻撃してきた敵を視認した

それは、禍々しい赤と黒の塗装が施された一機のガンダムだった

そのガンダムを見た義之は

「オーガ……カラミティ……」

とその機体の名前を呟いた

それは、初音島の諜報班が幾多の身命を賭して判明した名前だった

災厄の鬼

その名を冠するガンダムは、もはやその名前の通りに鬼だった

ガンダムを象徴するデュアルアイは睨むような目になり、頭部のV字アンテナからは

一本ずつ真上にアンテナが追加されている



最早原型機たるソードカラミティの面影を残しているのは、背負っている一対の対艦刀だけ

胸部のビーム砲は無くなっているが、腰部に連結式のビーム砲を装備している  
なお、連結せずとも固定式ビーム砲として使えるようになってい

両肩にはサブアームに保持されたビームマシンガンが装備されていて、それが先程のビームの雨の正体だ

その機体を見て義之は

「伊隅……ミーティアの制御権を渡す……こいつは、俺が引き受ける」

と言うと、ミーティアからフリーダムを分離させた

それを聞いたみちるは、素早く義之が分離させたミーティアの制御権を自機に同期させて

『了解……御武運を』

と言うと、一気に離脱していった

それを見送ると、義之は

「優しいじゃないか、魔女よ……見送るとはな」

と敵パイロット

セルベリア・ブレスに、通信を繋げた

すると、セルベリアは

『あのような小者……私が殺らざとも、この戦場で命を落とすだろうよ』

と侮蔑を込めた声で、義之に言った

すると、それを聞いた義之は

「そうやって見下している、足下を掬われるぞ」

と言つて、ビームライフルを構えた

しかし、セルベリアは

『いや、事実だよ。英雄……貴様も、ここで朽ち果てろ』

と言うと、対艦刀を構えた

それを見て、義之は

「はっ……上等!!」

と気合の声と共に、突撃したのだった

## 因縁

「ちいー！ 本当に、数は多いぜ!!」

と舌打ち混じりに言ったのは、烈空式型を駆るユウヤ・ブリッジスである

今や彼は、自身の手足のように烈空式型を操縦

次々と敵を撃破していた

そして、その甲斐あつてと云うべきなのか

烈空式型の制式採用が決定

量産態勢の準備が始まっていた

それはさておき、ユウヤはアルゴス小隊を率いて進軍

ユーラシア連合機を中心に、次々と撃破していた

その時、ユウヤは自身の直感に従って一気に機体を後退させた

その直後、先程までユウヤ機が居た場所を極太のビームが走った

『ユウヤ!?!』

『大丈夫か!?!』

「大丈夫だ……お前ら、あいつの相手は俺がやる……」

ステラとタリサの問い掛けに答えながら、ユウヤは攻撃してきた敵を視認した  
赤い両肩が特徴の、ガンダムタイプ

オーガカラミティ

その機体のパイロット達が、ユウヤには分かった

「さあ、決着付けようぜ……イーニア、クリスカ！」

ユウヤはそう言うのと、右手にビームライフル、左手にビームサーベルを装備して、オーガカラミティに突撃した

その頃、直哉は二機相手に激戦を繰り広げていた

直哉はテストメントの機動を活かして、激しく動いていた

その直哉機を、オータムが操るゲルプレイヤーが追隨  
機関砲を撃ち、直哉機を誘導していく

「ちいっ……誘導されているか……!」

敵の狙いに気付いていたが、そうするしかなかった

その事実にも、直哉は舌打ちした

それほどに、二人の連携は卓越していた

「このままでは、捉えられるのも……!」

直哉はそう言って、上方からのビームの雨を回避  
反撃しようと、ビームライフルを構えた

しかし、すぐに離脱

ゲルプレイダーのアフラマズダを避けた

そこに、ブラウカラミティからのバズーカが直撃

直哉機はバランスを崩した

その隙を狙い、ゲルプレイダーがツォーンを放った

「つつっ!？」

回避が間に合わない、直哉は目を見開いた

だがそこに、山吹色の機体

龍閃が、ツォーンを盾で防御

ライフルを撃った

そのライフルの一撃を、ゲルプレイダーは機体を大きく動かして回避した

その龍閃を見て、直哉は

「まさか……唯依か？」

と問い掛けた

すると、その龍閃と通信が繋がり

『間一髪、間に合ったな……直哉』

と唯依の声が聞こえた

「なぜ、ここに……唯依の担当宙域は違うはずだ……」

『気付いてなかったのか……ここは、その近くだ』

直哉の問い掛けに、唯依はそう答えた

どうやら激しく機動戦を繰り返している内に、ホワイトファング中隊の担当宙域の近くにまで来ていたらしい

『部隊は、雨宮に任せた……私は、直哉のフォローをする……直哉は好きに動け!』

唯依はそう言って、ビームライフルを連射

その直後、直哉は一気に動いた

長い間続いた因縁を、終らせるために

何よりも、下らない戦争を終わらせたいから

## 対決 1

『直哉！』

『了解！！』

唯依がビームライフルを撃ったタイミングに合わせて、直哉はゲルプレイヤーに突撃した

だがゲルプレイヤーは、それを機動で回避

初高速連装砲を撃った

直哉はそれを乱数機動で回避し、ブラウカラムיתיに迫った

直哉の狙いは、最初からブラウカラムיתיだったのだ

ブラウカラムיתיの火力は、確かに脅威的だ

ブラウカラムיתיは、火力と機動を両立した機体である

本来ならば相反するものだが、ブラウカラムיתיはパイロットが普通の人間ではないという考えの下で、強化改修された

パイロットに掛かる負担は、かなりの物である

そしてそれは、ゲルプレイヤーも同じ

規格外と呼べる機動で、高速に駆け抜ける

その速度は、直哉機と互する

だが

『カラミティの速度は……こちらより遅い!!』

直哉は、距離を取ろうとしたカラミティに更に迫った

その直哉機を止めようと、カラミティとレイダーは砲撃を放った

その砲撃を、直哉は最低限の機動で回避した

どうやら焦っているようで、精密照準がされていないらしい

『私を、忘れるな!!』

唯依はそう言いながら、レイダーに肉薄

ビームサーベルを振り下ろした

そのサーベルを、ゲルプレイヤーはミヨルニル改で防御した

だがその間に、直哉機はカラミティに肉薄

攻撃を仕掛けた

『あんたは覚えてないだろうがな、俺は覚えているぞ！ スコール!!』

憎しみが籠った声で、直哉はカラミティのパイロット



スコール・ミューゼルの名前を呼んだ

『あんたが生まれたから、俺達強化人間は造られた！ あんたら、成功個体が生まれたから!!』

そう

スコールやオータム、セルベリアという成功強化人間が産み出されたから、直哉達強化人間が産み出された

その為に、一体何人が犠牲になったのか

『だから、あんた達は俺達が倒すんだ！ 強化人間計画は、もう終わりだ!!』

直哉はそう言つて、ビームサーベルを抜刀

カラミティに、ビームサーベルを振るつた

その一撃をカラミティは、複合防盾で防御

至近距離で、背部のビームキャノンを撃つた

その砲撃を直哉は、機体を斜めにして回避

それと同時に、カラミティの胴体に蹴りを叩き込んだ

その一撃で、カラミティは機体のバランスを失つたが、そのまま盾のガトリングを斉

射

至近距離の弾幕は回避出来ず、直哉機は被弾

バランスを失いながらも、ビームライフルを構えた

そして、二機同時にビームを発射

二機の間地点で激突し、衝撃波を撒き散らした

その衝撃波で、二機は離れたが、直ぐに戦闘を再開

カラミティは圧倒的弾幕を形成するが、直哉機は機動で回避

ビームライフルを構えて

『チャージ、60%！』

チャージ機能でビームの威力を上げてから、撃った

そのビームを、カラミティは盾で防いだ

だがチャージしていたのは予想外らしく、弾き飛ばされた

『逃がすか！』

直哉はそのカラミティを追い掛けるために、スラスターを噴かした

『直哉！』

その直哉機を追い掛けるために、唯依はレイダーにビームライフルを連射して、機体を反転させて、スラスターを噴かした

そして決着の時は、刻一刻と近づいてきていた

## 三竦み

「どいてくれー！ ダルクス人ー！ お前達とは、出来ることなら、戦いたくないんだ！」

義之はそう言いながら、ダルクス軍のMSを撃破していく

その目指す先にあるのは、巨大兵器たるジェネシスである

それを破壊しなければ、地球が危ない

もちろんだが、核ミサイルの方にも手は打っている

ユーラシア連合軍の方には、みちるを中心にした部隊を差し向けた

その時だった

義之を、ある予感が走った

その予感に従い、義之は機体にランダム回避機動を取らせた

その直後、あらゆる角度からビームがフリーダムを狙って迫った

「この攻撃は……まさか!？」

その攻撃を、義之は知っていた

それは、初音島

もつと言え、天枷研究所でさくらと束が見せてくれた設計図

ジャステイス、フリーダム、テストメントの兄弟機の一機の攻撃方法と酷似していたからだ

「まさか……あんたらだとはな……ハッキングしていたのは!!」

しかし、開発されなかった

その最たる理由の一つは、その武装を扱うのに特殊な才能が必要と分かったからだ

その才能というのは、高い空間認識能力

パイロットならば誰もが有している能力だが、その平均値を遥かに上回る能力が必要だったのだ

計画段階でそれが判明し、それを探すが難しいと分かったさくらと束は、開発を中断

その設計図は、嚴重なプロテクトが施されたサーバーに仕舞われた

しかしある日、そのサーバーがハッキングされたことが判明した

そのハッキング先は分からなかったが、これ以上ハッキングされないようにと、機体の設計図データは特殊なサーバーに移動させ、見れるのは開発に携われる者のみとなった

だがここに来て、そのハッキング相手が分かった

それを裏付けるように、義之の視線の先にその機体は居た

ダルクス軍のMSの中では、ある意味異形のガンダムタイプ  
銀色のPS装甲に、後光を背負ったかのような機体

その名前は

「プロヴィデンス!!」

初音島での型番は、G A T ー X 1 3 A

ダルクス形式ならば、Z G M F ー X 1 3 A

天帝の名前を与えられた機体が、義之の視線の先に居た

そしてそのパイロットに、義之は気づいた

「ダルクス軍総司令……ダハウ!!」

『やはり、初音島の英雄か……』

義之がダハウの名前を呼ぶと、プロヴィデンスから音声通信が繋がった  
『君を、これ以上先に進ませる訳にはいかないな……』

ダハウはそう言うと、プロヴィデンスの巨大なビームライフルを構えた

その時

『ほう……ここに、私の獲物が揃っているとはな……なんとという幸運』

と声が聞こえた

その声を聞いて、義之とダハウは視線をある方向に向けた

その先に居たのは、黒と赤の配色の一機のガンダム

「オーガカラミティ……」

『ユーラシアの魔女か……』

ユーラシア連合軍切つてのエースパイロット

セルベリア・ブレスが駆るオーガカラミティだった

『貴様達を殺し、この戦争を終わらせる……栄光を、我が陛下に捧げる！』

今ここに、三竦みの決戦が幕を開く

## 覚悟を決めた者

「つつ……つつあ!!」

直哉は掛かるGを歯を食い縛って耐えると、ビームライフルをブラウカラムיתיに放った

そのビームをブラウカラムיתיは、ガトリングシールドで防御

即座に、背部四連ビーム砲を放った

そのビームを直哉機は、機体をビームの隙間を通らせて回避

ブラウカラムיתיを狙い、ビームライフルを構えた

だがその時、その直哉機を狙って、ゲルプレイヤーが頭部のツォーンを放とうとしていた

しかし、そこに

『私を、忘れるなっ!!』

と唯依機が、思いきりゲルプレイヤーの胴に蹴りを放った

その蹴りにより、ゲルプレイヤーはツォーンを明後日の方向に放った

それに怒ったのか、左手の初高速連装砲を唯依機に向けた  
しかし

『はあっ！』

唯依はその砲身を、ビームサーベルで切断  
使用不能にした

するとゲルプレイダーは、ある程度距離を取ってからミヨルニル改を放った  
ミヨルニル改は、恐ろしい速度で唯依機に迫った  
だが唯依は、慌てずに

『イン！だー！』

と声を上げながら、紙一重でミヨルニル改を回避  
即座に、ビームサーベルでワイヤーを切った

これで、ゲルプレイダーはミヨルニル改を使えなくなつた  
だからゲルプレイダーは、ミヨルニル改のグリップを投棄  
MA形態に変形すると、唯依機目掛けて突撃してきた

ゲルプレイダーは、機体を不規則に左右に振っていて、狙いを付け難しくしていた  
更には、機首の機関砲を連射

それを唯依機が、盾で防いでる間に接近



機体下部のクローで、唯依機を弾き飛ばした

この時直哉機は、激しい機動戦闘を繰り広げていた

直哉機はブラウカラムミティの砲撃を、機動を活かして回避し、ビームライフルを撃つていた

それを追従しながら、ブラウカラムミティは全身の火器を次々と開放し、攻撃していただがその時、ブラウカラムミティが右脇に抱えていたバズーカ

トードスブロック改が、弾切れになつたらしく、弾倉交換しようと、砲身を上に向けた

その僅かな隙を逃さず、直哉機はチャージしたビームを撃つた

直哉機が撃つたビームは、弾倉を交換して砲撃した直後のトードスブロック改を、右腕諸とも吹き飛ばした

だがその直後、トードスブロック改の砲弾が直哉機のビームライフルに直撃

直哉機は、ビームライフルが爆発する前に投棄

そして両手に、素早く予備兵装たる複合拳銃を構えた

その複合拳銃も、前より改修されていた

以前は弾倉交換によって、実弾とビームの切り替えをしていた

だが今は、弾倉は実弾のみにし、ビームは機体からのエネルギー供給によるドライブ

式に変更

それに合わせて、銃身が縦に二連装になっていて、タイムロス無く攻撃の切り替えを可能としたのだ

「っあっ!!」

そして直哉は、またブラウカラムィティに突撃した

いざとなれば、最終手段を使うつもりで覚悟を決めながら

## 三竦み 2

『くっ！』

義之は自身に放たれたビームの雨を、機体を不規則に左右に振って回避

その後、すぐに反撃に転じた

三つ巴の戦いは、激戦となっていた

一瞬でも隙を見せれば、二機からの集中攻撃が迫ってくる

その繰り返しは、かれこれ十数分続いていた

『今！』

義之はそう声を上げると、オーガカラミティに狙いを定めて、ライフルを連射した

それと同時に、プロヴィデンスも盾内蔵のビームガンを連射した

その攻撃を、オーガカラミティは両手の小型盾で防御しつつ機動で回避

腰のビーム砲を、二機に撃った

そのビーム砲を、義之はバラエーナで迎撃し、プロヴィデンスは回避した

何時決着が付くか分からない戦い

たが、決定的な違いが一つあった

それは、主機関

義之機たるフリーダムとプロヴィデンスの二機は、世界でもたった四機の核駆動炉搭載MSである

そのエネルギーは、実質無限

弾薬と推進材は消費するが、まだ危険域まで消費していない

弾薬と推進材に関しては、セルベリア機もまだ持つ

だが、エネルギーに関しては二機とは違った

セルベリア機

オーガカラミティは、バッテリー駆動だ

量産型機よりも大容量バッテリーだが、二機と違って制限がある

戦い始めて、既に数十分

オーガカラミティのバッテリーは、約三割消費していた

それを見たセルベリアは、内心で舌打ちしていた

彼女としては、短時間で決着を着けたかったのだ

オーガカラミティの性能は、フリーダム、プロヴィデンスの二機と遜色は無い

更に、成功強化人間の中でも特にセルベリアは、その性能は高い

だがそれでも、エネルギー総量だけはどうにもならない

出撃の際に、外付けバッテリーは付けてはいたが、全て使いきった

(奴等のエネルギー総量はどうなっている!? バッテリー駆動の筈だ!?)

この時、彼女は勘違いしていた

フリーダムとプロヴィデンスを、バッテリー駆動だと思い込んでいた

これは、初音島の防諜が高かったのも、要因だろう

ユーラシア連合は、第二次初音島攻防戦の後、フリーダムのことを調査させた

そこで、予想性能とパイロットは判明していた

しかし何より、詳細な機体情報が調べられなかった

ユーラシア連合は、幾多の諜報員を潜り込ませた

だが、その殆どを情報省の杉並を中心とした班が未然に防いできた

その結果、ユーラシア連合はフリーダムが核駆動だという重要な情報を得られなかつ

たのだ

(だが、機体性能は互している筈だ! ならば!)

セルベリアはそう思うと、操縦桿を掴み直して

『そろそろ、終われ!!』

オーガカラミティの主兵装たる、シユベルト・ゲバールⅡを構えて突撃した

このシユベルト・ゲバールⅡだが、合体分離機構の採用と、柄尻にビームソード発生基兼ビームガンを内蔵している

それによる格闘戦性能は、他の追隨を許さない程だ

『はあっ!!』

『甘い!!』

セルベリアの右手の一撃を、義之は機体を半身にさせて回避した

その瞬間

『貰った!!』

セルベリアは、左手の柄尻のビームガンを発射した

そのコースは、フリーダムの胸部への直撃コースだった

普通ならば、回避は間に合わない

そう確信したセルベリアは、笑みを浮かべた

だが

『っあ!!』

その一撃を義之は、機体を暴れ馬のように不規則に動かして回避した

それを見たセルベリアは、目を見開いた

(バカな!! 強化人間たる、私と同等の反射速度だということのか!?)

内心では驚きながらも、セルベリアは操縦を続けていた

まず、ダハウが放っていたドラグーンの攻撃を、まるで踊るように機体を動かして回避

その後、腰のビーム砲をサブアームを動かして、二機に向けて撃った

それを、フリーダムとプロヴィデンスは攻撃を止めて回避した

まだ、三つ巴の戦いは終わらない

## 戦場での再会

「核部隊は、どこだ!？」

と言いながら、彼、ユウヤ・ブリッジスは一機のダガーIを切り捨てた

ユウヤ率いるアルゴス部隊の最優先目標は、核投射部隊である

前回の旗艦は義之達が撃沈したが、新たに用意されているだろうと予想されている  
それが出来るのが、ユーラシア連合という大国なのだ

『慌てないで、ユウヤ!』

気が急いでいたユウヤに落ち着くように促したのは、ユウヤの僚機を務める、アルゴ  
ス3

ステラ・ブレイメルである

彼女が乗っているのは、初音島が払い下ろしたアストレイ二型の狙撃仕様だ

彼女の狙撃の腕は非常に高く、ユウヤの機動を予測して、その邪魔になりそうな位置  
の敵を逃がすことなく撃ち抜く

アルゴス隊には、なくてはならない存在である



『だな。慌てなくても、向こうから来てくれるだろうさー!』

ステラの言葉に同意したのは、白い塗装のユウヤ機とは違い、紺色に塗装された烈空式型に乗ったタリサ・マナンドルだ

彼女はある山岳民族の血を引いており、高い身体能力を誇っている

そしてその高い身体能力を活かした格闘戦を得意としていて、それはMS戦にも活かされている

彼女が乗る烈空式型は、ユウヤ機とは多少仕様が違い、今は二人が乗る二機種で制式採用を争っている最中でもある

『そう言っている間に、お客さんだぜ!!』

そう言ってビームライフルを撃って、ウィンダムを撃破したのは、ヴァレリオ・ジア  
コーザ

通称、VGである

陽気な性格で何かと軽い言動が目立つが、やる時はやる男である

そんなVGの言葉を聞いて、ユウヤは

『蹴散らすぞ! 散開!!』

と指示を下し、自らユーラシア連合のMS部隊に突撃した

そんなユウヤ機を狙い、ドッペルホルン連装砲を装備したダガーIが砲撃した

だがユウヤは、その砲撃を機動で容易く回避

お返しにとビームライフルを撃って、そのダガーLを撃破した

それに怒ったのか、二機のウインダムが盾裏のグレネードを連射しながら突撃してき

た

ユウヤはそのグレネードを、烈空式型の頭部バルカン砲で迎撃しつつ、距離を取った

その直後、一機をステラ機が撃ち抜き、もう一機をタリサ機がスレ違い様に切り捨て

た

その光景に恐れたのか、最後の二機になったダガーLが、反転して離脱しようとした

だがそのダガーLは、下方からのビームの直撃を受けて爆散した

それは、VGの攻撃だった

VGは相手の行動を予測して、ある程度の距離を取っていたのだ

逃げようとした場合、すぐに攻撃出来る位置を取るために

交戦開始から約二分足らずで、同数のMS部隊を撃破

それは、彼等が一角のエースという証左だった

その時

『お前ら、離れろ!!』

というユウヤの指示と同時に、全員散開

先程まで四機が居た場所に、ビームの雨が降り注いだ回避した四機は、一齐に攻撃してきた敵機を視認したそれは、両肩を赤に塗装した一機のガンダムタイプ

『オーガカラミティ……』

『スカレットツイン紅の姉妹か！』

その敵機を視認したユウヤは、獰猛な笑みを浮かべて

『お前ら、手出しするんじゃない……あれは、俺がやる!!』

と言って、ビームサーベルを抜刀した

そして、オーガカラミティに突撃しながら

『さあ、決着を付けようぜ……二人とも!!』

と声を上げた

そのオーガカラミティのパイロット達が、クリスカとイーニアの二人だと確信していたからだ

そうして、この世界での戦いは終局を迎えつつあるのだった

## 三竦み 3

「流石に……この三竦みは、キツイなっ!？」

と言ったのは、一度ヘルメットのバイザーを開けて汗を出した義之だ

三竦みの戦いは、膠着状態のまま進んでいた

全員が各軍のトップエースであり、機体性能もほぼ互角

それが、酷い緊張感を三人に課していた

ほんの僅かな油断や隙が、確実に命取りになってしまふ

その状況を長時間強いられて、義之は汗まみれになった

今は、隕石の影に機体を隠して様子見を兼ねている

そして義之は、サブモニターに視線を向けて、残弾、エネルギー量、推進材の残量を  
見た

「機体は問題なし……問題を挙げるとしたら、俺の集中力と体力か……」

義之も軍人として、体は鍛えている

しかし、体力というのは体格に直結する

義之の体格は、年令平均より少し大きいという位だ

それに対して、ダハウはかなりの体格

そしてセルベリアは、強化人間だ

体力面は、二人には敵わないだろう

そして集中力というのは、体力が減ると欠きやすくなってしま

それを考えると、義之はかなり不利だろうことは否めない

「だけど……やるしかない！」

義之はそう言うと、機体を一気に加速させた

その直後、義之機が居た場所を幾つもの光条が襲った

プロヴィデンスのドラグーンだ

義之は直感で気付き、回避したのだ

「つつっ！ そっお!!」

義之はそう言いながら、振り向き様に腰のレールガンを撃った

その一撃は、迫っていたオーガカラムיתיに直撃

オーガカラムיתיは、バランスを失った

そのオーガカラムיתיに追撃しようと、義之はライフルを向けた

だがキャンセルして、即座に離脱

そこに、再び網のように光条が襲った

ダハウが、ドラグーンを放っていたのだ

「ちいっ!?!」

絶好のチャンスを外され、義之は思わず舌打ちした

しかし、直ぐに気持ちを切り替えた

一度状況を逃がしたら、それに気を取られてる場合ではない

それが、死に繋がるからだ

そして義之は、目前に迫ってきていた艦の残骸を足場に、強引に方向転換

その先に居たプロヴィデンスに、ライフルを撃った

そのビームを、プロヴィデンスは難なく回避

お返しにと、ビームを撃った

義之はそのビームを、左手に持っていたサーベルで弾き、接近を計った

ように見せかけて、肩越しにビームを背後に撃った

その一発で、背後に回っていたドラグーンを一基破壊した

今この時、義之のSEEDは過去最高にその能力を発揮していた

今のドラグーンの破壊も、SEEDの能力で弾き出した予測からだった

「つつっ!!」

次に義之は、機体を宙返りさせた

その直後、オーガカラミティが対艦刀を振るって奇襲してきた  
だが、その一撃を回避

義之は、セルベリア機を思い切り蹴飛ばした

しかも、左手の楯をセルベリア機に投げ付けた

蹴られていたセルベリア機は、それに気付いていなかった

バランスを建て直した直後のオーガカラミティに、今度は楯が当たった

そしてこの時、義之は既に次の一手を打っていた

ライフルを、別々の方向に連射したのだ

そして一発は、セルベリア機の対艦刀の一本に命中

破壊した

そしてもう一発は、ダハウ機のライフルに命中した

二機は、爆発する前にそれぞれ武装を投棄

一度離れた

それを見た義之は、不敵な笑みを浮かべて

「さあ……第二ラウンドだ……今なら、負ける気がしない!!」

と言つて、突撃したのだつた

## ひとつの決着

「つあああ!!」

『そんな攻撃で!!』

直哉は両手の複合拳銃を連射するが、それをブラウカラムיתיは回避  
背部の四連ビーム砲を撃った

それを直哉は、機体をバレルロールさせて、砲撃の隙間を通じて回避  
複合拳銃の実弾を撃った

直哉が撃った弾は、ブラウカラムיתי背部のビーム砲の一門の砲口に命中  
爆発を起こした

『このっ!!』

一度はバランスを崩したブラウカラムיתיだったが、シールドに取り付けられていた  
ビームガトリングを斉射

弾幕を形成した

それは流石に、回避は難しかった



だから直哉は、盾で防御

複合拳銃を撃った

その弾は装甲に弾かれたが、僅かな隙は作れた

その間に直哉は、左手の複合拳銃を収納

ビームサーベルの柄を保持

複雑な機動で、接近を計った

もちろんブラウカラミティも、直哉機を近づけまいと弾幕を形成して対処する

しかし、直哉機の数度に弾幕形成が追い付いていなかった

まだ機能全開ではないが、かなりの速度を出していた

その直哉機を撃破しようと、ブラウカラミティは砲撃を続行していた

それが覆ったのは、一発のビームだった

そのビームを放ったのは、唯依機だった

別に、意図したものではなかった

ただ唯依は、ゲルプレイヤーを撃破しようとビームを撃つたに過ぎなかった

ただそのビームが、たまたまブラウカラミティの盾先のガトリング砲に命中したのだ

それにより、弾幕を形成していたビームガトリングが機能停止

その隙に直哉は、ビームサーベルのリミッターを解除

長い長い刀身を形成し、ブラウカラミティに振るった

その一撃をブラウカラミティは、機体を半身にさせて回避した

だが次の瞬間、複合拳銃から撃たれた光弾が頭部に直撃した

『なっ!?! ビームも撃てる!?!』

ビームの直撃を受けて、スコールは驚いていた

実は今まで、直哉は実弾しか撃っていなかったのだ

だからスコールは、実弾しか撃てないと判断していた

そこに、ビームが撃たれた

避ける間もなく、ビームを食らった

これが、スコールの命運を分けた

複合拳銃のビームの直撃を食らい、ブラウカラミティの頭部は吹き飛んだ

それにより、ブラウカラミティはセンサー類が一斉に使えなくなつた

スコールはそれでも、サブカメラの映像で攻撃しようとしていた

だが、サブカメラの小さな映像では狙いがつけづらい

結果、短時間とはいえども直哉機を見失つた

その間に直哉機は、ブラウカラミティの背後に回つた

そして、元の長さに戻したビームサーベルでブラウカラミティを深々と突き刺した

その一撃で、ブラウカラムィティは爆散した

『スコール!?!』

『隙あり!!』

仲間が撃破されたことで、ゲルプレイヤーの動きが止まった

その隙を突いて、唯依機がビームサーベルでゲルプレイヤーを腰から両断した

そして、しっかりと撃破したことを確認した二機は、主戦域に戻っていった

戦争を終わらせるために

## 白と紅 決着

「はあっ！」

気合いの声と共に、ユウヤはビームサーベルを一閃

その一撃は回避され、オーガカラミティは反撃にと対艦刀を横風ぎに振った

その一撃に、ユウヤは引き戻したビームサーベルを合わせて、受け流した

唯依から施された訓練を、ひたすらに繰り返し、更に暇を見つけては帝国軍のパイ

ロット達と模擬戦を繰り返してきた

その結果が、今発揮されていた

機体性能は、二人が操るオーガカラミティのほうが上

そして恐らく、操縦技能も二人のほうが僅かに上

だが、実戦経験はユウヤのほうが上だった

だからユウヤは、オーガカラミティの次の動きを予測

最善手を導きだし、オーガカラミティと接戦を繰り返していた

だが、一瞬たりとも気を抜くことは出来ない

今は相手の行動を予測しているから対処出来ているが、相手の方に分がある（狙うのは、一瞬！一撃で、行動不能にする!!）

ユウヤは、一撃で勝負を決めるためにチャンスを待った

最早ユウヤは、烈空式型を意のままに操縦していた

今も、至近距離で腰部のビーム砲を撃とうとしていたのを、膝蹴りで強引に砲口を明後日の方に向かせて、外したところだ

その動きからは、焦りが伺える

「焦ってるのか!? クリスカ、イーニア! 動きが、荒くなってるぜ!!」

ユウヤはそう言つて、オーガカラミティが突き出してきた対艦刀を折った

その直後、動揺からオーガカラミティの動きが僅かに鈍った

「つああ!!」

その隙を狙い、ユウヤはビームサーベルを突き出した

だがその一撃を、オーガカラミティは真上にスラストを噴かして回避

ユウヤ機の真下に移動した

そしてオーガカラミティの眼前には、隙だらけの烈空式型が居る

その式型を狙い、腰部のビーム砲を放った

だがそこに、式型の姿は無かった

「……だああああ!!」

ユウヤはそう叫びながら、オーガカラミティの腰の左側にビームサーベルを突き刺した

先程は、どうやって避けたのか

オーガカラミティが真下が行ったのを見て、砲撃態勢に入ったのを見たユウヤは、脚部のスラストのみで回避させつつ背面に回ったのだ

そうして、隙だらけだったオーガカラミティにビームサーベルを突き刺したのだ

ユウヤも、テストパイロットとして機体の開発に携わった

だから、機体の何処にどういった部品があるかはある程度予測がつく

ユウヤが狙ったのは、エネルギーコンバーター

電力関連である

そして、その一撃は狙った通りの効果をもたらした

オーガカラミティは、動きを止めた

それを見たユウヤは、思わずガッツポーズを取った

クリスカとイーニアの能力のことは、直哉から聞いていた

それを使われる前に、勝てたことを喜んでいた

未来予測

それを使われたら、一気に勝つ確率は下がり、クリスカとイーニアの二人に高い負荷が掛かっただろう

下手すれば、命に関わるレベルの

二人を助けたかったユウヤとしては、そうなる前に勝てたことが、何より嬉しかったのだ

「どんな形だろうが……出会ったなら、助けたいだろ」

ユウヤはそう言うと、オーガカラミテイの肩を掴んで

「アルゴスーより、大和へ！ これより、捕獲した敵機を運ぶ。データ抽出の用意を！」  
と言って、自分の母艦たる大和の方に向かったのだった

## 友との再会

「……見つけたぞ……グスルグ……」

『まさか……クルト……か?』

主戦域となった、ヤキン・ドゥーエ宙域

その一画で、奇跡とも言える再会が起きていた

二人はかつて、同じ部隊に所属していた

JEU軍懲罰部隊、422部隊

ネームレス

クルトは身に覚えの無い上官への反逆罪で、ネームレスに送られた

そして、ネームレスに隊長が居ないことを知った

正確には、クルトが配属される一つ前の戦闘で戦死

その直後に、クルトがネームレスに配属となった

懲罰部隊ネームレス

懲罰部隊と銘打ってはいるが、体のいい使い減らし部隊と認識されていた



そのネームレスだが、本来は特殊部隊として設立されたのである

故に、ネームレスの管轄は通常指揮下には無く、JEU軍情報局直轄扱い設立された当時は、帝国とEU軍から精鋭が集められた

しかし、ある秘匿作戦で大量に戦死者が出てしまった

幸いにも相手に証拠は掴まらなかったが、早急に人員が求められた

そこで帝国とEU軍は、技能は高くとも扱いに困っていた兵を多数送った

そしてまた戦死が出ると、今度は懲罰対象者を送った

そこから、ネームレスは懲罰部隊という扱いに変わっていった

そうしてネームレスは、ある二つの特殊なルールが出来た

一つ目は、認められた者以外には名前を教えない

そして二つ目は、当時の隊員の半数以上の名前を知る者が隊長をやる

この二つだった

そして先代隊長戦死当時、その資格があったのはグスルグだった

しかしグスルグは、自分には指揮を執る器が無いと自覚していた

そこにクルトが現れて、グスルグはクルトが隊長に相応しいと即座に看破

クルトに自身の名前を教え、クルトのサポートに回った

その後クルトは、グスルグの読み通りネームレスの半数以上の名前を聞き、ネームレ

スの隊長となった

その後、クルトはネームレスの隊長として部隊を引っ張っていった

だがグスルグは、ユーラシア連合のEU侵攻時に裏切りを見て、脱走

行方を眩ませた

その後クルトは、EU離脱戦から後退戦を繰り返しながらグスルグを探し続けた

そして、カラミティ・レーヴエンにグスルグが居ることを突き止め、今回の派兵に志

願

今、再会した

「グスルグ……出来ることなら、俺は友を撃ちたくない……投降してくれ」

クルトがそう言うと、グスルグは短く笑って

『それは無理な話だ、クルト……俺はあいつ……ダハウの言葉に、夢を見つけた……そして

その夢を、叶えたいんだ!』

と宣言し、武装の複合バズーカを突き付けた

それを聞いて、クルトは

「ああ……グスルグなら、そう言うと思っていた……だから、強制的にでも!!」

と言つて、愛機となったシグー・タイフーンを進ませた

戦争を

何よりも、友を止めるために

## 鹵獲と治療

『アルゴス1、帰還！ メカニックは待機せよ！ 式型の整備と敵機体からの情報抽出を行う!!』

信濃に帰還したユウヤ機と鹵獲したオーガカラミテイに、次々と信濃の整備士達が取りついた

そして一人の整備士が、コクピットハッチ横のコンパネにパスワードブレイカーを取り付けて

『……開きます!』

と告げた

それを聞いた警備兵達は、頷いてから小銃を構えた

その数秒後、コクピットハッチがゆつくりと開いた

それを見た警備兵達は、コクピット内に小銃を指向

そして、困惑した

なぜならば

『クリスカ！ クリスカ！』

イーニアが、泣きそうな表情でクリスカを揺さぶっていたからだ  
そこに、ユウヤが近寄り

『イーニア！ 何が起きた!?!』

とイーニアに問い掛けた

するとイーニアは、ユウヤにすがり付いて

『ユウヤ！ クリスカを助けて!!』

と懇願した

それを聞いたユウヤは、グツタリとしているクリスカを見てから

『分かった。俺に任せろ』

と言って、イーニアをコクピットの外に出してから、二人乗り席後部のクリスカに、手を伸ばして肩に触れた

その時だった

『ぐ……ああああああ!』

突如クリスカが、身悶え始めた

『つつ!?! まさか、禁断症状か!?!』

ユウヤの推察は、正解だった

クリスカに施された強化施術、並びに戦闘前に投与される薬物

その禁断症状が、クリスカの身を苛んでいた

その華奢な体を、ユウヤは力強く抱き締めながら

『衛生兵！ 来てくれ！ 衛生兵!!』

と声を上げた

そこに

『はいはい！ 退いて!!』

と束が現れた

『ドクター束!?! なんで信濃に!?!』

『データリンクで、君が強化人間機を捕獲したことを知ったんだよ』

ユウヤが驚いていると、束はそう言いながらクリスカの症状を見て

『うん、これなら……手持ちで、対処出来るっ!』

と言つて、腰のポシエットから無針注射を取りだし、クリスカの腕に当てて、スイツ

チを押しした

そして、容器内の薬が無くなった数秒後、クリスカの体から力が抜けた

それと同時に、クリスカの呼吸が安定した

それを見た束は

『よし……この子を、医務室に運ぶよ。手伝って』

と近くに來た衛生兵に言った

それを聞いた衛生兵は、敬礼した後に担架の準備を始めた

そこに、ユウヤが

『随分、処置が手慣れている……』

と呟いた

それを聞いて、束は

『そりゃまあ、一年近く強化人間にされた子の治療をしてきたからね……』

と呟いた

そして、クリスカが担架に固定されたのを見て

『それじゃあ、束さんは彼女の治療を始めるから……君は、自分のやるべきことを』

と云って、格納庫から離れていった

それを見送ったユウヤは、近くの整備士に

『式型の整備状況は!?!』

と問い掛けた

すると、その年若い整備士は

『今現在、簡易整備と平行して推進材とエネルギーの充電中です。最短で180秒掛か

ります！』

と答えた

それを聞いて、ユウヤは

『分かった！ 俺は、パイロットスーツの酸素を補給してくる！ 機体は任せたぞ！』

と告げて、格納庫端に有る待機部屋の方に向かった

そこで、パイロットスーツの酸素を補給するのだ

ユウヤは、パイロットスーツを脱ぐと汗を拭きながら

「後少しか……俺でも分かる……今が、この戦争の最終局面だ……」

と呟いた

そして、置かれてあったパツクで水分を摂取

酸素の補給が終わったパイロットスーツを着て、待機部屋から出た

すると、先程の年若い整備士が近寄ってきて

『ブリッジス中尉、機体の簡易整備と補給が終わりました！』

と報告してきた

それを聞いて、ユウヤは

『ありがとうよ。それじゃあ、行ってくるぜ！』

と愛機に取りつき、コクピットに入った



それを見た整備士は

『御武運を!!』

と言つて、敬礼しながら離れた

その後ユウヤ機は、カタパルトにより、再び漆黒の戦域に舞い戻っていった  
仲間達と共に、戦うために

## 壊滅する艦隊

三竦みの戦いは、ある節目を迎えようとしていた

その理由は、一つ

機体のエネルギーだった

フリーダムとプロヴィデンスは、核駆動

それに対して、オーガカラミティはバッテリー式である

もう、その限界間近だった

だが、離脱すら困難だった

実力が拮抗しているからこそ、三竦みで膠着状態だったのだ

もし、離脱する素振りを見せれば、即座に撃破されるだろう

それほどまでに、この戦域は際立ったパイロットしか居なかった

『見つけたぞ、魔女！』

義之はそう言つて、ビームライフルを撃った

それに気付いたセルベリアは、機体を宙返りして回避

義之機から、距離を取った

だがその時、オーガカラミティのкокピット内で警報音が鳴り響いた  
その理由は、バッテリーが危険域に入ったこと

『しまった!?!』

残り三割を切り、もはや攻撃にすら回せない

しかも、機体の動きすら鈍くなった

そしてその隙を、二人は見逃さなかった

二人から同時に放たれたビームが、オーガカラミティを撃ち抜いた

その数瞬後、紫電を放って爆散した

彼女の誤算は、技術部が二機のエネルギーが核駆動だと気づかなかったことである  
場所は変わり、ユーラシア連合艦隊旗艦ドミニオン

その艦橋では

「ダメです! ガンダム四機との交信途絶! IFF、反応無し!」

「我が軍の損耗率、40%を越えました! 一部では、戦線が崩壊しています!」

と悲鳴のような報告が、飛び交っていた

それを聞いたマクシミリアンは、怒った様子で

「一体、何が起きたというのだ!」

と怒鳴りながら、アームレイカーを叩いた

その時だった

「つつ!? こちらに接近する反応多数!」

「迎撃! MSを回せ!!」

CICからの報告を聞いて、グレゴールは素早く指示を下した

その指示を受けて、数機のMSが迎撃にライフルを放った

だが

「ダメです! 相手が早く、接近してくる敵機の捕捉が困難な模様!」

とオペレーターが言った

「そもそも、何機来ている!」

「相手は……12機!!」

「たった一個中隊程度、落としてみませんか!!」

オペレーターの報告を聞いて、マクシミリアンはそう怒鳴った

しかし、オペレーターは

「この速さは……初音島のガンダムタイプかと思われまます!!」

と告げた

その直後、回頭を終えた艦隊も迎撃の砲撃を開始

それに同調し、MS隊も更に弾幕を形成した  
だが、次々と閃光が走り、MSが撃破された

そして、ドミニオン前方のアガムムノン級に多数のミサイルが直撃

轟沈した

「ソーラシユ、轟沈！ アイネーンフェルト、艦橋に直撃、行動不能！」

とオペレーターが言った直後、ドミニオンの前を一機の巨影が通りすぎた

それは、ミーティアを装備したジャステイスだった

「あのデカブツに、砲撃を集中させろ！」

とグレゴールが命じ、艦隊はその命令に従ってミーティアを追い掛けて砲撃を開始した

だが、忘れてはならない

近付いていたのは、12機だと

周囲に展開していたMSが、次々と爆散

更に、ドミニオンを衝撃が襲った

「ぐうっ!？」

「報告しろ!？」

マクシミリアンは呻き声を上げ、グレゴールは報告するように促した

すると、頭を打ったらしく血を流しながらオペレーターが

「バリアント1番2番、大破！ 艦尾右舷ミサイルランチャー使用不能!!」

と悲鳴染みた報告をした

その時、艦橋目前に一機のガンダム

ブルデュエルが陣取った

「なっ!？」

マクシミリアンが驚いて立ち上がった直後、ブルデュエルのレールガンが発射されて、ドミニオンの艦橋は吹き飛んだ

その直後、ドミニオン全体に砲撃が命中

ドミニオンは、轟沈したのだった

そして、ユーラシア連合艦隊を強襲し、ドミニオンの艦橋にレールガンを撃ち込んだブルデュエルのパイロット

まゆきは

『戦火を拡大させた報いだ……思い知ったか……』

と言って、機体を翻した

旗艦が沈んだことで浮き足だったユーラシア連合艦隊を、壊滅するために

この数十分後に、ユーラシア連合は壊滅することになる

## 友との決着

「グスルグー」

『クルト！』

二人は互いの名前を呼びながら、砲撃を放った

グスルグ機は、複合ランチャーのビームを

クルト機は、試製のビームランチャーを撃った

クルト機に装備されている、MMIER65Aビームランチャー

ユーラシア連合からの解放後に、政府主導で開発が開始された

初音島からの技術提供もあり、EU初の携帯式ビーム兵器となった

それを、ネームレス隊の整備士

カリサ・コンツェン（年齢不詳）が、自身の伝を使って入手

クルトの操縦の癖に合わせて、改修・調整したのだ

クルト機の放ったビームは、グスルグ機の撃ったビームを飲み込み、グスルグ機に

迫った

『ちいつ!?!』

しかし、それをグスルグは機体を上昇させて回避  
クルト機に、実弾を放った

それに対してクルト機は、増加装備

アサルトシユラウドの弾幕を展開

グスルグ機が撃ったバズーカのリケット弾を迎撃した  
はつきり言えば、クルトの不利は否めない

機体の性能差は、如何ともしがたいものだった

しかしそれを、クルトは自身の戦略で覆そうとしていた

クルトはそうやって、何回も不利を覆してきた

諦めずに

『流石はクルトだな！ 俺の動きを、予測しているな!?!』

「半年間、近くで見続けていたからな！」

クルトはそう言いながら、ビームランチャーを撃った

グスルグはそのビームを、ドム・トルーパーに装備されているビームシールドで防衛  
した

そして気付けば、グスルグはクルト機を見失っていた



『クルトは!?』

グスルグはそう言いながら、周囲を見回した

そこに

「ここだ、グスルグ!!」

とクルトは、真上の隕石の裏から現れて重突撃機銃を撃った

その攻撃をグスルグは回避し、ビームを撃とうと構えた

その直後、グスルグ機の背後で爆発が起きた

『ぐっ!?!』

爆発を起こしたのは、グスルグ機の後ろを漂っていたMSの残骸

クルトはグスルグが避けることも予想して、予想回避先の残骸を撃ったのである

クルトはとことんなままでに、理詰めで戦っているのだ

最小の損害で勝つために

『こ、これは!?』

「グスルグ……!」

機体の性能差を埋める、理詰め

あらゆる状況を冷静に分析し、最適な行動を割り出し、行動する

そして、ネームレスで最初にクルトの能力に気づいたのは、他ならぬグスルグだ

そのグスルグは、少しずつだがクルトに追い詰められていた

回避軌道先を読まれ先回りされ、離脱しようとしたらその先に弾幕を形成された  
これもまた、戦争の一面なのだろう

友と認めあつた二人が、互いに銃口を向けあつて、命を奪い合う  
クルトとて、出来れば戦いたくなかつた

だが、ネームレス隊の隊長として、脱走したグスルグに対処しなければならない  
そして何より、グスルグと向き合うのが自分の役目だと思つていた

友だから

『クルトおおお!!』

グスルグは雄叫びを上げながら、複合ランチャーを撃つた

ランチャーから放たれたビームは、クルト機にグングンと迫り、直撃

爆発を起こした

『……』

それを見たグスルグは、不思議とある確信があつた

それを証明するように、爆煙の中から無事なクルト機が現れた

それを見たグスルグは、今度はロケット弾を撃つた

そのロケット弾を、クルト機は機体を旋回させて回避

そして

「オオオオオオ!!」

クルトは、長刀を突き出した

その一撃は、グスルグ機の胸部

正確に言えば、コクピットハッチの隙間に突き刺さった

それを見たクルトは

「俺の……勝ちだ……」

と呟いた

そして、動きを止めたグスルグ機に取りつき、コクピットハッチを強制解放させた

そして中を見れば、グスルグが力なく座っていた

よく見れば、腹部に鉄片が深々と突き刺さっている

恐らく、先の攻撃でコクピット内の資材が刺さったのだろう

それを見たクルトは

『……グスルグ……』

と声を震わせながら、グスルグの名前を呼んだ

すると、ゆっくりとグスルグの顔が動いて

『そんな声を出すな……クルト……』

とグスルグが言った

『だが……!』

クルトとしては、捕まえたかったのだ

しかし、今の傷ではそう長くは保たないのは明白だ

『誇れ……お前は、勝ったんだ……そして……こんなことを頼むのは……筋違いかもしれない……だが、俺の最後の頼みだ……』

『なんだ……』

クルトがそう言うと、グスルグは震える手でジエネシスを指差し

『あれに……地球を撃たせるな……』

と言った

『第三射……その照準は……モスクワだ……』

『なっ!?!』

ユーラシア連合首都、モスクワ

そこに、ジエネシスの照準が定められているという

『ダハウは……二射目でユーラシア連合が降伏しなかったから……モスクワを照準に定めた……幾らユーラシア連合とは言え……首都を撃たれたら……降伏するしかない……』

確かに、その通りだろう

幾ら大国と言っても、首都を撃たれたら、どうすることも出来ない

『だが……そんなことをしたら……どれだけの人が死ぬか分からない……だから……アレを……止めて……』

そこで、グスルグは息絶えた

『グスルグ……！』

友の死に、クルトは唇を噛み締めながら涙を流した

だが、何時までも泣いていられない

頼まれたのだから

クルトはグスルグの遺体を放し、身を翻した

そして、愛機のコクピットに入ると

「グスルグ……その頼み……果たしてみせるっ！」

と言って、機体を加速させた

友の頼みを、果たすために

## ジェネシス攻防戦 1

『クルト!』

『……グスルグは?』

ジェネシスに向かっていたクルト機に問い掛けてきたのは、クルトの副官をしてくれている、リエラ・マルセリスとイムカである

『……グスルグは、死んだ……そのグスルグの最後の頼みを、果たしに行く……』

二人からの問い掛けに、クルトはそう返答した  
すると二人は

『最後の、頼み?』

『……まさか、あの巨大兵器?』

とクルトの進路上にあるジェネシスを見た

『ジェネシスの次の照準は……地球、モスクワだ!』

『つつ!?!』

『なっ!?!』

クルトの言葉を聞いて、リエラだけでなく、冷静なイムカですら驚きの声を上げた  
もしジエネシスが地球に照射されたら、その被害は甚大

動植物は七割が死に絶えて、地球は莫大な放射能に汚染されてしまう  
『そんなこと、させるか!』

クルトはそう言うのと、機体を加速させた

『クルト!』

『待て!』

その後を、二人は追い掛けた

そして、三人がある程度ジエネシスに近づいた時

『それ以上は、行かせないわよ?』

と声が聞こえた

『つつ!?!』

『オープンチャンネル!?!』

『散開!』

クルトが指示すると同時に、三機は散開し、降り注いだ砲撃を回避した

そして、見つけたのはグスルグ機と同型機

ドム・トルーパー

リディア・アグーテだった

『クルト、先に行つて!』

『あいつは、私達がなんとかする!』

リエラとイムカという言葉聞いたクルトは、少し悩むと

『頼んだ!』

と言つて、先に進んだ

それを見たりディア機は、クルト機に複合ランチャーを向けた

だが、二機の砲撃に遮られて

『クルトの邪魔はさせない!』

『私達が、相手!!』

と二機が立ちはだかった

『邪魔よ、貴女達!!』

リエラとイムカの二機を見て、リディアは苛立たしげにそう声を上げた

場所は変わり、ジェネシス付近

そこでは、ダルクス側の防衛隊と帝国軍を中心とした連合MS隊が激しく交戦してい

た

そこに、大和型三隻が近づき



『ローエングリン、撃てええ!!』

三隻からほぼ同時に、陽電子破城砲が放たれた

放たれた陽電子破城砲は、グングンとジェネシスに迫り、直撃した

だが、破壊どころか損傷を負ったようにも見えない

それを見たらしく、大和艦長の小沢提督が

『バカな!? 確かに直撃した筈だ!』

と驚きの声を上げていた

そこに、オペレーターが

『ジェネシスの質量を大き過ぎるのと、ジェネシスのPS装甲の出力が、予想以上に高い

ようです!』

と報告した

戦略級兵器ジェネシス

核が爆発した際に発生するガンマ線を、幾度もコヒーレントさせて撃つという兵器だ

そのコヒーレントさせるには、特殊な鏡を必要とする

しかし、ジェネシスサイズで用意すると、かなりのコストが掛かってしまう

そこで、ダルクス軍の科学者達は、PS装甲を代用することにしたのだ

PS装甲の表面を可能な限りまでその特殊鏡に近くして、相転移させることに成功

それにより、ガンマ線をコヒーレントさせることに成功

そして予想外の効果で、ビームに対しても強くなったのだ

そこに、ジェネシスのサイズと出力が重なり、陽電子破城砲すら防いだのだ

こうなったら、外からの攻撃による破壊は難しいと見るべきだろう

ならば、取れる方法は一つ

『誰でもいい！ ジェネシス内部に突入し、内部の機関を破壊しろ！ そのためならば、特殊爆弾の使用も許可する!!』

小沢はそう判断した

特殊爆弾

それば、JEUが共同開発した戦術核に匹敵する超高性能爆薬だ

それを内部で爆発させれば、いかなジェネシスだろうと破壊出来る筈だ

しかし、問題が一つ

やはり、ダルクス側もジェネシスを破壊するには内部突入しかないと分かっているのか、膨大な数のMSと艦隊が防衛線を形成していた

その防衛線を突破しないと、突入など出来ない

『勇猛なる全軍！ ここが正念場だ！ 一気呵成に攻撃！ なんとしても、防衛線を突破せよ！』

小沢がそう指示すると、艦隊は次々と砲火を放ち、MS隊は一気に攻勢に出た  
『もう一度、陽電子破城砲を撃つ！ 全機、射線中に入るなよ!!』

小沢がそう言うのと、大和型は砲撃を続行しつつ陽電子破城砲のチャージに入った  
それを察知したのか、ダルクス軍のMS隊が攻撃を大和型三隻に集中させ始めた  
しかし、それを阻もうと連合MS隊も更に苛烈に攻勢に出た

まさに、一進一退の攻防戦

地球の運命を決める戦いは、佳境に突入した

## ジェネシス攻防戦2

「退けえ！」

クルトはそう声を上げながら、一機のグフを撃破

速度を維持したまま、ジェネシスに向かった

「戦況は……やや不利か」

ジェネシス付近の攻防戦を見たクルトは、小さく呟いた

拠点を攻めるには、相手戦力の三倍必要と言うのが定説だ

その点、JEU軍の数はようやく互角といったところ

不利は否めなかった

「つつ!?!」

その時クルトは、自身の直感に従って回避機動を取った

その直後、先ほどまでクルト機が居た場所を一発のビームが走った

そしてクルトは、素早く敵を視認した

三機目のドムトルーパーだった

「グスルグと同型の機体……！」

クルトが認識すると、最後の一機ドムトルーパーは、ビームシールドを展開したまま、ランチャーを連射してきた

クルトはその攻撃を、機体を左右に振って回避

突撃機銃を撃った

もちろん、それで撃破出来るとは思っていない

事実、機銃の弾は全てビームシールドで防がれた

「やはり、そのビームシールドは厄介だなー」

クルトはそう言つて、盾のガトリング砲を撃った

この弾も、ビームシールドで防がれてしまった

だがここまで、クルトの想定内だった

そのドムトルーパーに、バズーカと機銃が複数の方向から放たれた

その攻撃をドムトルーパーは回避し、攻撃してきた機体を視認した

それは、422部隊

ネームレスだった

ネームレス隊は全員が特化した技量を誇り、MSにも反映されていた

一人は狙撃手として特化していて、機体のジン・トナーDADVも頭部に三眼式光

学センサーを追加していて、相手のレーダー範囲外から狙撃を命中させることが出来る  
またある一人は、近接白兵戦を得意としていて、乗機のジン・トナーDADVは推  
力が強化されていて、機体各所にナイフが装備されている

以上のように、各々に合わせて調製と装備が許されている

「お前達、頼んだ！」

とクルトが言った直後、巨大な盾と大剣を装備したジンがドムトルーパーに突撃した  
ドムトルーパーは迎撃にと、ランチャーを連射するが、盾は悉くを弾く  
複合装甲式の大型盾は、その役割を十全に果たしていた

その盾を前面に押し出して体当たりすると、その機体は大剣のスラスターを噴かした  
大剣の一撃を受けたら不味いと気づいたドムトルーパーのパイロット

ジグ大尉は、一気に機体を後退させた

『グスルグさんから聞いていたが、確かに強い!?』

グスルグからネームレスの強さを聞いていたジグだったが、その強さは予想を越えて  
いた

ジグ大尉は17という若さだが、その操縦技能は非常に高く、ダハウの片腕と目され  
ている

そのジグと互角に戦っているのだから、ネームレス全員の練度が伺えるだろう

本当ならクルト機を攻撃したいが、他の機体を無視は出来なかった  
無視したら、手痛い攻撃を受ける

そう言った確信があつた

その証拠に、先ほどの盾持ちの後ろから両手でバズーカを持った機体が現れて、バズーカを撃つてきた

その狙いも、見事だった

一発目から避けられるか際どい狙いで、二発目以降は回避機動先を予測してきていた  
『ええい!!』

その攻撃をジグは、ドムトルーパーの攻勢防御機構

スクリーミング・ニンバスを発動し、強引に突破した

その直後、そのバズーカ持ちが僅かに横に逸れたかと思えば、一発の銃弾が飛んできた

『つつ!?! 狙撃か!?!』

その一発は辛うじて避けたが、かなり際どかった

そしてジグは、改めてネームレス隊の強さを確信した

確かに、一人一人も強い

だが、今は連携も重なっている

まさに、強敵だった

『だが、タダでは通さない!! ダハウ様の為にも!!』

ジグはそう声を上げて、ネームレス隊と交戦を開始した



# 完全覚醒

「ああああああ!!」

『はあ!』

義之とダハウの戦いは、苛烈になっていた

セルベリアが居なくなつたことで、互いに意識が集中された結果だ

ビームの網が形成され、互いを追い込もうとする

しかし、それを掻い潜り、光刃を振る

光刃がぶつかる度に、激しく火花が散る

時にはデブリを利用して強引に方向転換し、交差する

だが、中々勝負は着かないでいた

「いい加減!」

『墜ちろ!!』

二人はそう言つて、互いにビームを撃つた

二人が撃つたビームは、丁度中間で激突

周囲に、エネルギーによる衝撃を撒き散らした

それを受けて、幾つものデブリが高速で動き回る

デブリの中には、非常に高密度超重量の物がある

いくらPS装甲とはいえども、当たれば機体に掛かるダメージはかなりのものになる

当たる訳にはいかず、二機は一度離脱

ある程度移動すると、また戦闘を開始した

もう幾度となく繰り返し返された、互いへの攻撃

ほんの僅かな隙を狙い、ビームを撃ち続けた

だが、未だに双方共にダメージ無し

直撃どころか、掠りすらしていないのだ

これは、機体性能とパイロットの腕

その両方が、差が無いことを示していた

「っ！っ！っ！？」

だがそこに、ダハウ側に援軍が来た

一隻のナスカ級と、中隊規模のMS隊が義之機に攻撃してきた

だが、義之はそれを容易く回避

振り向き様に、ビームライフルを連射した

特に狙わずに撃ったビームは、悉く命中

M S 一個小隊を撃破し、更にナスカ級の艦橋に命中した

それにより、ナスカ級は一時停止

残存 M S 隊も、散開した

その時、義之は自身の直感に従って木の葉落としと呼ばれる機動マニユバをした

本来は有重力下での機動だが、義之は機体各所のスラスタを噴かして擬似的に再現した

その直後、義之機が先程まで居た場所にドラグーンによるビームが、あらゆる角度から殺到していた

「あつぷ……!?!」

『よく避ける!!』

義之は息を飲みつつ、反撃

レールガンを放った

しかしダハウ機は、レールガンを螺旋機動で回避

ビームライフルを撃った

「しゃらくせえ!!」

それを義之は、左手に握ったビームサーベルで弾いた

「見えてるんなら、対処出来る!!」

義之はそう言つて、ある方向にライフルを撃つた

その直後、一基のドラグーンを撃ち抜いた

『むっ!?!』

「だから……見えてるんだよお!!」

義之はそう言つた直後、バラエーナとライフルをほぼ同時に発射

更に二基のドラグーンを破壊した

今この時、義之のSEEDは今だかつて無い程に稼働していた

視界に捉えている情報を、一瞬にして把握

そこから、一瞬で最適な行動を導きだして、行動

まさに、覚醒

否、完全覚醒を義之は果たしていた

そしてフリーダムは、その義之の操縦に応えた

瞬間的に入力される20近い秒間コマンド

そのコマンドが入力された直後、フリーダムは武装の一斉解放

ハイマツトフルバーストで、敵残存MS隊を全て同時に撃破した

『貴様!!』

「この戦争……終わらせる!!」

義之はそう言って、フリーダムのスラスタを全開にして、プロヴィデンスに肉薄した

戦争の終わりを信じて

## 合流

「邪魔だあ!!」

直哉はそう声を上げながら、ビームサーベルを一閃

一機のザクを両断

その直後、振り向き様に複合拳銃を連射して、グフを撃破した

直哉は一路、ジェネシスに向かっていった

通信でジェネシス戦域が膠着状態と聞いたので、少しでも状況を好転させるつもりだ

「どけえ!!」

直哉はそう声を上げて、一機のザクのコクピットの蹴りを叩き込んだ

直哉機の蹴りにより、そのザクのコクピットは陥没

行動を停止させた

しかし直哉機は、それを確認せずに離脱

ジェネシスを目指した

だがそこに、数多の砲撃が殺到

直哉機は、機体を翻して回避

攻撃してきた敵戦力を視認した

ローラシア級と砲撃仕様のザク

そして、グフが居た

MS隊は、二個中隊規模

やはり、かなりの戦力をジエネシス近郊に配置

さらに集結させようとしていたようだ

「ちいっ!？」

直哉は殺到してくる砲撃を、乱数機動で回避

反撃に複合拳銃を撃った

しかし、距離が有ったために回避されるか防御された

やはり、バスターライフルを失ったのは痛かった

だが、今さら下がれない

もはや、戦争は最終局面に入っており、後退すれば戦局に影響が出かねない

「くあっ!？」

直哉はローラシア級とザクから放たれた砲撃と、ミサイル群を回避

どう対処すべきか、考え始めた

そこに

『こいつを、使え!!』

と知った声が聞こえて、直哉機の前に一丁のライフルが来た

それを掴んだ直哉は、ライフルが飛んで来た方向を見た

その先には、ストラトス隊とホワイトファンング隊が居た

直哉機が掴んだのは、71式改ビームライフル

Eパックは、バスターライフルと共通規格だ

「つつー！」

そして直哉は、ザクの砲撃を回避しつつライフルを撃った

直哉機が撃ったビームは、そのザクの巨砲

オルトロスに命中し、吹き飛ばした

そこに、ストラトス隊とホワイトファンング隊が次々と砲撃を放った

緑色のザクや青のグフは、回避しきれずに直撃を受けた

だが、黒い塗装の機体は、容易く回避

反撃してきた

「あの黒いのは、親衛隊か!？」

相手の力量から、直哉はそう直感した



それほどに、他の機体とは隔絶した技量を感じた

『こいつら、ヤルしかないぞ！』

『強攻突破して、後ろから攻撃されたら堪らないからな！』

という一夏と唯依の提案を受けて、直哉は決めた

「ヤルぞー！」

直哉がそう言った直後、ストラトス隊とホワイトフアング隊も動いていた

素早く散開し、機動戦を仕掛けた

砲撃仕様装備は砲撃強化の代わりに、機動性に難があつた

やはり、トレードオフなのだろう

しかし、その火力は強力で、集中砲撃を受ければ、艦といえども一溜まりもない

その機動性と近接戦闘能力を補うために、グフが居るのだろう

グフの機動性は高く、最高速度はエールストライクに匹敵するだろう

そして近接戦闘能力は、ビームソードとビームガン

そして、ヒートウィップを装備している

ヒートウィップは捕まえた相手に、高周波を流し込む武装で、機体の電装系にダメー

ジを与えることも可能だ

『二機連携を維持しろ！ 単機で戦おうとするな！』

『了解！』

『散開、機動挾撃！』  
フラット・シザース

それぞれの隊長の指示を受けて、二隊は機敏に動く

確かに、相手も精鋭なのは間違いない

動きで確信出来る

だが、二隊も精鋭

片やガンダムに乗ることを許された、稀有な才能を有するパイロット達

そしてもう片方は、帝国近衛でも最精鋭と知られる第一大隊の名前

フアング大隊の隊長直々から、フアングの名前を冠することを許された精鋭部隊

その動きは、相手を上回った

ホワイトフアング隊は瞬く間にグフ隊を撃破し、ストラトス隊はザク隊を蹂躞

そして、ローラシア級に迫った

ローラシア級は砲撃しながら離脱しようとしていたが、時既に遅し

二隊は、そのローラシア級を包围

次々と、砲撃を撃ち込んだ

二個中隊の砲撃の乱打に、ローラシア級は耐えきれずに轟沈

二隊は互いの無事を確かめると、一路ジエネシスに向かったのだった

## 仲間の思い

「次ー」

と気合いの声を上げたのは、一機のグフを撃ち抜いた明久だ

そして明久は、ビームトマホークを振りかぶってきたザクの頭を切り飛ばし、盾でその機体の胸部を叩き潰した

そして、一隻のローラシア級に翼下に懸架されていたミサイルランチャーを撃ち込んだ

それによりローラシア級は轟沈

そこに、砲撃が迫ってきた

それを回避した明久は

「ナスカ級か!!」

と敵を視認した

快速を誇るナスカ級が一隻と、その艦載機らしい一個中隊のMS隊

「いくらなんでもっ!?!」

一人で相手するには、相手の数が多すぎる

その時だった

『明久!』

明久機の両脇を、次々とMS隊が駆け抜けた

それは、MSSのMS隊だった

「雄二!」

『雑魚はこっちで引き受ける! 艦を潰せ!!』

明久が雄二の名前を呼ぶと、雄二機はビームサーベルでグフのビームソードを防御  
0距離で、ビームライフルをコクピットに撃った

それを皮切りに、雄二達とダルクス軍の交戦が始まった

MSSのエースは、文句なしに明久である

その明久をナスカ級に向けるのは、戦略的に間違っていないだろう

雄二達が敵中隊を抑えてる間に、明久はナスカ級に向かった

もちろんナスカ級も、明久機を近づかせまいと、砲火を放つ

艦首の主砲や、艦の至るところに配置されている機銃

ミサイルランチャーが、弾幕を形成する

それを明久は、防御や回避

時には迎撃しながら、ナスカ級に近づいていく

「そっつー！」

そして明久は、ビームライフルを連射し艦首主砲を破壊

更に、機銃を破壊した

その隙に、残った武装

ガトリングスマツシャーの狙いを付けて

「当たれえ!!」

と全弾放った

放たれた100mm弾は、次々とナスカ級に直撃

艦橋に直撃し、ナスカ級は沈黙

その数秒後、ナスカ級は爆発しながら沈没した

それを確認した明久は、雄二達と力を合わせて、残存MS隊を撃破した

幸いなことに、致命的な損傷を負った機体は無し

それを確認した明久は、安心した様子で

「皆無事で、良かったよ」

と言った

すると、雄二が

『まあ、何回か危なかったがな。他のMS隊に助けてもらったぜ』  
と返答した

そして明久は、ジェネシスの方向を見て

「僕は、あのジェネシスに向かう……皆は、どうする？」

と問い掛けた

すると、秀吉が

『すまんが、ワシらは推進材がギリギリの者が多数居るからの……一度、補給に戻らねば  
いかんのじゃ』

と言った

それは、確かに切実だ

宇宙で推進材が切れたら、宇宙の迷子になる

『明久はどうなんじゃ？』

「僕は……うん、まだ持つね。流星は、ガンダムタイプだ」

秀吉の問い掛けに、明久は推進材の残量を確認した

明久機の推進材残量は、まだ7割り近く残っている

バッテリーも、まだ余裕があつた

「残弾が心許ないけど、まだ十分戦えるよ」

と明久が言ったら、一機のアストレイが近寄り

『ボクのがトリング弾を、上げるよ』

と明久機のがトリングスマツシャーに、弾倉を取り付けた

「工藤さん……」

『幸いにも、ボクはがトリングスマツシャーを一回も撃ってないから。弾なら余ってるんだ！ 使って！』

愛子はそう言って、予備弾倉すら、明久機に渡した

そして、離れると

『ちゃんと、帰ってくるんだよ？ でないと、優子が泣いちゃうからね？』

と言った

そんなこと、言われるまでもなし

「絶対に、帰るさー！」

明久はそう言って、ジエネシスに向かった

仲間達の思いを背負って

## 防衛線突破

「邪魔だっ！」

直哉はそう言いながら、すれ違い様にビームサーベルを一閃

一機のグフの胴体を両断

その直後、デイバインストライカーを変型させて、後ろからビームトマホークを振りかぶっていたザクの腕を掴んだ

その直後

『貫った！』

と唯依機が、そのザクを後ろから突き刺した

それを確認した直哉は、そのザクを別のザクの方に投擲

爆発に巻き込まれて損傷したのを見て、ライフルで撃ち抜いた

その連携を見た一夏達が

『俺達とより、連携がすげえ……』

『やはり、経験差が凄いからか……』



と眩きながら、次々と敵を撃破していく

彼等も十分に精銳の域で連携を行っているが、直哉と唯依の二人の連携は更に上だった

『だけど、足手まといになるつもりは……ない!!』

一夏はそう言いながら、頭部バルカン砲を斉射しグフを牽制

その隙に、セシリア機が撃ち抜いた

『だけど……防衛線が……厚い!』

鈴音は一機のザクとのつばぜり合いを制して、こちらに向かってくるダルクス軍を見た

ユーラシア連合が瓦解し、壊走した今、ユーラシア連合と戦っていた戦力を呼び戻したようだ

ストラトス隊とホワイトファンク隊の二隊に対して、レーダーは二個大隊を観測している

今の時点でそれなのだから、時間が掛かれば、更に増えるのは明白だ

『そのままじゃ……!?!』

と一夏が危惧した時、相手に黒い装甲の部隊が現れた

その動きから、精銳だと理解した

『まずっ!?!』

とシャルロットが言った

そこに

『道は切り開く! 行け!』

と現れたのは、ミーティアを装備したジャステイスだった

『副隊長方!』

しかもそのミーティアから、更にブルデュエルが離脱

今ここに、ワルキューレ隊の二大副隊長が揃ったのだ

『ははっ! 中々の数だ! 楽しませてよねっ!!』

まゆきはそう言うと、ビームサーベルを抜刀

グフのビームソードを防ぎ、至近距離でレールガンを発射

そのグフの頭を吹き飛ばすと、そのグフを盾にして突撃

相手が攻撃を躊躇っていると

『よい、やー!』

と、そのグフを蹴り飛ばし、先頭に居たザクにぶつけた

その直後、ミーティアからの大規模砲撃が放たれた

それにより、敵が敷いていた防衛線の一分に穴が空いた

『今だ、行け！』

『了解!!』

みちるの号令を聞いて、二隊は最低限の敵を撃破しつつ、突破したもちろん、ダルクス軍はそれを止めようと機体の向きを変えたが

『敵がまだ居るのに、背中を向けるなんてさ……戦場じゃあ致命的だよ!!』

その機体は、まゆき機がビームライフルで撃破

更に、他の機体にステイレット貫通弾を投擲し撃破した

そして、まゆきは

『いやあ、ミーティアに簡易的な充電コネクターがあつて助かったよ。おかげで、エネルギーは問題なしっ!』

と云つて、レールガンを連射し二機を撃破した

実はミーティアには、後付けだが簡易充電コネクターがあり、同行するMS三機までなら充電が出来るようになってあつたのだ

これは、この最終決戦が長期戦になることを予想しての改修だった

『だが、推進材は気を付けろ！ 残量には気を配れっ!』

『分かつてるって!』

しかし、推進材の補給は出来ない

だが、そこは副隊長の一人

まだまだ余裕があった

『さて……あの子達の後詰め、見事に果たしてやろうじゃないの!』

まゆきはそう言つて、ビームライフルを連射

その直後、ジャステイスが巨大なビームソードでナスカ級を両断

続けざまに、ローラシア級にミサイルとビーム砲を撃ち込んで撃沈させた

そして、離れていく二隊を見て

『無事に、帰つてきなさいよ……あんたら……!』

と言つて、まゆきはビームサーベルを抜刀

敵MS隊に突撃した

## ジエネシス攻防戦3

「しっけえー！」

と稟は言いながら、一機のザクを撃ち抜いた

そして振り向き様に、ビームサーベルを一閃

背後から斬りかかろうとしていたグフの両手を、肘辺りから切り飛ばした

その直後、そのグフは胴体を実弾でビームで撃たれた

撃ったのは、柏木機だ

その柏木機は、稟機の後ろに布陣し

『流石に、ダルクス軍の防衛線が厚いね！ なかなか、数が減らない！』

と言って、相手が放ってきたミサイル郡を迎撃・回避した

すると稟が

「しっけいと、女に嫌われるって、教わらなかつたのかねっ！」

と言いながら、次々とビームを発射

近付いてきた敵に対して、牽制をした

合わせて、柏木機も牽制射撃をしている

それにより、大多数の敵は散開した

だが、極一部は最低限の回避機動のみで接近してくる

それは、他のダルクス軍と違う黒い装甲が特徴の部隊だった

「柏木、精鋭部隊だ！」

『つつつ!?!』

稟が忠告した直後、その黒い部隊から弾幕が放たれた

その密度は凄まじく、二人は大きく散開することを余儀なくされた

しかし、黒い装甲の部隊は二人の移動先に先回り

ビームを撃ってきた

「ちいつ!!」

『くうつ!?!』

稟は持ち前の直感で回避したが、柏木は間一髪で回避

しかし、柏木機の回避先に一機のグフが居て、蹴り飛ばした

『くあああああ!?!』

「このつ!!」

蹴り飛ばされた柏木機は、一機のザクがビームライフルを向けていたが、その敵機は

稟がビームを撃ち込んで撃破

そして素早く、柏木機の手を繋いで離脱した

「無事か!?!」

『ありがとう、助かったよっ!』

稟が問い掛けると、柏木は頭を振りながら答えた

その間に、ダルクス軍全体が態勢を整えてきた

しかも、徐々に半包围しつつあった

「ちい! 後退する!」

『それが良さそうだねっ!』

稟の判断に従い、柏木も後退しようとした

だが、その後退しようとした進路に凄まじい弾幕が形成され、二機の退路が塞がれた

「つつ!?!」

『マズっ!?!』

それは、砲撃装備機と艦からの砲撃だった

艦は全力砲撃らしく、艦各所から次々と砲撃が放たれて、二機に迫ってくる

それを二機は、必死に回避し続ける

そんな間に、ダルクス軍は包围網を完成させつつあった

控えめに言っても、窮地になりつつあった

このままでは、撃破される

二人がそう思った時

『させないよっ!!』

と声がして、二人からして敵右翼に砲撃が撃ち込まれた

そして二人は、その砲撃をした人物が誰なのかすぐに分かった

『茜!』

「来てくれたか!」

二人の部隊の隊長

涼宮茜だった

しかも、茜だけではなく

『うりゃー!』

『当たれえ!』

と他の隊員も来て、ダルクス軍に砲撃をしていた

そのおかげで、弾幕が緩くなり、二人は一気に仲間と合流した

実は二人は、混戦の影響で仲間とはぐれてしまっていたのだ

だが二人は、最優先目標たるジェネシスの攻略を優先し、ジェネシスに近づいたのだ



後から、仲間達が合流してくれると信じて

そして、その信頼に仲間達は答えた

二人の危機に、見事に合ったのだ

『やっば、ジエネシスに向かってたね、二人は！』

茜はそう言いながら、腹部のビーム砲を撃って、敵のローラシア級に損傷を与えた

それにより、ローラシア級はバランスを喪失し始めた

そのフォローに、ダルクス軍の幾らかが後退

それは、茜の策が成功した証拠だった

ダルクス軍には巨大な宇宙空母が有るが、やはり戦域の艦は大事である

緊急の補給等に影響が出るからだ

その艦が損傷すれば、MS隊はフォローに回るしかない

だから茜は、敢えて損傷を与える程度で留めたのである

『よし、今っ！』

茜はそう言って、機体をMA形態に変形させた

それを見た稟は、茜の考えを察して

「行けっ！」

と茜機の一ヶ所を掴んだ

その直後、茜機は一気に加速

崩れつつあった敵右翼に、切り込んだ

ダルクス軍は迎撃をしてくるが、茜機は機体を素早く翻させて回避

『土身!』

「分かってる!」

茜が声を掛けた直後、稟は機体のストライカーパック

ノワールパックのレールガンを連射

瞬く間に、遠距離装備のザクを数機撃破した

その瞬間

「つつ! 涼宮! 回避しろ!」

と稟は、何かを感じ取って声を上げた

それを聞いた茜は、機体をMA形態からMS形態に戻して乱数回避機動を取った

その直後、二機をあらゆる角度からビームが襲ってきた

「つつ! これはっ!」

『くううう!?!』

二機は辛うじて回避

そして攻撃してきた敵を探し、見つけた

異様な圧を放つ敵を

「あれは……」

『ザクだけど……知らないバックパックを装備してる！』

それは、黒い装甲の一機のザク

しかしその背中には、まるで後光を彷彿させるバックパックが装備されていた

その機体の名前は、プロヴィデンスザク

今ダハウが乗っているプロヴィデンスの、試験機である

「なんだか分からんが、殺るしかないのは変わらないか……」

『邪魔になるしねっ！』

茜のその言葉を合図に、プロヴィデンスザクはドラグーンを射出し放ってきた

「涼宮！」

『分かってる！ 01から全機！ 絶対に足を止めないで！ 常に周囲に気をつけて

!!』

『了解!!』

茜の指示に従い、レーヴァテイン隊は一気呵成に動き始めたのだった

## ジェネシス攻防戦4

「この数は……！」

ジェネシス宙域にて、唯依はダルクス軍の数に押されていた

唯依達二個中隊に対して、相手は二個大隊は居る

今はなんとか無事だが、このまま戦えば何時かは犠牲が出るのは必至

そうなる前に、ジェネシスに行くためには

「なんとか、突破口を開くしかっ！」

と判断した

そこに

『こちらネームレス1、合流する』

と、通信が入った

その直後、一機のシグー・タイフーンが割って入った

そのシグー・タイフーンの胸部には、口を縛られた犬のマークがペイントされている

「ネームレス1……クルト・アーヴィング大尉か！」

クルト機は何処で入手したのか、両手で巨大なスラスタ兼プロペラントタンクを掴んでいた

そしてある程度敵に近づくと、それを離れた

その直後、MSという重量が無くなったスラスタ兼プロペラントタンクは、勢いを上げてダルクス軍に突っ込んでいった

ダルクス軍はそれを迎撃するために、弾幕を形成した

一糸乱れぬ弾幕形成に、ダルクス軍の統率が非常に高いレベルで纏まっていることが分かる

『だが、今回はそれが命取りだ』

クルトは冷静にそう言って、一機のグフの頭を撃ち抜いた  
いつの間にか、大分接近していた

そして接近していたのは、クルト機だけではなかった

『余所見っ！』

と直哉機が、デイベインストライカーのクローでザクのコクピットを潰した

その二機を撃破しようと、他のダルクス軍の意識が二機に集中した

そこに

「私達を……忘れるなっ！」

『俺達もなっ！』

ホワイトフアング隊とストラトス隊が突撃した

二個中隊の突撃

本来ならば、数で勝るダルクス軍は二隊を押し潰せるはずだった

だが二隊は、敢えて乱戦を挑んでいた

しかも、IFFを外すという賭けもしてまで

だが、その賭けは成功した

ダルクス軍は味方誤射を恐れ、攻撃出来ないでいた

その間に、二隊は盛大に暴れた

隊長機らしいグフを撃破し、ローラシア級の艦橋にビームを撃ち込み、ザクをビーム

サーベルで両断した

そして、一気に突破した

『このまま、ジェネシスに！』

『了解！』

クルトの言葉に従い、二隊はジェネシスに向かった

後方からビームやミサイルが来るが、それはまばらだ

どうやら、ローラシア級の救援に動いたようだ

「クルト大尉、感謝します。貴官のおかげで、あの防衛線を突破出来た」  
『いや、俺としてもあの防衛線は突破したかった……亡き友との約束を果たしたかったからな』

唯依の言葉に、クルトはそう言った

「亡き友……ですか……」

『ああ……故あって、途中で敵になってしまった友だ……』

クルトのその言葉に、唯依はどう言うべきか迷った

その間に、二隊はジエネシスに接近

資材搬入口を目指した

そこから突入するために

## 思いの激突

「いい加減にい!!」

『墜ちろっ!』

義之とダハウは、互いにそう言いながらライフルを撃った

二人の撃ったビームは、丁度中間で激突

周囲に、衝撃波を撒き散らした

この時、二機は損傷していた

フリーダムは、左肩の装甲と右足が膝から喪失

プロヴィデンスは、ドラグーンを半数

更には、左腕が無くなっている

だが、二人は止まらなかった

否、止まらない

ダハウは、長年虐げられてきた同胞達の独立のために

義之は、地球のために



互いに譲れぬ思いのために、戦いを止めない

『貴様には分かるまい、英雄よ！ 長年虐げられ、妻子や家族を失った我等の怒りが！ 憎しみが！ ユーラシア連合は、確かに敗北している！ しかし、奴らにとつては一つの敗北に過ぎない！ また新しい指揮官が据えられて、我等に牙を剥く！ そうなる前に、かの国を滅ぼす!!』

「そのために、10数億の生物を殺すのか!? 一国を滅ぼすために!!」

ドラグーンからのビームを、義之はビームサーベルで弾き、バラエーナを撃った。放たれたビームは、プロヴィデンスに迫るが、ダハウは回避し

『50年の間虐げられた同胞の苦痛に比べれば、些事だ!』

と言つて、ライフルを連射した

そして、続けて

『初音島には、感謝している！ ユーラシア連合から亡命してきた同胞達を、多く受け入れてくれたことにはな！ しかし！ 地球という環境が、ユーラシア連合のような奴らを産み出した！ だから私が、大罪人の名を背負い、地球を汚す!!』

と叫び、残った武装を一斉に撃った

その攻撃を、義之は盾で防いだ

そして

「なぜ、他国を頼ろうとしない！　こちらは、そちらを独立国として認めようと準備していた！　そちらのスパイからの報告で、把握していた筈だ！」

と言った

それは、杉並からの報告だった

今初音島内部には、少なくとも数人のダルクスのスパイが紛れ込んでいると

敢えて泳がせながら、捕縛するタイミングを伺っているようだ

『確かに、初音島はその用意が進んでいることは知っている……しかし、他の国々では遅々として進んでいない！』

「くっ!?!」

帝国、EU、自由ユーラシアは、未だにユーラシア連合と交戦下であり、ダルクスを独立国として認めていいのかと議論が繰り返されていた

どうやら、それも把握しているようだ

『もう遅い！　もはや、止められんのだ!!』

「くそがつ!!」

ダハウの言葉に、義之は悪態を吐きながら弾幕を回避

ビームサーベルを、構えた

「……もう遅いというのなら、俺が止める！　罪人となる前にな!!」

『やれるのならば、やってみせろ!!』

これが、二人の交わした最後の会話だった  
死闘の結果は、どうなるのか

## 託す思い

『あんたら、しつこいのよ！』

『悪いけど！』

『諦めるわけには、いかないっ！』

リディアの悪態混じりの言葉に、リエラとイムカの二人は気合いの声を上げながらリディア機に肉薄し、攻撃を繰り返した。

リエラとイムカの二人は旧式機だが、二人の連携にリディアは押されていた。

何よりの差は、機体への熟練度だ。

リエラとイムカの二人は、前身機を含めるとそれこそ年単位の熟練度に達する。

それに対してリディアは、漸く一ヶ月になる。しかもリディアは、実戦経験は皆無だった。

それが、リディアと二人の差だった。

リディアは複合ランチャーのバズーカを撃つが、弾切れになり弾倉を交換しようとした。しかし、その隙をリエラは見逃さずに、重突撃機銃を単発発射。

その弾丸が弾倉を穿ち、爆発を起こした。

『ぐうつ!!』

『貫った!』

爆発を起こす直前に弾倉は放していたが、リディア機はバランスを喪失し、そこにイムカが切り込んだ。しかし、リディアは強引にバランスを直すと

『来るんじゃ、ないわよっ!』

と声を上げながら、複合ランチャーのビームを撃った。

ビームはイムカ機の右肩に直撃し、イムカ機は右腕を肩から喪失した。だが、イムカ機は止まらず

『ああああああああ!!』

雄叫びを上げながら、リディア機に迫る。

『つつ!!』

リディア機はそんなイムカ機を撃墜しようと、複合ランチャーを構えて撃とうとした。だが、数発の弾丸が複合ランチャーに命中した。

『ちいつ!!』

『行って! イムカ!!』

それは、リエラ機の援護だった。

リエラ機はイムカ機に当たらないようにと、位置を変えて重突撃機銃を斉射。

それが功を奏し、リディア機の複合ランチャーを破壊した。

そして、リエラ機の援護を受けたイムカ機は右腕から離れた専用武装たるヴァールを  
掴み

『終わりだああああ!!』

『舐めるな!』

声を張り上げながら、ヴァールを振り下ろした。

専用武装、ヴァール。

これは、彼女が発案し422整備班が開発した複合武装である。

機銃、バズーカ、大剣の三つの武装が合わさっており、使いこなせばかなり有用な  
武装である。

しかし、かなりヘビー級の武装になってしまい、使いこなせたのは結局彼女のみだっ  
た。

しかしイムカは、そのヴァールにより多大な戦果を挙げていて、軍からはイムカ機専  
用武装とすることを許された。イムカの戦果は、EUの七英雄に迫るものがあり、それ  
ほどの戦果を挙げたのは快挙だった。

そして、イムカ機が振り下ろしたヴァールは、リディア機を右肩から腰まで両断した。

しかし、リディア機が最後に抜いたビームサーベルが、イムカ機の腰に刺さった。

『イムカ！ 脱出して！』

『つつ！』

リエラが脱出するよう促すと、イムカはコクピットハッチをパージさせて、椅子を蹴って外に出た。

それを、近づいていたイムカ機が回収した。

『ぐっ……近づいたり、ダメだったわね……けど、出来ることはしたわ……ねえ、グスルグスル……』

それが、リディアの最後の言葉だった。

その数秒後に、リディア機は爆散。それを見たりエラは

『クルトを助けに行きたいけど、推進材と弾薬が、もう限界……』

と悔しそうに呟いてから、ジエネシスを見た。

激しく閃光が瞬き、炎の華が咲いている。

終幕は、近づいてきていた。

## 内部突入

『……見えた!』

その声を上げたのは、その機動性故に先行していた直哉機で、ジエネシス内部に突入するためのハッチを見つけたのだ。

しかし、その近辺には黒い装甲のMS隊が展開しており、そちらも直哉機を捕捉しようだ。

次々と砲撃を放ち、高密度の弾幕を形成した。

普通ならば、大きく回避するか防御で足を止めるかだろう。しかし、直哉はそのどちらでもなかった。

『邪魔ああああああ!!』

と雄叫びを挙げて、ビームサーベルを左手に保持し、そのビームサーベルでビームを弾き、迫ってきたミサイルは頭部のバルカン砲で迎撃し、機銃弾はVPS装甲で耐えた。

まさに、強行突破としか呼べないその行動に、ダルクス軍は驚愕からか、僅かに行動が鈍った。



そこに、閃光が走った。

直哉機から遅れること僅か、直哉機の後方に展開していたストラトス隊とホワイトフアング隊が砲撃を開始したのだ。

そのうちの一発が、一機に直撃し貫通。真空の宇宙に炎の花を咲かせた。

それで二隊の接近に気付き、一部が二隊を迎撃するために分火した。

だが、それによって直哉機を阻んでいた弾幕の密度が落ちた。

高密度で止められなかったのに、密度が落ちたらどうなるのか。

その結果は、火を見るより明らかだった。密度が落ちた隙を突いて、直哉機は一気に肉薄。蹂躪を開始した。

ビームサーベルが振るわれる度に、敵機が切り裂かれて爆散する。

そんな中直哉は、背後から襲撃してきたザクの胸部にディバインストライカーのクローを叩き込んだ。

そのクローの一撃は、ザクのкокピットブロックを押し潰した。

すると、接触通信により

『この……バケモノが……！』

とうめき声が聞こえて、次の瞬間には血を吐いた音が聞こえた。

それを聞いた直哉は

『バケモノで十分だっ!』

と返しながら、更にビームサーベルをまるで獣の爪のように振るった。

それにより、次々とダルクス軍のMSは残骸に成り果てる。テストメントはまるで、咆哮を上げて暴れる獣のように、縦横無尽に駆け抜けて、ダルクス軍を撃破した。

そして、ダルクス軍を突破した二隊はハッチに接近すると、ハッチに対して集中砲撃し破壊した。

確かにジエネシスは特殊なPS装甲により、戦艦の主砲や陽電子破城砲すら耐えた。

しかし、ハッチは開閉のために装甲が薄く、しかも隙間がある。

だから、破壊出来た。

それを見た直哉は、即座に内部に突入した。

その後に、二隊も突入しようとした。だが

『……すまない』

と直哉は呟き、ダイバインストライカーを展開させた状態でパージした。

『直哉!』

『何を!』

それにより、二隊は中に入ることを拒まれて足止めされた。

『すまん……だが……効率的に破壊するには……このほうが手っ取り早いんだ……死ぬ

のは、俺だけで十分だ……」

『直哉ああああああ!!』

直哉の眩きを聞いた唯依は、直哉が何をするつもりか気付いた。

直哉は、自爆するつもりなのだ。

## 決着と説得

『どのみち、我々の勝ちだ！ もう間もなく、最終砲撃がジエネシスから放たれる！』  
『なに!?』

ダハウの言葉に、義之は驚いた。

まさか、もうすぐとは思っていなかったのだ。

『私の名は、世紀の大罪人として歴史に残るだろう……だが、必要なことなのだ！ あの地球という星がある限り、我々のような立場の者が必ず現れる！ そうなる前に、私が終わらせる!!』

『させるかっ!!』

ダハウ機のライフルを避けると、義之機は背後に来たドラグーンをビームサーベルで両断し、更にビームを撃った。そのビームは避けられたが、ダハウ機のドラグーンは残り僅かになった。

しかし

『我が命尽きようとも!!』

ダハウは止まらず、ドラグーンとライフルを一斉に撃った。

その弾幕を、義之は機体を隙間に滑り込ませて掻い潜る。しかもライフルを連射し、強引にでも隙間を空ける。

『そんなこと、させるかああああ!!』

今も、地球では数十億人もの人々が必死に生きている。

その手で、未来を切り開こうとしている。だというのに、それを遮らせる訳にはいかない。

『ダルクス人の気持ちも分かる！ だが、未だに地球に残っているダルクス人のことはどうするつもりだ!?!』

『同胞殺しの罪は、私が背負おう!!』

義之の問い掛けに、ダハウはそう答えながら義之機に蹴りを放った。

それを義之は回避したが、その先ではドラグーンが砲口を向けていた。

『くっ!?! がっ!?!』

ドラグーンの砲撃は辛うじて避けたものの、ダハウ機の蹴りは避けられなかった。

しかし義之は、一撃を受けながらもビームサーベルを逆手持ちで抜刀。ダハウ機の右足を切り飛ばした。

『ぬっ!?!』

『その気概があるのなら、なんで他の方法を考えなかった!? 他にもあったはずだ!!』

義之は叫びながら、持ち替えたビームサーベルを一閃し、頭を切り飛ばした。

『なんとしても……阻止してやらあ!!』

義之はそう叫び、ビームサーベルのリミッターを解除。

倍以上に伸びた光刃を、ダハウ機に突き出した。

『ぐうっ!?』

ダハウは自機を後退させて避けようとしたが、間に合わず

『殺<sup>と</sup>った……』

ビームサーベルは、ダハウ機の胸部を深々と貫通していた。

そして、義之機がビームサーベルを放して離れた数瞬後、プロヴィデンスは爆散した。

同時刻、ジェネシス内部

『はいか……』

直哉機は、ジェネシスの中心部に到達した。

爆発させる核をカートリッジ形式にして、複数個同時に爆発させてガンマ線のみを外に出すための機構。

まさに、ダルクス人の叡知の粋が集まった区画だ。

その機構を徹底的に破壊すれば、発射出来なくなるだろう。

しかし、何時発射されるのか分からないのに、一つずつ破壊するには時間が足りない。だから直哉は、出来るだけ中心部に近付くと、操縦悍下のコンパネを叩き、キーボードを出した。

それを視認した直哉は、キーボードを素早く叩き始めた。

テストメントの常温核融合炉の安全装置を解除して、暴走・自爆させるためである。

『安全装置……解除……核融合炉、暴走開s……』

と直哉が呟いていた、その時だった。

『直兄!!』

と聞こえない筈の声が聞こえた。

そこに一機のMS、山吹色の龍閃が来て

『生きようよ、直兄!!』

と再び、円夏まどかの声が聞こえた。

『唯依……連れてきていたのか……』

『ああ……篠ノ之博士の薦めでな……』

その時になって分かったが、よく見れば唯依機のコクピットブロックが僅かに大きくなっている。

どうやら、二人乗り仕様のようだ。

『よく、退かせたな……』

『忘れてないか？ お前の隊には、現場での工作と電子工作が得意な奴が居るだろう……』

直哉の問い掛けに、唯依はそう答えた。

通路にて直哉は、デイバインストライカーをクロー形態にして展開し、突起部分を掴ませて妨害にしてきた。

しかしそれを、ラウラと簪が協力して、機体のケーブルを繋いだ後にハッキング、クロー形態を解除させたのだ。

『直兄……確かに、私達は強化人間で、普通の人みたいに生きられないよ……寿命だつて、短い……けど、最後まで生きようよ……人間らしく……』

円夏その言葉に、直哉は俯き

『俺は……俺は……』

と呟いた。



## 終わり

それは、突如として起こった。

ダルクス軍が守っていた、巨大戦略兵器たるジエネシス。それが、大爆発を起こしたのだ。

瞬く間に、ダルクス軍に動揺が広がった。

それは、前線指揮をしていたダハウの部下の一人たるジグ少佐も同じだった。

『ダハウ大佐……！』

しかも彼は、ダハウの識別信号が無くなっていることにも気付いた。

それだけでなく、ダハウ直下の三幹部も自分だけになっていた。

そこに、みちる機が近寄り

『投降してほしい……無用な犠牲は、これ以上は出したくない』

と投降を勧告した。

それを聞いたジグは、持っていた複合ランチャーを降ろして

『……ダハウ様の、御遺言を履行する……』

と悔しそうに、呟いた。

その直後、ジグ機のバツクパツクから信号弾が打ち上げられた。

色は、青、緑、白の三色。それは、国際条約で定められている停戦信号だった。

そして、ジグは完全オープンチャンネルで

『自分は、ダルクス軍カラミティ・レーヴェンのジグ少佐！ こちらは、戦闘の意思は無

い！ 停戦した後、会談したい！』

と告げた。

こうして、ダルクス軍との戦争は終結した。

『だけど、あのジェネシスの爆破の威力と熱量は……核爆発……』

『……まさか……神崎少尉か……？』

とまゆきとみちるが話していると、山吹色の龍閃とストラトス隊が近づき

『伊隅中佐、高坂中佐……すいません、機体を失いました』

と直哉が謝罪してきた。

『神崎少尉！』

『無事だったか!？』

『……お恥ずかしながら、死に損ないました……どうやら、自分でも気づかない内に生きていたと思っています……』

まゆきとみちるの問い掛けに、直哉はそう答えた。

その言葉からは、困惑した様子が伝わってくる。

『生きなよ……』

『強化人間と言えど、お前も人間なんだ……生きる権利は十分にある……』

『……はっ……』

まゆきとみちるの言葉に、直哉が頷いた。

そこに

『いやあ……辛勝だったわ……』

と義之の声が聞こえ、大破レベルのフリーダムが小刻みにスラスタを噴かして戻ってきていた。

『大佐!!』

『弟君!!』

義之の帰還に気付いたみちるとまゆきは、義之機をしっかりと受け止めた。

『なんとか、ダハウは討ち取った……いや、機体が機能停止寸前だわ……』

『よく、ご無事で……』

『部隊の指揮は、私達がするから、弟君は着艦して……』

義之の言葉を聞いた二人は、そう言うってから義之機をアークエンジェルのほうにゆっ

くりと押した。

すると、アークエンジェルから

『義之機、着艦します！ 緊急着艦ネット用意!!』

と音姫の指示が聞こえた。

その間、直哉は近くに来た一夏機のコクピットに入った。

すると、続々と仲間達が帰還してくる。

今回の大規模戦となると、流石に無傷とは言えないらしく、損傷機が多数確認される。

暫くは、整備班は大忙しだろうことは間違いない。

『ああ……終わったか……』

義之は着艦ネットに機体が包まれた衝撃を感じながら、自分の役目が一先ず終結したのを直感した。

後は、さくらや純一の役目になるだろう。

そう思った義之は、機体が固定されてからコクピットを出て、近づいてくる恋人を見上げたのだった。

## それぞれの道

あの後、スイスにて会談が設けられた。

初音島、自由ユーラシア、日本、EU、NAU、ユーラシア連合、ダルクスによる会談だ。

後に、ザンクトガレン条約と呼ばれる条約により、ダルクスは独立する権利を得た。なお当初は、ユーラシア連合は自由ユーラシアとダルクスに属国になるよう求めたものの、二国はこれを拒否。

一度会議は紛糾したが、司会を引き受けたスイスにより事なきを得た。

そして初音島は、ユーラシア連合に対して強化人間にされた二人

直哉と円夏に対する謝罪と賠償金。更には、以前の侵攻に対する賠償金を払うよう求め、ユーラシア連合は苦渋の決断で承諾した。

直哉と円夏には、日本円にして五百億円が賠償金として支払われ、初音島には九千兆円が支払われることが決まった。

そして問題となったのは、ダルクスと自由ユーラシア連合の独立に関してだった。

日本とEUは、ユーラシア連合から復興に消費する物資の無償支援を引き出した。ダルクスと自由ユーラシア連合は、元々はユーラシア連合の支配下だったのだから、支配下に戻るべきだ。とユーラシア連合は主張した。

しかし、勿論のこと両者はそれを拒否した。

両者は今まで、ユーラシア連合により長い間虐げられてきた。

不当に下位の者として、奴隷同然に扱われ、少しでもユーラシア連合に対する不満を漏らしたら、死ぬまで強制労働所で働かされて、死んでもただ無造作に焼かれて埋められるだけ。

おおよそ、まともに人間らしい扱いをされなかった。

それを両者は指摘し、それを更に参加国が擁護した。

結果、ダルクスに関しては独立が認められた。

しかし条件として、各国の大使館の設立と軍備の縮小が求められ、ダルクスはそれを承諾した。

そして、一番の問題となったのが、自由ユーラシアの独立。

ダルクスもだが、自由ユーラシアはクーデターにより分裂した国。

しかも、その殆どが一度は人口の爆発的增加にインフレが崩壊し、吸収・合併された中国系の人々。

その独立など、断固として認めないというのが、ユーラシア連合が最後まで突き通した意見で、結果、自由ユーラシアとユーラシア連合は物別れとなつてしまい、戦争は継続する流れとなつた。

だが、軍事を取り仕切っていたマクシミリアンの戦死が大きく響き、ユーラシア連合の士気は大きく低下していた。

その後、一年もの間戦争は続き、双方に疲弊の色が見え始めた頃に、自由ユーラシアが起こした電撃降下作戦により、ユーラシア連合の首都だったモスクワが陥落。

皇族は、全員死亡が確認され、戦争は終結した。

こうして、ユーラシア連合が発端となつた戦争は終結し、世界は一旦の平和を取り戻した。

しかし、完全に平和になつたわけではない。

一部では、民族による紛争や宗教による紛争が起きているし、海賊等もまだ居る。

そんな輩から戦う力の無い人々を助けるために、軍人が居る。

だけど、今は休憩の時だろう。

長い間戦争を駆け巡っていた軍人達は、愛しの家族の下に戻つたり、恋人と過ごしたりと寛ぎ始めた。

「はあ……平和だ……」

と呟いたのは、久しぶりに実家たる芳野家の縁側で緑茶を飲んでゐる義之である。

その浴衣姿から、初見の人物は義之が軍人で英雄と呼ばれているとは、想像しないだろう。

「義之、お昼にしましょう」

「あいよー」

恋人の麻耶の言葉を聞いて、義之は縁側から立ち上がった。

近い内に、麻耶と結婚することになっており、麻耶の左手薬指には婚約指輪がさされている。

あれからだが、フリーダムは無事に修理されたが、本当に緊急時以外はストライクEに搭乗することに決まった。

勿論だが、そのストライクEは義之用に改修された物になる。

一夏は、シャルロットに告白されたが、ほぼ同時期に部隊の女子全員に告白され、固まっている間にあれよあれよと、気付けば神界式に結婚することになっていた。（主に、とある悪戯兎が主犯格）

『何がどうして、こうなった……』

というのが、一夏の談だが、言わせてもらえば、お前が鈍感なのが悪いというのが、女子達全員の見解だ。



そして、直哉と円夏だが、さくらと束の研究が進み、投与された薬物の過半数の副作用を打ち消すことに成功。

円夏は、一夏の妹として織斑家に引き取られ、直哉は初音島からの駐在武官の一人として日本帝国に派遣されることになり、帝国に居る間は篁家で過ごすことに決まった。

そして篁家だが、唯依の異母兄と判明したユウヤ・ブリッジス改め、篁祐也が篁家の家督を継ぐことになった。

祐也は驚いたが、篁家を継ぐことを了承した。

今さら、国に帰っても帰る家が無い。だったら、まだ信じられる人物の居る篁家に居るとというのが、祐也の談だった。

そして、そんな祐也の近くにはクリスカとイーニアが居る。

これは、監視という役割もあるらしい。

捕虜として帝国軍の監視下に入った二人だったが、二人に投与されていた薬物により体に酷い負荷が掛かっていた。

それこそ一時期は、命が危ぶまれた程に。

しかし、祐也が甲斐甲斐しく病院に行き話し合い、更に初音島から来た直哉から提供された薬により二人は快復。

祐也と共に居ることを決めた。

稟は普段は、教導隊にて指導をする地位に就き、新人をしごいている。しかしながら、タマに女子から告白されてしまうらしいが、そこはきつちりと

『すまんが、もう居るんだよな……』

と断っているらしい。

その首下には、楓や桜、シア達から貰った指輪を通したネックレスがある。

それを常に身に付けているようだ。

そうやって、各々は自分の時間を過ごしていく。

また何時か、戦場に立つことになる、その時まで……

END